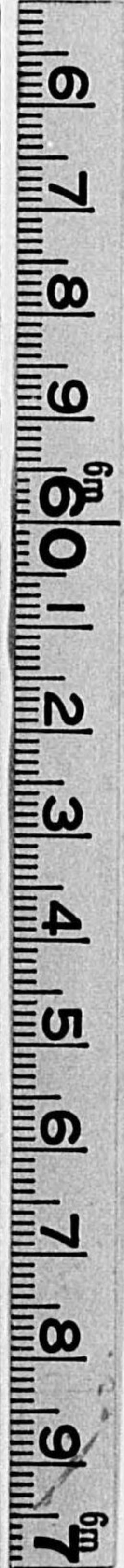


522.5-A43-2ウ

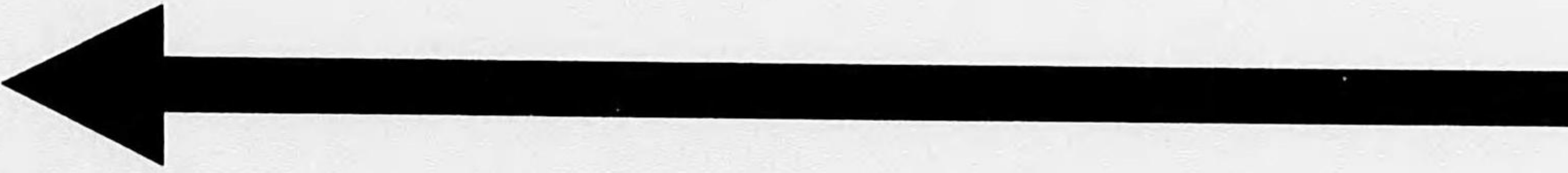


1200500745265

522.5  
43  
2



始



12

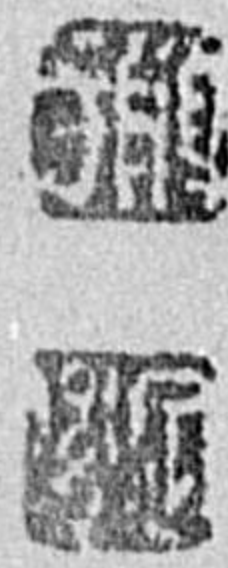
522.5  
A43  
2

昭和十八年



訂正  
增補  
印度佛塔巡禮記 下冊

天沼俊一



522.5  
A43  
2

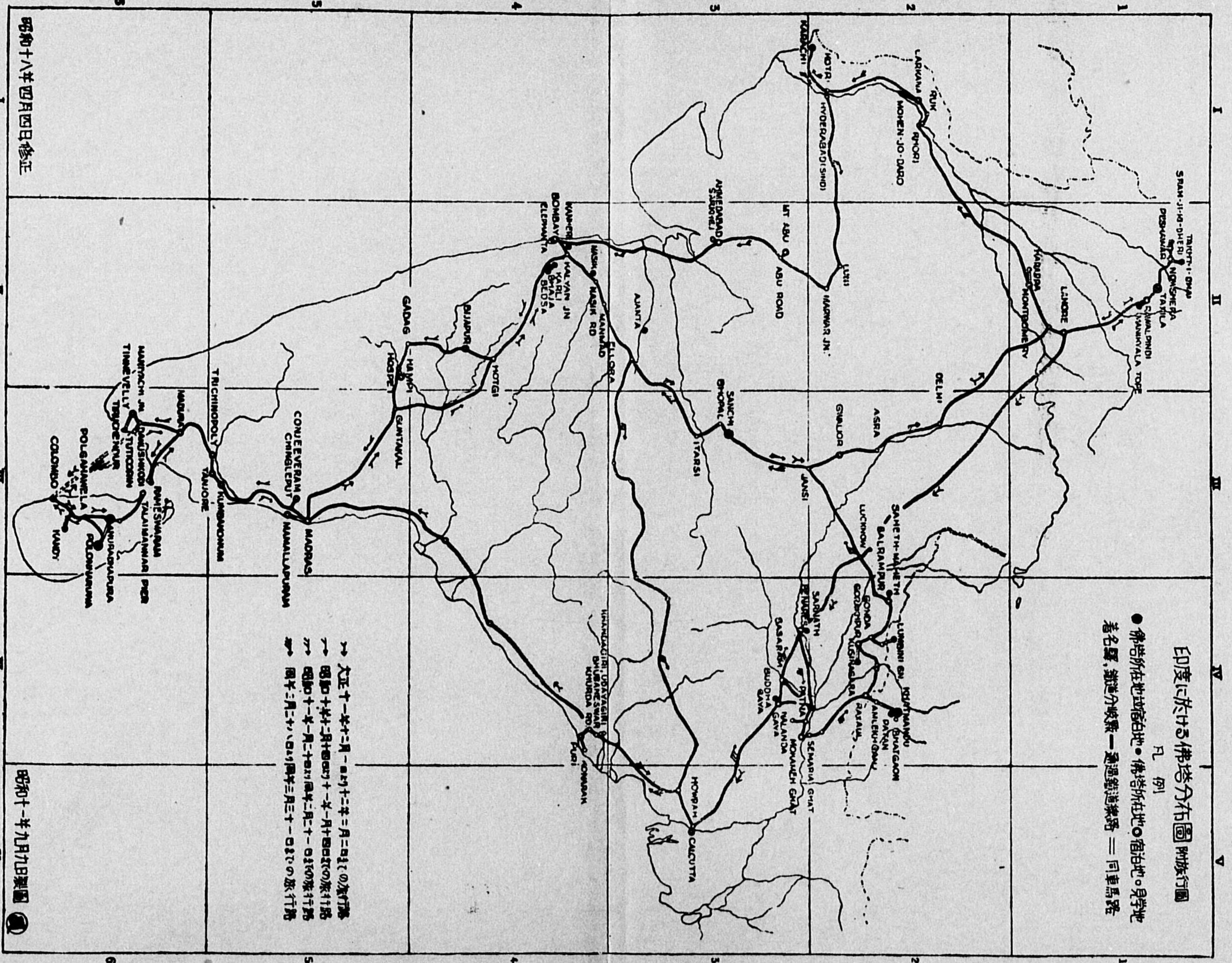
522.5  
A43  
2

989  
106



THE DISTRICT OF COLUMBIA  
DEPARTMENT OF THE DISTRICT ENGINEER  
WASHINGTON, D. C.





印度に於ける佛塔分布圖 附旅行圖  
 凡例  
 ● 佛塔所在地  
 ○ 宿治地  
 ● 見學地  
 者名羅、鐵道分岐點、通過鐵道線路、同車馬路

→ 大正十一年十二月 - 昭和十二年二月三日の旅行路  
 → 昭和十一年二月 - 昭和十一年四月十日の旅行路  
 → 昭和十一年一月 - 昭和十一年二月十日の旅行路  
 → 昭和十一年二月十日 - 昭和十一年三月三十一日までの旅行路

昭和十八年四月四日修正

昭和十一年九月九日製圖





## 序

本冊には秘境ネバル國の旅行記を兼ね、佛塔以外の宗教建築は勿論、民家・橋梁  
其他風景を成るべく多く圖示しておいた。大震災の跡始末も十分できなかったので、  
時に慘憺たる光景もあるのは止むを得ない。

附録として大脇正一氏の『ネバル國の蓮花貨幣に就いて』の一文を、同氏の快諾  
を得て添えておいた。これは嘗て發表されたものに、氏自ら訂正を加へたので、校  
正迄も同氏の手になつたのである。銅錢や紙幣にも、或は何か珍しい文字があるか  
も知れないが、前者は殆ど其兩面の磨損したものを一二枚入手しただけで、後者は  
一見さへし得なかつたため、調査研究の手段を講ずる事ができなかった。

此國の貨幣に就いては、パーシバル・ランドンの著書【ネバル】の終りに近く、  
數例を掲げて記載を試みてゐるが、元より文字の意味等を闡明してはゐない。だか

ら此研究は多分最初のものであらう。此點に於いて、讀者と喜びを共にする事を得たのは、洵に幸な次第である。

昭和十九年九月一日

京都市に  
於いて

著者 敬白

目次

七六	ネバル國	二
七七	ラクサウルからアムレクガンジへ	五
七八	アムレクガンジからビムフェヂへ	四
七九	ビムフェヂからシサガリへ	三
八〇	シサガリからカトマンヅへ	六
八一	トリプレスワー・レスト・ハウス	五
八二	首都の六日間	六
八三	宗教建築	三
八四	佛塔	三
八五	スワヤムブナート寺大塔	五
八六	ボドナート寺大塔	六

八七	チャパイルの佛塔	一四
八八	印度教祠	一四
八九	ビムセンタン	一五
九〇	マハヅ・デパール	一五
九一	シバレー・デパール	一五
九二	八角三重塔	一六
九三	小三重塔	一六
九四	デオ・バータンの三重塔	一七
九五	バシユバチナート・テムブル	一七
九六	バータンの四方塔	一八
九七	北塔	一八
九八	中央塔	一九
九九	池畔の三重塔	一九
一〇〇	ダアバア・スクエアの諸堂	一九
一〇一	バートガオン市建築の二三	二〇

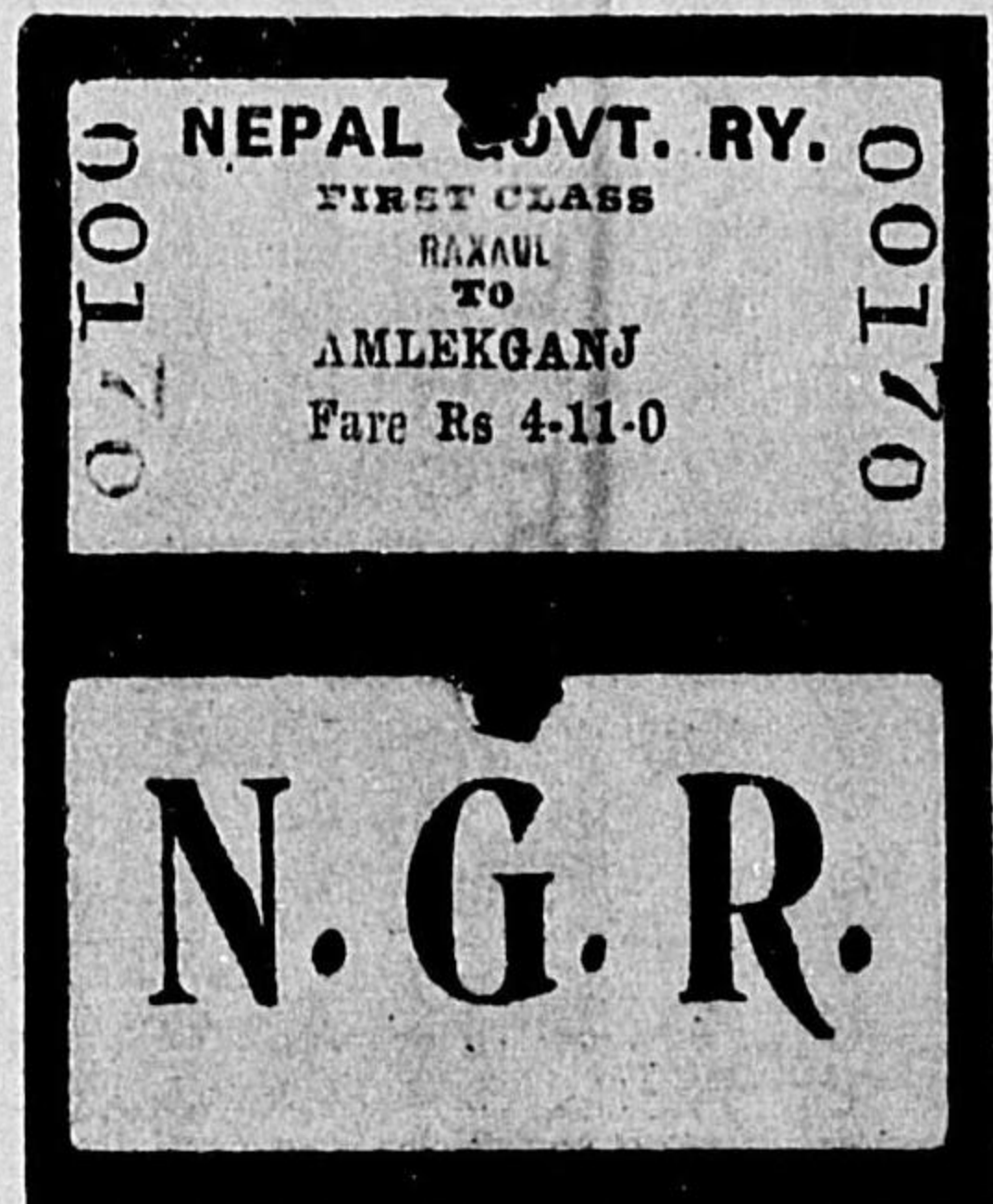
一〇二	二重塔	二〇
一〇三	五重塔(ニアトボラ・デパール)	二〇
一〇四	ダタットラヤ祠	二一
一〇五	カトマンヅからシサガリへ	二一
一〇六	シサガリからラクサウルへ	二二
一〇七	ラクサウルのレスト・ハウス	二二
一〇八	ラクサウルからゴラクプールへ	二三
一〇九	ゴラクプールからバルラムプール經由孟買へ	二三
一一〇	孟買解纜・歸朝	二四
一一一	感謝	二四
一二二	印度と日本とに於ける佛塔の比較	二五
一二三	結尾	二五
附録	ネバル國の蓮花貨幣に就いて	二六
	大脇正一	二六
	目次終	二七



印度佛塔巡禮記

(第十二回)

(昭和十二年三月十三日發行)



ネパール國有鐵道乘車券。上、表。下、裏。

七六、ネパル 國 (地圖 IV 2)

印度の北方、ヒマラヤ山麓、印度國と西藏國との間に、ネパル (Nepal) とブフータン (Bhutan) と二小獨立國が、シッキムを (Sikkim) 距てて並んでゐる。ネパル國は東西 500 哩南北 150 哩と大體に見積られてゐるようだが、幅等は最も廣いところがこれだけださうである。面積も 500 × 150 なら當然七五〇〇〇平方哩であるべきだが、實は約六〇〇〇〇平方哩と見積られてゐるらしい。

此國は少し大きな地圖を展げてみれば判る様に、山岳地と平地とに分れてゐる。其平地の部分をテライ (Terai) といひ、殊に他國人にとっては甚だ不健康地ださうである。平地で必要なところは、印度の方から國境まで鐵道が敷設されてゐるから、つまり鐵道で取圍まれてゐる状態で、ただ國內は僅に 25 哩の間輕鐵があるだけである。東のダージリンはベンゴール政府の夏期避暑地であり、西のナイニ・タル (Naini Tal) は聯合州 (ユナイテッド・プロビンセス) の夫れで、英人が群集するといった有様だから、まるで英國に壓迫されて、ヒマラヤ山脈におしつけられ、眼を白黒して漸く手足を動かしてゐる様な工合。餘り亂暴をして始末に悪いので、大きな岩の中に閉ぢこめられ、辛くも頭と兩手兩足だけだすことができた孫悟空といった有様。どうする事もできないらしい。此例へがけしからぬとあれば、十六むさしで雪隠詰めにされた王様といった格であらう。斯様に國內は山又山で、道らしい道はないから、國人は一度印度に出で、更に鐵道で都合のいい所まで行き、それから又自國內に入った方が速くて便利ださうである。

自國內の一所から他所に移るのに、外國を通つて行く方が始末がいいといふのだから面白い。歐米人でも中勝手に入國並に國內の旅行はできぬさうで、非常にやかましいのだらうだが、ある書物に二つあげてある理由によると、一は國內が山岳ばかり多くて近づき難いのと、他は此國は獨立國中の獨立國だからといふのである。併しこれは表向きの理由で、裏の裏、底の底があるものと思つてゐる。

\* Thus, lying between the 80th and 88th degrees of east longitude, it is 520m. long and nowhere more than 140m. broad, but averaging between 90 and 100m. ("THE GURKHAS", p. 3.)

\*\* It can thus be seen that within the boundaries of this small state is to be found every variety of climate and scenery, for on its northern frontier are situated some of the highest mountains in the world, whilst in the southern part of the country lies the much dreaded area of forest and swamp known as the Terai. This latter, although justly famed for the wonderful sport it provides—being the haunt of swarms of tiger and rhinoceros—is perhaps, one of the most malarious spots on the face of the earth.

Besides this division into differing zones of country, the territory of Nepal can be further divided, from west to east, by the series of ridges which are given off respectively by the mountains Nanda Devi (25,700 ft.), Dhaulagiri (26,826 ft.), Gosainthan (26,305 ft.), and Kinchinjunga (28,156 ft.). Mount Everest, the highest mountain in the world, lying partly in Nepal and partly in Tibet, and situated roughly midway between the last two named mountains, but somewhat behind the main range, gives off no main ridges, and so does not affect the divisions of the country in this respect ("THE GURKHAS", pp. 3, 4).

\*\*\* The first is that a considerable portion of the country is composed of inaccessible mountains, but the second and principal reason is that Nepal is the most independent of Independent States ("PICTURESQUE NEPAL", p. 2.)

此國は「尼波羅」(Ni-po lo) 國として【大唐西域記】に載つてゐる。それには

尼波羅國。周四千餘里、雪山ノ中ニ在リ。國ノ大都城ハ周リ十餘里アリ。山川連屬シテ穀稼ニ宜シ。花果多ク、赤銅・犛牛 (Yak) ・命命鳥ヲ出ス。貨ハ赤銅錢ヲ用ヒ、氣序ハ寒烈風俗ハ險詖ナリ。人ノ性ハ剛獷ニシテ信義ハ輕薄ナリ。學藝ナク工巧有リ。形貌ハ醜弊ニシテ邪ト正トヲ兼ネ信ジ、伽藍ト天祠トハ堵ヲ接シ隅ヲ連ネタリ。僧徒ハ二千餘人アリテ、大小ノ二乘ヲ兼巧シテ綜習セリ。外道異學ハ其數詳カナラス。王ハ刹帝利 (Kshatriya) ニシテ栗咭婆 (Licchavas) 種ナリ。學ニ志シ清高ニシテ純ラ佛法ヲ信ズ。近代王アリ鶯輪伐摩 (Ang-shu-fa-mo, An-chu-fa-mo (Amsuvarman) 唐ニ光曹トイフ) ト號ス。碩學聰叡ニシテ、自ラ聲明論ヲ製シ、學ヲ重ジ德ヲ敬ヒ、遐邇ニ著聞ナリ。都城ノ東南ニ小水池アリ。人アリテ火ヲ以テ之ヲ投ズレバ、水即チ焰起リ、更ニ餘物ヲ投ズルニ、亦變ジテ火ト爲ル。此ヨリ復タ吠舍釐 (Vaisali) 國ニ還リテ、南笈伽 (Ganges) 河ヲ渡リテ摩揭陀 (Magadha) 國ニ至ル。舊ニ摩伽陀トイヒ、又摩竭提トイフハ皆訛ナリ。中印度の境。

とあるが、これが今のネバルと位置に於いて多少の相違があるかどうかは調べてはゐない。尙ほ玄奘の

\* 命命鳥 = *mingming bird* (*jianjiao*) (Real) = (鶯鳥) francolins (Walters) = 雉子 (【解説西域記】)

\*\* Thomas Waters: "ON YUAN CHWANG'S TRAVELS IN INDIA" の附圖中に記せるネバル國の圖は、此國內ヲチ川の流域にクシナガラをおいてあり、其他頗る興味を惹く。此書は最近入手のためと、どうしても描き直さねば複寫が  
できないので、複製間に合はず、そのため讀者に示すことができないのは遺憾である。

時代にはネバルは西藏に屬してゐたのである。

元來もつと大きな國であつたが、英吉利と戦つて負け、一八一六 (文化二三年) 年三月四日、セゴウリ條約 (The treaty of Segowli) により東はシッキム、西はクマオン (Kumaon, Kumaun) ・ガルワル (Garhwal) 及ガンダク河以西のテライ全部を失つたので、この時全領土の約半を亡失したのであつた。ガンダク河以西のネバル領がどれ位の面積であつたかが、私にははっきり判つてゐないが、何にしろあぶなへU. P. (United Provinces) の一にされて了ふところであつたらしい。其他ネバル國の歴史については、いろいろな書物に詳しくかいてあるから、ここには略しておく。簡にして要を得てゐるのは  
エンサイクロペヂヤ・ブリタニカである。

### ヤセ、ラクサウルからアムレクガンジ (Amlekhgani) へ

昭和十一年三月十三日、三度目に五・三〇に眼がさめた時は、睡魔連りに襲ふのを勇敢に撃退して起

\* At this time, about A.D. 645, Nepal was a dependency of Tu-fan (吐蕃) or Tibet, and it joined that country in sending contingent to help Wang Hsian-tse (王玄策) in his trouble with the usurper of Magadha ("YUAN CHWANG" Vol II, p. 85)

\*\* On the march 4 the Treaty of Segowli was signed, by which Nepal lost Sikkim, Kumaon, Garhwal and all the Terai to the west of the Gandak river, thus reducing the country to the present limits, the river Mechi on the east and Kaili on the west ("THE GURKHAS" p. 50)

きたところ、寒さが劇しいので、不思議に思ひ寒暖計をみたら、気温57であった。印度の北方が如何に寒いかは、彌生の半にこの有様だから、大概想像がつくであらう。

洗面を終り食事をしようと思ひ、机の上をみたら、昨夜確かに蓋をしておいたアルミの鍋は、何ものかの襲撃を受けたと見え、蓋はとれてゐてそこいら中が落花ならぬ落飯狼藉。桁と椀との間に面戸板が儉約してあるので、多分そこから鼠でも侵入して、私がつかれてぐすり寝込んでゐるうちに、彼等が生れてから未だ嘗て試みたことなき、國運隆皇威八紘に輝ける大日本國産の特等白米に舌鼓を打ち、千載一遇の好運を天に謝したかも知れぬが、私にしてみれば、これ位の事に氣がつかず、此朝に用ゆる計畫の兵糧を机の上に出し放しにしておいたのは、如何にも不覺千萬であった。

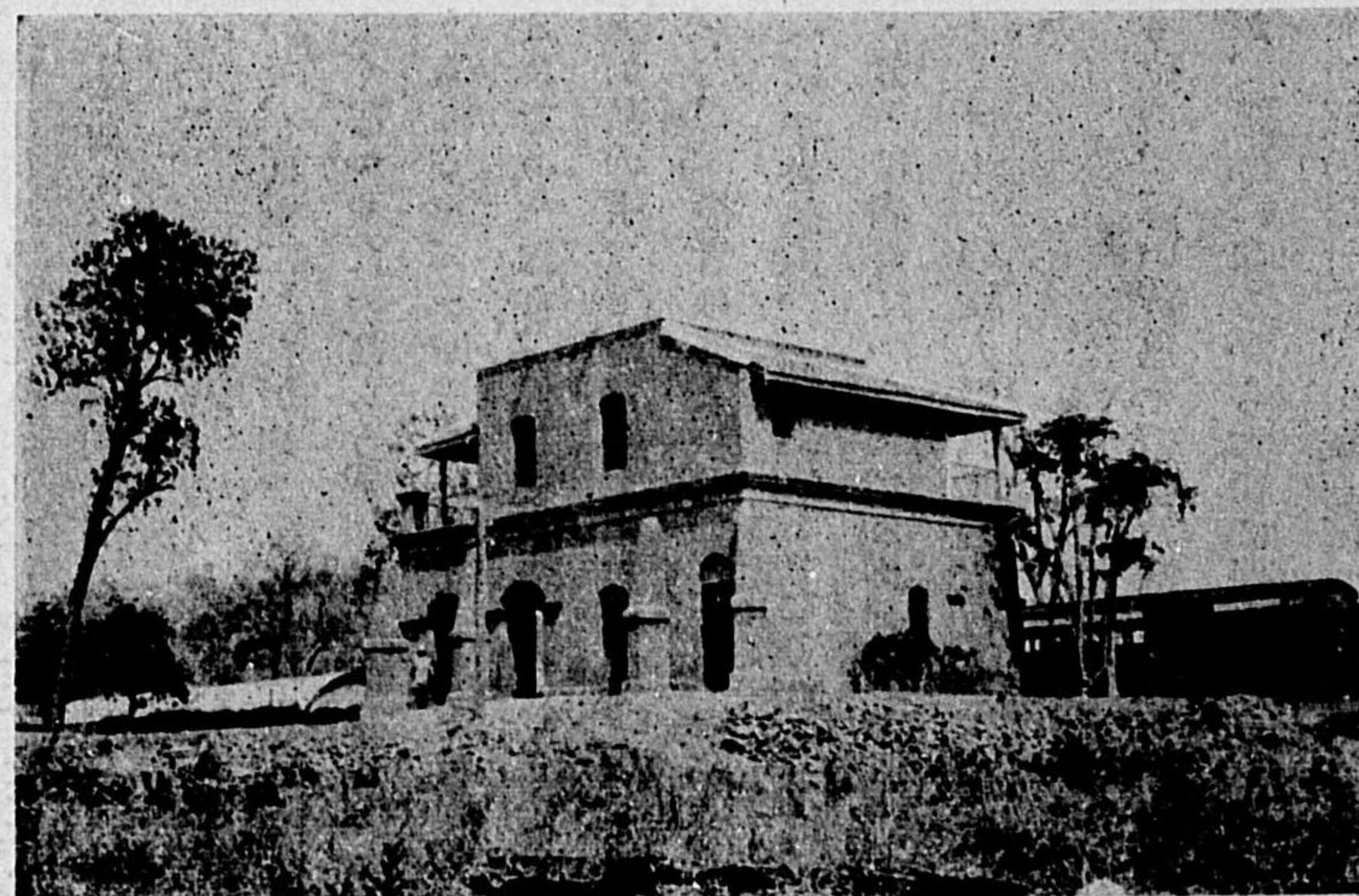
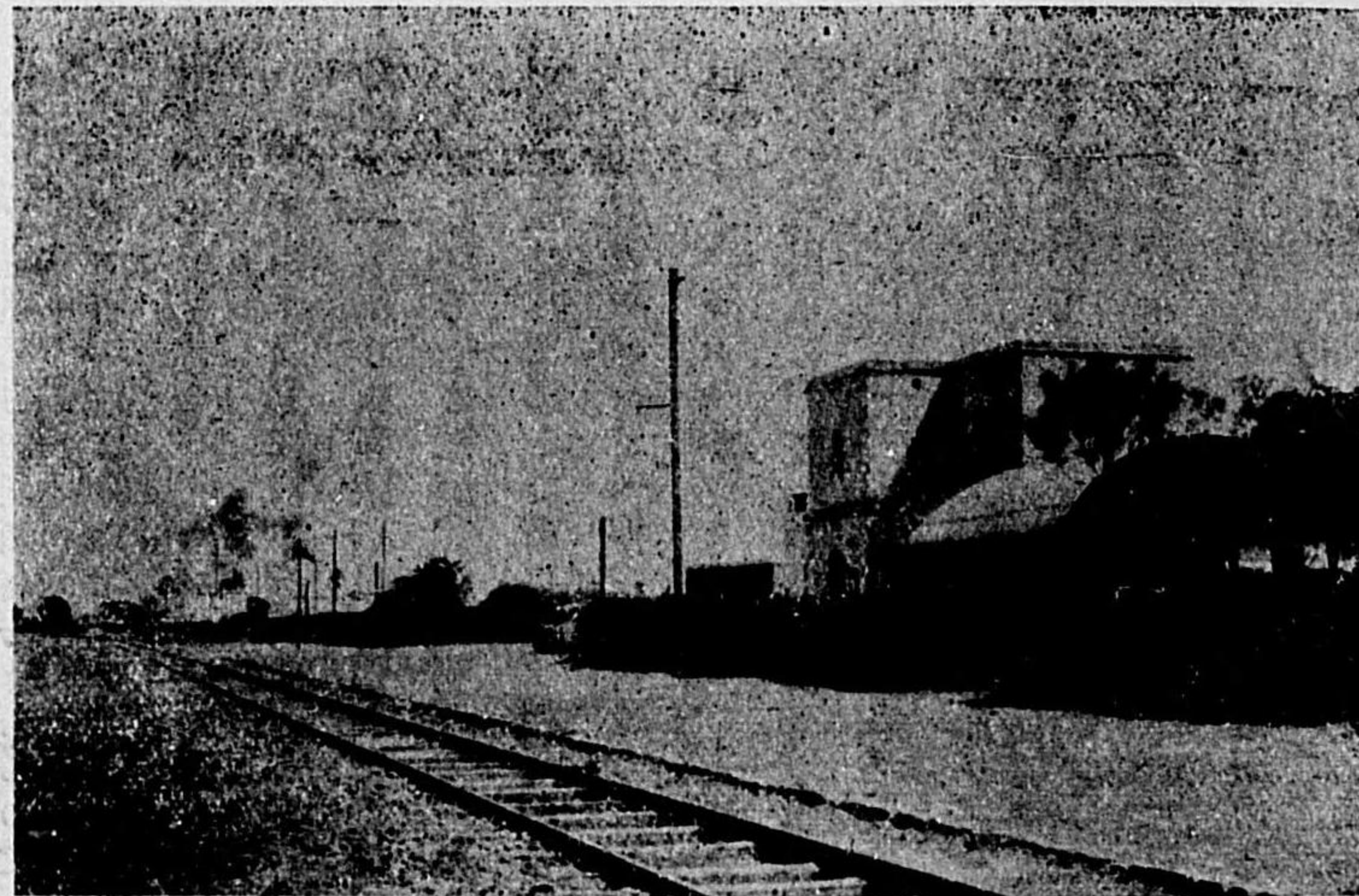
新に飯を炊かせる時間はなし、仕方がないので前日汽車の窓から買ったバナナの残りを出してみた。四本のうち一本は全部腐り、あとの三本は半分づつ駄目になってゐたが、他に食物がないから、此朝は牛乳を得られたのを幸ひ、紅茶を入れてバナナをたべて朝食に代へておいた。玉子位ありさうなものだと思つたが、それさへ得られなかつた。後の旅行者は注意すべきである。

貧弱なアイ・ビーは西が正面だから、裏の方の室は東を向いてゐた。そこで室前のテラスに机と椅子とを出して、朝日——といつても早いので未だ出なかつたが——に向て食事したのは楽しい思出である。上冊第389頁の上圖に、バンガローの向つて左に机と椅子と寫つてゐるのは、私の食事の後を片附すに出かけたので、これが寫つてしまつたのであるが、今では反つて記念になつてゐる。

鐵道は國有で、ネバル・ガバンメント・レイルウェイ(N・G・R・)といふ。表題上の小圖は其一等切符の表裏で、全線25哩の運賃一等4/11/0三等0/12/6だから、前者は後者の6倍。つまり従者二人で1/3。汽罐車は側面に名が金文字で浮き出しにしてあつた。實は金ではなくて眞鍮であつたが、「ゴラクナート」(GORAKHNATH)といふ。抑もゴラクナートとは印度聖人の名で、北印の今クシナガラと推定されてゐる地に近き町なるゴラクブルは、此聖人に因んだのださうである。ゴラクナートの像は、孟買の英皇太子博物館(Prince of Wales Mus.)でみたが、何でも石造か何かの大きな建物があり、其傍に小さく裸體の男が描いてあつたが、それが即ちこの人ださうである。聖人といへば孔子孟子乃至顔回の様な顔が頭に浮んで來るのだから、裸一貫でお行儀の悪いのなんかどうかと思ふが、それでも大變にゑらい人ださうである。其印聖の名を無斷借用したのだらう。定めて立派な汽罐車であらうと思つたが、外見はペンキが剥げたりしてゐて頗る貧弱であつた。

汽車の時刻表(よくみたら、インヂアン・ブ  
ラッドシヨウにかいてあつた)によると、八・一五にでる筈になつてゐるが、初めから後れて八・三〇にでた。汽罐車の次に無蓋貨車二輛、一・二・三・三・緩急車といふ編成であつたが、やがて前日サガウリ驛から乗つて來た異人が澤山の荷物と共にやつて來た。想像が的中して妙な男と乗合はすことになつた。

ラクサウルの次がビルガンジで、此間に國境がある筈である。といふのは第12頁に挿入した地圖でも判る様に、ラクサウルは印度にあり、ビルガンジはネバルにある。私は多くの興味を以て、汽車の窓か



上。ネバル國有鐵道起點ラクサウル驛（昭和十一年三月二十三日）

下。同 終點アムレクガンジ驛（昭和十一年三月二十二日）

僅に延長25哩の輕鐵で、中間の驛は仕方のない建物だが、さすがに起點驛と終點驛とは、煉瓦の二階造。前者の二階は一二等の寢室兼休憩室にあて、寢臺一脚を備付け、其他椅子と卓子ともあるが、長い間放置してあったか、塵埃堆く總てのものの上を覆ふてゐた。右端に見えてゐる控壁の間の出入口は、段階へ達するためのである。前者の階上は何に用ひてあるか知らない。



上。ラクサウル驛立札（昭和十一年三月二十三日）

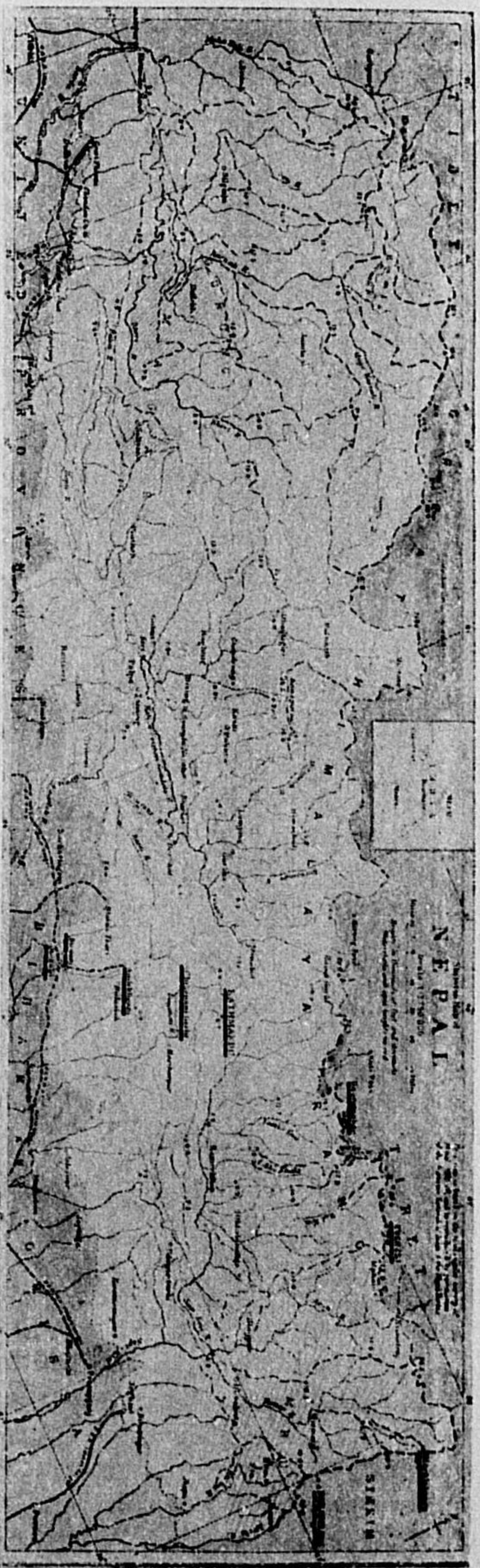
下。アムレクガンジ驛立札（昭和十一年三月二十三日）

今迄に掲げた印度の鐵道各驛の立札は、何れも英字を大きく中央にかいてあつたが、ネバル國は獨立國だから、豊葦原瑞穂國の鐵道の驛立札と同じく、さすがに自國の文字を先きにし、西洋人の便宜をはかり、英字を添えてゐるのは、東洋の獨立國に限り見得るだらしない風景である。近頃發行された印度の地理書の中に此國の事を記し、「國內には一軒の鐵道もないが」と書いてあるのは、いふ迄もなく誤りで、この通り確かにある。

らたえず右顧左眄や左顧右眄をしてゐたが、國境はどうしても判らなかつた。そこで同車の異人にきいてみた。「ネバル行は初めですか」それを聞いて何になる』『國境がどこか判らないので、二度目なら知っておいでかと思つて』『實は自分も初めなので、どこか判りません』といった調子で頗る不愛想であつた。此男昨日私に汽車進行中話しかけたので、面倒だったが知つてゐる限り先方の間に答へてやつたのに、老人は昨夜睡眠不足か何かで機嫌がよくなかつたのだらう。國境が判らなくとも別に困らないから話はこれでやめたが、遂に判らずにゐるうちにビルガンジについて了つた。これでは悪意がなくとも國境突破は常にかかるであらう。相手がUSSRであつたら、何さま只ではすむまい。

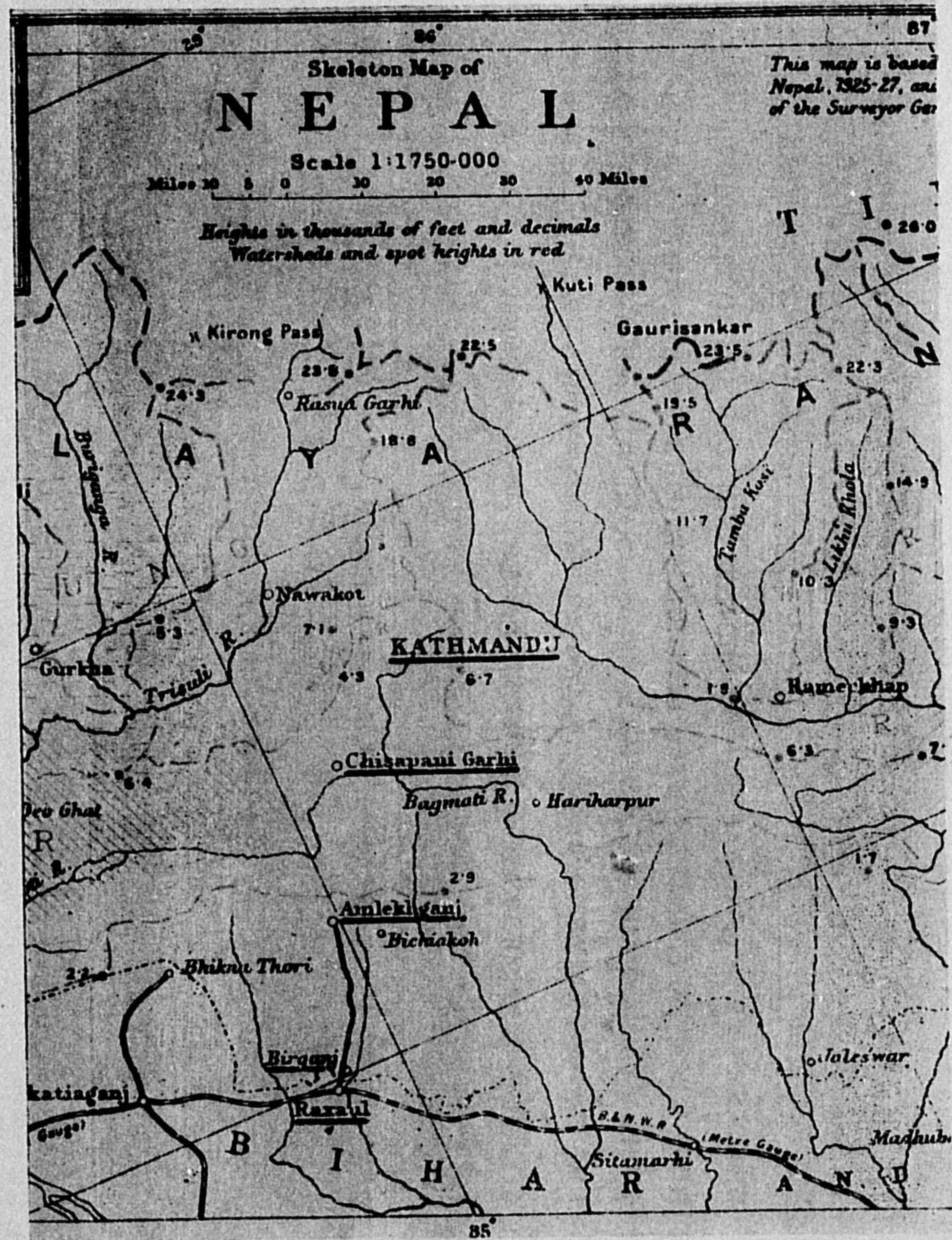
汽車がビルガンジへ停つて暫くしたら、人が私の乗つてゐた客車の窓へ近づいてきた。私に向つてミスター・アマヌマかとさくから、左様といつたら、従者は何人かと重ねてきいたので、二人と答へたら何か紙を出して、既にかいてある文字の間へ何か書込み、旅券だからなくさぬ様にといつて渡してくれ、尙ほ其上に十三日の夜はシサガリのD・B・は満員だから、ビムフェチへ泊れる様に準備がしてあるといつた。かういふ工合でつまりゴスワラ・コート役人が汽車の窓口までパスポートを持ってきてくれたのである。

多分ネバル國産のであらうが、一尺に四寸位の、薄い黄色を帯びた紙に、デバナガリの様な文字がしばい書いてあつた。文字は一つも讀めないが、記念になるから大切に保存しようと思ひ、折らない様にして日記帳の間へ挟んだ。何にしろヒマラヤ山脈の裾野に、山脈と直角に敷設された鐵道だから、嘘偽



1925—27年の實測に基けるネバル國概略地圖（“THE GURKHAS”附圖複製）

『約』に縮め、且つ出版にできなかつたので網目版にしたため、特に文字等が判らなくなつたのは遺憾であるが、其全體の形はほぼ列るであらう。必要な地名や山名の下には、黒い太い線を引いておいたが、全長の右から1/4位のところに、下から上へ——即ち南から北——RAXAUL, BIRGANJ, AMLEKHGANJ, CHISAPANI GARHI, KATHMANDU とあり、又國境に添ひては、左から右下りへ順に GATIRISANKAR EVEREST, KINCHINJUNGA 等、雪山中の高峰があり、さうしてその最後のもの下に DARTWELING (金剛寶土) がある。なほ地圖の右上に方角もかいてあるから、これで見當をつけるとよろしい。中央上部に印度の全土とネバル國との位置大きさの比較早見圖があるが、孟買と甲谷他と記入の文字が反對になつてゐるのは、外國でこの書物としては珍しいことで、全くケアレス・ミスレークで頗る愛嬌がある。Pareval London の大著“NEPAL”にもこれとよく似たスケルトン・マップをのせてゐるが、それにはこのキイ・プランはない。兩國共ラカサウル・ナムレクガンジ間の輕鐵はかいてある。



前頁に掲げた概略図の一部

西藏との境界は太い破線で、印度との夫れは點と破線と一つおき、即ちトンツで現してある。それでラクサウルが印度にあり、ビルガンジがネパルにあるのが明らかであらう。ラクサウルの左方 Jn. に "katiaganj" とあるのは頭の "Nar" がとれたので、「ナルカチアガンジ」驛である。右下はずっと行けば「サマスチプール」驛に出る。此圖にはサガウリ、ラクサウル間の線路がかいてないところを見ると、あの間の方がネパル輕鐵より後に開通したのかも知れない。

りなく首都の方を向けば上(登)りである。だから漸く進むに従ひ漸く登りとなる。普通なら一・四〇に終點に着く筈だから、バン位は得られるかも知れないと思つてゐたところ、其一つ手前のシムラを發車し、もう着く時分だらうと思はれた頃、僅かの勾配を登ることができず、汽車は停つてしまった。汽罐手は直に下りて修理を始めた、時に一二・一〇、一時間かかつてともかくも應急修理を了り、一三・一〇に動き出したが、やはり登りきれずにやめて了つた。そのうち反對の方向即ち終點の方から、モーター・ローリーが數臺來た。近いところなので助手か何かは汽車立往生の旨を報告に及んだのであらう。ローリーは列車の傍に一列側面縱隊に停止した。三等客は先を争つて乗り移つた。客ばかりではない、荷物をもつて移つたのだから、あとは相當に輕くなつた筈である。だから或は動くかも知れぬと思つて待つてゐたら、汽罐手は汽車を少し後退させて、勢をつけて登らうと試みたが、やはり失敗に終つた。

大體いつ頃になつたら動く見込なのか、終點が近いのだから救護汽罐車位直に來さうなものだが、それも來ないところを見ると、埒のあくのを待つてはゐられなくなつて來たので、私もローリーの厄介になるべく汽車から下り、バハツールに談判させて一つの車の運轉手の傍らに座を占めた。さうして間も

\* Motor-lorry (貨物自動車)。これは英語。日本ではトラックといつてゐるが、これはモーター・トラック (Motor-truck) の略で、同じく貨物自動車のことだが、これは亞米利加語。印度は大部分が英語だから、當然英語で「ローリー」といふ。

なく走り出し、五分たつたぬうちに、終點驛前の大通、とはいふものの實に氣の毒な程貧弱であつたが、其大通りとビムフェヂ街道との交叉點へ停つた。併し誰も下車しないので、私も其まま乗つてゐたら、幸な事に此車はビムフェヂ直通とのことであつた。

斯様にして私は、例ひ事故のためとはいへ、豫定より約二時間二十分後れ、汽車中でランチ・バスケットをあけても何もたべるものはなく、アムレクガンジでは麵麩を得られるどころの騒ぎではなかつたから、腹は随分へつてはゐたが、半日でここ迄來られたことは、鐵道のなかつた時に比べれば、雲泥の相違で有難く心得ねばならぬのである。一八七七年(明治一〇年)に出版された書物には、セゴウリ(Segowli || Sagauli)からラクサウル(Ruksowl || Raxaul)迄の哩數を掲げたりしてゐるが、こんな時分は此間は勿論、國境に沿ふての鐵道もなかつたらうし、旅行の困難は到底同日の談ではなかつたらう。

### 七八、アムレクガンジからビムフェヂ (Bhimphedi) へ

アムレクガンジへ着したローリーは、約一時間停車の後一四・五八(三時二)になつて漸く發車した。

\* Daniel Wright, "HISTORY OF NEPAL."

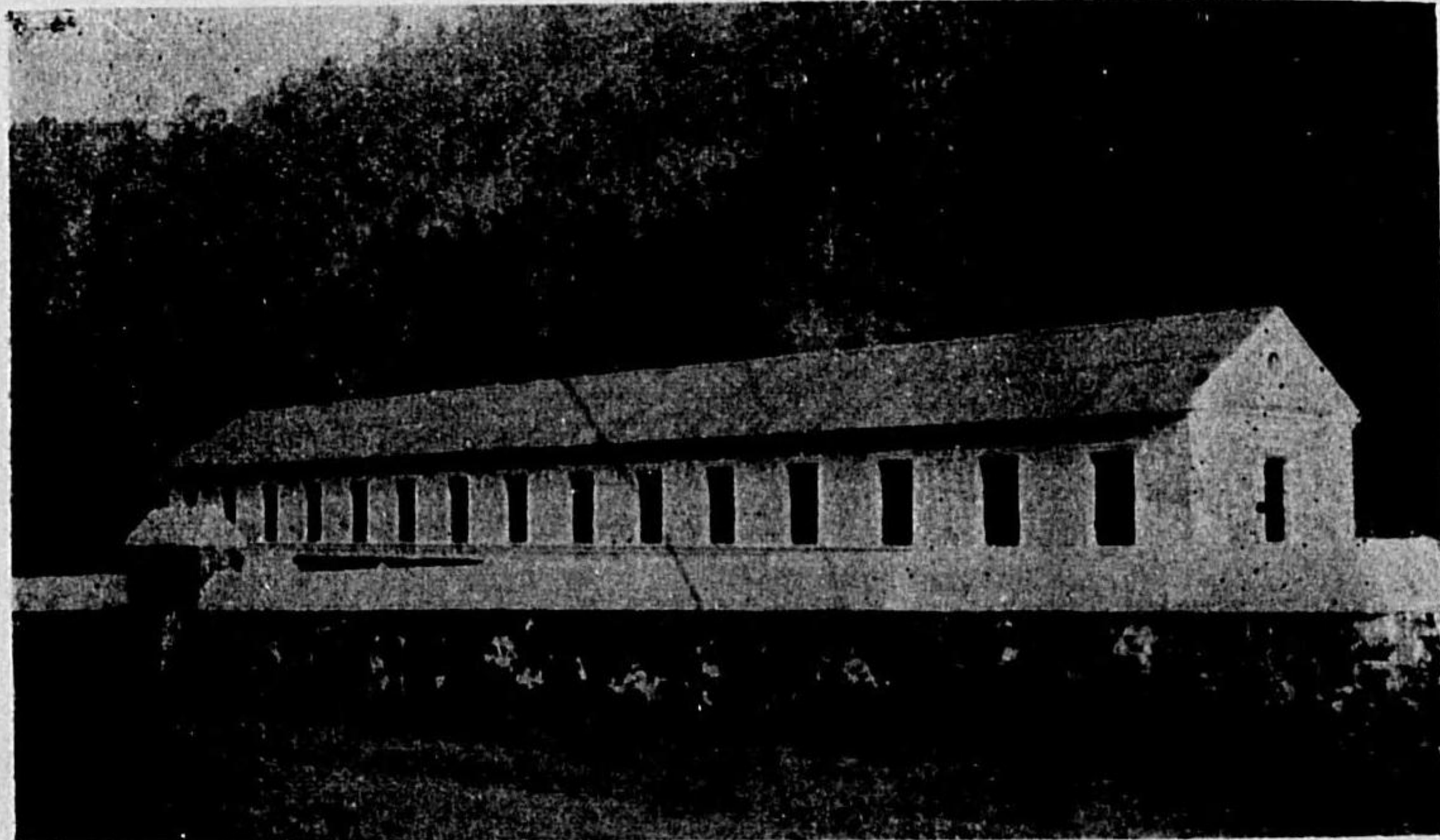
\*\* 一八八四年(明治一七年)カトマンヅへ行つた英人梵語學者ベンダール(BENDALL)はフルワリマ(PHULWARIA)の附近で國境を横切つたとかいてゐるが、今その地名は私に調べようがないので、よく判らない。併し當時はモチハリ(MOTIHARI)で汽車を下りたらしいから。或は鐵道はここ迄しか通じてゐなかつたのかも知れぬ。

發車はしたが一走りといふわけには行かず、よく休んだ。其休むたびに旅券を調べられた。ところが其調べる役人といふのが、まことに年の若いまあせいせい中學の四五年生位の子供の様に見えた。それもただ形式的らしく、片手に旅券を持ってよくも見ないで喋つてゐるのだから、まあいい加減なもの。暫く行つてからトンネルがあつた。可なり長く漸く車一臺が通れるだけだから、兩方から車が來て途中でぶつかつては事である。だから人を配置したり、内部にあかりをつけたりして、まごつかぬ様にしてあつた。車は一七・一〇にビムフェヂに着いた。アムレクガンジとビムフェヂ間、25哩ときいてゐたが、これで見ると、多少の出入はありさうであるが、何れにしてもビムフェヂ迄は、まるで歩かすに行けることだけは確かである。

其車の停つたところに大きな二階建の家がある。此家が即ち公立宿舍で、ここではダク・バンガローともレスト・ハウスとも言はず、ラインズ(Lines)といつてゐるさうである。往來に面しては立派な石の扉があり門を開き、入ると前庭は美しく掃除がしてあり、甚だ殺風景で倉庫の様ではあるが、切妻造二階建の大きな長方形の建物がある。私の泊る室は階上向て右の端ださうで、階段を昇ると大きな室に

\* After leaving Raxaul 16m. of fields and 9m. of sal forest bring one to the foot of the Siwalik hills. The next 13m. are through Siwalik hills with scenery familiar to those who have crossed them near Dhera Dun. Turreted hills of conglomerates border both sides of the (huria pass (approx. 2200 ft.) which is tunnelled for about 300 yds ("THE HIMALAYAN JOURNAL" Vol. IV, 1934)

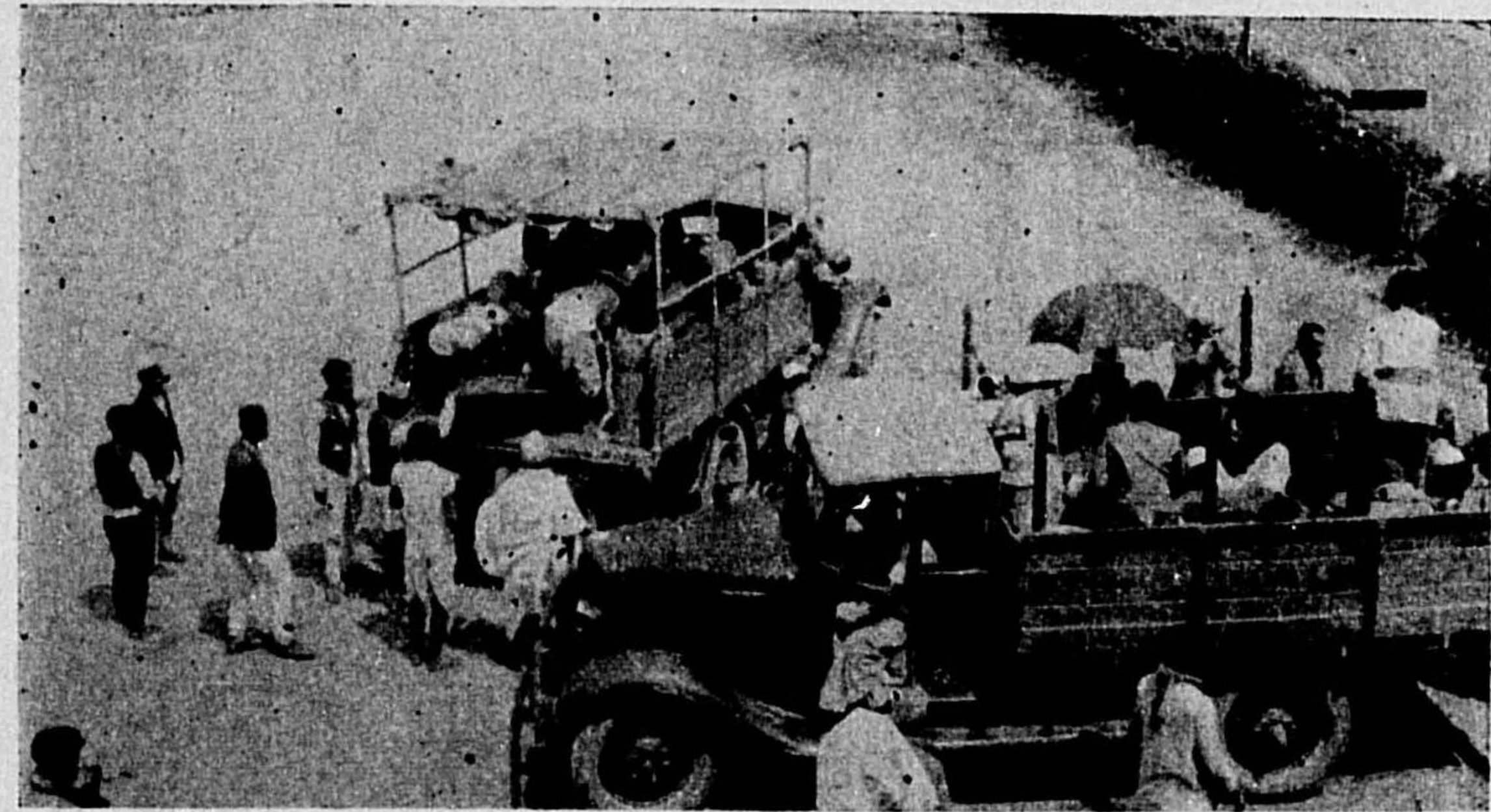




上。ビムフェチの公立宿舎全景  
 下。同 一部  
 (昭和十一年三月十四日)

ネパル国立の宿舎で、煉瓦造二階建。前は往來で後ろはラプチ(Rapti)川。前頁下圖に其一部が見えてゐる通り、ローリーはこの前に停つたのであった。私は此階上右端の一室に泊つたので、其部を記念のため下圖に大きく出しておいた。

この建物はレスト・ハウスとかバンガローとか呼ばないで、ラインス(Lines)といつてゐた。十三日夜はシサガリのD・B・Bが満員なので、ここにとまれと言はれ、その通りにしたのであった。



上。乗合貨物自動車アムレクガンジ驛から出發せんとするところ  
 (昭和十一年三月二十二日)

下。乗合貨物自動車ビムフェチ着の光景 (昭和十一年三月十三日)

輕鐵終點アムレクガンジ驛には、貨物自動車三四臺あって、客を運んでゐる。夫れがすべて「モーター・バス」でなくて「モーター・ローリー」であるから、どうも客と荷物とゴタゴタに積まれるので、大に心地がよくない。下圖は私の乗ったローリーがビムフェチといふ寒村へついたところで、右の方の高いところに人が大勢ゐるのは、私の荷物を宿舎に運び、幾分の賃金を貰はうとしてゐる人夫等である。

出で、端には唯一室あるばかり。これは定めて静かであらうと思ひ、非常に氣が落付いた。室内は清掃してあり、寢臺には毛布を添え、洗面器や石鹼入迄備付け、水さしには清水が汲んであつた。ゴスワラ・コートから通知がいつてゐたので、用意をしてゐたものと見える。此二階からみたところは、如何にも山中の部落といふ景色で、氣のせいも故國の夫れによく似てゐた。

\* \* \* \* \*

斯様に氣が落つてくると、朝から食事をしてゐないので、空腹耐え難くなつた。茶腹も一時の騒通り、茶を入れるべく先以てマンガに湯を沸させた所、紅茶が入つたが牛乳は得られなかつた。少し重いが罐詰の一番小型の牛乳を三打も持ち歩くと、かういふ時に至極便利であらう。これも亦後の旅行者に進言しておく。

荷物を運搬するためクローリーが五人、ダンディ (Dandi, Dandy) の擔夫五人、白馬一頭と馬子一人(馬子と馬の事は實は後に知つたのである)、合計十人と一頭が私のために首都から到着したさうで、大勢二階へ上つて來た。馬で行くかダンディで行くかとバハヅールがきいたので、馬はやめると答へておいた。嶮岨なところで一つ跳られたら、それこそ萬事休す。いくら懂れてゐても、ヒマラヤ山麓の土と化する勇氣は持合はしてゐないのみならず、まだ少し早すぎる。

彼等は二日間の食料として、差向き Rs. 3 を要求した。バハヅールは、首都迄の料金は不要なので、つ

まり食料だけを貰ふのだといった。馬糧は姑く措くも、二分 Rs. 3 は 10 人に割ると一人一日 As. 4.8、即ち邦貨約 39 錢に當る。さう計算してみると、洵に安いものである。

夕食には漸く炊きたての飯にありついた。全く此日は難行苦行の一日であつた。従者は二人共終日何も食べるものがなかつたさうで、何を食べたかきいてみたら、茶を飲んだだけと答へた。明日のひるは何をたべるかきいたから、玉子四つゆでてくれといった。六つにしないでいいかと更に尋ねたから、四つで充分だと答へ、魔法瓶へ紅茶を一杯つくつて持つて行くつもりだと言つておいた。最早別に用事がないので日記をつける前に一先つ寢臺へひっくり返り、暫く天井をながめてゐた。

\* \* \* \* \*

前日サガウリ驛以來、妙に一所であつた老異人は、汽車が立往生するや、素早く一臺のローリーを雇ひ、終點迄飛ばした。丁度私の乗つたのがここに達した時、タキシで出て行つたのを見たが、其ままピムフェヂ迄行き、そこからシサガリへ出て D・B・へ泊つたさうだ。『アムレクガンジ・ピムフェヂ間タキシの雇賃 Rs. 40。シサガリの D・B・には、此老人の他に婦人客が三人泊つてゐるので、それで満員なのだ。併し歸途は最早さういふ事はないから、シサガリに泊るのだ』。以上はどこまできいてきたのか、ピムフェヂへ着いて間もなくバハヅールが注進に及んだのであつた。ところが同じ區間を私はローリーへのつてきたので、時間はかかったが従者二名と荷物十個とで、運賃僅かに Rs. 7 であつた。

税関は遂になかった。荷物がいくつあるかさへきかない。だから例ひ禁制品をもって居ようとも、悪い事をしようとも、どうやら勝手にできるらしい。大概どこの國でも税関は國境にあると定まったものだけに、ここはどうしたのか知らんと思った。其税関はシサガリにあることが後に判つたのである。

改めて記す迄もなく、月は四季で夫夫趣きは異なるが、夜半或は曉天に、感慨に耽るのには月が最も必要である。内地でも勿論さうだが、外地、殊に外國に於いては、人靜まつてから月をみてゐると、一種異様の感に打たれるのは、外國旅行をした人は多少の經驗はあらうと思ふ。私は朝鮮の山寺へ泊ると、幸に月があれば必ず深更又は拂曉、唯一人で靜かな境内を散歩するのが癖で、山が深ければ深い程、寺が小さければ小さい程、感慨無量である。これは決して精神に異状を呈してゐるのではない。印度のバングローでも随分みたから、もうどこでも同じ筈だが、ネバルのは又格別であらう。現に昭和十年九月三日、歐亞旅行に出かける僅に二日前、山陰の温泉に靜養して居られた友人Nさんからも、ネバルの月に關する句を打電され、當時まだ私の此地方の旅行が、海のものとも山のものとも決まらなかつたといふよりは、寧ろ絶望に近かつた時に、大に激勵してくだされたに對しても、見て歸らねば話しができないし、申譯もないと思つたから、是非第一夜に於いて見たかつたが、もう大分老齡になつてゐるから、

宵の口では望みがない。いくら眠くても夜中に起きねばならぬ。

第一回は一・〇〇に起きた。目的は達したが、どうも一度では物足りない。惜しい様な氣がしたので、氣をつけてゐてもう一回三・三〇に起きた。此時も亦幸運であつた。月あかりで見た四方の山は、洵に穩かなぼんやりした輪郭で重なり合ひ、村の民家は深き眠りに落ちてゐて、音といつては宿舎の後ろを流れてゐるラプチ川の潺が僅に聞えるばかり。憐れな様な情ない様な、何とも名状すべからざる異様の感に打たれ、窓に近く椅子を引張つて、いつ迄も景色を眺めてゐた。これがほんとうに一生に一度で、この建物に一夜の露をしのぐ事もあるまいし、又假にあつたとしても月が出るかどうか判らぬ。私がどうかして大金を得て、使途に困り三度外遊を試みるにしても、ネバル行の再舉は到底許可を得られまいから絶望とすると、どう考へても二度と再びビムフェヂの月は見られまい。さう考へると如何にしても寢床に入る氣になれぬ。大體ビムフェヂといふ名は初めてきいたのだし、大して美しい村でもなし、どちらかといふと少しぢぢむさいし、衛生上憂慮すべきところもある様だが、それでも何でも氣に入つたのである。憧れの土地とはこんなものかと思つてみたりした。

併しながら前夜二一・〇〇床に入り、十四日朝五・三〇に起きた迄、月をみるための興奮を除いては

\* 電文譯「一路御平安を祈り、來春恙なく御歸學を待つ。微恙靜養中にて御見立出來ぬ。残念。ネポールの大塔に懸る月淋し。鳥取關金温泉。N・U・」。

實によくねた。前夜バハヅールは、此朝六時にたつか七時にたつかときいて来たから、私は八時にたつといた位に休養を要したのであった。それなら月をみたら直にねたらよささうなものであるが、二十四年間時機をねらつてゐただから、さう理屈一點張りには行かない。三〇分やそこいらは起きてゐたのに不思議はない筈である。

### 七九、ビムフェチからシサガリ (Sisagathi) へ

既に記した様にラクサウルからビムフェチ迄は、汽車なり自動車なりで來られるが、これから先に山があるので、車は絶対に通じないから、カトマンヅをさる6哩か7哩のタンコット (Thankot) 村迄、約18哩の間は、歩くかさもなくばダンヂイへのるか、何れかを撰ばねばならぬ。最初旅行の許可をネパールの當局に申請する時、成るべく先方へ迷惑のかからぬ様にしようと思つたので、首都着の上は宿泊、他ににつき、一切自分でするといふ事を總領事館へ申出ておいた。ところが總領事館から、どういふ風に照會してくだされたか知らぬが、此間の乗物等は私自身で總て準備せねばならぬ様に先方からいつて來たので、私にはその様な能力はないから大分まごついたが、これは私が三月二日に總領事館へ出頭して、改めてその邊の要意も總て先方へ依頼する様に、もう一度手紙を出して頂いたので、速に解決し扱てこそクローリーを其筋からよこしてくれたのであった。だから前途の不安は全くなり、これまた歩かずに行けることになつたのである。

\* \* \* \* \*

宿舎の前の方の廣場、即ち往來とを限る塀の内側には、澤山の厩が並び、横の方には従者又は馬方の寝る宿ができてゐる。彼等は粗野で何等の教育がないから、人数は知れたものだが、朝になつてからは、何事が起つたのかと思はれる位に騒がしかった。丁度朝の五・三〇に其騒ぎがあつたので、まあ起されたも同然であつた。此朝六・〇〇の氣温<sup>63</sup>、ラクサウルより6も高かつたので、昨朝程寒くなかつたのは幸であつた。

朝食をすましてから庭へ出たら、そこに平面が略ぼ卵形の簡單なかごの様なものがおいてあつた。骨は木を曲げてつくり、其間に目の六角にあんだ籐を張り、前後に長軸と同方向に棒がでてゐるもので、これが即ちダンヂイといふものであらうと氣がついた。全體水色のエナメルか何かで塗つてあり、大分美しかった。この上に18哩のせられるのは、少しばかりつらからうが、それはがまんするとしても、ど

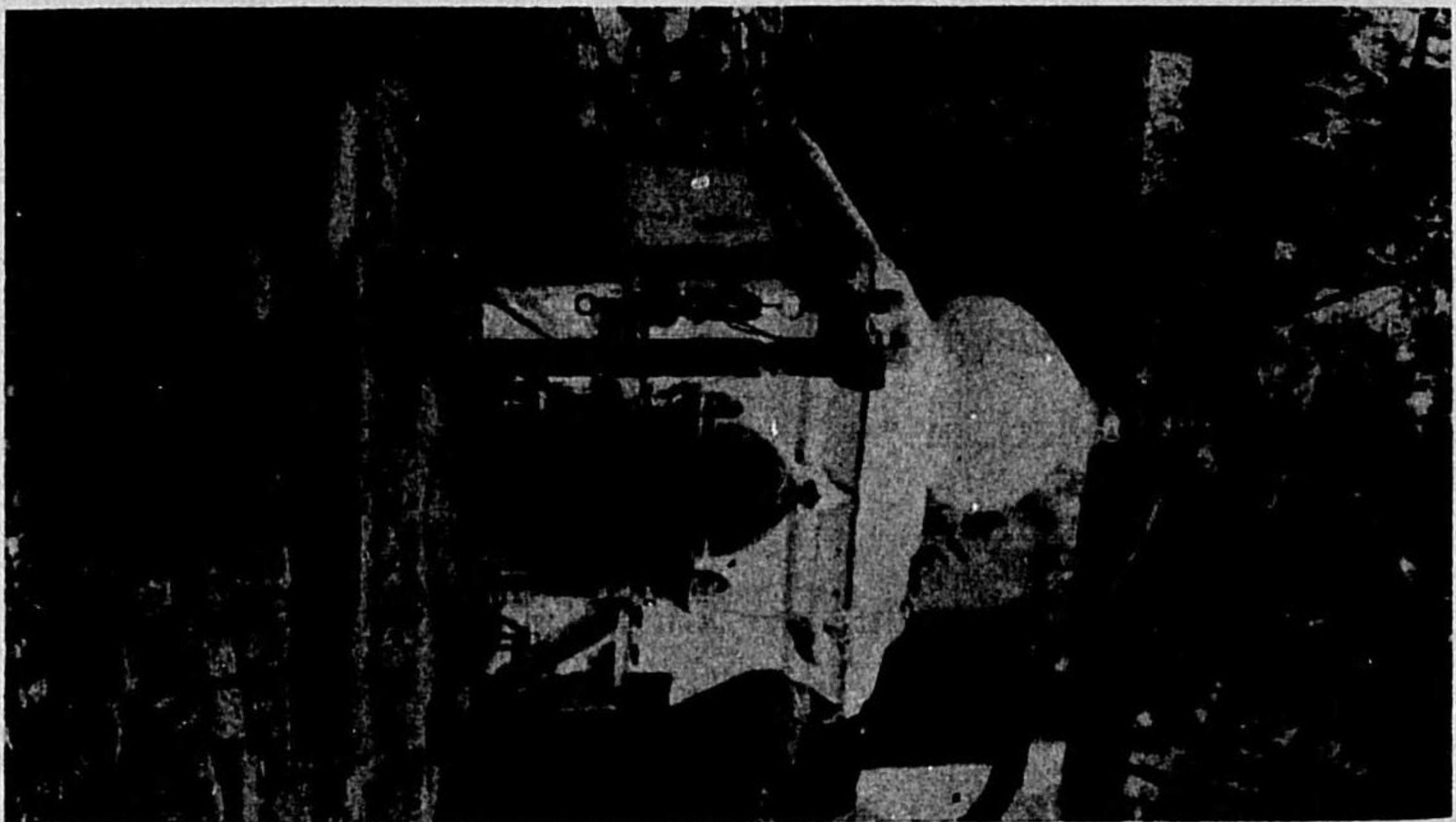
\* "The information you have given that the doctor will be making his own arrangements for the journey has been noted. I presume he knows that for the part of the journey from Phimpheedi up which lies at the foot of the Sisagathi hills to the valley of Khatmandu previous arrangements to obtain a dandy from Khatmandu a distance of 18 miles, has to be made by him." 昭和十一年二月二日附、ネパール國マッテ・マン・シン氏から甲谷他駐在野々村副領事に宛てた手紙の一節。

うも不安定らしく思はれた。

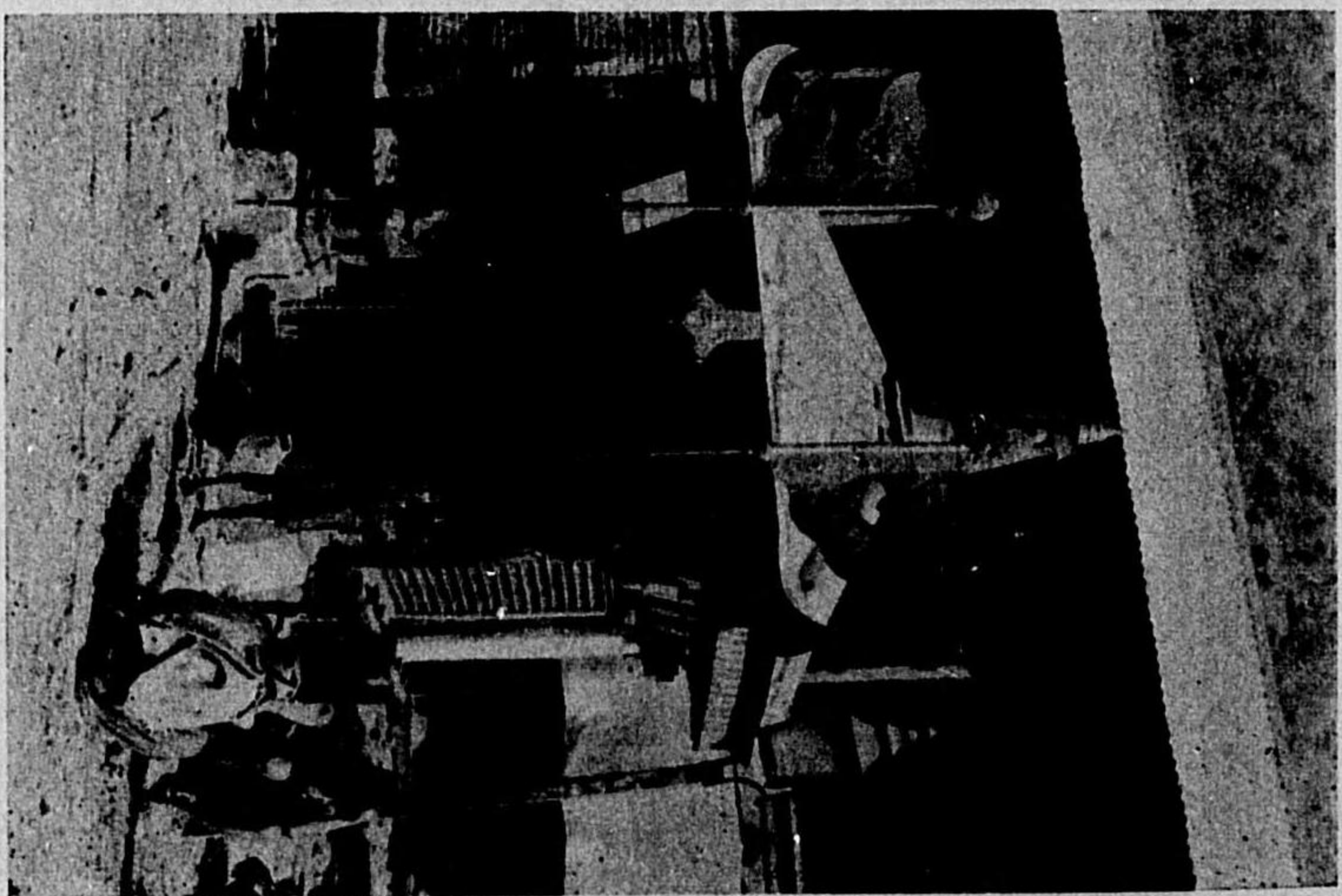
決めた通り正八・〇〇に宿をでた。初めからダンヂイへのつて出た。長軸と同方向に前後に出た棒へ、更に直角に棒を結びつけて四人でかつぐのだが、のつてみると決して不安定のことはない。荷物運搬には五人もいらぬが、これは首都から来たのだから、とにかく荷物を五分して背負はした。略ぼ圓錐形をなした籠を、紐をつけて前額から吊り、胴にも紐で結へ、この籠の中へ荷物を入れるのである。馬子と馬とは最初どこから来たか知らなかったのだが、出かける時従者が何か私にいったが脚力の強健なものは、山位は歩くがよいといふ様な顔をして出かけた。

宿舎を出て目的の方向に進むと直につき當りで、町は鍵の手に二度曲つてゐる。つまり初めに右へ曲り、次に十五六間行つて今度は左に曲る。曲ると間もなく左側路傍に小祠がある。方一間單層寶形造金銅の板葺で、屋上中央には例の裝飾があり、正面左右には同國の國旗を模したらしい金銅製の旗がたててあり、旭光を受けて屋根も旗も光輝燦爛として邊を拂ひ、美しきこと限りなかった。早速寫真にとりたかつたが、歸りまでがまんすることにした。例ひものが小さく、第三第四流位の小神を祀つてある祠にせよ、私は永年の間憧れてゐたネバル建築をネバル國に於いて初めて見たのだから、大分興奮したのは無理もあるまい(次頁挿  
圖右側)。

村の人家は約一町ばかり続き、それから川を渡らねばならぬ。ラブチ(Rapti)川といふ。水が出ればひどからうが、平素は田舎の小川位の程度だから、徒渉は容易である。川を渡り了ると直に山で、それ



右。ビムンエチの小祠  
(昭和十一年三月二十二日)



左。シサガリの小祠  
(昭和十一年三月十四日)

鐵道沿線の部落には、汽車中からみただけでは祠堂はまるでなかつた。初めて實物をみたのはビムンエチの宿舎から、ダンヂイへのつて出かけたときで、右のが夫れ。ほんとの路傍の小祠だが實に氣に入つた。それからシサガリの部落でみたのが左圖、何にしる初めてみたので感銘殊に深かつた。何れも三月十四日のこと、十四といふ數字が大正九年以來、妙な因縁でつき纏つてゐる。

Route from Segowli to Kathmandu

Stages	Miles	Rivers Crossed
Segowli to Ruksowl	16	Sikrana, Ruksowl, Tilaway.
Ruksowl to Simrabasa	14	Ruksowl and Tilaway.
Simrabasa to Bichakoh	10	Small stream
Bichakoh to Hetowrah	12	Kurru
Hetowrah to Nimbuatar	7	Samri and Rapti
Nimbuatar to Sisaghuri	8	Small stream
Sisaghuri to Markhu	7	Markhu
Markhu to Thankot	8	Small stream
Thankot to Kathmandu	7	Kalimati and Vishnumati

Daniel Wright 著 "HISTORY OF NEPAL" (1877) よりとったもの。鐵道が敷設されてゐなかつた時分も、やはりサガウリ (Sagauli, Segowli) からラクサウル (Raxaul, Ruksowl) にでたものと見える。ラクサウル・カトマンツ間75哩といふが、ここにあげてある哩數を合せると73となる。

から羊觴たる山路が長く續く。かうなるといくら若くて脚が達者でも可愛想だといふ考へも起り、從者のため乗馬賃位はだしてやつてもいいと思つた。ところが從者の方は遙かうわ手で、交代で前刻からすましてのつてゐた。

シサガリ (Sisagarhi) 一にチサバニ・ガリ (Chisapani garhi) といふ。こゝ迄上りつめるのである。そのシサガリにつく三十分ばかり前に、上から徒歩で下りてくる西洋婦人三人とすれちがつた。此連中が昨夜 D・B・を占領したので、私は下に泊らなければならぬことになったのだ。歐洲人さへ入國に大制限があり、容易に許可されぬさうなのに、よくも偶然とは言ひなが

ら、かうも一所に旅行者が鉢合せをしたものだと思つた。三人のうちの年嵩の女がすれ違ひざまに、朝食はすんだかときいた。昨夜ビムフェヂへ泊つたので、朝食は宿舎ですまして來たと答へたら、シサガリはすぐそこで、今なら朝食の用意はあるといつた。つまり自分達は昨夜そこへ泊り今朝朝食をすまして出發したのだから、私がすき腹で上つて來てさぞ困るだらうと同情して、親切にいつてくれたと解すべきであるから、其厚意を謝したら、若いのが横から口を出して「グード・ラック」といつた。こんな所へくると、異人の女達でも割合に愛想がいい。だからありがたうといつて分れた。

シサガリについた時、人夫は路傍にダンヂイを下ろした。丁度そこにまた小祠があつた。其形式はビムフェヂの程に面白くはなかつたが、それでも記念として先のと一所に挿圖にしておいた。此小祠は正面の出入口のところはネバル式でいいが、屋根の形が意に充たない。即ちの葱花屋根 (Balbous dome) が氣に入らない。これでは餘りにサラセン式むき出しで、この様な建物のあるのは、當然すぎる位當然だが、やはりここでは四注が寶形でなくては、氣分がよくでないと私は思つてゐる。

\* From Bhimpheedi the road passes up a most rugged and precipitous hill, on which stands the small fort of Sisaghuri or Chisapani, so named from a spring of very cold water a little above the fort. The fort is about 1600 ft above the level of the village of Bhimpheedi, and it takes a traveller nearly an hour and a half to reach it. .... and there is a small village below the fort where custom duties are levied on all goods and travellers entering the country. (D. Wright, "HISTORY OF NEPAL," pp. 3, 4)

税關はここにあった。私の今迄の経験では、税關なるものはいつも必ず國境にあるので、ある國へ入ってから其日は何事もなくゆつくりと一泊し、其翌日大分行ってから検査を受けるなんかは、全く以て珍らしい。尙ほ其上に、荷物は前記の小祠の前の石の上に、家も何もない日光の直射するところへ並べるので、つまり小祠前の敷石が検査臺になるのである。さうするとそこへ役人が出てきて武器・彈藥・寶石・鴉片等の有無をきく。さういふものは一切ないとはつきり答へたら、ほんの形式的にスーツ・ケースの内容をみて終りを告げた。晴天であったからよかつたが、雨でも降つてゐたら荷物はぬれて了つたらう。そんな時にはどうするか。税關のことを英語でカスタム・ハウスといふが、ハウスがないのだから、將來建物ができたら知らぬこと、今のところではカスタム・ブレースとかカスタム・ストーンとでも言はねばなるまい。面白い國があればあるものである。

#### 八〇、シサガリからカトマンヅ (Kathmandu) へ

漸く出發といふことになり、もの二十歩も行ったか行かぬかに、途の右側に建つてゐた小屋の前でとめられた。マンヂイを下ろしたのが此小屋の直下だったのだから、先刻から氣がついてゐたが、この内に兵隊だか役人だかゐて、旅券を見せろといふ。前日の男よりいくらか年もとつてゐるし、ここでひっかかったが最後、一步も前進はできないから、大事にしてあつた旅券をだして見せたところ、妙な節をつけて音讀し、取り上げてしまった。「デバナガリ」だから私には一字もよめないが、記念のため

にとつておき度く思つたので、返してくれといったら、ならぬといふ。若しまた先の方で旅券を見せろと言はれたら困ると言つたところ、もうその様なことは決してないといつて、何といつても返してくれないから、仕方なしにあきらめた。

此所から當分は登りばかり。此邊の沿道は、一方は急に深い谷底に向つて勾配になつて居り、他方には丁度満開の白い花をつけた林檎の樹が並んでゐて、非常に美しかった。登り登つて遂に峠に達し、次は降りばかりであるが、随分途はよくなかつた。折角登つたのを皆な降りて了つたら川畔に出たが、或は吊橋を渡り、或は川中においてある飛石を傳ひ、或は小さい木橋を過ぎ、遂に人家が少し集つてゐるところへ出た。ここで小流を横切るが、此即ちマルク (Markhu) 川で部落も同名である。この川べりに大きな家屋が建つてゐた。此家は昔旅人の宿泊に便するため、政府で建てたものでポワー (powah)

\* The road now runs upwards to a gap, near the top of the ridge on which the fort stands, at a height of about 2300 ft. above Bhimphedi. The descent on the northern side is not so steep nor so long as the ascent, but is still rugged and difficult. At the foot of the hill runs a clear rapid stream, up which the road proceeds, crossing it in several places by temporary bridges made of stones and brushwood. In the cold season this stream is small, but in the rains it becomes formidable, and in one place it has been found necessary to throw a lofty bridge across it. The hills on both sides of the bed of this stream are steep and bare. At the extremity of the gorge stand a powah and a small village named Markhu, after passing which the road lies over a low, bare, undulating range of hills, called the Ekdunta, till the valley of Chitlong or little Nepal is entered. ("HISTORY OF NEPAL" p. 4.)

といふ。書物でみるとパワーはここばかりではなく、あちらこちらの不便なところに皆建つてゐるさうである。川畔にあるので飲料水は自由に得られるし、中庭には厩まで設けてあり、不自由はないのだから、旅人は食料を用意し自炊さへすればいいのである。

マルク川を渡つてからの登りは又極めて急峻である。どこにも食料を得られる様な店があるではないし、天日に曝されながらダンヂイへのつて旅行をつづけた。あひの肌着に夏服を着、その上から雨外套をひっかけ、それで暑からず寒からず、つまらぬ山道でも珍らしいので割合に愉快に行進を續けた。一五・〇〇ある小さい部落を通りすぎた。これが多分チロン(Chitlong)だらうが、きいてみても判らなかつた。このあたりになると、高いには高いが左程上り下りはなく、先づ山の上の平地といった形(第3頁)。ここで路傍に休憩し辨當をたべた。従者にたづねたら、この小部落はバザーで、これから先にはカトマンズの谷へ下りたところのタンコットといふ村迄殆んど人家はないさうである。

バザーか何か知らぬが、どうも甚だきたらしいので入つて休憩を遠慮して、樹下にダンヂイを下ろさせたのである。私は朝から従者二人で交代に首から紅茶のびんをかけてゐるのをみてゐた。茹玉子は私が駕籠のなかへ一所に入れてもつてきた。だからいつでも辨當はたべられるわけである。荷運夫は遙かに後れて影も形も見えなかつたが、そんな事は平氣で玉子の包をあけてみたら、鹽がなかつた。これは全く氣がつかなかつた。マンガもつい忘れたのであらう。然るに鹽の一ポンド入の瓶は人夫がざるの内にに入れて遙か後れてゐるので間に合はぬ。そこで漸く考へてバハツールを呼び、附近のバザーへやっ

て鹽を求めさせた。

幸ひにあつたにはあつたが、鼠色といふのか灰色といふのか、少し黄色を帯びたドス黒い結晶で、小さいのはそれでも金剛砂位だが、大きいのは指の爪程もあり、ソヂウム・クロライドの標本にはいいが、食べるのは洵に不適當極るものであつた。何分このままでは如何ともなし難いので、ハンケチに包んで石の上のせ、他の石を以て敲きつぶして埒はあけたが、その粉にくだいた奴を玉子につけて口中に入れ、次に嚙下する迄には相當の勇氣が必要であつた。今日迄正式に此國に入った日本人は私を入れても十人にはならぬさうだが、バザーで得た岩鹽をなめたのは恐らく私一人であらうから、此點からだけは少しばかり自慢ができるであらう。

嘗てある朝鮮の有名な大本山の住持が、朝の洗面のときこれと同じ様な鼠色の岩鹽を、境内を貫流せる小溝の縁石の上のせ、附近に落ちてゐた瓦片を拾ひ、土のついてゐる面を形式的に手指で拂ひ、其瓦片を以て岩鹽を摩擦して摧き、右の食指につけて口中に入れ、食指の腹を齒楊子の代りとして齒を磨いたのを見て、大に感心したことがあつたが、私は其時、それより數年後に、ネバル國カトマンズ街道のバザー近く、それ以上の藝當を美事にやつてのけようとは、全く夢想だもしなかつた所である。無病息災で長生すると豫期せぬ事に出遇ふものである。



此所を發足したのは一五・三〇であった。首都迄16哩といふ。これでは日が暮れぬうちに到着の見込がないので、大分に落膽をした。こんな事ならもう少し早く朝たてばよかった。人夫はそれを見越して六時にたつ等といったのであらう。それならバハヅールが注意してくればいいのに、けしからん事だ。だまってゐるものだから、こちらは其様なことは知らない。まあそんな風にいろいろ愚痴も出たし後悔もしたが、今更如何とも致し難い。仕方がないので従前通り行進を続け、遂に第二の峠に達して休憩をした。第二の峠はチャンドラギリ (Chandragiri) と呼ぶ。ここからカトマンズの溪谷 (Valley of Khatmandu) は一目に見える筈であるが、生憎霧の様なものがかかっているため、眼界朦朧として判然しなかつた。ここではまだ日があつてゐた。

夫れからは正真正味の一瀉千里、降り降りて麓の村に達し、村をすぎて其はづれのところ、道の兩側に一軒づつ家のあるところにダンヂイを下ろし、擔夫四人は其家に入りて土間に休憩した。時に一七三〇、まだ大分あかるかつた。それから三十分後、丁度一八・〇〇になって従者二人非常に疲労した状態で到着した。私は直にここから首都迄何哩あるかきかせたら、8哩との返事であつた。よく考へてみれば先刻休んだバザールから16哩がうそか、ここから8哩がうそか、どちらかである筈だがこの時は中左様な考へは出ないで、取敢えず8哩を事實と信じ、これで夜の九時でなくては行つく事はむづかしいと思つたので、若し此村から電話が通じるなら、自動車を首都から呼びよせることもできようから、電話の有無をきかせようとしたら、バハヅールは言下に通話の可能を主張したので、然らば直に電話をか

ける様にといつて使にやつた、時に一八・一〇。直に車がくるとして、一九・〇〇には行けるだらうと決めてゐた。

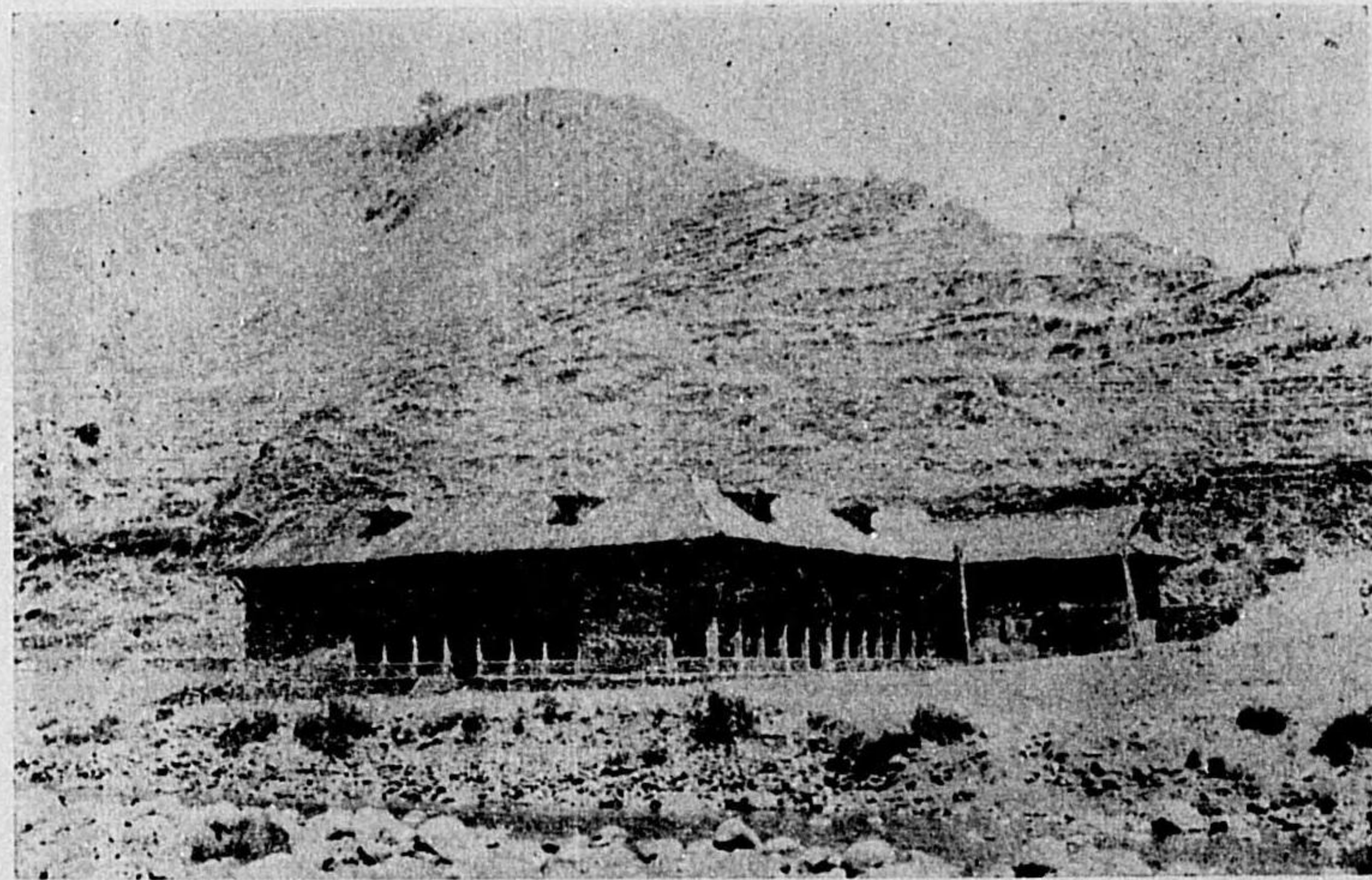
所がいつ迄たつても兩人共歸つて來ない。餘り晩いので迎に行くつもりで少し歩き出した。もうたそがれ時ですれ違ふ人の顔もさだかでない。爪先上りの途を二町餘りも行ったが、眞暗になってきて少し

\* チャンドラは「月」、ギリは「山」だから、チャンドラギリは「月山」といふ意味な筈だと話したことがあつたが、其後入手した河口慧海師の【西藏旅行記】(下巻第四一八頁)には「月の峰」と譯してあつた。この方が月山よりは餘程うまい譯である(46頁四行目参照)。

\*\* On reaching the top of the Chandragiri pass, a stranger is at once impressed with an idea of the denseness of the population of the valley. Besides three large towns, which are conspicuous objects in the view, there are many smaller towns and innumerable hamlets, straddled all over the higher grounds and slopes of the hills; and in addition to these, in almost every field there appears to be a cottage. The natives themselves estimate the population of the valley at about half a million, and probably this is not far from the truth. ("HISTORY OF NEPAL" p. 8)

The second of the two passes between Bhiphedi and Katmandu (Chandra giri pass, 7,400 ft.) is on the rim of the Nepal Valley. The white palaces could be seen 3,000 ft. below in the distant haze, with fields fading out beyond. It is small wonder that this valley has been a centre of civilization since before even Asoka had consecrated it with his stupas. (Travellers in Nepal. J. B. Anden. HIMALAYAN JOURNAL. Vol. VII, 1935)

\*\*\*【印度紀行】には「……廓爾喀ハ尼波爾ノ首府ニシテ尼波爾ハ西藏ト英領印度間ノ一大國ナリ……」とあるのでみると、その頃は、コルカが首府であつたか、或は誤つて首都と思つたか、何れかと思える。



上。マルク川に沿へるボワー（昭和十一年三月二十一日）

下。カトマンズ街道の小部落（昭和十一年三月十四日）

上圖は其昔交通が今よりも一層不便であった時代に、旅人が宿泊するためにネパ  
ル國の政府で建てたものさうで、今は殆んど用ひてゐないが、多くの室があり、  
中庭に面しては厩迄が設けてある。困るのは飲料水だから、豫めその用心をしてマ  
ルク（Markhu）川畔に建てたのであらう。下圖はこのボワーから暫く行った山上の  
稍や平らなところで、小部落があり（Chitlong?）、バザーもあって旅人  
の休憩に適してゐる。

ばかり心細くもあるのでやめにして元の所へ戻った。戻ったところで休む所はなし、寒いのと空腹とで  
大分弱ったが、止むを得ずそこいらを歩いてゐたら漸くバハヅールが歸つて來た。其報告に曰く、『電話  
をかけたが、そこ自動車の車庫とは約一哩を距てゐるので、早速使を出して車を呼ぶことにしたか  
ら、車の來る事は確である』と。これで車の來ることは間違なきさうだが、何故に電話をかけた所と車  
庫と一哩もあるのか、自動車屋に電話はないのか、使をやるにしても自轉車位はありさうなものだ、と  
いふ様なことが總て判らないので、一體どこへ電話をかけたのかと訊いても、答は要領を得なかつた。  
夫れから30分も待ったが、未だ車は來なかつた。氣がついてみればマンガがゐない。どこへ行つたの  
かと思つてきいたら、返事を待つてゐるのださうだ。これが又私には何の事かはっきりしないので、重  
ねて訊いたら電話の返事だといふ。愈よ判らなくなつたから、更に説明を求めたところ、何にしる車庫  
迄電話をかけた所から一哩もあるので、直に使を出したが、其使が歸つて來ぬうちは、はっきりしない  
から、歸つた上の返事を電話できいてから戻つて來るつもりで、今尙電話をかけたところに居るとの事  
で、漸くマンガの歸つて來ない理由だけは判つたが、先刻車が來る事は確實だといふ返事は、確實でも  
何でもなくなつて來た。さうこうしてゐるうちにやつとの事でマンガは歸つて來て、直に車を廻送する  
といふ返事があつたといつたので初めて安心ができた。

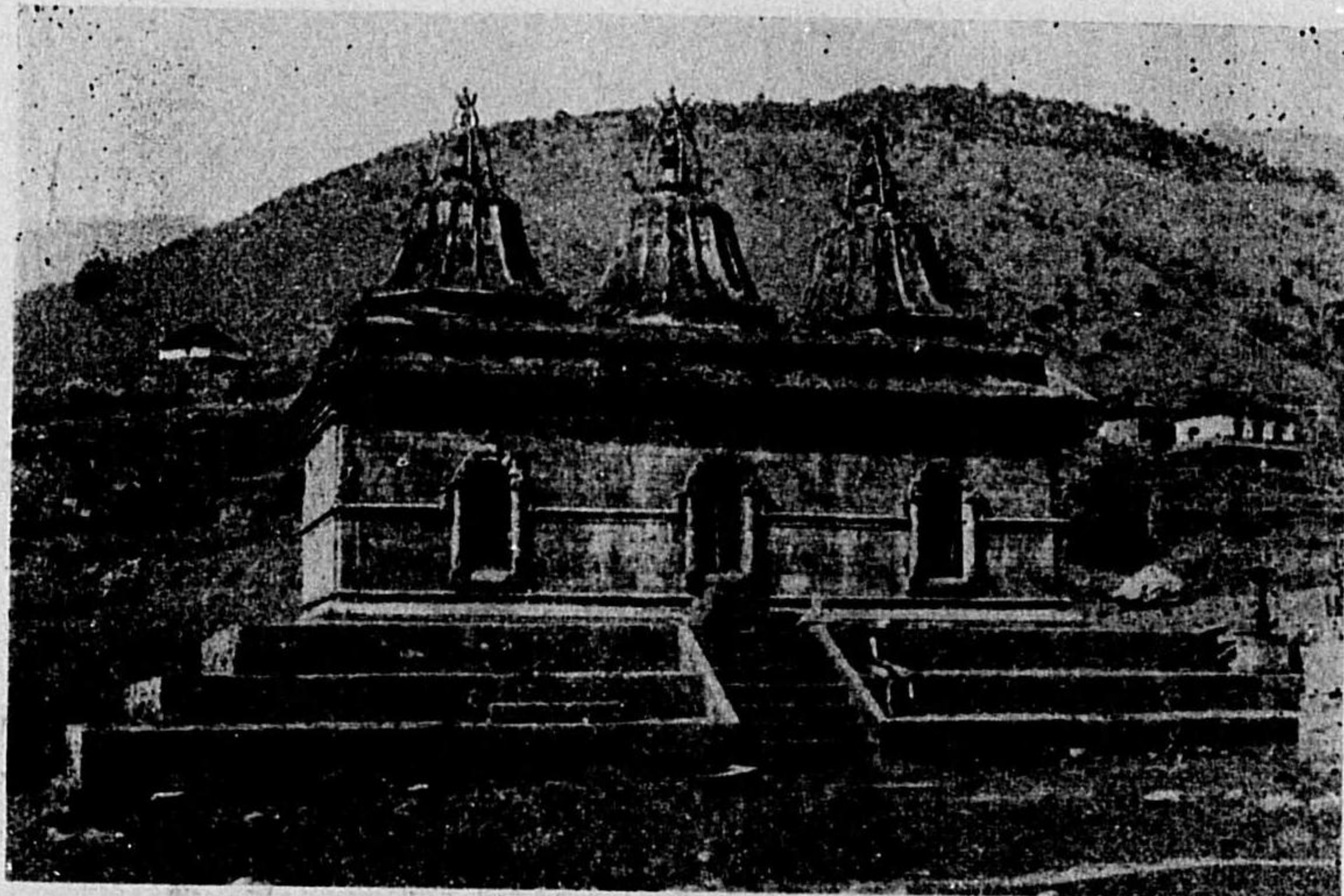
\*

\*

\*

\*

\*

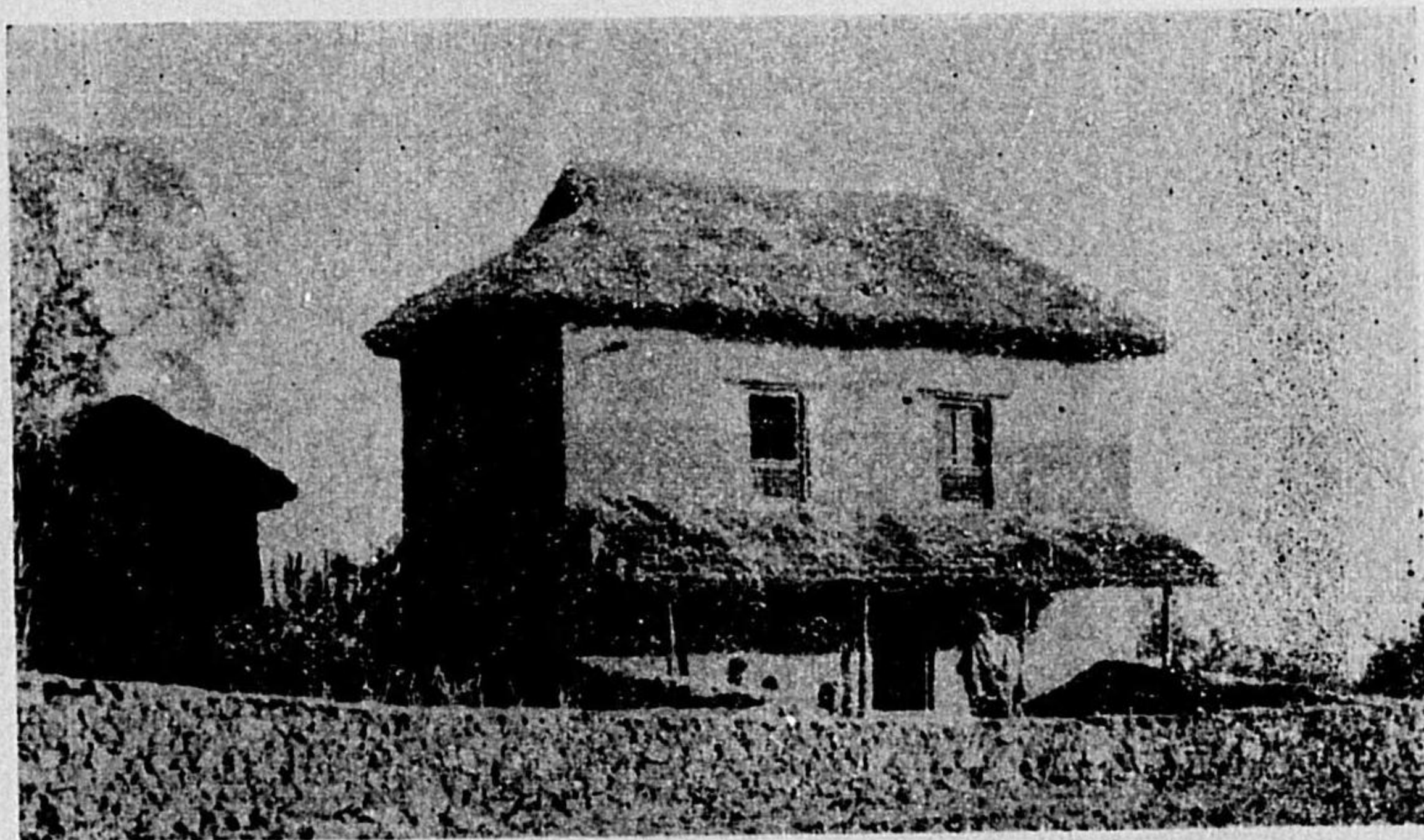


上。カトマンヅ街道路傍の小祠 其一  
 下。同 其二  
 (昭和十一年三月十四日)  
 (昭和十一年三月十四日)  
 マルク川を渡り、また山を登り、稍や平たいところに出で、更に少し進んだところの部落に、上圖のやうな三間長屋の印度教祠がある。今空家かどうかきく事もできなかつたし、近づくのはあぶないから、遠方から寫真だけとっておいた。屋根の形が少しばかり面白いので、これは後に記すことにする。下圖は三重の祠堂で、次の部落のはづれのところに建つてゐた。



上。チャンドラギリ峠 (昭和十一年三月二十一日)  
 下。土人木材の運搬 (昭和十一年三月二十一日)

ビムフェヂからタンコット迄は車を通ぜず。馬かダンヂイ(Dandy)か歩行か、或は特殊の装置で反対向きに——恰も厨子のない千手観音の様に——背負はれて行くか、とにかく四者其一を撰ばねばならぬ。峠は二つあり、一はシサガリ(Sisagarhi)峠でもう一はチャンドラギリ(Chandragiri)峠である。上圖は籠のうちにランチ・バスケットと輕便寝臺とを入れて、チャンドラギリ峠をシサガリの方向に人夫が通るところ。下圖は土人が大きな角材を背負ひ急勾配を登って行くところ。



上。タンコット村の農家

(昭和十一年三月二十一日)

下。クリ・カニ村の農家

(昭和十一年三月十四日)

煉瓦又は泥土(といっても石を積み泥土を塗る)で壁を造り、壁面には水平に帯模様を以て裝飾し、屋根は藁を以て葺く。壁面の帯は大概白と代赭(インヂアン・レッド)と一つおきで、時には白の代りに黄色を用ひたものもある。インヂアン・レッド色は實に彼等の喜んで用ふるところ。西藏——熱河の夫れも——建築等の紅臺といふのは、實物は知らぬが、繪でみると似てはゐるが、少し異ふ様である。



タンコットの村はづれに家が二軒あり一軒の方へ擔夫四人が全部入り込んで、家の人と話し込み、反對側の家の隣の空地に人夫五人と馬子とが集り、荷物を入れた籠を下ろして何か話し込んでゐる。最早まっ暗で人の顔も判らない。擔夫の入り込んだ反對側の家といふのは、荒物の小賣商人らしく、店頭に聊の商品を並べ、カンテラを一つともしてゐたが、暫くしておもてを閉めて了つた。だから邊は一層淋しくなり、且つそんな有様だから腰をかける所もない。仕方がないから地面においてあつたダンヂイの内へ、無理に身體を曲げ、初めから寢具の中から一枚出して使用してゐた毛布を纏つて寢轉んだ。かういふところでねる事は、平素から肘掛回轉椅子の上で僅かの時間をみつめて、ひるねをしつけてゐるので、殊更身體を曲げても平氣である。夜になって少し風が出て来て、初秋の木嵐の様な調子で木の枝を吹き渡り、頭の上にはオリオン星座が特によく光つてゐた。近所の瘦犬が出て来てダンヂイの内を覗き込む。といった有様で少しいやになりかけてきた。

いつかも書いたが、斯様な時には特に從者の氣のきいたのがほしくなる。若しワッサンであつたら、まさかこんな目には遇はせまい。ワッサンはネバル行を大變楽しんでゐて、自分はルンビニ園までは行った事があるが、カトマンヅは知らないから、是非連れて行ってくれといつてゐた。カラチで入國許可の電報を受取つた時、早速話したら随分喜んでゐたのに、急に事故ができて江商株式會社出張所へ返上したため、今回は連れてくる事ができなかつたが、若し彼であつたら、主人が饑しく寒く犬に吠えられながら、ダンヂイの中でとぐろを巻いてゐるのに、自分は相棒のバハヅールや荷運夫等を相手に、暗ら

やみで駄辯を弄してはゐなかつたらう。マンガは實に正直な善良なる若者だが、少しばかり気がきかない、それが彼の缺點である。ババツールに到つてはつい二日前の雇入だし、あとで判つたが、若いが中一癖あつた。こんな有様だからワッサンがゐてくれたらばと思はざるを得なかつた。

既にして時計は二〇・〇〇になつたのに、未だ車が來ないので、失望の極起き上り、懐中電燈の光りをたよりに少しそこいらを歩いたが、遙か遠方にその昔三上山を七巻半まいた蜈蚣のその様な眼玉が二つ暗中に赫奕たる光明を放つた。それが時時刻刻接近してくることが確かになつた時位安心したことにはなかつた。こんな時はブダ・ガヤ行でさんざん苦楚を舐められた道龍師を思ひ出して平然としてゐるのが當然だが、それは平素考へてゐることで、この様な危急存亡の秋にそんなに落付いてゐられる位なら、學校の教師なんか勤めないでも、立派に一人前の坊さんで暮らせる。年配だけからいへば大僧正の資格はあるが、それが老朽淘汰で柄にない教師の職から放り出されようとしてゐる俗物には、中中さうは參らぬのである。

主人は年をとつてゐるだけで、まるで修養ができてゐず、従者二人は主人が困つてゐても一切お構ひなしでは、一つとして取得のない主従だが、従者の方は多少狀情酌量の點がなくもない、といふのは兩人共朝から殆んどろくなものは食べてゐず、バザーでも何も食ふものがなかつたといつて、變な顔をしてみせた位であつたから、まあ仕方があるまい。いくら若くとも山二つ、18哩の間を白馬一頭に交代でのつて越したのだから。併しあれだけ喋つてゐたのだから、口をきくのも懶かつたとはいへない。だから

ら無罪には勿論、起訴猶豫もむづかしい。せいせい執行猶豫位のところであらう。

待ちに待つたる自動車は到着した。幌なしの大型であつた。大型だから私と従者二人と荷物全部と運轉手と助手——だと思つたが後にさうでないことが判つた——と皆樂にのれた。私は寒いので持參の毛布を頭から冠り、眼だけ出して車内に蹲り、擔夫・人夫・馬子・白馬其他全部置去りにして一目散に走り出した。さうして間もなく首都に入り、大きな建物の前に車を停めた。同時に人が大勢出て來たが、其中の一人が突然明快な英語で挨拶をした。それが夜目にも洵に瀟洒たる紳士に見え、今迄みてゐたいとむくつけき土人の型式を超越した風采を備えてゐた。だから大分面喰ひ、鸚鵡返しにグード・イブニングも出ないうちに、先方は愛想よく矢繼早に『荷物は直ぐあとから運ばせます、さあどうぞ直にお上りなさい、お部屋は三階にとつてあります』といった調子。寒くて腹が減つてゐるところへ、かうまくし立てられては、こちらは一言も出ない。漸くありがたうといつて階段を上り、指定の室に入った。二室あり、一は居間で一は寢室、それに洗面所が附屬してゐて、それだけで一郭をなして居り、全く他と没交渉で、室は椅子と机は勿論敷物まで敷いてあり、寢臺には毛布を添え、總て清潔で明るい電燈がついてゐて、洵に申分のない迄に行届いてゐた。一通り室を點検して椅子に腰を下ろしたら正二一・〇〇であつた。

紳士は第一に途中困らなかつたかときいてくれたから、此先きの何とかいふ村で車を待つてゐた間、寒いのと車の來様が晩かつたので、大分弱つたといふことを卒直に答へたところ、車は七時半にこちらをだしたといつたので、電話はここへかけたのかも知れぬ。どうも妙なところへかけたものだと思つた。さうこうしてゐるうちに、荷物は全部上に運びあげてきたので、自動車賃はいくらかと從者にきかしたところ、車は無賃で運轉手に心附さへやればよろしいとの事であつた。そこで總て小錢がないので擔夫・荷運夫其他賃錢も心附も皆明日拂つてやることにした。

バハツールは直に熱湯をもつて來た。續て牛乳も罐入の上等ビスケットも出て來た。様子が變なのでビスケットの由來をきいたら、歡迎してくれた紳士の贈物だといふので、扱ては中中入國を許可せぬ代りに、よろしいとなつたら相當に接待してくれるものだと思つた。何とかいふ村——これはタンコットといふことが後に判つたが——で大分なさない目にあつたが、空腹に牛乳を交せた紅茶をのみ、英國製の上等ビスケットをたべたので、其苦みを十二分に償ひ得たのであつた。

マンガは直に食事の要意をするが、何もないから飯と味噌汁とだけだといつた。それで充分だから直につくる様に命じた。ネバル紳士は明朝午前九・〇〇に來ていろいろ相談をするし、見物の場所も順序もきめて、皆自分が案内するといつて歸つて行つた。夕食ができたのは二二・二〇、食べてしまつたら二三・〇〇、夫から半時間たつて床に入つた。從者二人はこの様におそくなつては、バザーへ行つても何もないし、或は階下で番人に何か貰つて食べたかも知れぬが、私の食事のからを下に運んで行つたき

り、隣室へ入つてごろねをしてしまつたらしかつた。

昭和十一年三月十四日はかくして私にとって最も記念すべき日になつた。何にしる私が初めて外國へ出かけたのが大正十年四月十四日で、これも随分記念すべきである、其後別に細工をしたのではなかつたが、其時から十四年後に一月ちがひの同じ日にネバルの首都についたことは、どこ迄も十四といふ數がついて廻つてゐるやうである。最近では昭和十二年六月六日下の關から關釜連絡船にのつたとき、それが「興安丸」の第十四號室の第十四號寢臺にあたり、歸途は六月二十六日釜山からのつたのが「金剛丸」の第十四號室の第十四號寢臺であつた。偶然といへば偶然だがおめでたくなるのも□□十四年□月十四日かも知れない。まだ十四とい數が一身上の大事件について廻つてゐるが、公開はやめておく。

シサガリ迄も随分登りであつたが、それからとにかくタンコット村へ降つた迄は既に記した通りで、相當の難路であるが、私はダンヂイの上で居眠りをしてゐればいいとはいふものの、四人の擔夫のうち一人に顛倒されたら、乗つてゐたものはただではすまない。それが當然といへば勿論さうには違ひないが、ビムフエヂ——タンコットの大難道が無事に到着したことは、何といつても洵に有難いことであ

る。考へてみるとベナレスのD・B・へ泊ったこのかた、ろくな日は一日もなかった。ラクサウルのI・B・で、ひなた水の様な湯をあびて身振ひがしたのに、風も引かず無事であったのは、この上ない幸であつたとすべきである。

併し土地の人は何とも思つてゐない。子供でも歩いてゐる。母親が子供を抱いて乳を飲ませながら、大難道のチャンドラギリ峠を越して行くのに出遇つた位である。尤もこれは當然のことで、馴れてゐれば何でもない筈である。大變だと思つては、こんな所へ住めぬ筈である。何といつても車は通じないのだから、どの様な富豪でも貧生でも同様で、歩くのがいやならダンヂイへのか、或は人夫の背負つてゐる籠へ手観音の様に反対向きに負はれて行かねばならぬのだから頗る痛快である。諸君これを以て弱者の負惜みと誇り給ふ勿れ。

ネバル國の貴族かも知れぬが、主人と夫人と娘と立派なダンヂイへのり、従者數名此につづき、其次に荷運夫十數名、一列側面從隊で蜿蜒數十間の長行列とすれ違つたことがあつたが、此時は其堂堂たる繪の如き美的行進にみとれて、私が活動寫眞機を持つてゐなかつたことを甚だ残念に思つた位であつた。だから謂はゆるスピード時代に、ここでは總てが速度を超越してゐるのだから、大に現代離れがしてゐて愉快此上もない。

(昭和十二年七月二十二日稿了)

其昔河口慧海師がネバル國へ行かれた時の記事は、現今の有様と比較すると頗る興味がある。左に其一部を【西藏旅行記】から引いておく。同書下巻第四一七—四一九頁に

……其翌日(明治三十六年一月二十一日)三里程進んでピンビテと云ふ驛に着きました。此驛までは牛車及び馬車等が通過するけれども、是れから先は非常な急坂で馬も車も通じない。四年以前に此急坂を登つた時分には何も持たんで登つたが非常に苦しかった。今度は物を持って登つたが極く平氣なもので、ドントノ進んで酷い坂を一里半許り登ると兵隊が居る。其處はチサパニーと云ひ或はチサガリとも云つて居る。此處で始めて來た通行券を納めて了ふのです。勿論通行券を取調べる處は是迄來る間に三個處ありました。此處には税關もあつて、輸出入の物品に税金を課するですが、私は特に國王からの報知の前に着いて居つたものと見えて他の者は大抵荷物の取調やら課税やらで一日位逗留しなければならぬのですが私だけは荷物の取調もなく僅に三十分許りで通して呉れた、是れまで附いて來た巡査は此處から跡戻りをして更めて護衛兵を一人附けて呉れた、チサガリの頂上より北方を眺めますとダーヂリンで見たりも尙ほ豪壯雄大なヒマラヤ雪峰が巍然として聳えて居るです、……急坂を一里餘り降りクリカネ村を過ぎ鐵橋を渡り二里餘り進んでマルクと云ふ村に泊りました翌二十一日午前三時に支度を調へて山の中へ登つて行きました、今日は急いで行けば大抵首府カタマンドーに着ける心算ですから餘程早く起きました

\* ビムフエチ (Bhimpheti) の事であらう。

\*\* チサパニ・ガリ (Chisapani Ghar) の事であらう。

\*\*\* シサガリ (Sisagari) の事。チサガリの「チ」は「ミ」の誤植であらう。

\*\*\*\* クリカニ (Khalikhan) の事。

\*\*\*\*\* マルク (Markhu) これは正しい。明治三十二年最初の首都行の時も、一月三十一日は此處に一泊し、翌二月一日に首都入をして居られる(同書上巻第三八頁)。

\*\*\*\*\* カトマンズ (Kathmandu, Khatmandu, Kathmandoo) の事

たので、轉て山上の平原に出ますと廣い芝原は大變に霜が降つて居るです、空を仰げば銀色の玉兔が雲間に隠顯して居る……寒氣凜然膚に迫るものから荷持も兵士も顔ひながら山を登りますと其山の間にはヒマラヤ山の名物のドロ、デンツロンの花は今や將に綻びんとして奇岩怪石左右に欝つ……一里餘り登つて又一里許り降りますと遙かの向ふに大きな原あり原の向ふは矢張雪の山であります、今私の通り掛つて居る峰をチャンドラギリ（月の峰）と云ふ、其山を降ると平原に出ます其處は海面を抜くこと六千尺餘りの山原で其山原を出てから三里餘り行きますとネパールのカタマンドー府に着きました、……

とあるのでみると、ビムフェチからカトマンヅ迄沿道の有様は大概似たものであつたらしい。河口師は首都迄徒歩されたので、随分大變であつた事と思はれる。シサガリの關所で關守が旅券を取上げるのは前からのしきたりであつたと見える。

シサガリの税關の役人は、私の荷物が少しであつたせいもあらうが、ほんの形式の検査ですんだし、別に有難いともよかつたとも思はなつたが、この記事によると當局から何も前以て通知でもなくては、相當に時間もかかるらしい。尙ほ河口師はマルク村へ一泊されたとあるが、あの河畔の公立宿舍へであつたかも知れない（第35頁上圖、259・26）、翌日も午前に出發されたさうで、夫が一月二十一日では、幸に月はよかつたとしても、さぞ困られた事と拜察する。西藏旅行でさんざん苦まれて、充分修養をつまれた立派な坊さんであつたればこそ、この位の事はなんでもなかつたらしいが、私では到底我慢ができなかつたであらう。其昔北畠道龍師がバトナからブダ・ガヤまで行かれ、河口慧海師が甲谷他か

\* ロードデンツロンの誤植であらう。ロードギンドロン (Rhotolendron) 石楠科植物。

らネバルを通りぬけ大迂回で拉薩へ到達された紀行を讀んでみると、實際どうも自分の旅行が恥かしくなる。マルクをたつて月を踏み寒風に吹き曝されて山を登り、「山上の平原の廣い芝原」（當時はさうであつたのかも知れない）（第35頁下圖）で休み、辨當の茹玉子を食べようとして鹽を忘れたのに困つたり、タンコット村で首都から自動車を呼びよせたのに、來ようがおそいからといって、そこいらを歩き巡つたり、人が全部歩いたところを乗物にのり人夫にかつがし、本人は四方の景色を眺めながら目的地に向つたり、どうも先人が随分困却された事も知らないで、自分獨り大旅行をした様な氣持になり、歸來得意になつてすましてゐた等は、何といつても慚愧にたへない次第である。

（昭和十七年三月一日増補）



# 印度佛塔巡禮記

(第十二回)



ネパール國4A郵便切手 (チョコレート色)

上の文字は左から右へ「Shri pa shu pa ti」、下は同じく左から右へ「Ne pal sa r ka r」。初めのシユリはマゼスチー、あとのサルカールはガバーンメントたさうな。何れも蓮藤先生に讀んで頂いたので、私には一字も判らない。

八一、トリブレスワー・レスト・ハウス (ウ六〇)

首都に着した夜はゆっくり安眠をしたし、翌朝起きてみたら非常にいい天気なのだから申分はなく、軽い氣持で濡縁に立って考へてみた。昨夜タンコットの村はづれで、毛布を冠って車を待つてゐる間に、首都にはD・B・があるさうだから、或は按外うまくいくかも知れぬと思つてゐたものの、かく迄立派な堂堂たる宿舎があるとは想像してゐなかつた。元來最初私の外遊が決まつた時、今度こそは何とかしてネバルへ行つてみたいと思ひ、これには英國といふよりも、寧ろ印度總督府の助力を得ることが絶対に必要だと考へたので、先づ以て其當時京都在住の英人故Pさんへ、何とかありませんかと申出してみた。Pさんは英國の名家だから、定めて其方面に知己朋友もあらうと推定したからであつた。

Pさんは早速請合ひ、直に印度總督の親戚に當る人で、極く親友だといふ人の手許へ手紙をだしてくだされたさうである。それから若干の日たつてのある日、先日出した手紙の返事が来たといつて、渡されたものをみて、この分なら大分有望だと思つてゐたが、それからまた若干日たつてのある日、Pさんは甚だ氣の毒さうな顔をして、ネバル行は駄目らしいですよといつて一枚の紙を渡された。この紙には印字機で何か文字がうつてあつたので、何が書いてあるのか知らんと思つて讀んでみたら、駄目とはかいてなかつたが、まああきらめた方がよさうな文句であつた。「ザ・リザルト・オブ・アワー・エツフォーツ」がこれでは頗るなさけない。参考のために次にだしておく(出版)。

Note.

Owing to the extreme sensitiveness of the Nepalese Govt. on the subject of their complete independence, it was decided some years ago with the approval of His Majesty's Govt. that in future all applications from foreigners, i.e., others other than British subjects, to visit Nepal should not be referred by the British Representative in Nepal to the Nepal Govt. Colonel Daukes, who was the British Envoy in Khatmandu at the time, ascertained from the Nepal Govt. that they would prefer such applications to be sent direct to them and not through the British Legation. The only exception to this rule is in the case of foreigners who go to Nepal as the guests of His Majesty's Minister, in which case the British Legation make the necessary application to the Nepal Govt. It is assumed that Professor Amanuma would not expect to go as the guest of Colonel Bailey so that his best plan would be to apply direct to the Private Secretary to His Highness the Maharaja of Nepal for permission to visit Nepal, although he could of course make his application through the Japanese Foreign Office. It may be added that it is impossible for any distinguished foreigner to visit Nepal except as the guest either of the Nepal Govt. or of His Majesty's Minister, since there is no public or hotel accommodation in Khatmandu. This information may be of interest to Prof. Amanuma.

\* Freeman writes:

"I'll certainly do my best to get the entire for Nepal. But you know the difficulty there always is about getting to Katmandu. Still we have recently done H.H. the Maharajah proud when he visited us at Delhi in the cold weather & I'll make a special appeal.... I'll let you hear the result of our efforts. Which is I feel as much as we could hope for at the moment. I'll write at once when I hear again."

一九三五年四月十二日附、英國在住の某氏よりP氏への手紙の一部。フリーマン氏は當時の印度總督ださうである。昭和十年五月十二日P氏より受取る。

ERECTED  
DURING THE ADMINISTRATION OF H.H. THE MAHARAJAH  
LIEUTENANT GENERAL SIR CHANDRA SHAMSHERE JUNG BAHADUR  
RANA GOB. SCI. GOV. & DGL THONGLIN PIMMA KOKANG WANGSIAN  
PRIME MINISTER & MARSHALL, NEPAL

A.D. 1916

Tripureswar Rest House 軒の刻銘

THONGLIN・PIMMA・KOKANG・WANGSIAN=統領・兵馬・果敢・王衛

(昭和十一年三月十五日寫す)

此原紙はネバル行の手續を依頼すべく、順序を経て其筋へ差出したきり、返つて來ないので今は手許にない。このノートは何處から出たのか知らぬが、或はニュー・デリーあたりから英國に送られ、更に英國から日本へ來たのかも知れない。何れにしても終りのところの數行がやつかいである。英公使やマハラジャの客分としては、例ひ萬一先方が來てもいいとあつても、こちらから辭退するとして、ホテル・アコモデーションは成程首都にはないが、バブリックの方は大きなものがある。而もラクサルのアイ・ビーの様に貧弱なものではない。これは一體どうしたことか。

此レスト・ハウスの正面、即寫眞でみる通り、ブロークン・ベヂメントの妻入だが(第5頁上欄)、其妻のフリーズに刻んだ長い銘文がある。此により此建物は一九一六年(大正五年)にできた事が明らかである。銘は上記の如くである。

即ち今から27年前に建てたものである。それなのに宿泊所がないといつてきたのは、成程ネバル國としては、其「完全なる獨立」のために、できるだけ外國人を入れぬ工風をしてゐるには違ひないが、英吉利がそれに賛成をして醫押をしてゐるとみるのは、あながち邪推とばかりはいへまい。Pさんは親切に世話をしてくだされたのは感謝にたへぬが、英國人の手から入國を容易にして貰

はうと思つたのは、全く私の認識不足の結果であつたと思へない。

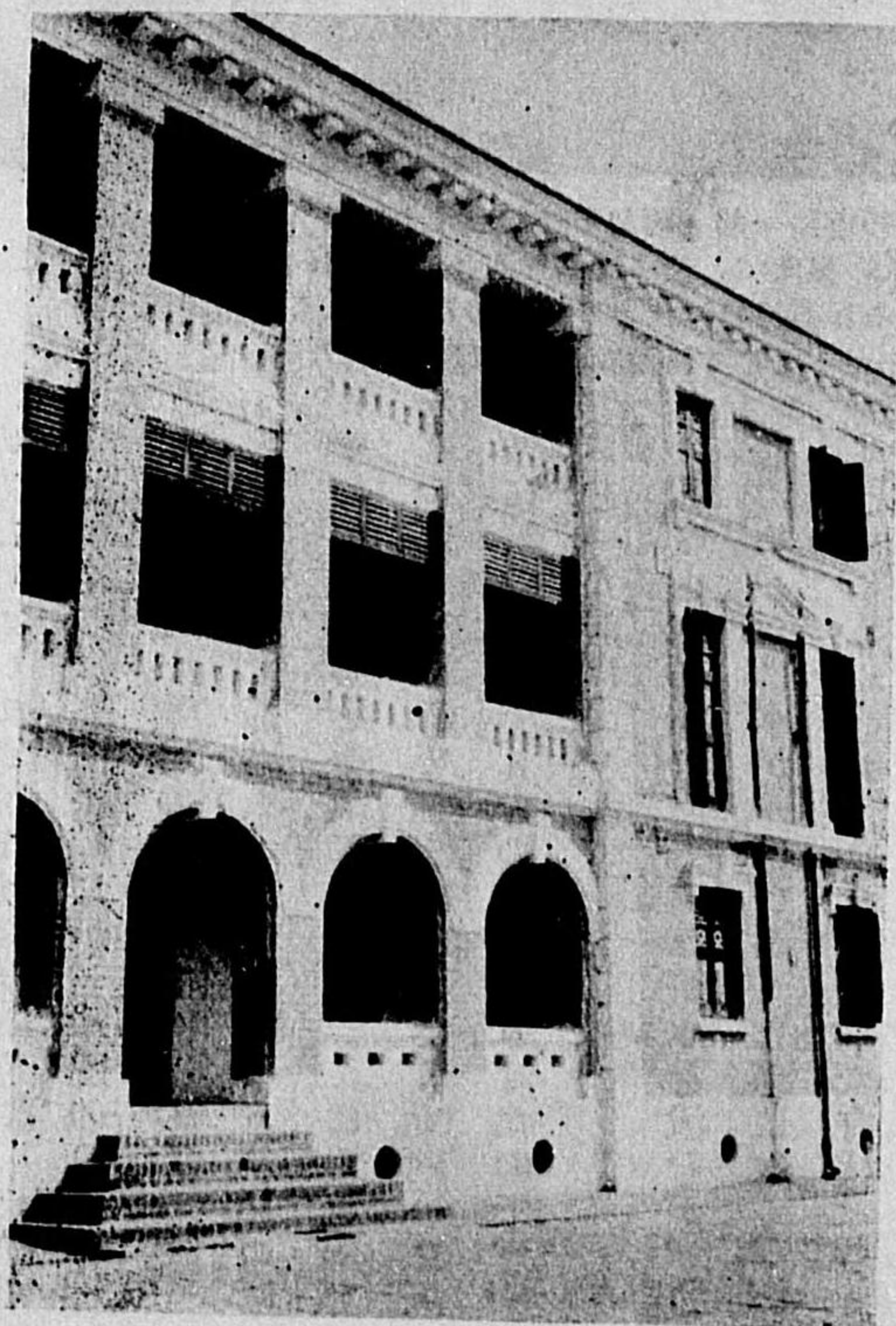
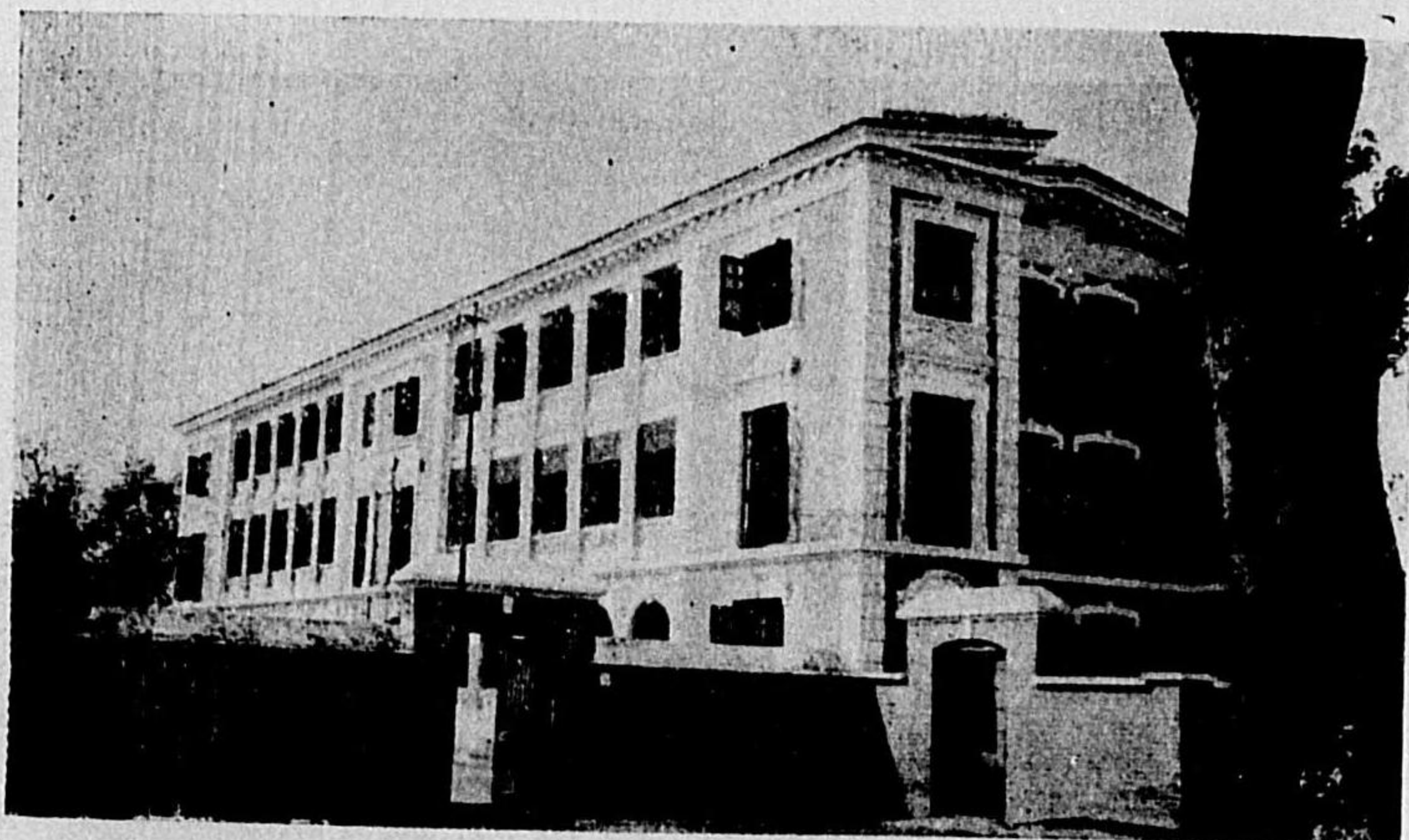
庭は全部煉瓦を敷き、左右は塀で、建物に對してゐる方だけが廻廊の様になつてゐた。そこには大勢の西藏人がゐて、唐辛を大きな麻か何かの袋に入れて重さをはかつてゐた。何でもラサあたりから出てきて、一月ばかり働いて歸るのださうである。片道六ヶ月位かかるといふのだから、僅か一月で歸るのでは勘定に合ふまいし、何ぼ何でも片道半年もかかるまいから、これはどこかに法螺が交つてゐるのであらう。聞くところによると、ネバル國には可なり西藏人が住んでゐるさうだから、それ等の人人が働いてゐるのかも知れぬ。彼等及び彼女等は、庭を限つて反對側にR・H・と向い合つて建つてゐる廊の様な建物の下か又は庭の敷石の上に、何か粗末な薄いきれを敷き、又は何も敷かずに、着のみ着のままねる。朝起きて洗面をしたのをみた事がない。至極原始的簡易生活をしてゐる。さうして庭の一部、成るべく一群の男女が起き上れば直に手の届く様どころ——だから一ヶ所には限らないが——に火を焚き、薄黄色いドロドロしたものを入れた鍋をかけ、時々アルミニウム時代以前に日本で常用されてゐた様な木製しゃくしでかき廻してゐる。其内容からは湯氣がゆるく昇つてゐるところを上からみると、腹のすいてゐる時等は如何にもうまさうである。

起き上つたものから順に鍋の周圍に集り、大きな椀に其内容を盛り、あついためか吹いてさましながら、うまさうに嘍つてゐるのを毎朝の様にした。實は其食物のエタイが判らないので、階段踊場の窓の錠戸を殆んど閉めた様にして僅にあけておき、そのすき間から望遠鏡で覗いてみたら、内容はどうやら

黍粥らしく思はれた。

朝鮮平北の大本山普賢寺で、坊さんの卵子を孵化してゐるが、彼等の常食として粟飯を與へてゐる。其食事の有様を視察した際、餘りうまさうに食べてゐたので、夕食の時私にも少し食べさせてくれと頼んだが、到底食べられたものではないとの理由で一蹴されて了つたのを、漸くのことで茶碗に一せんだけ貰つたが、成程大してうまくなかつた。監務の話では、折角道心堅固で弟子入をしても、金持の子供は粗食に閉口して逃げだすから、貧乏人の子でなくては、まあ將來立派な坊さんにはなれませんかとあつた。西藏人の黍粥にしても、それはそれは不味なものであらうが、見たところだけは實にうまさうであつた。さうして印度人と同じくセメントの上でも石の上でも、所嫌はずごろ寢をしても、全く平氣なのだから何といつても不死身である。

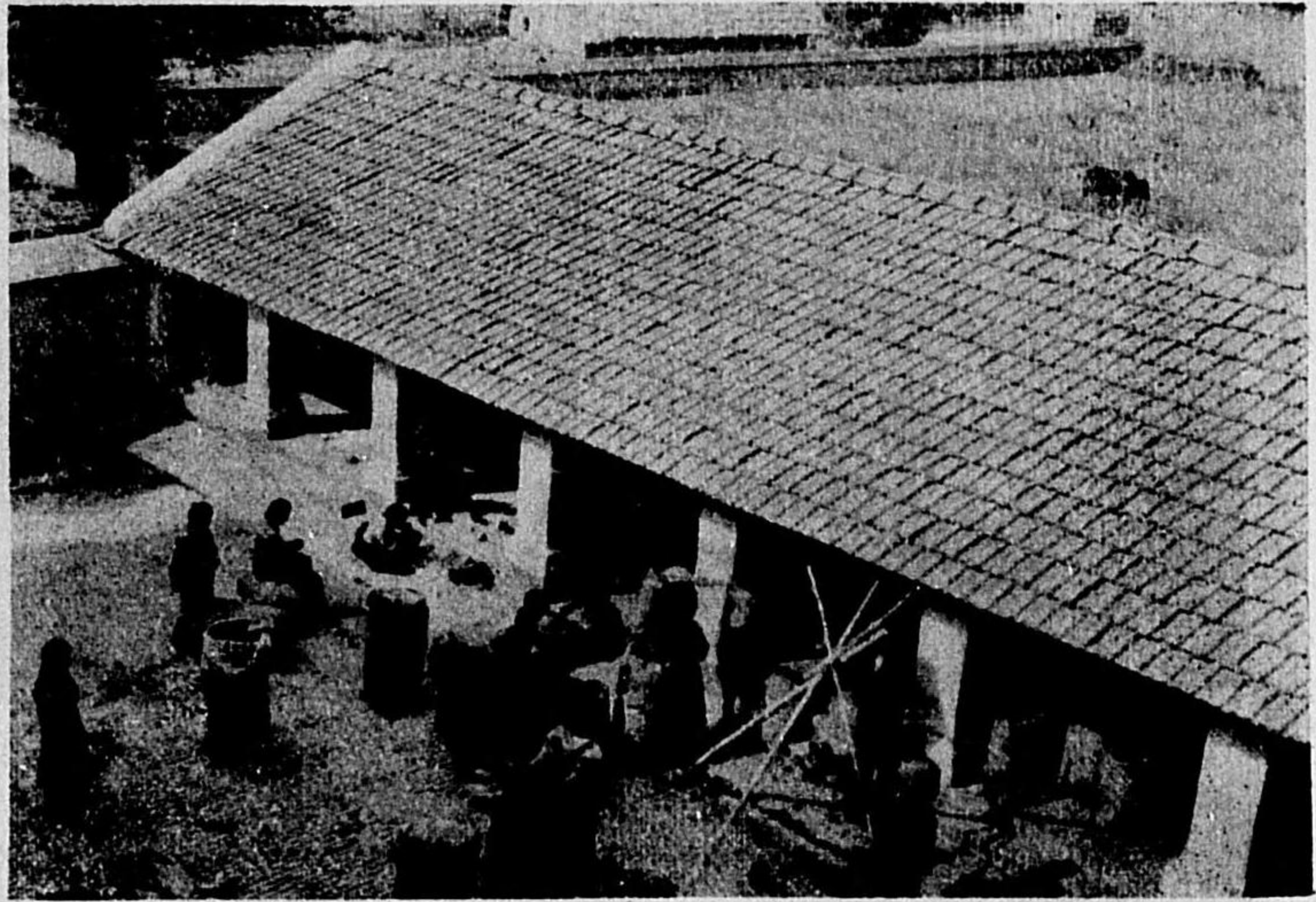
洗面所で洗面をしたあとの水の捨場がないには随分困つた。ビムフェチでも同様であつたが、窓をあけて思ひ切つて勇敢にぶちまけたので、どうにか始末はついた。併しこのR・H・では、庭は廣く煉瓦か何かで敷詰めてあるにしても、人がゐるので窓から捨ることもできず、床に散くことも同様のできかねたので、初めの朝は大失敗をしたが、漸くにして床に直径三寸位の至極小さい凹所ができてゐて、其中央に孔があいてゐたのを見出した。そこで試にここにあげて見たら、あたりへ大分にこぼれたが、それでも水は直に流れ込んでしまつた。この部屋は大分大きく、正方形ではないが八疊位はある。其理由はここが便所を兼ねてゐるからであるが、それならそれで兩方の設備がなければならぬのに、小



上。 首都の公立宿舍全景  
下。 同 一部

(昭和十一年三月十五日)  
(昭和十一年三月十八日)

カトマンツ市に於けるネパル國の宿舍で、煉瓦と石とで造つた三階建、切妻妻入の堂々たる大建築。上圖の切妻のところは北側だから、客間は東西に面してゐるので、各階に四人づつ泊れる様にしてゐるから、つまり同時に十二人泊れるのである。私が一週間泊つてゐたのは下圖即ち西側の北へよつた方の三階で、階段のところの窓からヒマラヤ山脈の一部がよく見えた。



R.H. の庭の一部（昭和十一年三月十五日）  
働いてゐるのは總て吐蕃人の男女で、袋に唐辛を入れて、それをはかりにかけて重  
さをはかつてゐる。それが毎日の仕事の様である。何れも蓬頭垢面で、  
一見したところ大して清潔な人種とは思はれない。

の方だけおいてあつて大の方はない。こんな  
事をかくのは甚だ恐縮だが、印度の D・B・  
だつて皆大小兼用のをもつて來ておくので、  
それはそれで掃除人があるのである。初めは  
變だが馴れると平氣になる。ここでは兼用で  
ないだけに困つてしまつた。そこでバハヅ  
ルに言ひつけて其方の要意をさせたので、や  
つと一人前になつた。

印度と同じ様にバナワラが水を汲むが、水  
壺にめつたに水が一ぱいあつた事はなく、い  
つでもつかつたら其ままといつた有様。さう  
して洗面器も手洗器も同一で、日本製の安物  
らしいのが唯一つおいてあつた。これでは何  
としても始末が悪いので、何とかしてやつと  
の事で混同せぬ方法を按出したが、初めはど  
うしようかと思つて大分に弱つた。それに寒

いのでいくらきびが悪くとも、身體を拭くこともできず、D・B・式の入浴を試みたくも同様に不可能  
であつたため、滞在一週間これが最も困つたことであつた。

従者二名は少なくとも最非入用である。私がつれていった二人の内、一人は英語を自由に練るので、  
見學の時連れて歩いて通辯に使つたり用事を言ひつけたり、一人は日本料理ができるので、留守番にし  
て飯炊きをさせたが、これで手一ぱいであつた。滞在中の食料を持參することと従者二人とは、私の様  
に簡易生活をするものにとつては、必要にして充分なる條件であつた。日本人としては、きらすと一番  
困るのは白米であらう。

\*

\*

\*

\*

\*

Parceval Landon 著『NEPAL』第二卷に一八八一年より一九二五年迄、即ち44年間にネパルに入國  
した歐人の數は、公用者を除き約153人といふ事になつてゐて、各年毎に其人名及び職業が掲げてある。  
言ふ迄もなく其大部分は英人で、軍事上の視察が多く、考古的方面の研究者は數名に過ぎない。表題の  
書き起しに“LIST OF EUROPEANS……”とあるのが、その一九一三年の部也

Mr. J. Taka, M.A, D. Litt, Professor of the Tokio University, Mr. Ekai Kawaguchi, of Japan,  
two Japanese, names not known (January-February) to study Sanskrit MSS.

とあるのが眼についた。J. Taka は文博高楠順次郎先生であらう。河口慧海師は西藏探險で盛名を馳せ

た人。一九一三年(大正二年)入國とあるから、このR・H・はまだ建つてゐなかつたから、どういふところへ泊られたか、或はマハ・ラジャの客人としてかも知れない。

私がきてゐたのでは、私の入國は日本人としては五人目ださうであるが、一九一三年の四人を入れると九人目になる。いつのことか知らぬが軍人が一人行き、其後梵語學者の榊亮三郎先生が行かれ、最近では參謀本部の井出大佐と、鹿野園の壁畫を完成された野生司畫伯とが行かれた。この二人はたしかにこのR・H・に泊られたことはスバからきいた。榊先生はいつ行かれたか、はっきり記憶してゐないが、まだ二十年はたつまいと思ふから、さうすると此建物はできてゐた筈である。それで假にここで起居されたとしたらば、私は日本人で四人目、入國したのでは九人目となり、極く少ないのである。だから二日でも三日でも、ただ行ってきたといふだけで、無線放送電話で三十分間法螺を吹く位のことには誰にでもできる。洵にはや他愛のない次第である。

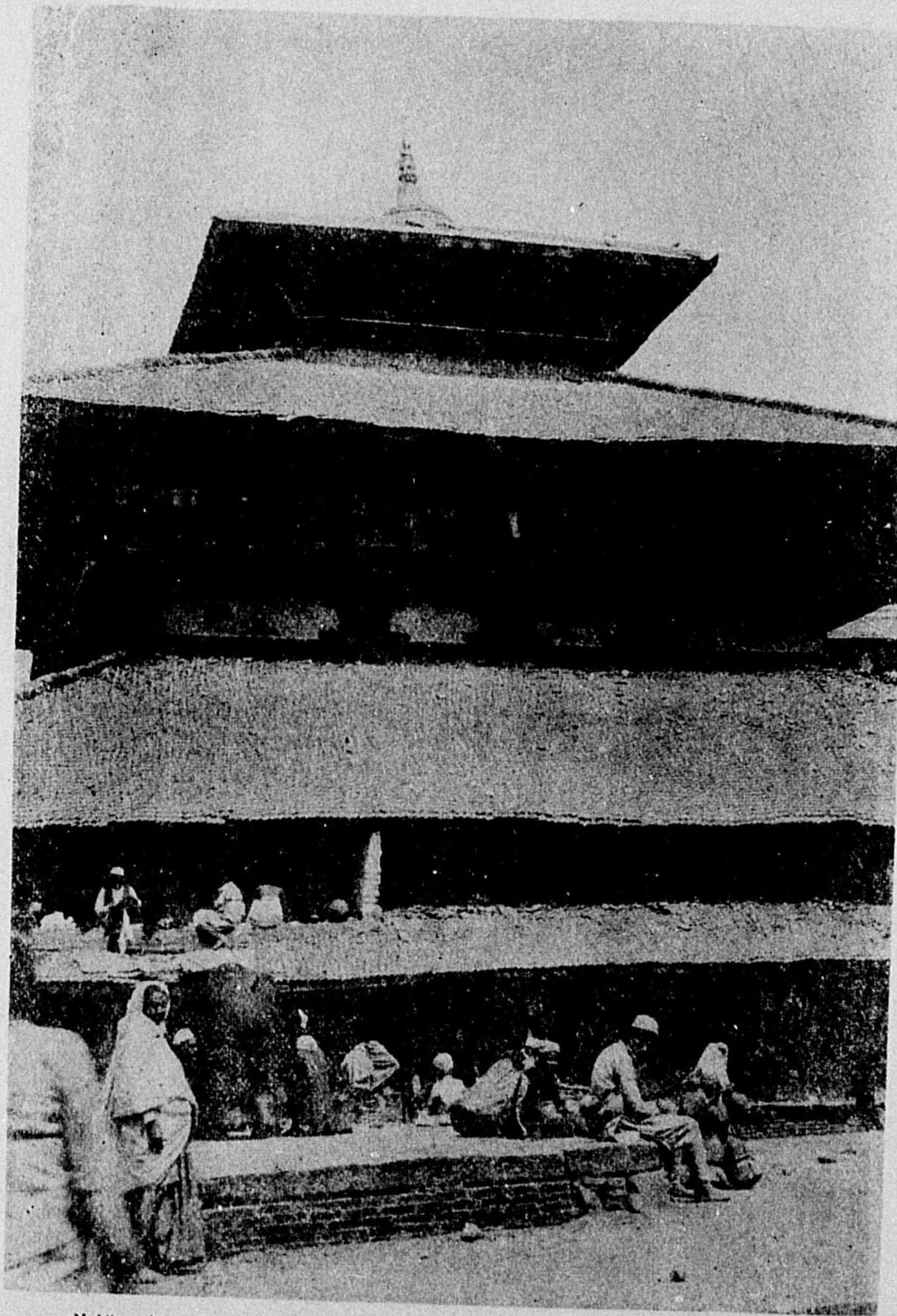
\* \* \*

寫真でみる様に此建物は三階建てで、各階に一組の室が四つづつあるから、合せて十二組といふ事になり、つまり同時に十二人泊れるのである。私の室は三階の西向きで北方ので申分はなかつたが、中庭で唐辛を取扱つてゐる西藏人が、可なりやかましく喋るので、うるさいから東側の室にかへてくれと申込んだところ、東側は全部あいてゐる——泊客は私一人だから十一室は空間である——が、まるで掃除が

してないので、芥だらけな上に、電燈を全部取外してしまつたので、泊れないといつて断られた。これが嘘でない以上、東側の室は當分使用しないらしい。使用しなくても心配はない、入國がこんなによかましくては、とても一度に十二人なんか泊ることは絶對にあるまいから。

前夜私をここで迎へてくれた紳士は、此朝九・〇〇に来るといつて歸つたのに、堂堂30分遅刻して漸く九・三〇に来た。極めて婉曲に姓名・年齢・國籍・入國の目的等をきいたから、私は旅券を出して見せたら、そのうちの必要の部分を書いた後、市内外の名勝舊跡は皆自身案内するといった。さうして尙ほマハ・ラジャに面會せぬかといつたので、成るべくさういふむづかしい事は避けたく、野人で何も儀禮を辨へぬから、萬一失態でも演じたらば一大事だし、服装もこれでは如何ともなし難いと言つた所、公用で来て正式に訪問するのではないから、略服で勿論差支なしといつて、どうしても謁見させようとするので、強いて断るのも何だか工合が悪いし、此所少なからず當惑した。此紳士はマニ・ラム・パンダリー(Mani Ram Bhandary)と呼び、スビ(Suba)といふ役ださうだ。スバとはどの様な役か、判任官か高等官か何か知らぬが、前額の中央、佛様なら丁度白毫のあるあたりのところに、朱色で寶珠を少し上下に長くした様な、短徑約三分位のものを、胡粉の細い線で輪郭をとつたものを描き、眼鏡をかけ現世紀の初めに日本に於いて専ら流行した形式の口髭を生やした若い貴公子然とした人物で、非常に親切らしく且つ親み易く見えた。暫時雑談の後、午後一・〇〇に再び來るといつて辭去した。

然るに不幸にして此約束は守られず、さうして此時限り彼は來訪せず、従つてプレーセス・オブ・イ



首都の名の元となったと傳ふる木造家屋（昭和十一年三月十五日）  
 Katmandu, Khatmandu, Katmandoo, 等と綴るが、この名の元は (KASTA)+(MA  
 NDAP) で、つまり「木殿」といふことださうである。現在は巡禮前に用ひられて  
 るさうである。外見はこの様におそろしく肥満した袋層附三重塔  
 といった風で、少しきたならしい。

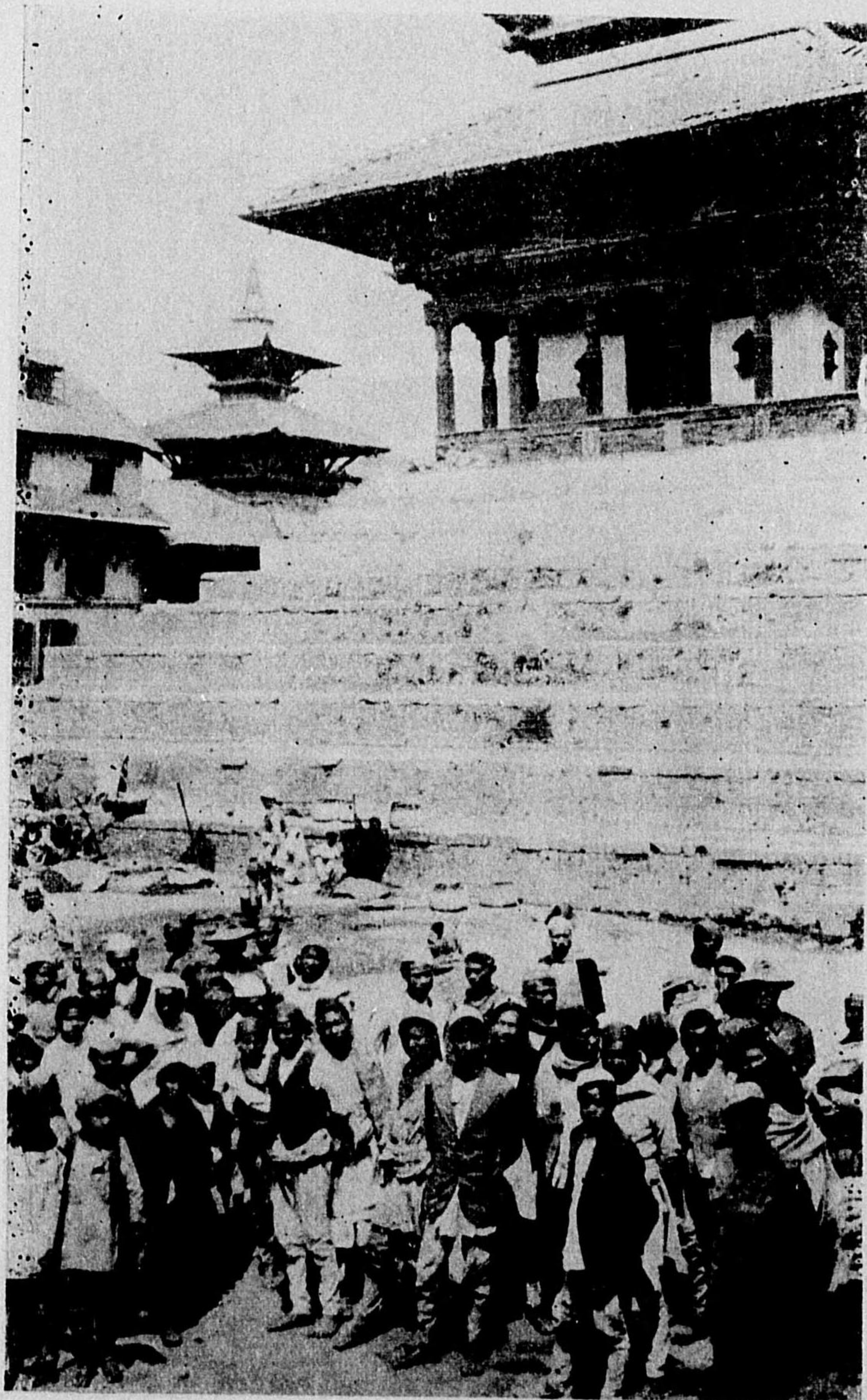
ンテレストも一つも案内をして貰へず、仕方がないから自分で勝手に歩いてみた。何をきくにもバハツ  
 ールの通譯だし、訊く相手はR・H・番人頭なる護衛<sup>\*</sup>といふよりも寧ろ監視人だから、答は甚だ不充  
 分で、此點は洵に遺憾であった。といって別にとる方法もなかった。かかる状態で十五日から二十日迄首  
 都に滞在し、二十一日早朝出發、翌二十二日夕刻ラクサウルに歸着したのであった。

## 八二、首都の六日間

三月十五日、日、好晴

午前九・三〇に來訪したスバが辭去して間もなく、徒歩でその邊へ出かけた。其時此宿舍から菜葉  
 服を着た男が一人ついて來たのを、最初は少しも氣づかなかつたが、どうもいつ迄も一所に歩き、寫眞  
 等をとらうとすると蝟集してきて、レンズの前に大して賢明とも思はれぬ顔面をつき出す群集を追拂ふ  
 役を勤めるので、扱ては多少の金錢にありつくため、そこいらのものが來たのだらうと想像して、あれ  
 は何物かときいたところ、ボリスだといった。ボリスでも中中從順で、ともすれば大きな顔をしようと  
 する様な不心得なことはなく、決してオイコラ等とは言はず、恰もサーバントの如くであった。此最初  
 の外出の時、初めてクマリー・デパールを外から見、其廣場に數基の三重塔が並び建てる有様をみて、  
 頗る感激して歸宿したのであった。かくて此絶對鎖國の首都の第一印象は極めて良好であった。

\* Mulhya と云ふらしい。



ダーバー・スクエアの一部（昭和十一年三月十七日）  
 前方は九重の段上に建てる三重塔の基部、写真をとらうとすると、夥しい見物の  
 大供子供が、レンズの前に立って了って始末に悪いこと圖の如し。

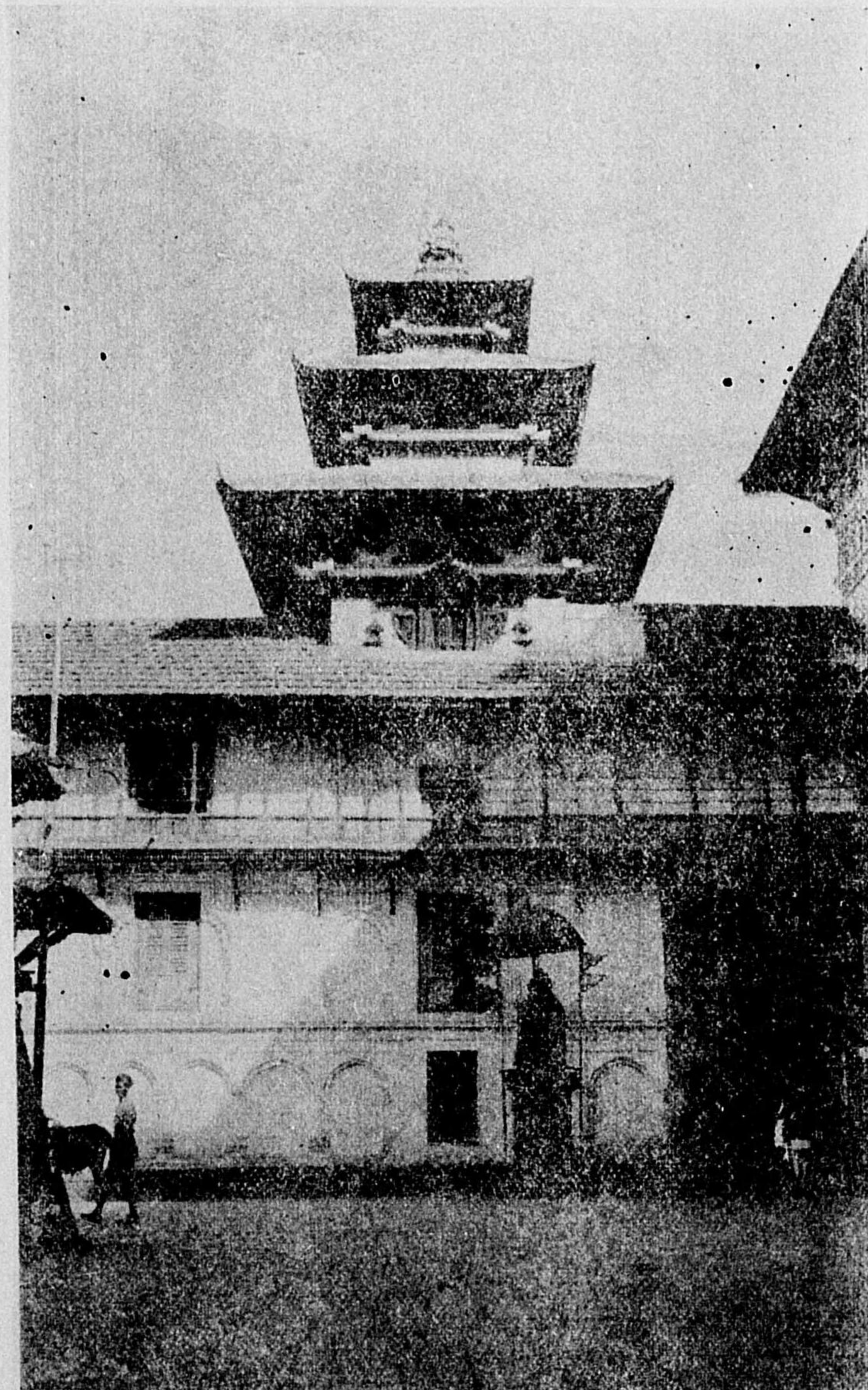


クマリー・デバル (Kumari Deval) (昭和十一年三月十七日)  
 背景の建物がさうで、前の三重塔ではないさうであるが、やはりさうである  
 らしい。車が三臺あるのは何れも自家用車で待機中ではない。

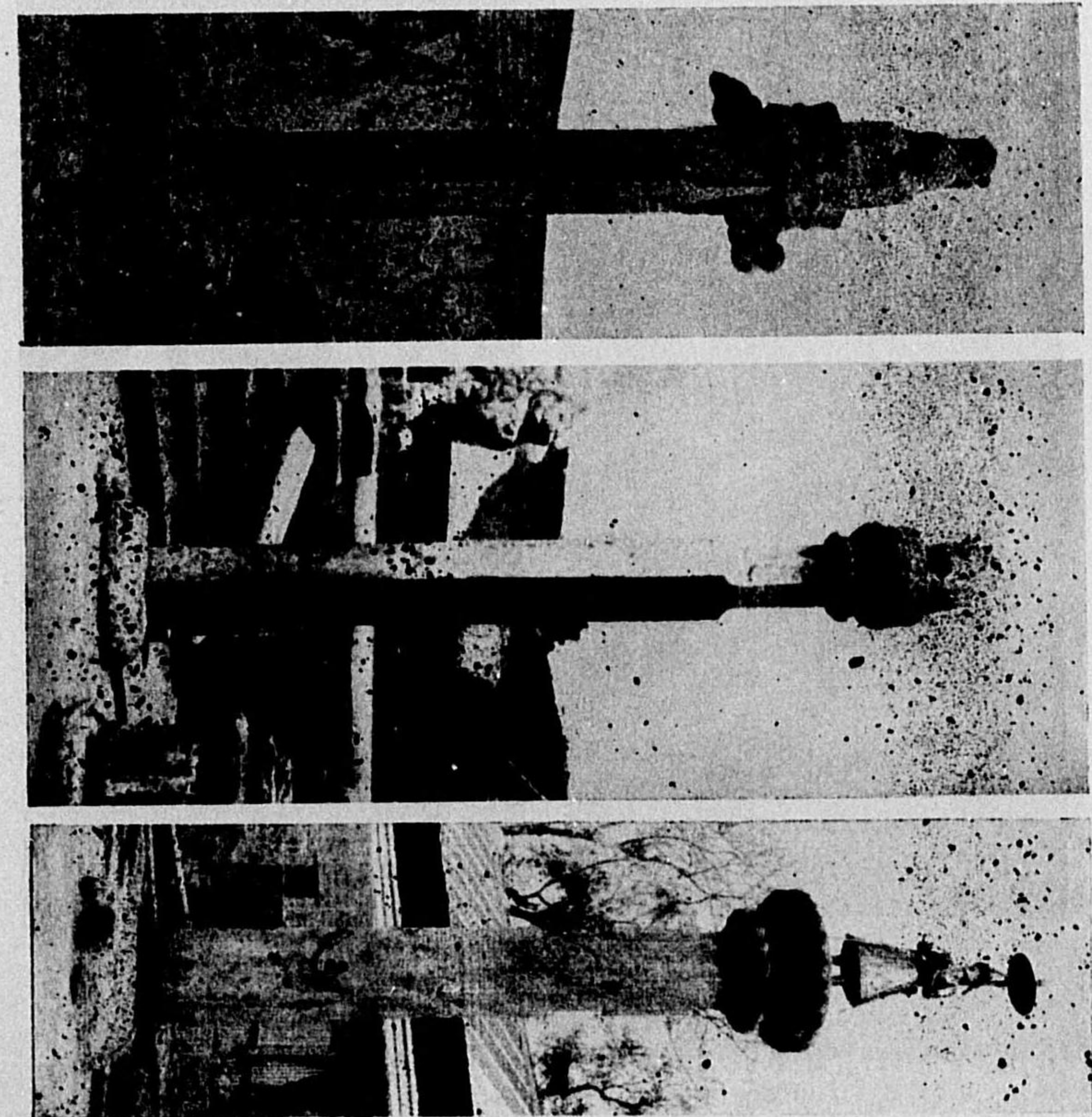




右。テルプライアソル堂前石柱 其一（昭和十一年三月十六日）  
 左。同 其二（昭和十一年三月十六日）  
 テルプライアソル (Terpr. i. sor) 堂は地震で全部破壊したが、幸に堂前の石柱は倒潰を免れた。面白いのは其臺座で、謂はゆる「龜趺」である。頭・四肢・尾・甲等總て龜たる條件を備へてゐる。次頁参照。



ハヌマン ドーカ (Hanuman Dhoza) (昭和十一年三月十七日)  
 出入口の向つて左方に、臺座の上にハヌマンがのり、傘をさしてすましてゐる。臺上に傘下に坐せるはハヌマン。幸にこの邊だけは震災に倒壊を免れてゐる。



右 カラモチャン堂前の石柱 (昭和十一年三月二十日)  
 中 パークンの阿育王塔前の石柱 (昭和十一年三月二十日)  
 左 支那山西省雲岡石佛寺遺の石柱 (大正十四年十一月四日)

右及び中圖を注意してみると、何れも基礎が彫形である事が、これ等の小さい寫眞からでも明らかである。この様な「鑄鉄」上に立つてゐる石柱を探して歩いたら、國內に相當にあるであらうと思はれる。前頁の圖といひ、これ等といひ、支那の影響とみる事はできないであらうか。

左圖は大同府から雲岡石佛寺へ行く途で、先年見つけて寫しておいたものだが、これに基礎が立方狀で、大して面白くないけれども、石柱の上に蓮座が乗り、其上に獅子があるところは、中國と全く同じである。ただ支那だけに、華表の様に石柱の上部瑞雲が貫いてゐるだけの差である。

此等と比較する時は、どうも偶然の暗合とばかりは言へまい。調べて見たら、此等が元になり、随分面白い結果がいろいろ出て來る様な氣がする。

午後は一時に來る約束して歸つたスバは、三・〇〇迄待つたが來なかつたので、來るのか來ないのか人をききにやつたが、三・一五になつても其使が歸つて來ないので、待ちきれなくなつて外出した。今から考へてみれば僅に15分間で返事を得ようとする方が無理らしかつたが、この時は實際待ちきれなかつた。さうして四・〇〇に歸宿してみたら、此日は來ないといふ返事であつた。やつとの事で來てもいいといふ許しを得て、やつとの事でやつて來た一刻千金の遠來の珍(?)客の最貴重な午後時間、寫眞をとるのに都合のいい一・〇〇から三・一五迄を、無意味にR・H・の三階で費させた揚句、こちらから使を出して初めて『今日は來ない』とは、洵に以て言語同斷、けしからんといふのにも程度がある、といふ工合に大に憤慨したが、いくら憤慨して見たつてどうにもならない。前夜も此朝も實に好個の紳士だと思つて、スバに迎へられたのを大に喜んだが、これですっかりいやになつて了つた。

來なければ來なくともいい、何もこちから頼んだのではない、勝手にしろといった調子で再び出かけたが、もう時が晚いので思ふ様に寫眞もとれず、仕方なしに翌日を期して歸つた。今日の事は今日せよ、明日ありと思ふ心がいけないといふ風に心得てゐて、自分では成るべく其通り實行してゐるつもりだが、此日は貴公子然たるスバの爲めに、此日の仕事の一部を翌日にのばさねばならなかつた。だからこれは私の責任ではない。

併しながら豫て書物の挿畫でみた孔雀を意匠した圓窓をみたり、放射形の狭間飾の精巧な圓窓があつたり、那伽が隨所にのたくつてゐたり、三重塔が幅をきかせてゐたり、商家・住宅・邸宅・宗教建

築を問はず、軒一重疎樺で、隅樺を放射形に配置し鼻隠板を打ち、軒先の桁を壁面より出した方杖で支へてゐること、例へば我が姫路市白鷺城の如くであったり、何とも愉快でたまらず、こんなものをみてる間は、スバのけしからん事なんか忘れて了ひ、ただもう嬉しくて仕方がなかった。

\* \* \* \* \*

昭和九年一日十五日、北印に劇震があり、此あたりは被害甚大であつた。これはビハール・ネバル地震 (Bihar Nepal Earthquake) と知られてゐるようだが、何でも其當時震災のため、ネバル國の皇女御一方が薨去遊ばされた旨新聞紙は報じたのを記憶してゐる。此大震災のために破壊された建物等は、まだ其ままで殆んど跡片附等はできてゐぬ様である。どこも随分ひどくなつたままで、まるで手をつけてゐぬと思はれるところもある。倒れかけた煉瓦壁に丸太でつかひ棒をしたままで、平氣で交通の妨害をしてゐる等も珍らしくなかつた。宿舎に極近いテルプライアソル (Terpraisor)・テムブル(名稱は少しきき遊つたかも)の如きは、名狀すべからざる慘狀を呈してゐた。私は此祠堂の前の石柱の臺が、龜形である事に初めて氣がつき、夫を非常に面白く思つた(第6頁)。これは支那式だと思つたからである。併し此種のもものはR・H・に程近きカラモチャン堂(第66頁)や、バータンの中央塔(二)前の石柱にもある事を知り(第6頁)、この調子だと未だ他にも珍らしくあるまいから、さうするとこの「龜趺」から見ると、支那・朝鮮・日本は明治前から親類同志であつた事が判つた様な氣がした。龜趺はないが、支那山西省の大同

府から雲崗の石佛寺へ行く途中に、今は知らないが、先年私が行つた時には獅子が乗り、蓮座下には恰も華表の様に雲が貫いてゐる石柱が建つてゐたが(第6頁)、此等も亦、餘りによく似過ぎてゐるから、多分謂はゆる他人のそら似としておくわけにも行くまいと考へるのである。目貫の街等も其通りで、この機會に市區改正をやり、町幅等も大分廣くしてゐた様である。夫れにしても全部の取片附はいつ終ることか。殊に二重塔や三重塔の如きは、二重目の軸部のところから大概折れてゐる。賽の目の五の如く、五重塔の初重内部心柱と四天柱との關係の如く、本尊と四天王との如く、大壇上に於ける五色の蓮花の如き關係に建つてゐた殿堂なんか、殆んど形がない迄に壞れてゐるのが多い。

民家で屋上に塔を建てたのがあつた。ここに何か祀つたのかも知れぬが、きいてもはっきり判らなかつた。意匠としては最も面白いものであると思つた。

\* \* \* \* \*

午前の外出でいろいろ見た珍しい建物のうちに、三重であつていやに大きな平面を有し、ために大に嵩高く見える建物があつたので、早速寫眞にとつたが、此が即ち首都の名のカトマンヅと呼ばれる元になつたのだらうといふのである。即ち KASTA = Wood, MANDAP = Temple だらうが、KASTA + MANDAP = KATMANDOO だとの事である。第61頁にだしておいたのは即ち此建物である。

初めてネバルの兵士を見た。外出する兵士の服装は、私共から見ると随分ひどい。偶々私の前方に二人並んで歩いてゐたのに、右の兵の上衣の背は左へ、左のは右へ曲つてゐたので、背面からは可なり可笑かつた。而も左の兵のは吊皮だけで剣はなく、其男の右腕につけてゐた三本の山形の黒線は、縫ひつけた糸の片方が綻びてゐて、歩く度にブラブラしてゐた。兵を外出させる時分に、將校が多忙なら、せめて下士官にでも服装検査位させてもよさうなものだと思はざるを得なかつた。このあたり大分だしがないようである。

\* History states that Khatmandu was founded in 724 A.D. and near the darbar square is an ancient wooden building from which the city is said to take its name. Externally it is a somewhat ramshackle erection, and the inside is dark and mysterious—"no light but rather transpicuous gloom." It is used as a house of accommodation for travelling devotees, and was built in 1566 A.D. by the Raja Lachmina Sing Mal. The Newars still allude to this building as *Katmandu*, the legend being that the whole of it was constructed from the wood of one monster tree, hence the name, *Kath* being "wood," and *mandu* "edifice, house, or temple." Thus has been evolved its modern designation, but originally this city was called Manju Pattan after its founder Manjusri. ("PICTURESQUE NEPAL" pp. 65-66)

斯様に現在は巡禮宿に用ひられてゐるとかいてあるが、私其場できつたのでは、今でも殿堂であつてムレサートル・テムプル (Musalte Temple) とらふらうである。眞偽不知といつておくより仕方がない。

以上が第一日の感想である。

寒暖計は朝の七・三〇に62°、一四・三〇に68°、一九・〇〇に64°、あひの肌着にあひのシャツ、夏服に雨外套を用ひたが、午後は外套なしで丁度よかつた。此日は朝と晝とは刻んだ葱をみにした味噌汁と奈良漬、即一汁無菜ですましたが、夕食の時は花野菜の煮たのがでてきた。マンガがバザーへ行つて買って来たとのこと。これで漸く一汁一菜になつた。これ位のもの得られると見える。

三月十六日、月、好晴

拂曉月がでてゐたので安心をしたが、それから霧か何かで一面に白くなり、それが夜があけてから美しく晴れてゐた。山國はこんなのかも知れない。此朝は58°で、ラクサウルより僅に1°高いだけで稍寒かつた。午前は此地に於いて最も神聖とされてゐる殿堂なるバシニパチ (Pasupati, Pashupati, Pashupati) 堂へ行つたが、R・Hから3哩といふのに係らず、其遠いことは5哩位に思はれた。それでも往路は元氣よく歩いたが、歸りは少しくくたびれたので、タキシを尋ねさしたが、そんなものはないとの事で、それではローリー、それもなければ馬車、それもなければ荷馬車でもいいといつたが、何にしる乗物は一切なかつた。妙なところがあればあるものだと思はされた。

バシニパチ堂の後ろの丘から初めて遠景にボドナート・テムプル (Bodhnath (Boddhnath) temple)

をみたが、この時私はこれをスワヤムブナート・テムブル (Swayambhunath temple) だと思った。なせ丘上にないか不思議に考へたので、名を尋ねたが、知らぬと見えてただ佛寺といっただけだったが、とにかく何とかして直ぐに行くべく交渉したが、大分遠いとの事で延期をした。宿舎へ歸りがけに不圖前方をみたら、小山の上に同じ様な塔が建つてゐるのが見えた。それがスワヤムブナート寺であることは直に看取できた。

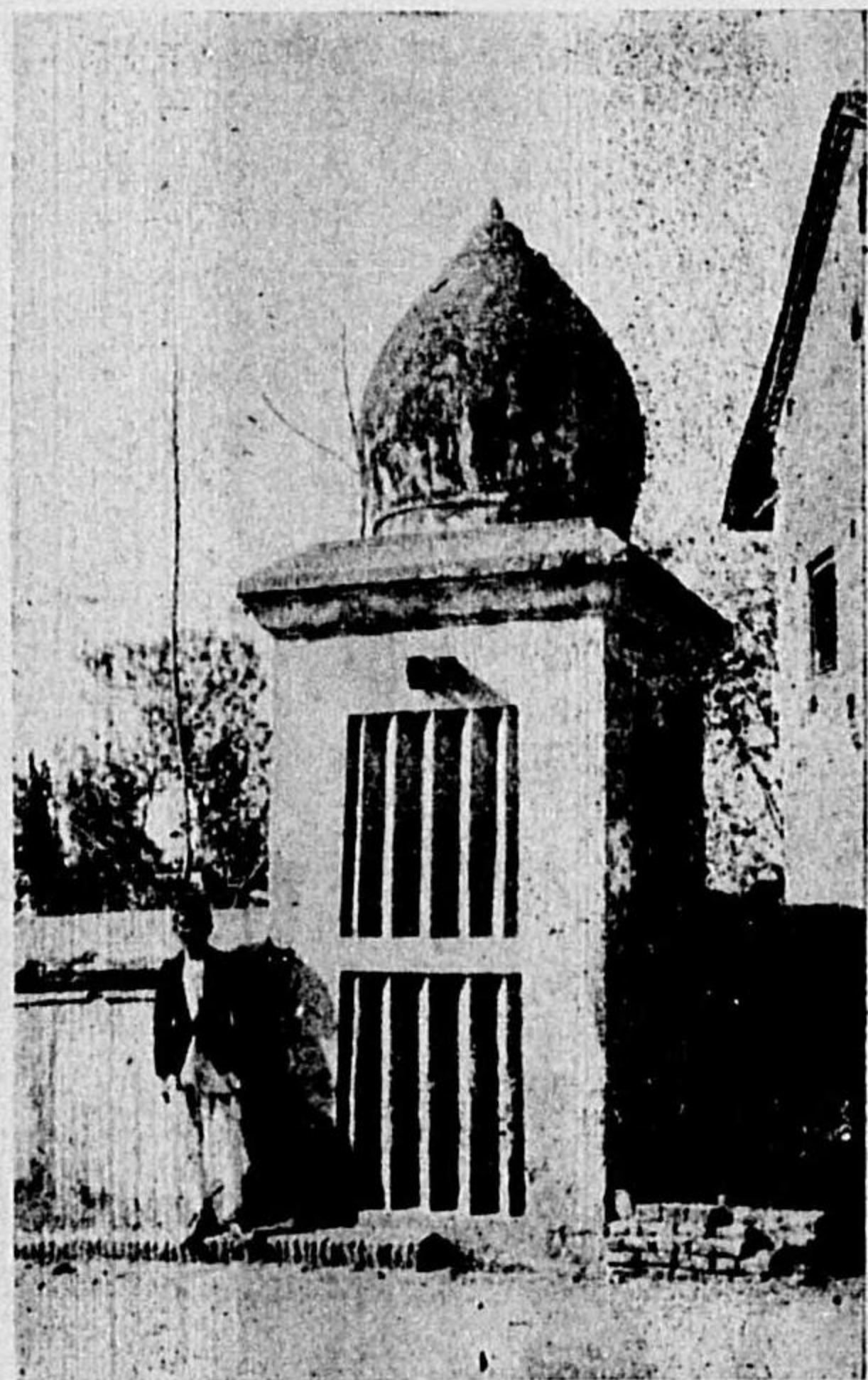
歸宿したら一時が過ぎてゐたので、午後は二・三〇に出かけることとし、自動車を雇ひきりにして右の二大塔の見學をすまますか、賃錢をきめろといひつけた。十五日午前クマリー・デパールで、此日はバシニパチで、自動車で見物してゐる老人——サガウリ・ラクサウル間及びラクサウルからアムレクガンジの近く迄同車し、汽車が立往生してから、逸早くタキシでかけ出し、シサガリへ宿泊した老人——を見かけたので、車さへあれば樂に見物ができるので、此際金錢の事は考へてゐられない。少し位かかっても、夫れはがまんすべきであると考へたからである。どこへ行くのでも歩いてばかりゐては、くたびれてやり切れない。

然るに二時頃になつて、バハツールは馬車が來たから、最早自動車を雇ふ事は不用である。さうして馬車では午後から二つすませぬから、スワヤムブナートだけにしてはどうかといつてきた。仕方がない

\* 後にきいたので、此老人のいとこがネパール政府の何か役人をしてゐるさうで、かう自由がきいたらしい。さうでもなくては、車等を雇ふ事も多少眼が光るらしく、まあ可なり窮屈と覺悟すべきである。

のでさうきめて出かけたが、それは小さい箱馬車で、馭者臺には馭者と宿舎の番人頭とか乗り、車内には私とバハツールとが納り、後方には不景氣にして貧弱且つ粗末なる馬丁が二人つき、ゴム輪の車輪だから、昔の我國の圓太郎馬車の如く、ガラガラ音をたてはしなかつたが、割合に早く市中を走る。何がさて車等はめつたにないので、たまにブーといふのはローリー位のところだから、人は總てスロモーターである。さうすると馬丁がかけ出して奇聲を發し、危険事故を防止するといった有様。先づ約半世紀時代に逆行してゐた。

行つく迄は正面即ち東の方から近づくものと思つてゐたのに、さうでなくて馬車の停つたのは南側であつたが、そこで下車してやはり東へ廻り、正面の多くの石段を登つたら、豫て寫眞で馴染であつた大塔の前へ出た。そこは周圍に十二支を陽刻した圓形の臺の上に、偉大なる金銅の五鈎杵が、日光の直射を受けて金色燦爛としてゐた。此日は何故か參詣人が非常に多く、番人頭と従者とで、寫眞機の前に群がる人をいくら追拂つても、まるで効果がなく、終には二人共なげだした位で、全く策の施し様もなかつた。嘗て南印のクムバコナム (Kumbakonam) へ有名なる同地の印度教殿堂を見學すべく行つた時、あの邊は餘り日本人が行かぬと見え、町を歩くと大供中供小供が何十人となく後ろからついてきて、寫眞をとらうとすると、私を中心として前方に鋭角の空間を残して兩側に堵列して了つて、まるで目的を達することができず、随分困つたが、中中それどころの騒ぎではない。レンズの前になつて了ひ、動かないのだから何としても始末に悪い。日本人が殊に珍らしいので、かうするのかと思つたが、さうでも



右。橋の袂の塔  
(昭和十一年三月二十日)

左。あるタンクの中に立てる柱  
(昭和十一年三月十六日)

宿舎を出て少し右の方へ行くと、細流に架せる橋がある。川の名はツクチャ(Tukcha)だが、橋の名は知らない。その橋の袂のところに、この様な塔が合計四基たつてゐた。可なり大きなもので、傍に立てる人物から大概見當がつくであらう。方形の平面を有し、盲連子を以て其面を飾る。屋根が葱花型であること、バグマチ川の橋の小塔(後出)と同様である。どうも全く装飾のためらしいが、偉大なる擬寶珠と見るのも面白からう。

左はタンクの中央にたてる石の一本柱で、上部に蓮花を刻み、更に其上に半球形の蓮座があつて、最も上には佛塔をのせてある。最上部の型式の佛塔なら、市内隨所に見出され、珍らしいのは初めだけで、しまひにはいやになる位ある。併しこの様な形の蓮座附のは、純佛塔ではなく、多少印度教も混つてゐるのだといふことである。このタンクはバシヌハチ堂へ行く途にある印度教祠に屬するもの故、この塔もヒンヅー・ブヂスト・スツーパーであらう。



ないらしく、とにかく外國人なら皆珍らしいらしい。外國人の書いた書物にも、人が集つて来て寫眞をとるのに困つたとあつた位である。

大塔の伏鉢は美しく白色に塗られ、相輪及び平頭は新に鍍金せられしもの如く、青空に白色と金色とは、美しとも何とも形容の言葉なき位であつた。平頭四方の兩眼と疑問符の如き鼻とは著しく特色を發揮してゐた。相不變外國人で、殊に靴をはいてゐるとの理由で、差別待遇を與へられ、一切大塔に近くことはならぬとあり、止むを得ず周圍を一巡して、再び機會は來ぬからとばかり、隨分寫眞をとつた。近づいてよく見たいところ、多くの奉獻小塔婆のかけになつてゐるところ、其他さういつた様な場所は、總て思ひ切らねばならなかつた。同じ佛教徒なのに、どうも甚だけしからんと思つた。或はスバが一所に來てくれたら、こんなでもなかつたかも知れぬが、どうも如何ともする事ができなかつた。

スワヤムブ丘を降り、麓のバラジ(Balaji)といふところへ行つた。ここには池があり鯉の様な大きな魚が澤山にゐた。鯉の種類だらうといつたら、従者はヒル・フィッシュだといつた。そんな魚がゐるかな。鱗の粗いまるで鮠を大きくした様な淡水魚で、折柄そこに店をだしてゐた家の女が、南京豆をもつてきたので、試に一握投げてやったら、先を争つて皮ごと鵜呑みにした、實に猛烈な魚であつた。ここに上向きに水中にねてゐる石刻ナラヤン(Narayan)の像があるのみだが、時既に晩く寫眞にとれなかつた。尙ほここにマカラの頭部を彫刻した噴水口(後にパータンの夫れを圖示する)(194頁下圖)が澤山に並んだのがある筈で、書物の挿繪になつてゐるのを見たが、實物はつい見なかつた。

書留郵便を出さうと思つて郵便局へ行つたが、午後五時限りださうで、折角行つたのに目的は達せられなかつた。此市には English P.O. と Nepalese P.O. と兩方あり、外國郵便は前者だけで取扱ふのだといふ。随分變な制度である。而も其郵便局なるものは、普通なら最も繁華な部分にあるべきだのに、さうではなくて町はづれの可なり淋しいところにあつた。さうして一〇・〇〇から一七・〇〇までださうだから、凡そなまけて月給がとりたいといふ不心得者にとっては、カトマンヅ市の E・P・のに奉職するに限る様である。

\* \* \*

今日は勇敢なるグルカの兵隊さんの練兵をみた。觀光の往復に練兵場のそばを通るので、やつてゐればいやでも見えるのである。各個教練をしてゐるが、第一跣足のと靴を穿いたのと混つてゐる。教官が一人の兵に教へてゐる間に、他のは尻餅をついてゐる。横を向いたり笑つたりしても、教官は叱らぬようである。將校は前額の中央に赤玉をつけてゐる。見馴れないせいか、どうも何だか變である。ネバル國には嘘か本當か知らぬが、飛行機は一臺もないさうである。そんなと敵の飛行機が來て爆撃をしたらどうするのかときいたら、「知らない」といふ極めて簡單明瞭な答を得た。併し一九二三年の條約で英國とはとても仲がいいのだから、敵なんか來る心配はない。戦争をしたくも相手はない筈である。今時世界を通じて、西藏國と共に最嚴重な鎖國で、英國に雪隠詰めにされてゐて、何のために兵を養ひ武を練るのか、といへば誰人と雖も、大概見當はつくであらう。

三月十七日。火、好晴

前日行きさへなつたもう一つの大寺なるボドナート・テムブルへ行つてみた。大塔一基を中心とし、其周圍に圓形に村ができてゐるのだから面白い。圓形に建てられた村等めづたにあるものではない。スワムブナート寺が丘上に建てるに反對に、ボドナート寺は平地にある。だから此村落を外からみると

\* TEXT OF TREATY OF 1923 BETWEEN NEPAL AND GREAT BRITAIN

WHEREAS peace and friendship have now existed between the British Government and the Government of Nepal since the signing of the Treaty of Segowlie on the 2nd day of December One Thousand Eight Hundred and Fifteen; and whereas since that date the Government of Nepal has ever displayed its true friendship for the British Government and the British Government has as constantly shown its goodwill towards the Government of Nepal; and whereas the Governments of both the countries are now desirous of still further strengthening and cementing the good relations and friendship which have subsisted between them for more than a century; the two High Contracting Parties having resolved to conclude a new Treaty of Friendship have agreed upon the following Articles:

Article I. There shall be perpetual peace and friendship between the Governments of Great Britain and Nepal, and the two Governments agree mutually to acknowledge and respect each other's independence, both internal and external (以下略)。(「NEPAL」 Vol. 2, p. 289.)

【ザ・グルカス】にはサガウリ條約の締結は一八一六とあり、これには一八一五とある。エイチ・ハンズレッド・アンド・フィフチーンと明記してあるのだから、この方が正しいのかも知れない。こんなことはよく知らぬ。

ころは、特殊の景觀を呈してゐる。若し周圍に小高い丘でもあればそこへ登つてみたら餘程面白からうが、不幸にしてあたりは平地である。

ボドナート寺へ行き道の傍に、可なり大きな佛塔をみた。眞偽は知らぬがこれは舊ボドナート寺で、今は已に廢寺になつてゐるといふ。そのせいか坊さんはゐなかつた。此塔は古式で面白く、其上珍らしく一種の石燈があつたので、非常に興味を覺えた。尙ほ此等の他にもう一つ廢塔があつた、相輪は亡失してゐたが、平頭までを存し、幸に四方の龕内に大型の四佛を存した。但し周圍の飾漆喰はとれて了ひ、骨が露はれてゐた。此等は何れも後に圖示するであらう。

午前中は右に記した様に非常な收獲で喜んだが、此に反し午後は全く振はず、クマール・テパールの邊をまごつただけで歸宿してしまつた。あとから考へたのでは、このとき墓地の見學をしたら、或は珍らしい墓標があつたかも知れぬし、又は思ひ切つてキルチプール (Kiripur) にでも行つてみればよかつたが、この時はそんな考へはまるで出ず、とうとうどちらも見ずに歸つてきたのは、返す返すおしいことをしたと思ふ。

何にしる此日は大變な風で、砂っぽりで眼をあいてゐられぬ位であつた。それでも歸宿の道で昨夕しまつてゐた郵便局へ行つたが、とても面白い郵便局で、こんなのは未だ嘗てみた事がないから、次に其話をかいておく。

此局は往來から大分入るのである。往來には門がある。其門を入つて眞直に行くと、もう一つ門あり、道の兩方は島か何かになつてゐた。まづ南大門を入り、次に中門を入りといった有様で、突き當りに平家が本堂といった體裁で建てゐた。其軒にはネバル文字の看板がでてゐて、室は三つ並んでゐるものの如く、各室共出入口に徑五分位の鐵棒を三寸位の間隔に建ててあつたから、漸く間から手首を出し入れする位で、臺も何もなく、局員は床の上で仕事をしてゐた。

以上が謂はゆるイングリッシュ・ポスト・オフィスなるものの體裁である。バハツールは其鐵棒の間から郵便物を出したら、局員は夫れを受取つて目方を測り、封書の上にいるだけの切手をのせて返した。私の書留二通(何れも日本行)各0/5/5づつ、普通二通(印度行)各0/1/0づつ、兩方で0/15/0であつた。然るに普通郵便は直にここで出せるが、書留郵便はさうはいかない。

本堂を出て中門から南大門を通り、往來へ出てから左方へ約3町ばかり行くと、今度は又別の建物があり、ここで初めて書留郵便物を引受るのだが、其室の出入口の所にも、前と同様に鐵棒をたて、四角に張りだしてバルコニーの様にしてあるが、其中程に平たいかねがやつてあり、此かねの板に孔を穿ち、それに鐵棒が通してある。即ちこの板かねは一寸位の幅さがあるので、其上に郵便物を落ちぬ様に圓棒にもたらしおき、各人がおとなしく順番を待つてゐるのに、局員は横を向いて何か仕事をしてゐるので、まるで埒があかない。

バハツールはこんな時には、するいだけに役にたつ。次の窓口へ行つて、別の局員に何かいって特別



の取扱をして貰ったので、二分位ですんでしまった。其消印に NEPAL とあるのでみると、謂はゆる E・P・O はここ一所だけかも知れない。

三月十八日、水、好晴

此日初めてパータン (Patn) へ往復をした。パータンは首都を距る二哩とも三哩ともいふ。書物によりて異ふ様だが、何にしろ殆んど家が續いてゐるので、うっかりしてゐると區別がつかねるが、間に門が一つあるので、はっきりしてゐる。ゆつくりと隅から隅まで見物するつもりで、昨夕馬車には八・三〇に来る様に言はせ、辨當として茹玉子も個と魔法瓶へ紅茶を要意させて待つてゐたが、例により例の如くいつ迄たつても来なかつた。こうなるとそこいらへ出る事もできず、若しでたあとへ直に来るといけないといふ様なことから、遂に一〇・一〇迄まつて漸くきた。

實は私はもう少し自由がきくものと思ひ、馬車屋(?)に私の都合のいい時間をいったのだが、或はその時間は先方に通じてゐたかどうか判らない事に、此朝になって初めて気がついた。ことによつたらバハツールが途中でいい加減にしてしまったのかも知れない。何ほ何でも八・三〇と一〇・一〇とは間違ひかねる。こんな事なら馬車等は斷つて了ひ、八・〇〇頃から徒歩で出かけた方がよかつたと思ふが、これは理屈で、さうばかりいかなない事情もある。どうも洵にうまく行かないので困る。

待ちかねた馬車が来たので直に出かけた。ものの20分も走つたか走らぬかに、町幅は狭いし材料も構

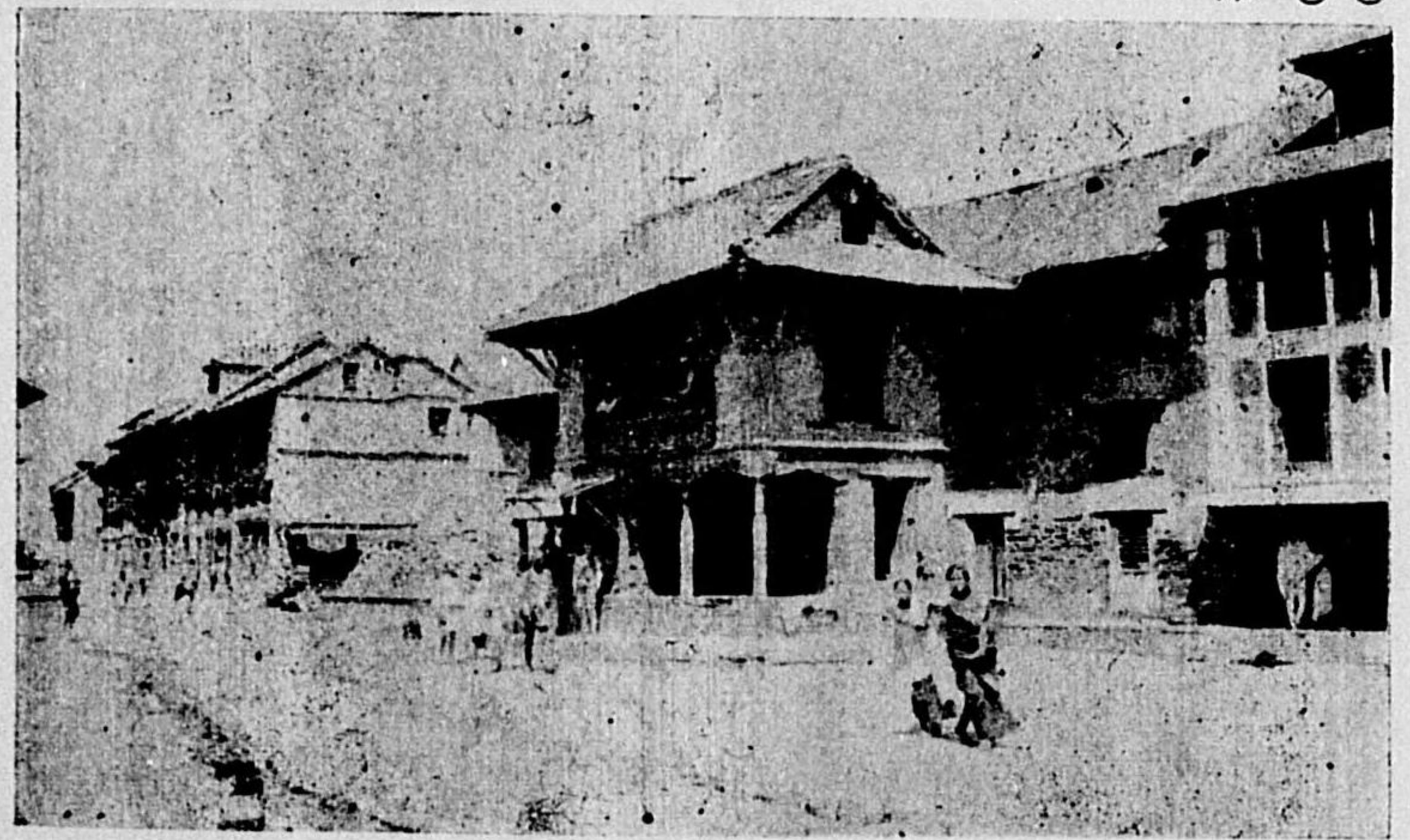
造も可なり粗末だが、兩側とも三階建ちの家が揃つて建つてゐるところへ出た。一直線の町で相當に長いから一層美しい。こんなところがネバル國にあるとは豫期しなかつた。紐育の下町は摩天閣が多く建ち、大正十年に初めて私が、氣のきいた化物が引込む時分に、赤毛布を一着に及んで間拔面をして出かけた頃は、ウルウォース・ビルが幅をきかせてゐたが、此頃はエムバイア・ステート・ビルとかいふ途方途轍もないノッポができたさうだ。併し私には用がないから見には行かない。これ等は現代建築術の進歩と、其國の富とを世界に誇示するには充分だが、扱てどうも所所にそんなのが建つてゐたのでは、町並としては揃はない。そこへ行くとさう馬鹿氣たノッポのない歐羅巴の都市の方が餘程美しい。今ネバル國でみた三階建の揃つた町は、パータン市の入口のところであるが、私には揃つたところが氣に入つたので、變化がないといふ批評は免れないかも知れぬ。此町を通り抜けて右へ曲り、僅か行つたと思つたら、そこには多くの殿堂が建つてゐた。これが即ちダーバー・スクエア (Darbar (Durbar) Square) である。

カトマンズのダーバー・スクエアにも、書物の挿畫で見ると、もっと多くの二重三重塔があつたのだが、それ等が例のビハール・ネバル大地震のため、殆んど一掃されてしまつたから、今ではパータンの方が多くなつた。それは數が實に多く、いくら珍らしくても嬉しくても、こう澤山あつては少しばかり鼻について、またかといふ感がなくもない。勿體ないことで有難いことで、いくら多くあるにせよ、内地外地の老幼男女をませて約一億の我國民のうち、この様な光景を眼前に眺められたのは僅か十人足ら

上。 パータン市の町 其一  
下。 同 其二

(昭和十一年三月二十日)  
(昭和十一年三月十八日)

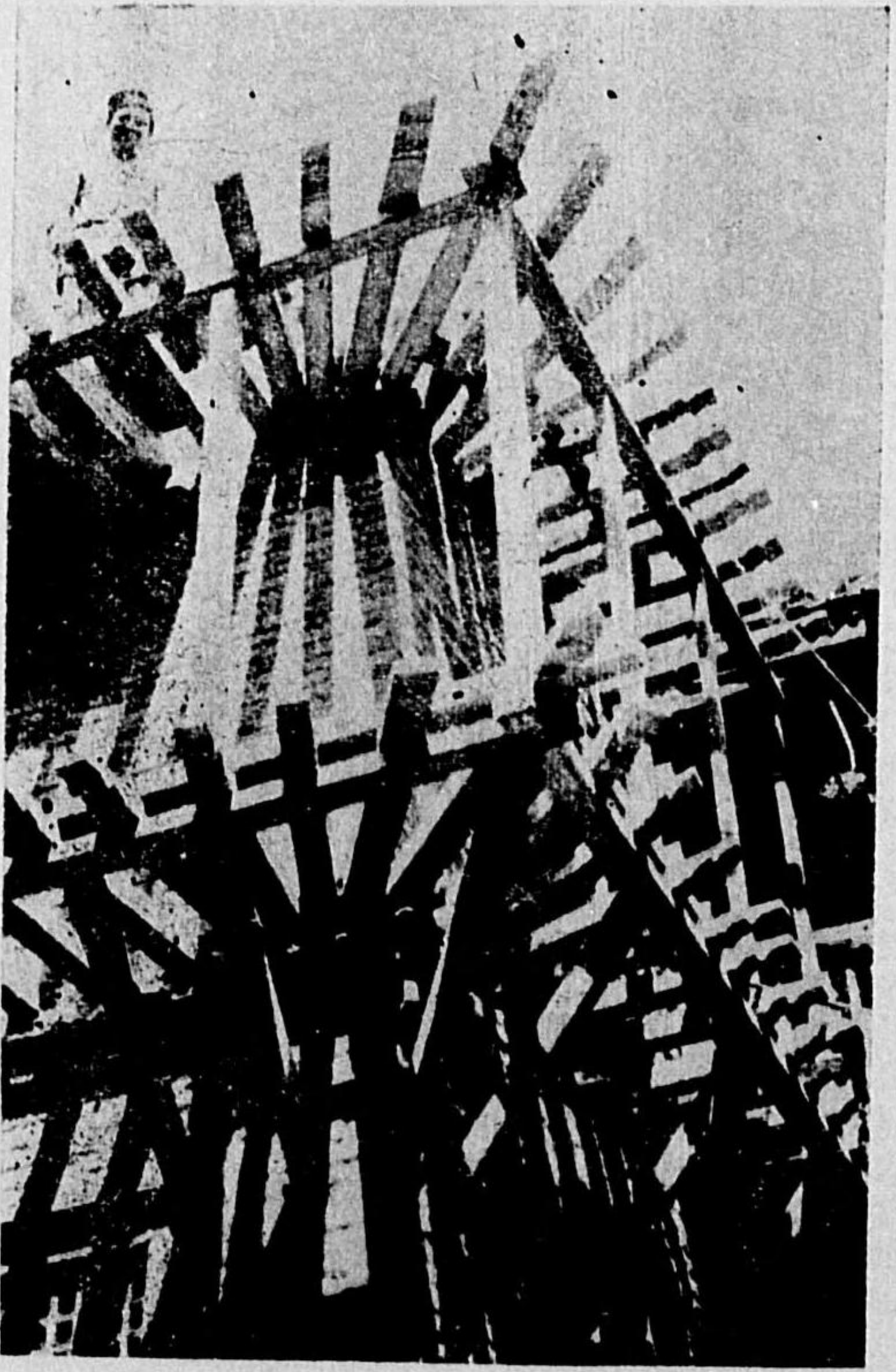
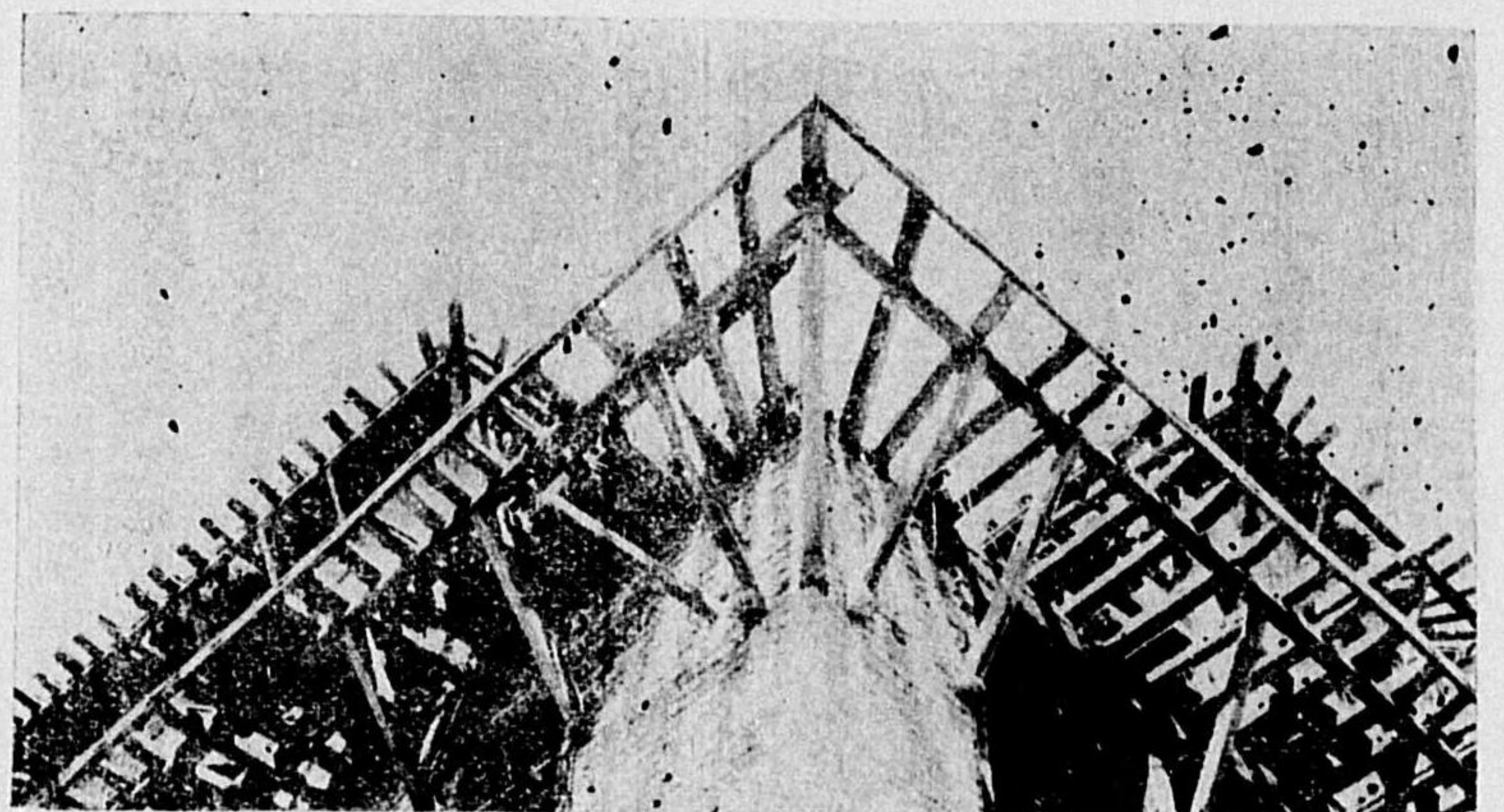
首都の方からパータン市へ入って間もなく、町幅は大して狭くないが、両側に煉瓦造の三階が建並び、非常な美観を呈してゐる。町幅も狭く建築材料は粗末でセメントは泥土か何かだが、確かにみた所はウンター・デン・リンデンを向ふに廻して相撲がとれる?。これは上圖。ところが下圖はさうはいかない。同じ市だが少し入ったところで、グーバー・スクエアを左に曲つたところ。地震のあとが復興できぬらしく、往來を汚い下水が流れてゐて、緑色のけが生えてゐる中に、子が泳いでゐるのだから少し恐れ入る。



上。 パータン市に於ける建築中の家屋  
下。 同

其一 (昭和十一年三月二十日)  
其二 (昭和十一年三月二十日)

偶ま新範中の家の前を馬車で通つたので、急いで停め下りたところ、忽ち大供子供に取り巻かれたが、敢然としてとつた寫眞が即此。壁から方杖をだして軒桁を支へ、其軒桁の上の一重に極をおくが、隅だけを放射形に配置し、軒先に鼻隠板を打つので、實に興味のある構架法がよく判るであらう。大工が上から見下ろして愉快に笑つてゐる。



すとすると、約一千万分の一なのだから、一一十分に拜観しないと罰が當るかも知れないが、カトマンズの市内にある小塔婆と同じく、餘りあるので「なんだまたか」といふ様な、洵にけしからん気分にもなってくるのである。午後は舊ボドナート寺の石燈をもう一度見て寫眞をとるために出かけた。

\* \* \*  
バータンの町も震災後は片づいてゐない。震災で町家も随分破壊されたらしく、其ため以前は至って狭い町幅であったが、現在は不規則におそろしく廣くなり、従て其廣い町の中央に、幅一間位に蒲鉾形に矢筈形に煉瓦を敷き、其兩方——を溝ができてゐたのかも知れぬが、今は溝はなく自然に低くなつてゐる所——を下水が流れてゐたが、その中には緑色のこけが一面に生へ、長い細い絲狀蟲が緩く蠢動してゐたこと、私が大學の學生時代に於ける東京市の下水溝の如く、傍らを歩くと異臭鼻を突く。これが春先の二月中旬であつた。それでこんなだから、眞夏になつたらたまるまい。かかる有様だから衛生上憂慮すべき點が多くある様である。さすがに東京都の目貫の通りには、此頃こんな光景は見られないが、裏町へ入つたら多少は名残りがあるだらう。

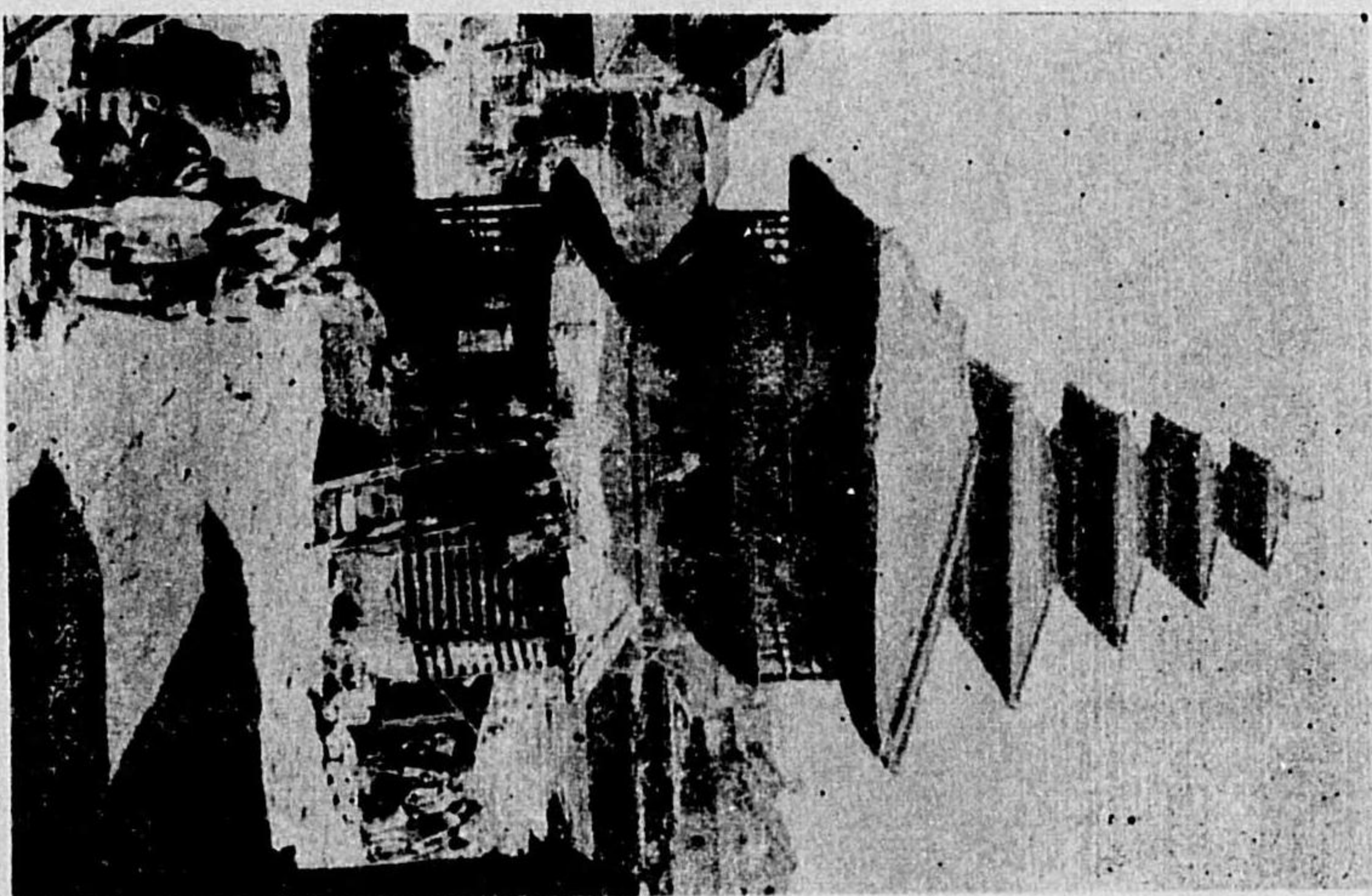
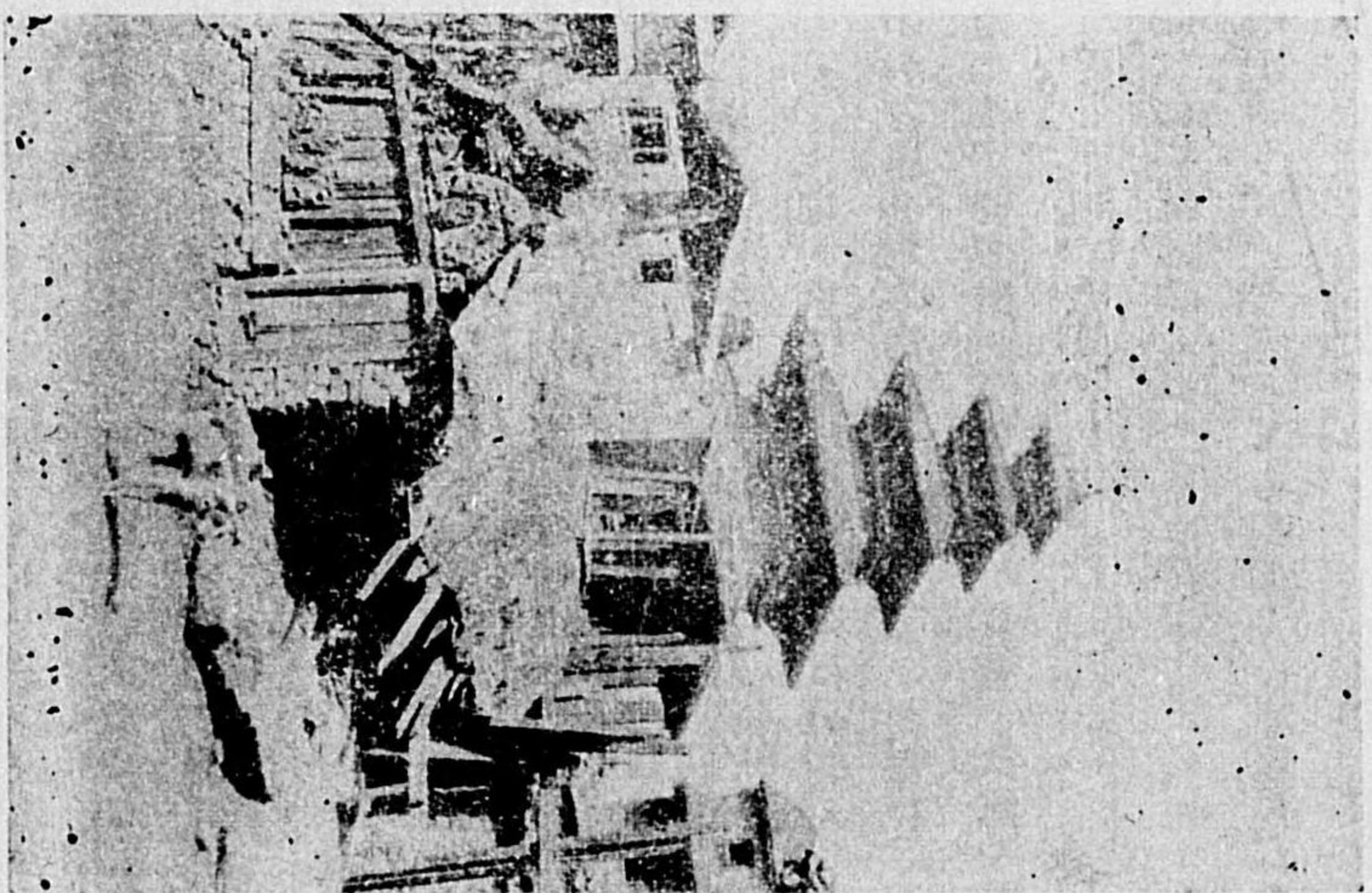
### 三月十九日、木、好晴

此朝はバートガオン (Bhatgaon) へ行ってみる豫定であつたが、ここは首都から9哩あり、多少凹凸もあるから馬車では無理だから自動車で行くので、正九・〇〇に宿舍へ來るとの事であつた。どこから

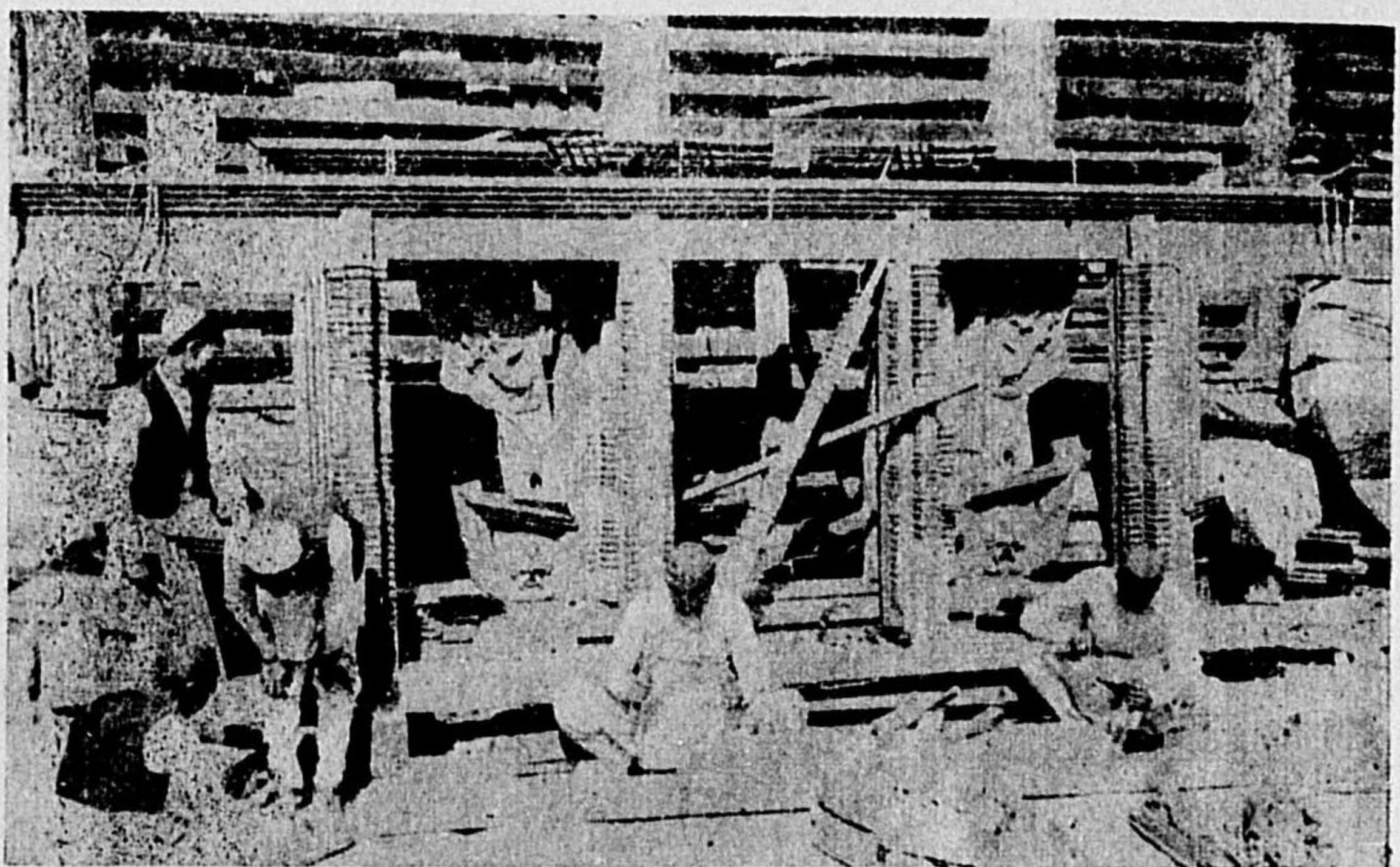
來るのか知らぬが、どうせ「時」とか「約束」とかいふものに對し、無關心で無感覺な人種の住んでゐる土地だから、前日の朝の例によると、何時に來るのか判つたものではない、といふ様な次第でゆつくりと落着いてゐたら、此度は負の違約で八・四〇に來た。早い分には文句は言はぬが、時間と約束とを守らぬことは同じである。

車は間もなく目的地に達し、さうしてダーバー・スクエアに停つたが、ここも亦地震にひどくやられたと見え、豫て寫眞等でみて楽しみにしてゐた俵は更になく、幸に残つた三重塔も亞鉛鍍生子板で臨時の屋根が架けてある有様であつたが、幸に五重塔が唯一基残つてゐた。今日迄隨所五重塔を探したが、震災に顛倒して了つたと見え、どこにも見出せなかつたのに、ここで初めて見つけたのは何といつても喜ばしかつた。折角だから石段を登つてみようと思ひ、一段登るか登らぬかにとめられてしまった。

大變にやかましく、土地の人でも坊さん以外は近づくことは罷りならぬさうである。最初は外國人だけにやかましいのかと思つたのだが、さうでない判り、それでは止むを得ぬとあきらめた。下から望遠鏡でみたくらゐでは、軒の出が深いのだから軒下は眞つ暗で、どうもはつきり判らなかつた。それから町を少し歩いて、少し變つた様式の三重塔 (ダタットラヤ堂 (Temple) をみたり、四注造の家屋——民家の時と家屋其物が殿堂の一部の時もあるようだが——の屋上から、上が大きく下の小さい寶形造の小祠が突き出するの等があり、いつ迄も興のつくる事はなく、ならば少なくとも一泊して、ゆつくり隅から隅迄歩いて見たい様であつた。



右。ニアトボラ・デパール  
 其一 (昭和十一年三月十九日)  
 其二 (昭和十一年三月十九日)  
 左。同  
 機でからどうかして一度震物を見度く思つてゐた五重塔、幸に震災で倒潰を免  
 れた五重塔をバートガオン市で見つけたので、嬉しくて大分寫眞をとつた。右は  
 南方から、左は北方からの寫眞。右の方のは前景に面白い家があるが、何にしる  
 ひどくやられてゐて修理中であつた。いづれ大きく岡版にしてあとから掲げる  
 が、取敢えず、二室をだしておいた。



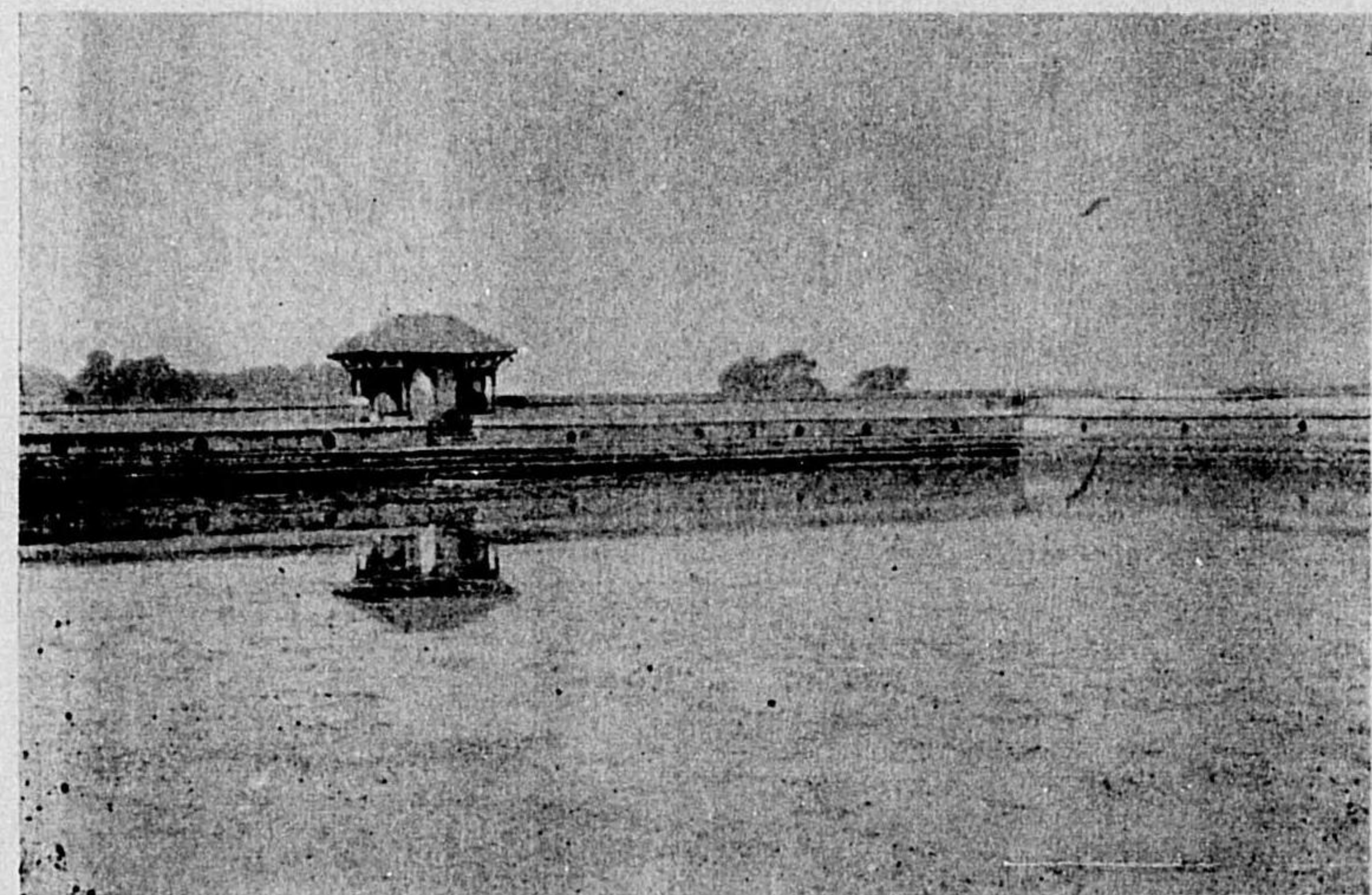
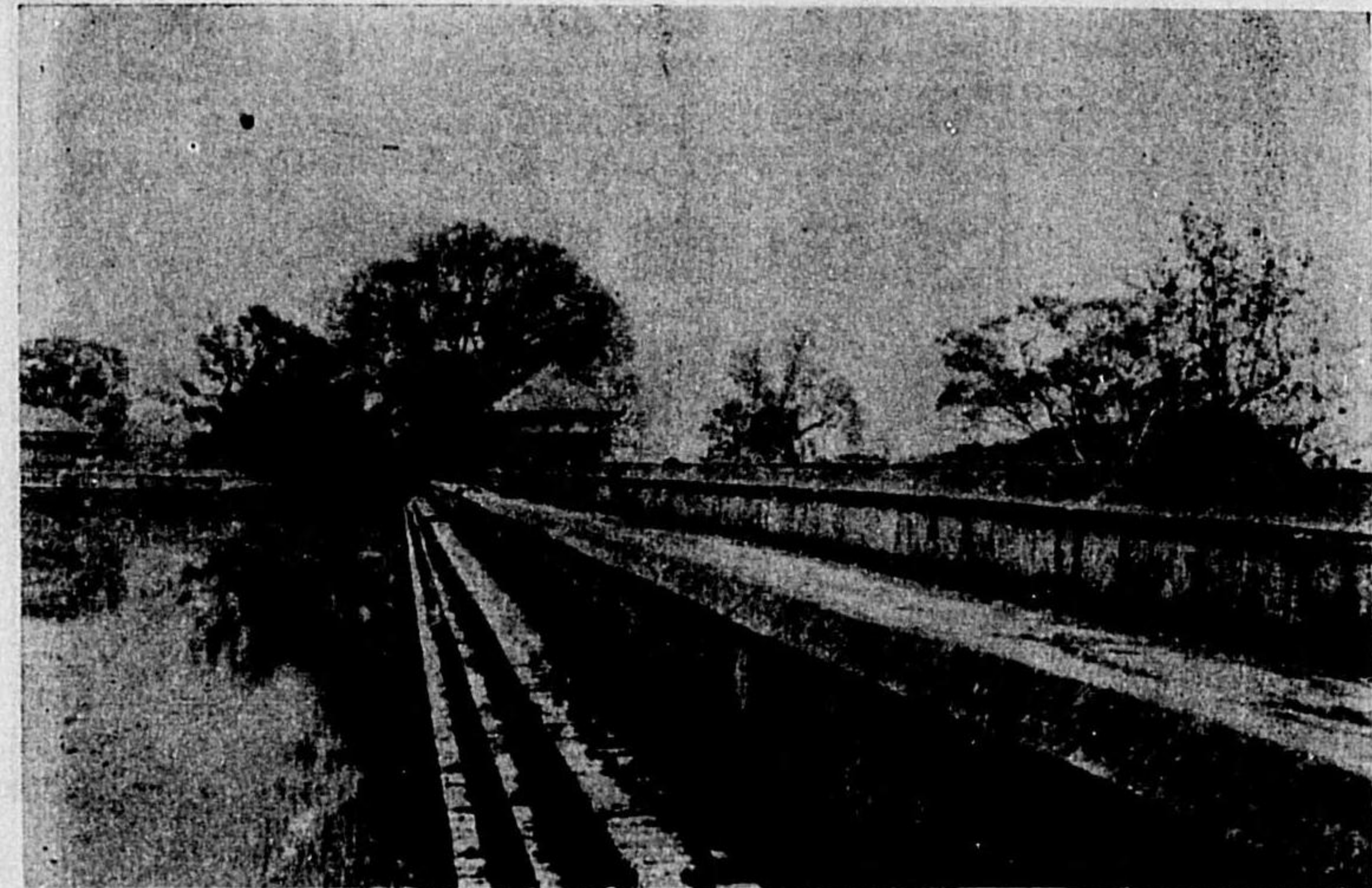
上。バートガオンの大工  
 下。バートガオンのニアトボラ・デパール前の群兒 (昭和十一年三月十九日)  
 バートガオンの大工が三連窓を彫刻してゐるところで、鑿と鐵鎚とを以て、孜孜と  
 して仕事をしてゐるところ。この大きな枠をそっくり煉瓦壁に嵌め込むのである。  
 たしかに「工藝あり」で今でも手先の仕事は大分上手である。下は前岡にだした五  
 重塔の石段下に集つた子供。右手の大きな石像の寫眞をとらうと思つたらこの始末。



上。チミ村壺屋の店頭（昭和十一年三月十九日）

下。チミ村風景（昭和十一年三月十九日）

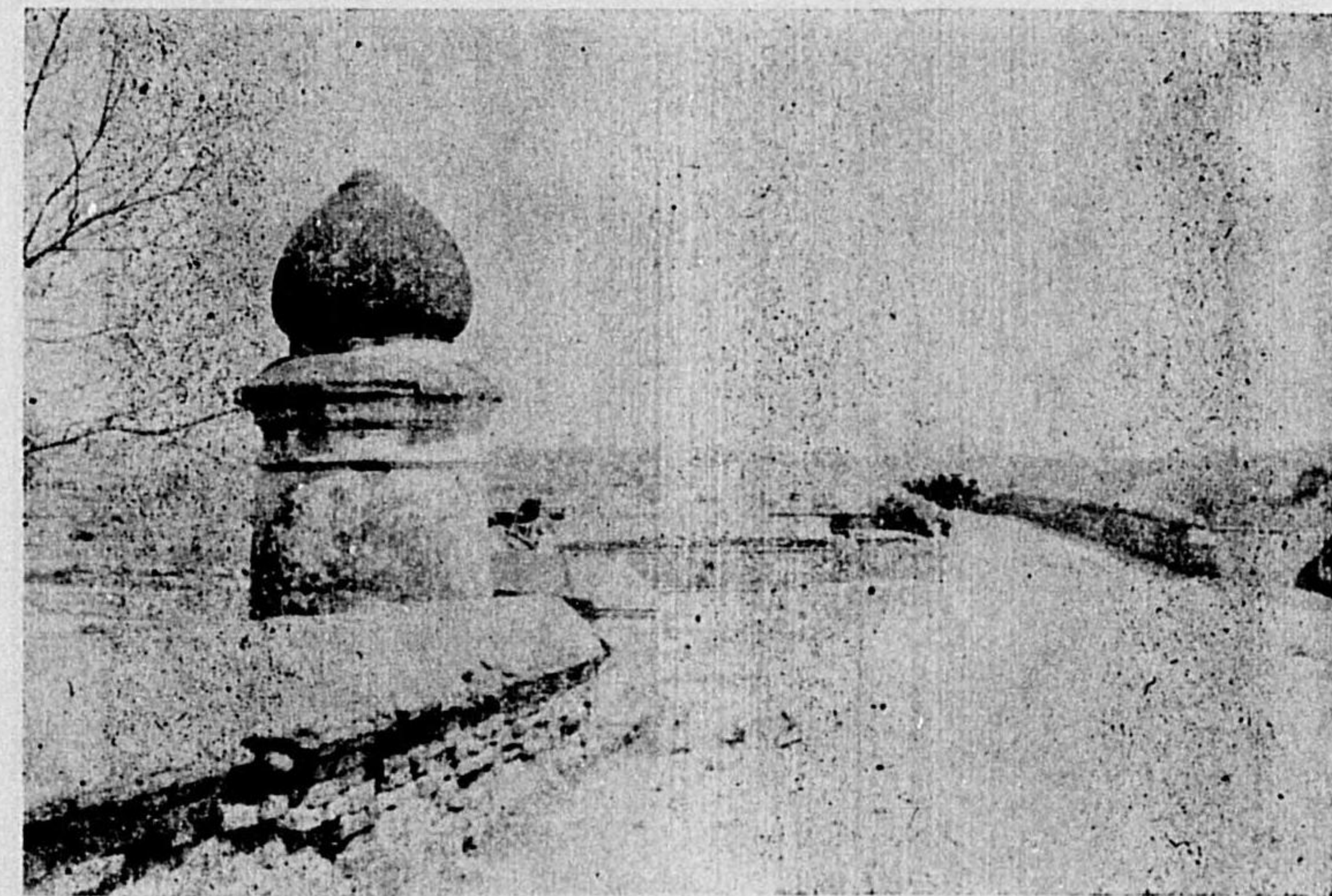
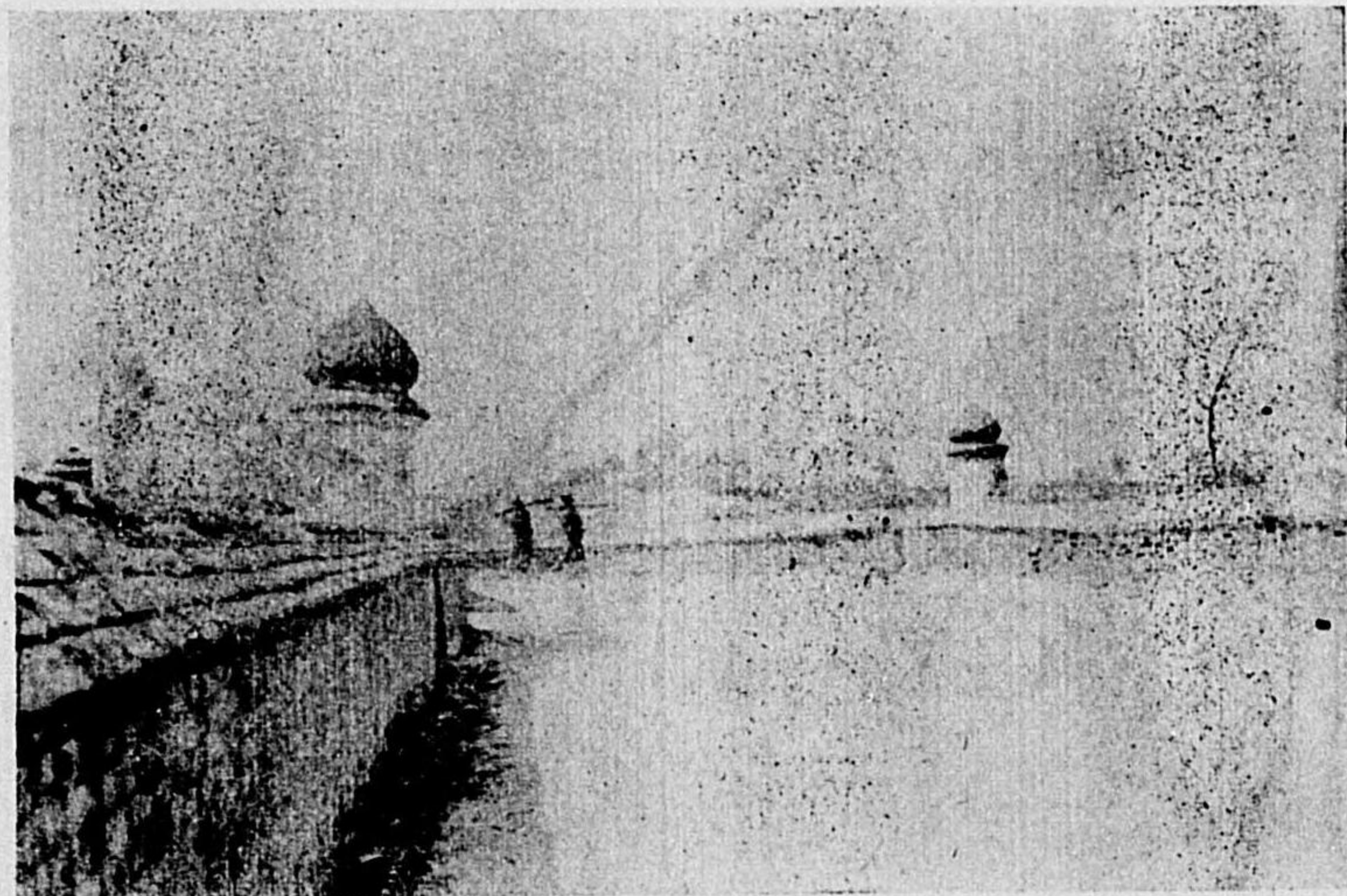
チミ(Thimi)といふ村は首都とバートガオンとの間にある最大の部落であるが、街道は其北はづれを通過してゐる。上圖は其部落の北のはしの東端、北側にあった壺屋の店頭で、丁度壺屋のおかみさんが子供を抱いて家から出てきたところを、商品と一所に失禮したもの。遠景の家はナカデサ(Nakadesa)又はナチ(Nali)とも呼ぶ部落の一部。上圖の壺屋の家は下圖の右端に見えてゐるが、切妻のところが壊れてゐて少し氣の毒。雨風の時には困るだらう。此部落は中中大きいから、相當な町かも知れない。



上。バートガオン市郊外大タンク 其一（昭和十一年三月十九日）

下。同 其二（昭和十一年三月十九日）

バートガオン市へ入る少し手前に大きなタンクがある。地圖にはシダポクリ(Siddhapokhri)とかいてあるから、それが多分にこのタンクの名であらう。長方形で正面の門は四心拱が用ひてあり、ネバル建築の閘式と異なるから、このあたりは回教建築の影響ではあるまいかと考へられる。今は掃除不行届で水等は  
大して美しくない。



上。 バグマチ川の橋 共一（昭和十一年三月十九日）

下。 同 共二（昭和十一年三月十九日）

カトマンズからバートガオンへ行くには川が四つある。ドピコラ、バグマチ、マナウラ、ハヌマン。そのうちバグマチ川の橋の袂から一哩位のところに陸軍の射撃場があるが、丁度そこから歸る兵隊が鐵砲を擔いで橋上を歩いてゐた。橋の勾欄の一部には、偉大なる擬寶珠の様な塔——葱花屋根の小塔——が、多分裝飾のためであらうが目立って風致を添えてゐる。

勿論運轉手はこちらの言ひなり次第で、一つ所を二度往復させても決していやとは言はない。折角行つたが光線の都合でもう少しおそい方がいいとき、直に他の所へ行き、適當に時を過ぎてまた行つたりした時もあった。けれどもこの様なのは、どうも氣の毒でならぬ。又市中を走つてゐるとき、面白い家屋があり、寫眞をとりたくても停車を遠慮せねばならぬ時もあり、中思ふ様には行かぬものである。漸くひるに近くなつたので、そろそろ歸らねばならなくなつて來た。遂に思ひ切つて歸途につき、市を離れて少し行つたら、大きなタンクのところにてた。往路には先にばかり氣がとられてゐたせいか、まるで氣がつかなくつたが、歸りにはそこで下りて正面の門を入つてみた。

大きな長方形の水溜めで、元は美しかったかどうか知らぬが、現在は一ばいに藻が生へてゐた。金魚がゐたことがあるとの事であつたが、あんな所では金魚は育つまい。少なくと緋鮎だが、まあ緋鯉位のところであつたらう。正面の門の出入口の上が四心拱の様になつてゐるのは、ネバル式ではなくて、回教建築の影響であらう。このタンクはシダボクリ (Sidhapokhri) といふ様である。地圖にさうかいてあるからさうだらう。ボクリとはタンクの事ださうな。これは直に首肯できる。

途中チミ (Thimi) といふ大きな町を通つた。道路の東端に水甕だの壺だのをつくつてゐる家があり、土器累累として店頭を飾つてゐた。此町を殆んど通り抜けようとした時、不圖車に故障があつて動

かなくなった。運轉手は直に修理を初めたが、容易にできない。遂に長時間を要し、漸く自動する様になつてから急速歸宿したのは、午後一・四〇であつた。

晝食を終つたのは更に一時間後であつた。バートガオンへの往復は路面平ならず。アリスの夢の様に汽車が小川を跳び越す程でもなかつたが、ネバル國政府所有の自動車でも可なりこたへた。それに天氣もどんよりして總てに懶くなり、午後は休養にきめてしまった。

最初の考へでは22日退京23日ラクサウル着、翌24日朝五・二七にゴラクプール (Gorakhpur) へ向ふ豫定をしてゐたが、一層の事もう一日早く退京したかどうかと思つてみた。どうせどこでも殿堂の内部は勿論、境内をのぞく事さへ許してくれず、これでは何度行つても同じ事である。少しばかりいや氣がさしてきた。だからいい加減に切りあげてラクサウルのR・H・で一日休養してみればどんなものか。それにここに居ては入浴は愚か行水もできないが、ラクサウルへ行けば、今度は立派なR・H・へ泊るのだから、湯位は何とでもならう。もう一つは今雨期でないから、先づ十中九分九厘迄は心配はないが、最後迄延ばしてゐて若し雨に降られたらばそれきりで、歇む時まで待たねばなるまい。さうするとゴラクプールのインスペクション・ハウスに二十四日の夜宿泊する事は、豫てファイツァバードの收税吏の承認を得てゐるのだから、日が違つて手續きがやかいだし、のみならず泊れるかどうか判らぬから、可なり結果は重大になる虞があるのである。

こうなるとほんの五分間でもいいから、スバに遇ひ度いと思つた。さうしたらば廿一日歸還する旨を話して、序にダンヂイの擔夫・荷運夫・乗馬等の要意を依頼するが、彼は最初の日の朝来てうそをついて行つたきり、どうしたのかまるで顔を見せぬ。従者は直接にバダ・カヂ(官名か何か餘程大  
事な稱呼らしい)なるマリチ・マン・シン氏に手紙で依頼せねばならぬ、さうしなければ出發の準備はできぬと力説したので、進退谷まり檻樓の出ぬ様にできるだけ短い手紙をかき、二十一日朝擔夫四人・荷運夫五人・乗馬二頭の準備を依頼に及んだ、聞く所によると、タンコット迄は自動車で、それから山駕籠にのるので、丁度來た時のひっくり返しになるのだとのことであつた。

### 三月二十日、金、好晴

朝八・〇〇に昨日の自動車は修理完成せぬため、此朝は來ることはできぬが、代りに馬車をよこす。明朝なら何時にでも間に合はず、といふ傳言をきいた。もう先日のようにだまされて一〇・〇〇迄待つのは困るから、何時に來るのかと問はせたら、晩くも九・〇〇には來るとの事であつたが、これを眞にうけて待つてゐると馬鹿をみるので、八・一五に極近くのカラモチアン堂 (Jung Bahadur's Temple of Kalamochan) といふのを見に行った。廻廊の中央に建つ葱花屋根をもつた四角な建築で、これも亦回

\* Balhous dome. 我國の擬寶珠の様な形の屋根。葱の花の形に似てゐるからか。

教建築の影響を受けた新しいものの様に思はれた。さうして寫眞を四枚ばかりとって歸つてみたら、馬車はもう既に來て待つてゐた。

東即ち正面からの寫眞は午前でないのとれぬから、朝の内にスワヤムブナートへ行くのだと何度も申渡しておいたのに、バータンの方へ行かうとしたので、さうではないといったら、今度は先日と同じ道をスワヤムブ丘の方に向つたら、いつも同じ道ではつまらない。私はこの町をみにきてゐるのだから、今日は異つた道を行けといったら、漸く其通りにした。そのため此朝ビムセンタン (Bimsentan) と稱するゴヒラの三重塔をみる事ができた。狭い町に大きな三重塔が建つてゐるので、餘程斜にならぬと全體は入らぬし、さうするためにあちこちを歩いてゐると、群集がレンズの前にたつし、いい加減苦勞をした。併しさんざん文句をいってお蔭で、こんな珍らしいものをみる事ができたのであつた。

目的地へ近づいたら、此日は不幸にして例の勇敢なるグルカの兵隊さんが射撃をしてゐた。そのため正面の方へは近づくことができなかった。だから折角樂みにしてゐた正面石段の途中からの寫眞は、とる事ができなかった。背面から丘上に登ることも、或は駄目かも知れぬと威かされたが、どうやらこれはできた。そのため相輪の頂上に近いところから、相當に大きな樹が頭から生へた廢塔をみつけた。無論新しいのも立派だが、この様な壞れかけたのは大に風致をますものである。

晝頃迄待つてゐたら、或は實彈射撃は終るかも知れぬと思つたが、中中さうはいかぬとの事に、ついにあきらめて退去し、バータンに行くつもりで歸つた。其旨をよく馭者に話したら、引受けてゐながら

宿舍の内へ引込んでしまつた。歸宿するのではない、直にバータンへ行き、少しおそくなくても半日で片づけるのだといったら、馭者と番人頭とは不平さうな顔をしてゐたが、それでも直に出かけた、さうしてクムベスワラ (Kumbhevara) 堂をみたき旨を述べたら、地震で壞れて何も無いといった。それでもとにかくみるといつて頑張つたら、連れては行つたが果してそれかどうか、三重か五重かも知れぬ位に、全然跡方もなくなつてゐるのに、それでも一步も境内に入れぬのみならず、覗くこともならぬといふやかましきで、大分癪にさわり、勝手にしろと思ひながら側面へ廻つたら、塀の崩れたところからすつかり見えたが、ただそれだけの事で跡形なき迄に壞れてゐたから薩張仕方がなかつた。

バータンには例の賽の目の五の様な配置をもつた佛塔が、タンクの傍にある筈だから、次に夫れが見度いと申出た。さうしたら細い通りを大分歩いて漸くゆきついたが、それは土塔であつた。此町には東西南北の四方に、各一基づつの土塔があり、其中央といつた格で賽の目の五式の塔があるといふことで、私は今其五塔を見度く思つたのに、意外なことに先方の間違ひから、其土塔の一に出遇つたのである。名は何といふのかときいたら、ツドツ (Tsudo) 堂だといつたが、少し怪しい。これはどうも南塔に當るらしいので、私は獨りさうきめて、一六〇に掲げた地圖にもバータンの南にそれをかいておいた。一巡したら偶然一基の石燈が見つかった。これは思はぬもうけものであつた。

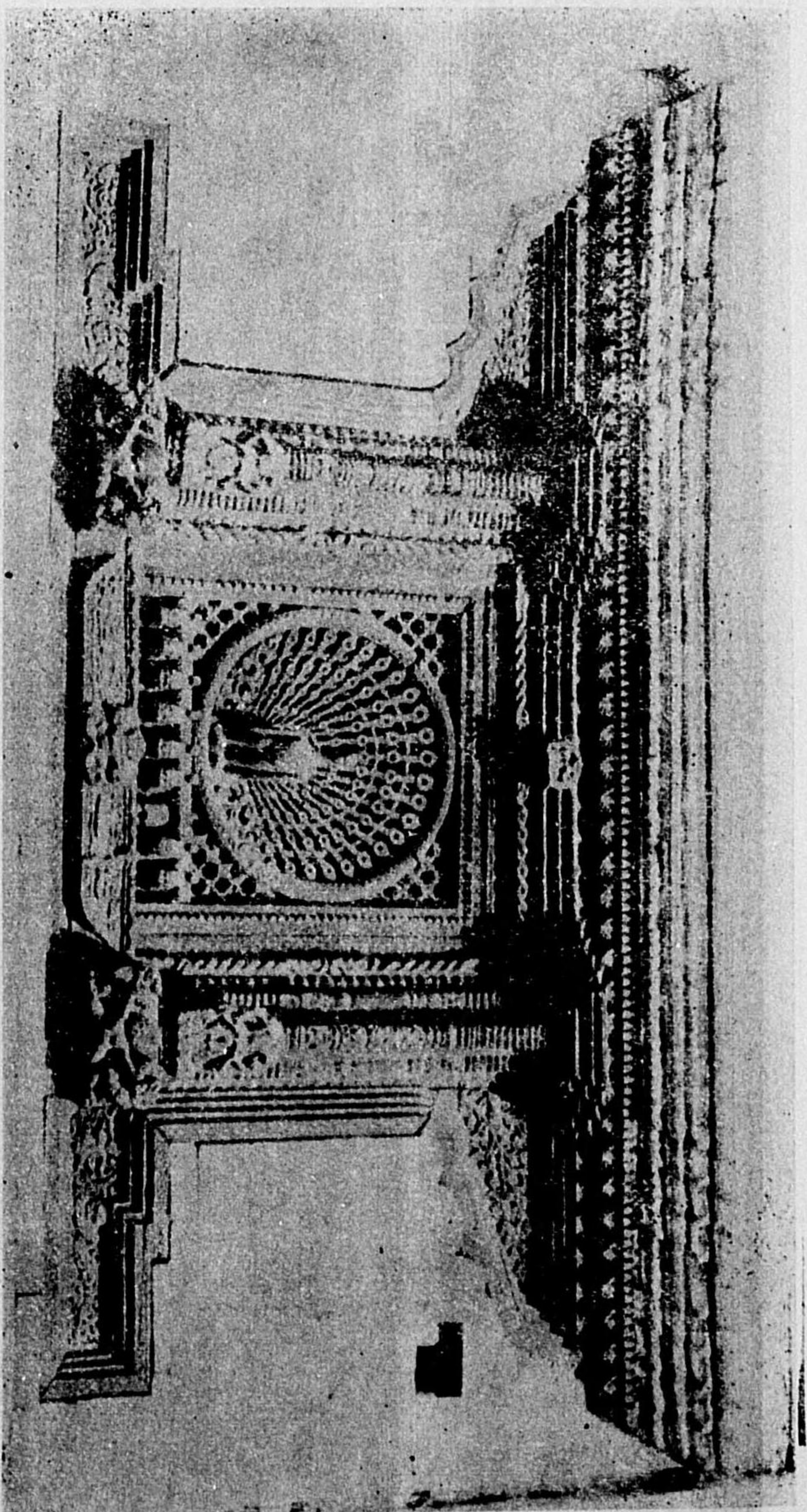
次にどうしてもタンクのそばの佛塔を見たいから、とにかくタンクのところへ案内をしてくれと番人頭に申込んだら、暫くそこいらを乗り廻して、歸路に出てもう少してバータンの町を出ようとするあた



りから左折したら、とにかく大タンクのある所へ出た。水は少し濁ってゐたが、洗濯女で頗る賑つてゐた。不圖向ひ側をみたら、まっ白に美しく塗られた塔があり、水に投影して甚だ美しかった。これで漸く目的を達する事ができた。併し伏鉢の形は豫て私が見てゐた寫眞とは異なつてゐたが、これは何度も塗り直したりした結果、多少型が變つたと見るべきで、確かにこれに違ひないことは明らかであつた。此タンクはチャージャー・バンナー (Chaya Vahā) といふ。書物にさうかいてあるので、さういつたが全然不通の様な態度であつた。スバが何故か來ないので、この番人頭が毎日ついてきたが、どうも甚だ不愛想でいやになつた。どうしてもタンクのところへ連れて行かぬなら、此市の大きさを知れたものだから、馬車なんかいらぬ、自分で勝手に歩いて探がしてみるといふ風に見せたので、初めて連れて行つたと思ふ。これは邪推かも知れぬが、私はかう悪くするのである。このお目附役は何も此頃始つたのではなくペンダルが行つた時(一八八四年明治十七年)の記事にも、此種の附添人のことが書いてある。だから彼のいふ如く、非常に都合のいいこともあるので、寫眞をとる時レンズの前に立つ群集を追拂ふ如きは其一例で

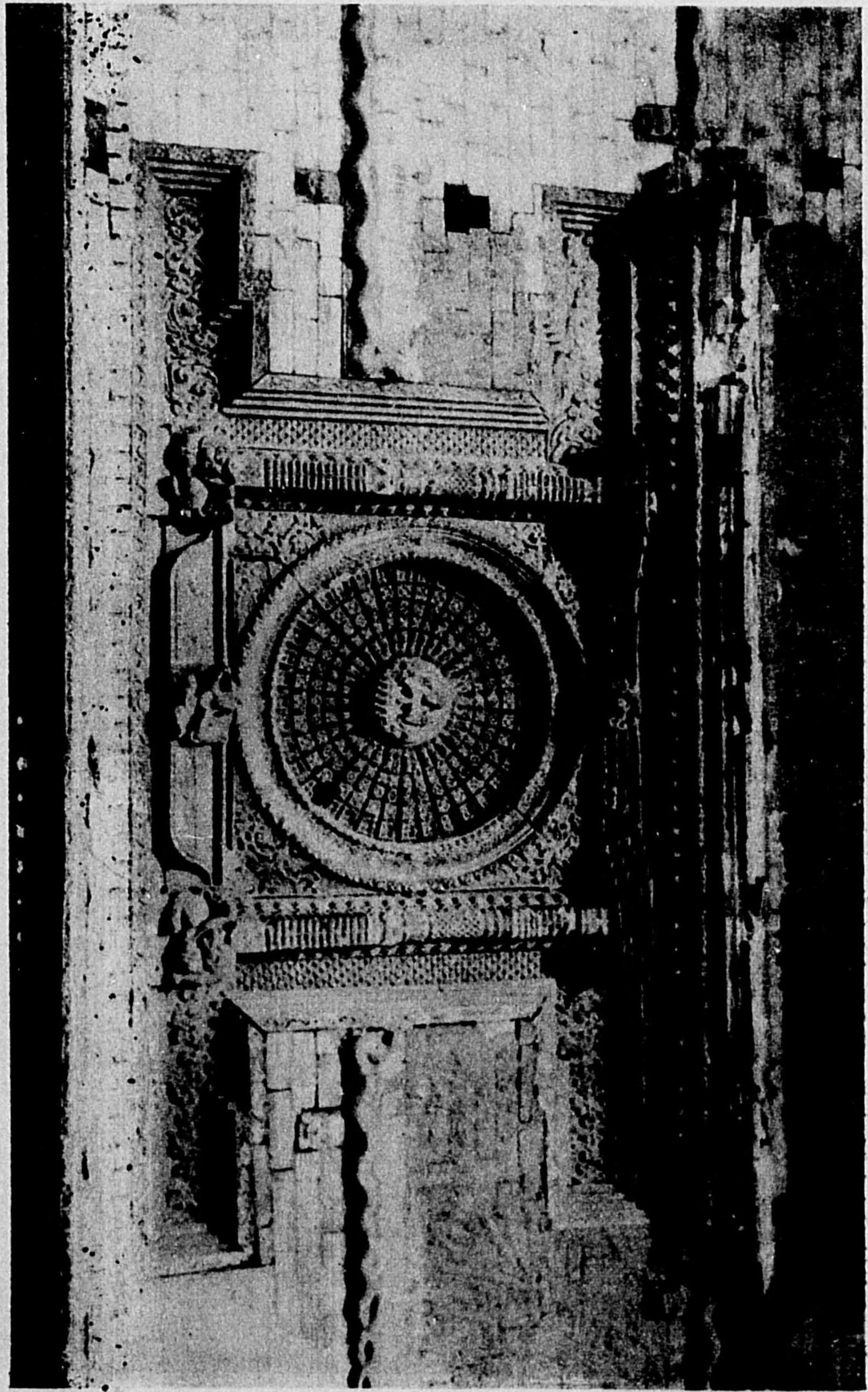
\* Pentall: "A JOURNEY IN NEPAL AND NORTHERN INDIA" PL. IV. (二一六・二二) (十七參照)

\*\* .....but my negotiations were, I fear, interlarded with by the officiousness of the Nepalese mukhy, or guard in attendance on me. As a general rule I had nothing to complain of in the demeanour of these men; on the contrary, on several occasions, so far from acting as spies or standing in the way of my investigations, they were of great use in overcoming the stupid prejudices against strangers manifested especially by the Fuddists of this country. (Pentall: "A JOURNEY IN NEPAL AND N. I., p. 15)



其一 (昭和十一年三月十七日)

圓形の内部に放射形の狭間飾を入れたのなら、此上のない大きな立派なものか、歐洲各國のゴシック建築の大會堂(カシー・ドラル)の正面についてゐるが、夫れ等は何れも中心から線が放射してゐるのである。だから其何れもが半徑である。然るにネパールの規模こそ小さいが、尾をひろげた孔雀を圓の内側に立たせたのだから、圓の中心と放射線を中心と一致せず、鳥は裝飾になるし、ひろげた尾翼を圖案化してゐるし、我國では到底望まない意匠である。どうして此際なうまい事を考へたものか。(第211頁參照)。



あるが、又こんなタンク等は彼にとっては洵につまらぬので、ついてゐるのがいやでたまらないのだらう。けれども私は遂に目的を達したので、充分満足することができたのであった。

\* \* \* \* \*

大正十一年秋埃及國を旅行した時、上埃及のラクソル(Luxor)に滞在し、ある日カーナック(Karnak)に於けるアモン大堂(Gt. temple of Ammon)の見學をした後に、其南方程近きムート堂(Temple of Mut)へ行くべく案内人を促したところ、態態行つても何も見るものがないといふので、ベデカの案内記の附圖を見せ、此様に例ひ復原圖にせよかいてあるのだから、とにかく行くと主張したら、地圖にかいてあつても實際何もないといふので、暑さも暑しまあやめておけと思つて中止したことがあつたが、どうも氣にかかつてゐたので、昭和十年再度ラクソルへ行つたのを幸ひ、今度は先年と同じ案内人に何氣なき體で、一番先きにムート堂を見るところ、今度は大に賛成をしたので、第一に行つてみたら、遺跡は中中立派で、柱の基部等殆んど全部残つて居り、何もないどころではなかつた。案内人、殊に職業的案内人の通弊がこれで、つまり面倒なところはすべて避けたがる。成るべく通り一片のところを樂なところを案内し、書物にかいてある様な事をただ棒暗記で述べたるに過ぎぬのである。パータンのタンクの傍の佛塔にしたつてさうである。二三日前からこの話を持出してゐたが、番人頭はタンクの所には何もみることがないといつてゐた。以前はたしかにあつた事は書物の圖版に證據が残

つてゐる。然るに現今ないといふのは、或は地震で全部壊れて了つたのかも知れぬから、餘り大きな事はいへぬが、例の通りなくともいいから壊れたあとを見るといったのと、前記の如く歩いて行くといふ勢を見せたので、仕方なしに案内をしたのであらう。何故にこんな骨惜みをするのか、全く了解に苦むのである。或はこちらの言ふことを誤解したかも知れぬが、それは私が直接に話したのではなし、バハヅールに通譯させたのだから、その邊は保證はできかねる。

南塔からチャーヤ・バハ・タンクに行く途中に家屋を新築してゐたところを通つた。極を配置し、隅だけを放射形とし鼻隠板を打ち、極下端に桁を架渡し、其桁を壁から出した方杖で支へしめたところがよく判る。我國の建築でいふなら、天竺様の軒に、桃山時代の城堡建築の一なる白鷺城の軒を合併した様なもので、洵に興味の津津たるものがある(83頁)。

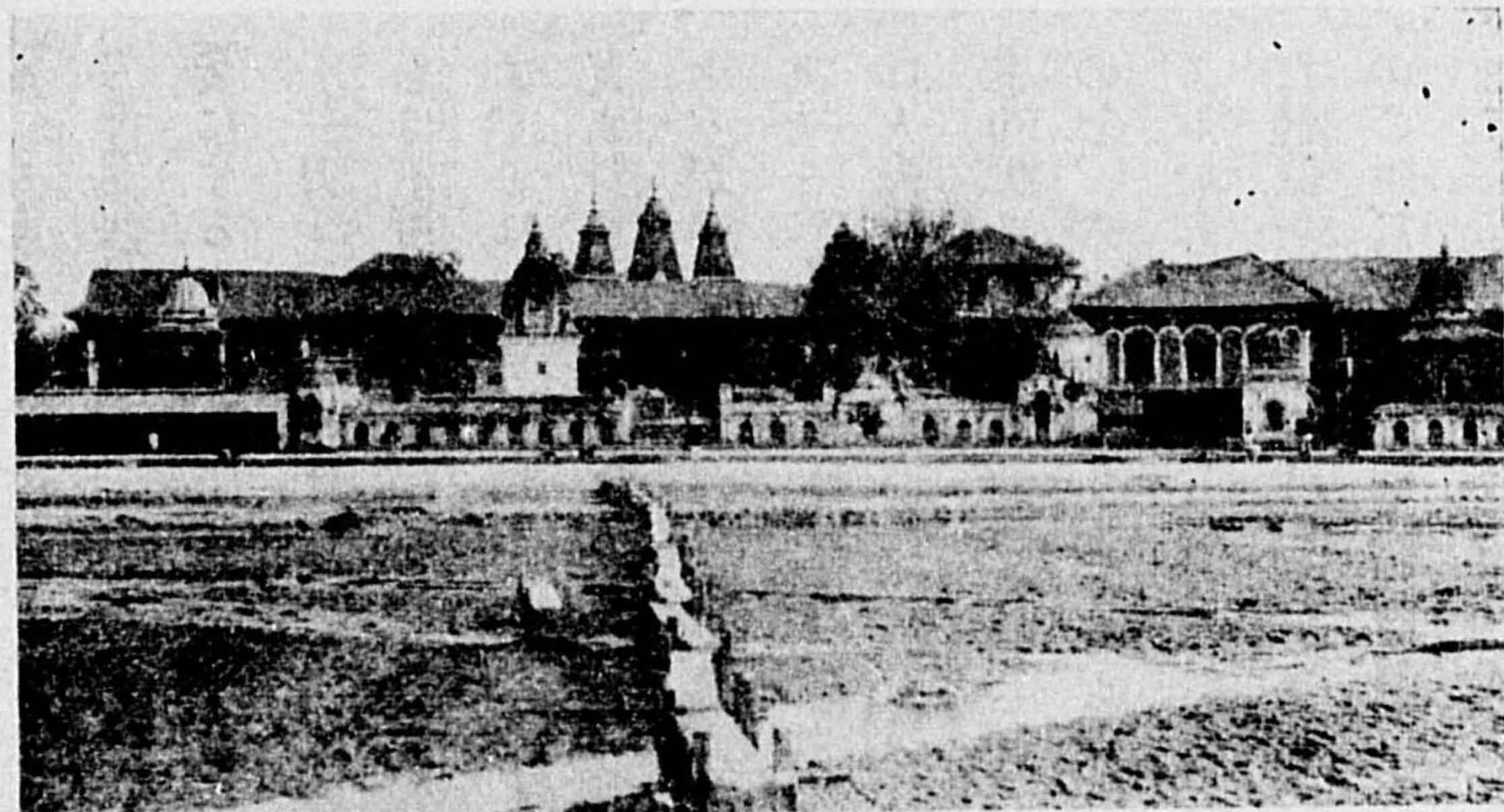
此日は餘り寫眞をとる所はないと思つて、フィルムもさう多く持つて出なかつたが、後になって案外いろいろあつたので、もう一本ほしくなつたが、どうしても都合がつかかねたので、がまんをして了つた。思ひだすと今でも惜しくて洵に遺憾である。

\* \* \* \* \*

晝食後荷物を造つたが、時間が少し餘つたので、バグマチ河畔でも歩いてみようと思つて出かけたが、あとから人が追ひかけてきた。さうして小さく折つた紙を手渡したので、あけてみたら何か讀めな

い文字が澤山かいてあつた。よく注意をしてみたところ、折つた上に鉛筆で“Dear doctor. Kindy pay the cooly Rs. 32/75 for your coming to Nepal”とあつてあつた。32/75はネパルのルーピーで、印貨にすると26/3になるのださうな。だからそれだけ拂へばいいと附加へた。

三月十五日に實は一人か二人の人夫が金を請求にきた。彼等は人夫賃のみを請求し、自動車と乗馬賃とは不用だといつた。バハヅールは費用はすべて先方でもつので、ただ心附さへやればいいといつたのに、これはどうしたのか。尤も私は何もネパルの招待を受けたのではないから、別に先方で拂つて貰ふつもりは毛頭なかつたが、何故に自動車賃と乗馬賃とが不用で、人夫賃だけ請求するのか、それもスバが拂へといつたら直に拂ふが、どうもはつきりする迄拂はずにおく、スバが来るまで待つてといつて其まゝにしておいた。然るに其翌翌日即ち十七日午后、人夫が心附を貰ひに來たといつたので、それでは人夫賃はどうなつたのかと尋ねたら、それは既に當局に於いて支拂済だから、心附さへやればそれで終りだといつた。どうも併し腑に落ちないので更に問ひ返したら、あれはこちらに請求すべからざるものを、人夫等の誤りでこちらにもつて來たのだとの返事であつたから、それで少し奮發して心附をやつておいたのに、今日になつて此有様は何たる事か。第一いつ迄たつても金をだしおしみてゐる様で甚だ體裁が悪い。同時にバハヅールは全く信用のできぬ人物であることが明瞭になつた。この分では先日の心附だつて半分位誤魔化してゐるかも知れない。事情がはつきりせぬところへ來ると、萬事が不安でまことに困るものである。



上。 バグマチ河畔の殿堂 其一（昭和十一年三月二十日）

下。 同 其二（昭和十一年三月二十日）

首都滞在の最後の日、最後の外出に得た写真。R.H.を出でて道を左にとり、二三町行ってから左折して河畔へ出た。川幅は可なり廣いが、雨がないので水量は極めて少なく、水面から一尺位の高さに一枚の板を渡し、夫れが橋の代用をしてゐる。だから同時に人がきて、互に譲らなければ、途中で殿合ひでもして勝負を決せねばならぬが、一人が謙讓の美德を發揮して砂地へ下り立ちさへすれば極めて容易に解決する。此圖は上下共さう大した殿堂でもなささうだが、殊に下圖は此國獨特な三重塔があるだけに、よく附近と調和した光景を呈してゐる。時も可なり晩く薄曇りであつたのに割合にはっきり寫つてゐる思ひ出が殊に深いのである。

人夫賃を拂つてから再び散歩に出かけ、バグマチ河畔を歩いてみたり、一時間ばかり散歩して歸宿した。これが一生の見納めかと思ふと、少しばかり淋しい様な氣がしなくもない。首都の附近を流れてゐる川にマチといふ語尾のつくのが多い、バグマチ (Bagmati)・ビシヌマチ (Vishnumati)・バドリマチ (Badrimati)・カリマチ (Kalinati)・ククマチ (Kukhumati)・アラヌマチ (Alanumati) 等である。マチは英語だと植物(菅)であるが、まさか其意味ではあるまい。何か梵語の辭書でも引いたらあるかも知れない。

歸る時の旅券はどうなるのか。スバは嘘のつき放しで終に顔を見せず、こんな事をしてゐて明日出發ができるかどうか判らない。明日たてねば明後日にする。さうすれば初めの計畫通りである。然るに一八・一〇になった時番人頭が来て、人夫も山駕籠もタンコットへ行つたから、来た時と同額を請求するといつて受取をだした。明後二十日は何かの祭禮で、馬は其方に徴發されて一頭もないが、明朝自動車は来るさうで、それに人は勿論荷物も皆乗せてタンコット迄行き、それから来た時の通りを逆に實行するのである。

Nepal  
20/10/36

To  
Dr. S. Amanuma  
Tripureswar Rest House

Sir,  
With reference to your letter dated 19th instant informing that you are leaving this place on the 21st morning and requesting for the arrangement of a Dandy, two horses and five coolies I write to inform you that a Dandy with four coolies and five other coolies will be coming to your place early tomorrow morning. As no horses are available on hire I am sorry to inform you that these could not be secured for you. I hope you will please pay the coolies their due.

Hope your stay here has been a pleasant one and that you will have a pleasant journey back.  
Yours Truly  
Nagendra Man Singh  
for Bada Kazi  
Private Secretary to H.H. Maharaja, Nepal

ネパール國マハ・ラジャ秘書マリチ・マン・シン氏の返事(代筆)

夜になつてから、代筆ではあるが、マリチ・マン・シン氏から返事がきた。此所に掲げたのが即ちその手紙で、署名人のナゲンドラ・マン・シンといふのは兄弟かも知れない。「アイ・ホープ・ユ・ウ・ケル・ブリーズ・ベイ・ザ・クローリーズ・ゼイア・チエウ」(御手数ながら何卒人夫共へ賃錢御支拂成被下度願上候)は何とも恐恐縮縮の次第で、到

着の時變ないきさつから暫時支拂を見合はせたので、歸りに支拂をせずに行つては困るといふのを婉曲にいっただけの事。こんな結果になるとは思つてゐなかつた。「ネパール國マハラジャ殿下秘書バダ・カジ代理」とあるから、このバダ・カジといふのは餘程有難い役の名か何かだらう。何さま法成寺の入道そのけの肩書をつける所と見え、昭和十年十月二十九日に甲谷他の總領事館から、私の入國の第一回照會をしてくだされたにつき、十一月五日附の返書の差出人の肩書其他は Pradipta Manyabar Nepal Tara Pradipta Gorkha Lakshina Bahu Bada Kazi Marichi Man Singh C. I. E. Private Secretary to H. H. The Maharajah, Nepal とついで、どうも字引を引張つてみても C. I. E. が Companion of the (Order of the) Indian Empire といふ勳章をもつてゐる事を現はしてゐるほか、私には一つも判らない。この様な高官へ私とはかく人夫や馬の準備を願ますといふ手紙を出したのだから、讀者諸君はさう馬鹿にはいけない。

\* \* \* \* \*

明朝は早起せねばならぬ故、八・三〇に臥床したら、間もなく必要な事件があるといつて起された。仕方なしに扉をあけたら、役所から使がきて、明日は何か都合があるので、政府の車八臺の内六臺は他へ廻さねばならぬ、さうするとあとに二臺しか残らぬから、車の都合はつきかねると言つたさうだ。何も一日借りようといふのではなし、朝六時頃せいせい一時間位ですむものだから、何とかなりさうなもの



NEPAL MONEY

4	Dâma .....	= 1 Pice (paisa)
4	Pice .....	= 1 Anna
6½	Annas .....	= 1 Sukâ
2	Sukâs .....	= 1 Mohar
2	Mohars .....	= 1 Rupee (Rupaiya)
1¼	Nepali Rupees ...	= 1 British Indian Rupee

(Perceval Landon:- "NEPAL" より)

い文字のうちから、辛ふじて数字を拾ひあげ、あとはいい加減に頭を働かせると、どうやらこんな事になりさうである。夫れにしてもいい年をして一つも讀めないのは如何にも残念である。學校の教師を勤めてゐる間に、文學部へ出かけ行って、其當時現役の教授で居られた榊先生に手解きでもしておいて頂けばよかつた。ただうかうかとぼんやり、人に馬鹿にされながら其日其日を暮してきて、扱て一朝免職になつて初めて目がさめたつてもう晩い。歸路の分も此日に宿舍の番人頭がもつて來た。この方は内譯が上にあつて、下に合計がでてゐるが、何か Re. 1 餘計になつて居るため、合計も 32/75 となつてゐるが、これは番人頭が鉛筆でその部分へタマをかき、下に同じく鉛筆で何か書いたが、此がどうも私にとっては、まるでそんじよ、そいらの寺に傳はつてゐる天狗の筆蹟乃至精神病患者のお筆先と同じ様なもので、どうも始末に悪い。こんなのを何とか手取り早く時をあげて頂くのは、やはり遠齋先生にお願ひ申すのが最も近道の様である。どうかよろしく。

此領收證の左肩のところに黒印がおしてある。歪七角形で、何が刻してあるのかまるで判らない。とにかくこの書類からみても、旅券を取り上げられて了つたのが惜しくてならぬ。極く薄い記憶では、やはりどちらが上か判ら

だ。夫れもならぬとあらば別に都合をして貰はないでもよろしい。もとよりこの車は私から頼んだのではない。勝手に先方できめ、勝手に断つてゐるのだ。バハヅールは先方からするといつておいて、こんな晩くなつて断つてくるのは大に不都合だといふから、それなら馬車はどうだときいたら、遠過ぎて馬車では行けぬといふ。

此事があつたので、きた時の車の出所と、くるのに時間がかかつた事と、賃錢の不用だといふ事と、總て皆判明した。此町に自動車もあるさうだから、然らばそこへ行つて、明朝六時に相違無く來る様に約束をしろと命じた。擔夫と人夫と既にタンコット村へ行つてゐる以上、一日延期等はせぬといつて再びねた。

\* \* \* \* \*

此所に擔夫・人夫の賃錢の領收證——印が押ししてあるからさうだと思ふが、字が讀めないのはつきりしない。或は請求書かも知れないが——をだしておく。これは現在ネバル國で用ひてゐる文字で、デバナガリかも知らぬが、かかる方面に興味を持つて居る讀者がもしあるとすれば、其諸君には多少御參考になるかと思つたからである。往路の賃錢は此日支拂つたが、此方のは合計が先きにかいてあり (32/75)、内譯として 14/- + 18/75 としてある、つまり (14/-) + (18/75) = 32/75 となるがこれは多分擔夫 4 人、1 人 Rs. 3½ づつ、荷運夫 5 人、1 人 Rs. 3½ づつといふ計算ではあるまいか。何だかまるで判らな

ぬ様な文字でかいてあったと思つてゐるが、若し今手許にあつたら、さぞ面白いであらう。

参考のため、ネパル國の金錢の單位をあげておく、これによるとネパル國の5ルービーが、印度の4ルービーに當ることになる。さうしてあの書類にはルービーの端數を百分比例でかいてある。だから  $Re. \frac{3}{4}$  は  $\frac{1}{5}$  としてある。そこで  $32/75$  は  $1/4$  (Nepal) = 1 (B. I.) だから 1.25 で割ると  $26\frac{2}{5}$  となる。  $Re. \frac{1}{5}$  は As. 3 強故、其「強」だけは負けとして、換算額を  $26/30$  としたのであらう。

\*

\*

\*

\*

カトマンズの六日間、右記載の通りで終つて了つた。中中考へてゐた  $1/4$  も効果を収める事が出来なかつた。殿堂の内陣は望みなしとしても、境内に入れぬ等とは夢にも思つてゐなかつた。これが最も残念であつたが、如何ともする事ができなかったのであつた。

(昭和十二年八月二十二日稿了)

チャパイル佛塔塔身下部の塔婆を刻せる石



(物差は曲尺の約五寸(六吋)・昭和十一年三月十八日)

# 印度佛塔巡禮記

(第十三回)



### 八三、宗教建築

ネパル國の宗教建築で非常に目立つのが二種と、他に一種合せて三種ある。其一は伏鉢型で相輪を頂く塔婆で、殆んど必ずともいい位に平頭の四方に眼をかいてある。極めて小型のものから、偉大なまである。其二は二重・三重・五重の塔の様な形をしたもので、大概は大型で隨所に見出される。現に印度國ベナレス市の恒河河畔に、新しいものだが二重の塔がたつてゐるが、ネパリス・テムブルとして可なり有名である位に著しい特徴をもった建物で、既に第61・62頁等に其一二を紹介した通りである。其三は回教式葱花屋根をもったもの。要するにこの三種に分つことができるのである。

### 八四、佛塔

バンタチャリヤ (Benoyosh Bhattacharya) 氏著【印度佛像の研究】(The Indian Buddhist Iconography) には、ネパル國の有名な三塔と題し、其圖版第二にシムブ (Simbhū) シムブ (Baudh) カーテ・シムブ (Kathe Simbhū) として、伏鉢型塔婆の圖を三つ並べて掲げてゐる。このうち初めの二つは多くの圖版を添えて詳細に解説をかいておいたが、終りの一つはどこにあるのか知らない。圖で見ると其形は最初によく似てゐるので、先づあれと同じ位に考へてよささうである。あの書物にはただこの圖版だけで、説明がない(あるのかも知れぬが私は)ので、大きななどはよく判らないが、相當なものだといふ事は想像ができる。

カトマンズ市には二つの頗る有名な佛塔がある。佛教もここには多少は印度教が入つてゐるので、純粹とはいへないさうであるが、どの程度迄入つてゐるか、その邊のことは、私の専門外なのでよく知らない。併し此等の塔婆が創建された時からではあるまいから、さうして入つてゐても僅からしいから、此等を佛塔とみて少しも差支ないのである。其二つは曩に記したシムブとバウドで、普通はスワヤムブナート又はシヤムブナート (Swayambhunath, Shambu-Nāth) 及びボドナート (Bodhnath, Boddhnath) といつてゐる。どちらも大勢の信者があり、殊に後者は西藏からの參詣が多いさうである。一六〇に黒色の半圓形を以て示したのが佛塔だが、勿論これは極く一部分に過ぎない。現にバータン市内にあるのはかいておかなかつたし、其他小塔はいくつあるか實數も位置も不明だから、全部圖にかき現はすことはとてもできかねる。

\* In the "Chaiya" or earlier and more purely Buddhist style of building, there are several interesting examples in the Valley, the two most famous being the temples of Shambu-Nāth and Bodhnath both situated near Katmandu. The former is the richer and more popular shrine, besides being built on a hill in a very picturesque and commanding position, but the latter standing alone and in the centre of the open plain, has an impressive character of its own. Its main feature is the great pairs of eyes, figured high up on each face of the *toran* or square base of the spire, which gaze serenely over the smiling fields of the Valley, as they have done of a thousand years and more ("PICTURESQUE NEPAL" p. 139).

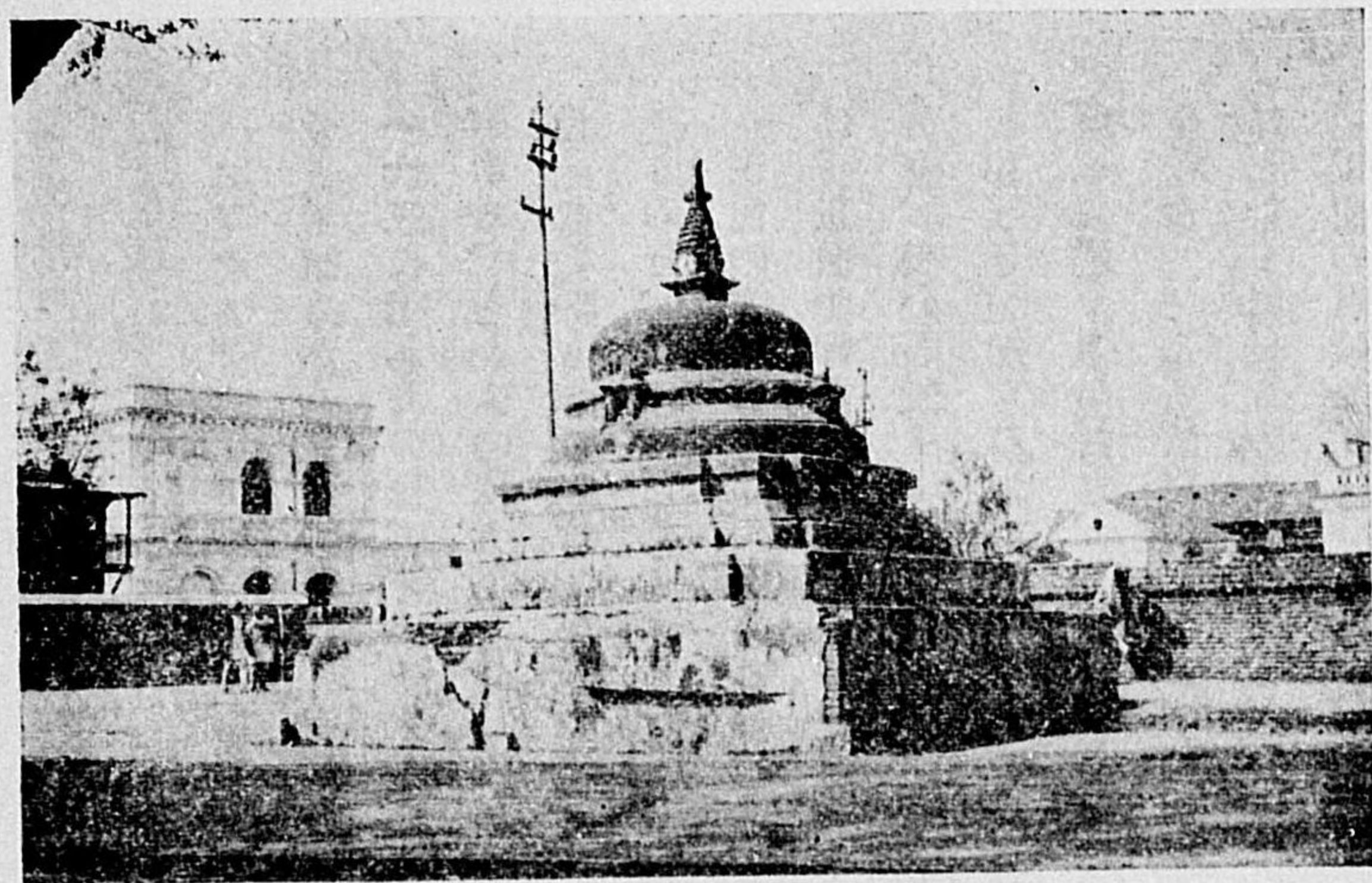
どこの國へ行っても、少し大きな町だと地圖を賣つてゐる。故に内地外地外國のどこへ行っても第一に買ふものは地圖で、これがなくては何もかも暗中模索で薩張始末が悪い。ところがここではいくら買ひたくも地圖はないといふことである。仕方がないので私はまあいい加減に見當をつけてみておいて、歸つてきてから書物の附圖にツロ覚えで記入したのだから、甚だ以て怪しいものである。怪しい位ならまだいいので、まるで間違つてゐるかも知れない。その邊は讀者諸君にがまんして頂かねばならない。塔婆一般の形式は一六一(これは後に解説するが一八四―一八九に示したボドナート寺大塔の略寫であるが)に示した様なもので、伏鉢の上に帽子を冠つた首がのつてゐる様な形、大きくても小さくても同じこと。つまり半球形の伏鉢の上に平頭があり、其上に圓形又は方形の相輪があり、其上に天蓋を頂いてゐる事、印度や錫蘭に於ける塔婆と同じもので、 Cholten (Chorten) といふが、それは西藏語かも知れない。元來遺物を保存するためのものであるが、後には記念碑のやうなつもりで建てたりした。カトマンヅ市にある小型のものは、多くは、セノタフである。とにかく大小に係らず非常に特有の形式のもので、平頭の四方に眼があつて四方を睨んでゐるのが著しい。佛教信者で心中少しでも疚しいものが參詣して、平頭を仰ぎ視れば恐らく罪を後悔せずには居られまいと思はれる位に睨みつけてゐる。下三白の印度式の眼で睨まれてゐるのだから、少しばかりおそろしい。ここに本文中に挿圖に掲げたのは其數種であるが、私は左に其代表的のものに就いて記載しておかうと思ふ。

#### 八五、スワヤムブナート寺大塔

スワヤムブナート寺は市の西北方約二哩(一哩としたものもある)をへだてた小丘の上にある(一六〇)此小丘は少なくとも東方から見た時は、背の低い圓錐體で地上に特立してゐるので、大變に目立ち且つ立派である。一六三に示したのは、ダニエル・ライトの著書の石版繪を複寫したもので、どうせ繪だから少しお負けがある、といふのは大塔の少し大きくかき過ぎてゐるのである。尤も一八七七年頃にはこの位な割合に見えたのかも知れぬが、現在の嘘偽りのない状態は一六五の如くで、もっと近づけば一六六の如くに見えるので、何れにしてもライト博士の著書の挿圖の様ではない。

正面の方から途があると思ふが、私は二度其側面の方から行つた。側面からでも丘上へ登るのは、正面か背面か何れかへ廻らねばならぬ。正面は石佛が多く並んでゐたり、途中等に奉獻小塔婆等もあり、長い石段――四百段とかいたのと五百段とかいたのとある。數へなかつたので何れが眞か、兩方ともうそか知らぬが、何れにしても室生寺奥の院の御影堂へ參詣するよりは遙に樂である――によりて頂上に達するのだし、裏からは斜面を行くので段はない。此方からだ相輪の頂上から可なりの大木が生ひ茂つてゐる廢塔があつたりして、大に風致を添へ、參詣人をして如何にも此寺の開基が古さうだ思はしむるに足るのである。

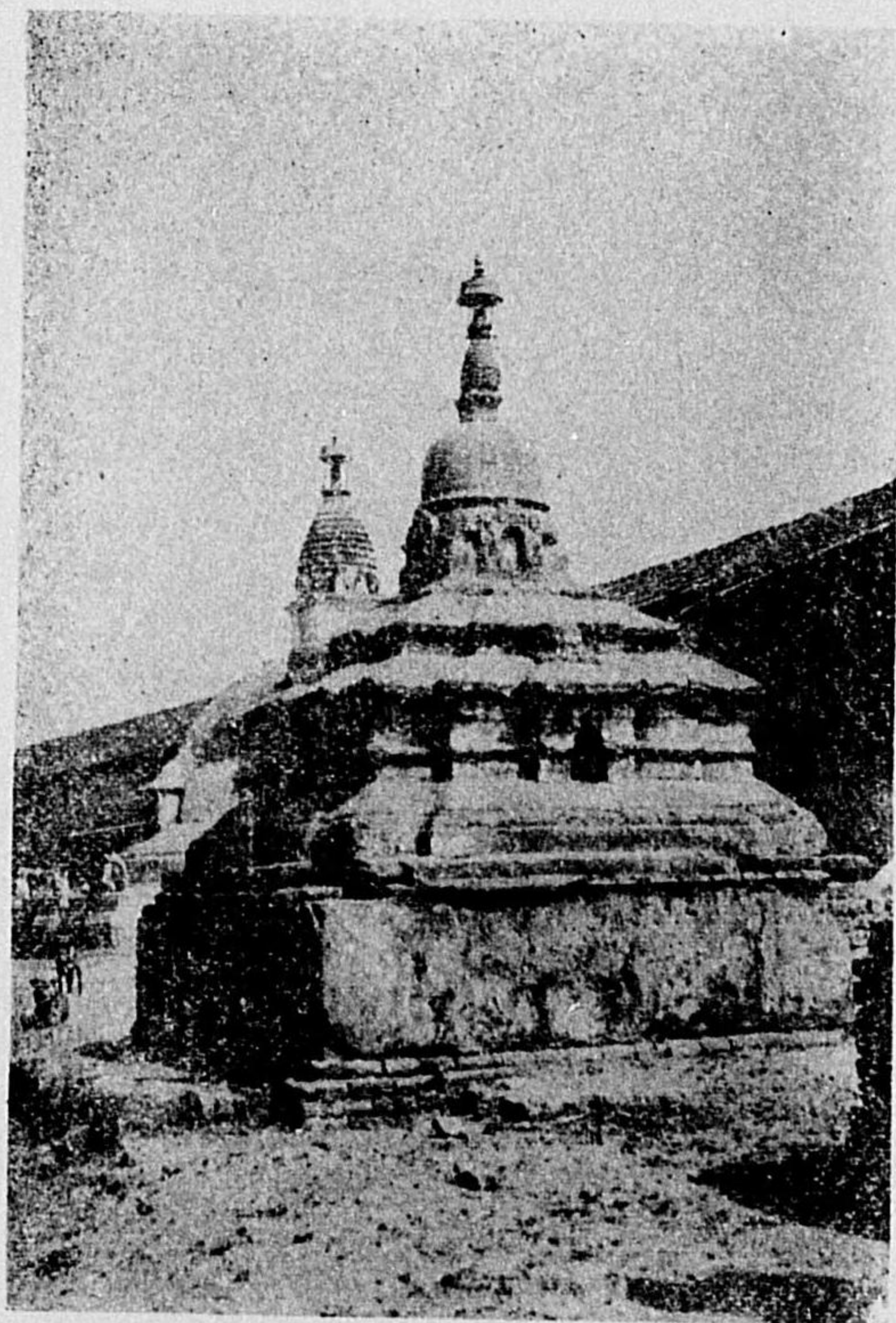
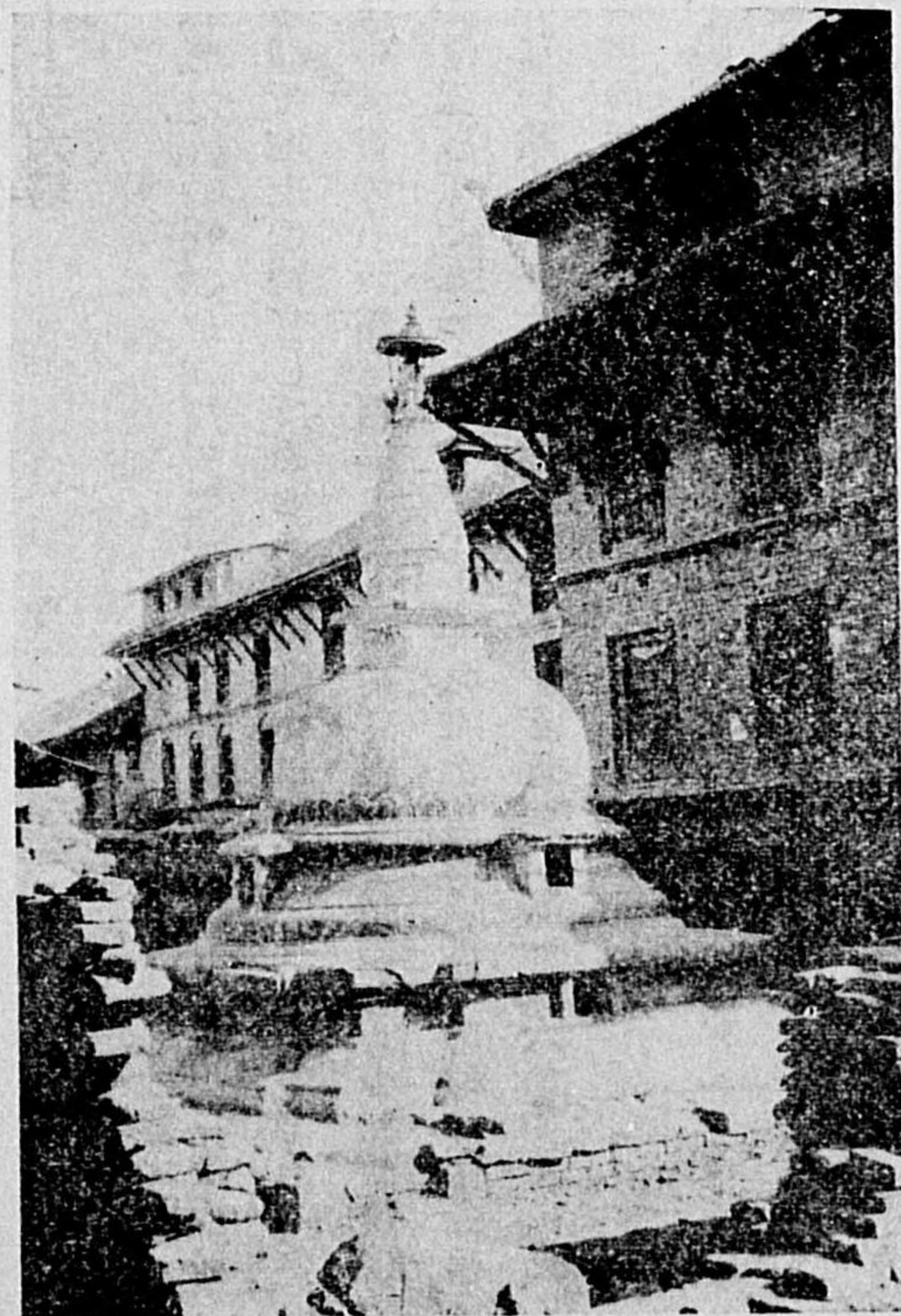
正面の石段を昇りつめると、そこには臺の上のつた大きな五針杵が目につく。臺は下が四角で上が



上。カトマンヅ市中所在の小塔 其一  
下。同 其二

(昭和十一年三月十六日)  
(昭和十一年三月十七日)

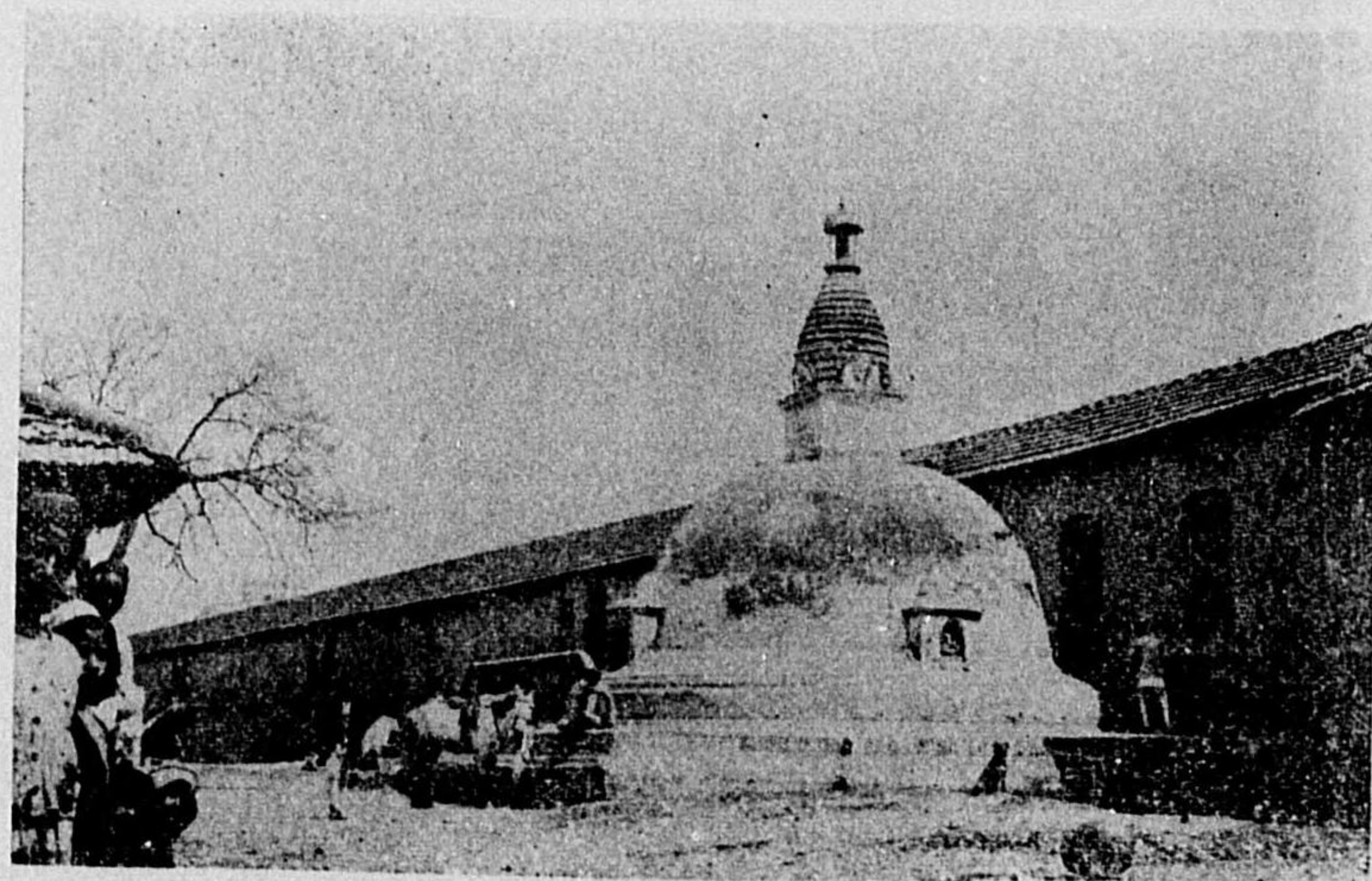
此種の小塔は市内到る所にある。上下圖共四佛をまつる小龕は塔身の下方或は基礎の上方ともいへるが、つまり塔身についてゐない。この様なのは時代の降つてゐる事を現はしてゐると思ふ。下圖塔身基部の蓮瓣に注意せよ。下圖は震災で周囲の壁が壊れたまま放置してあつたので、幸に全形の寫眞がとれたのである。



上。カトマンヅ市中所在の小塔 其三  
下。同 其四

(昭和十一年三月十五日)  
(昭和十一年三月十五日)

これ等は前のと異つた二種である。上圖は基礎がいやに發達してしまひ、又四佛奉安の小龕もやはり下の方にさがつてゐるので、さう古いものとは思はれぬ。其後方にもう一基あるが、これは可なり大きい。下圖は夫れだけ寫したもので、この方は四佛龕も塔身についてゐるし、平頭上に花頭形の楯形寶冠がある。この塔婆は相當古いらしい。尙ほ第122頁に擴大圖がある。



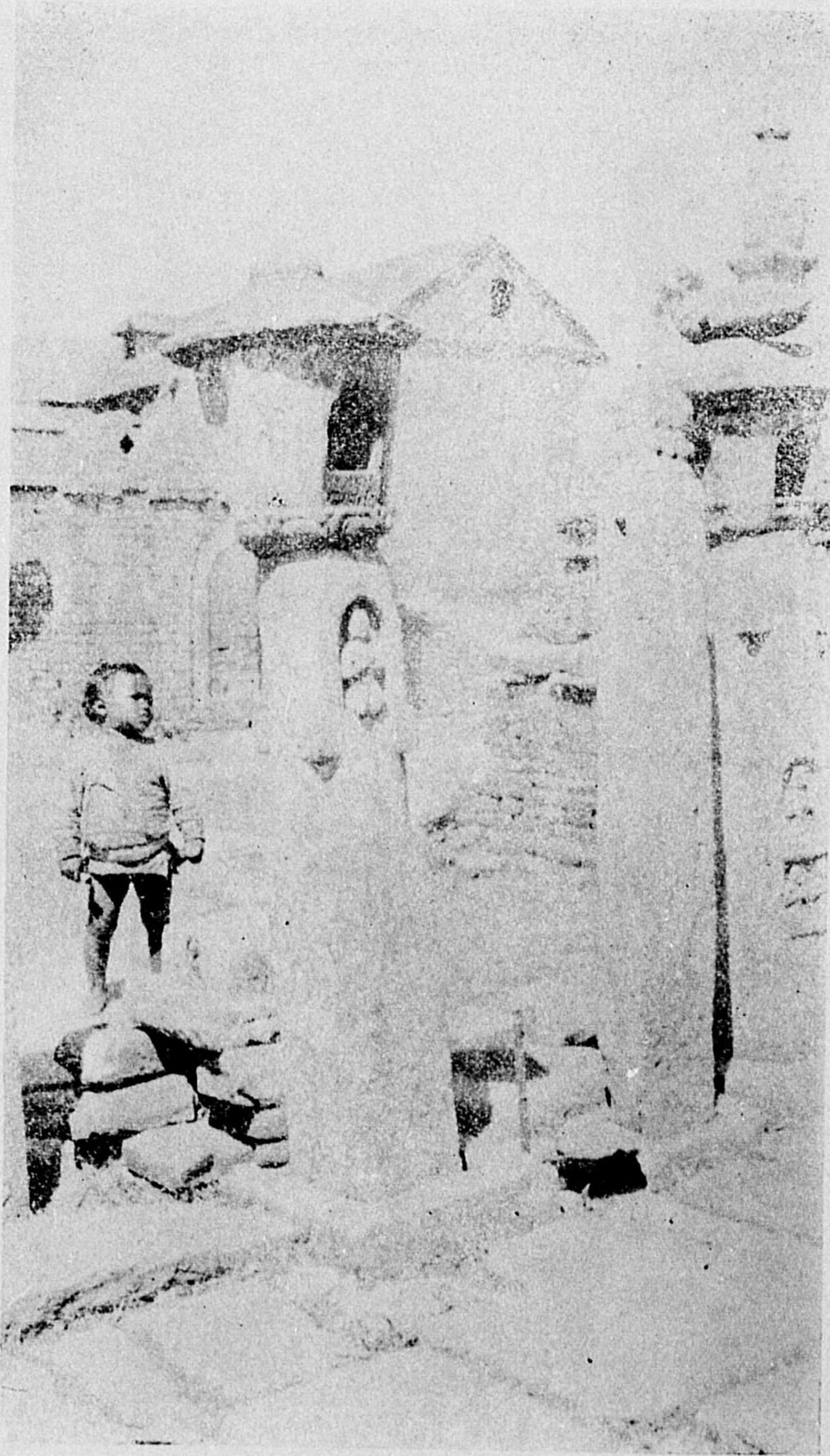
カトマンツ市中所在の小塔 其四詳細



(昭和十一年三月十五日)

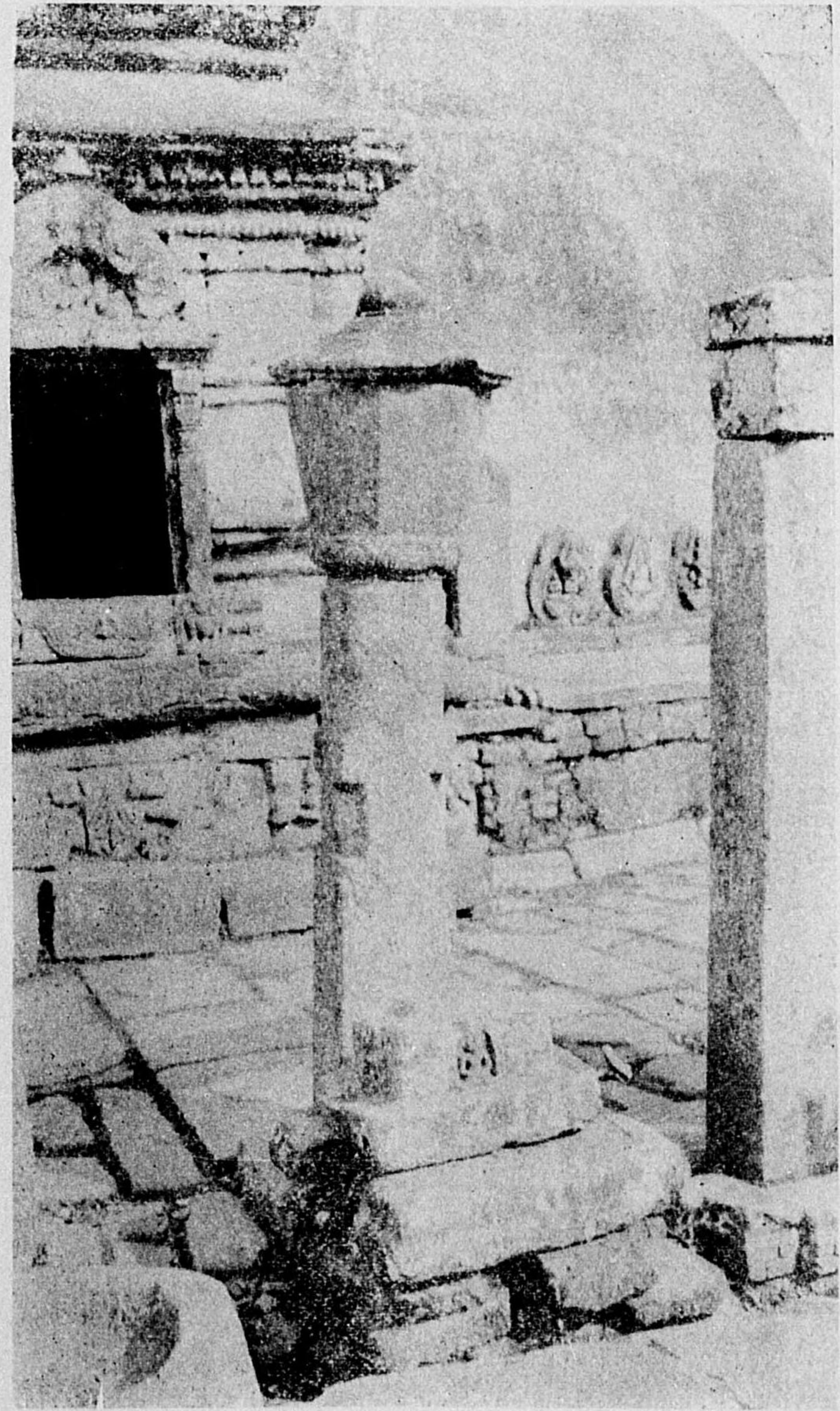
前頁の下圖に掲げた小塔の詳細で、四佛の小龕と相輪とを見るのが目的の圖。前者は正面が半圓拱型で葱花屋根を頂ける所に興味がある。後者は他の多くの例の如く途中に少しく膨みがあり、十三輪あり、上に天蓋を頂く、平頭は四方に眼があり、額に花頭型(Ogee Arch shape)の寶冠をつけてゐる。

チャバイル佛塔 其一 奉獻石燈 正面



(物指は曲尺の一尺・昭和十一年三月十七日)

石燈の形状は此圖及び次圖に示す如く二基並んでゐるから、恰も我國室町以降の夫れの様子、一對と見えるが、意匠は異つてゐるから、別別にあつたのを寄せ集めたのかも知れない。高さ各約五尺五寸。基礎は共に方形であるが、實は左様に見えるだけで、竿は其中からたつてゐるのである。竿は兩方で少し其意匠は異なるが、然るべき石柱を適當に切斷して竿に應用したのでは、かう(次頁)

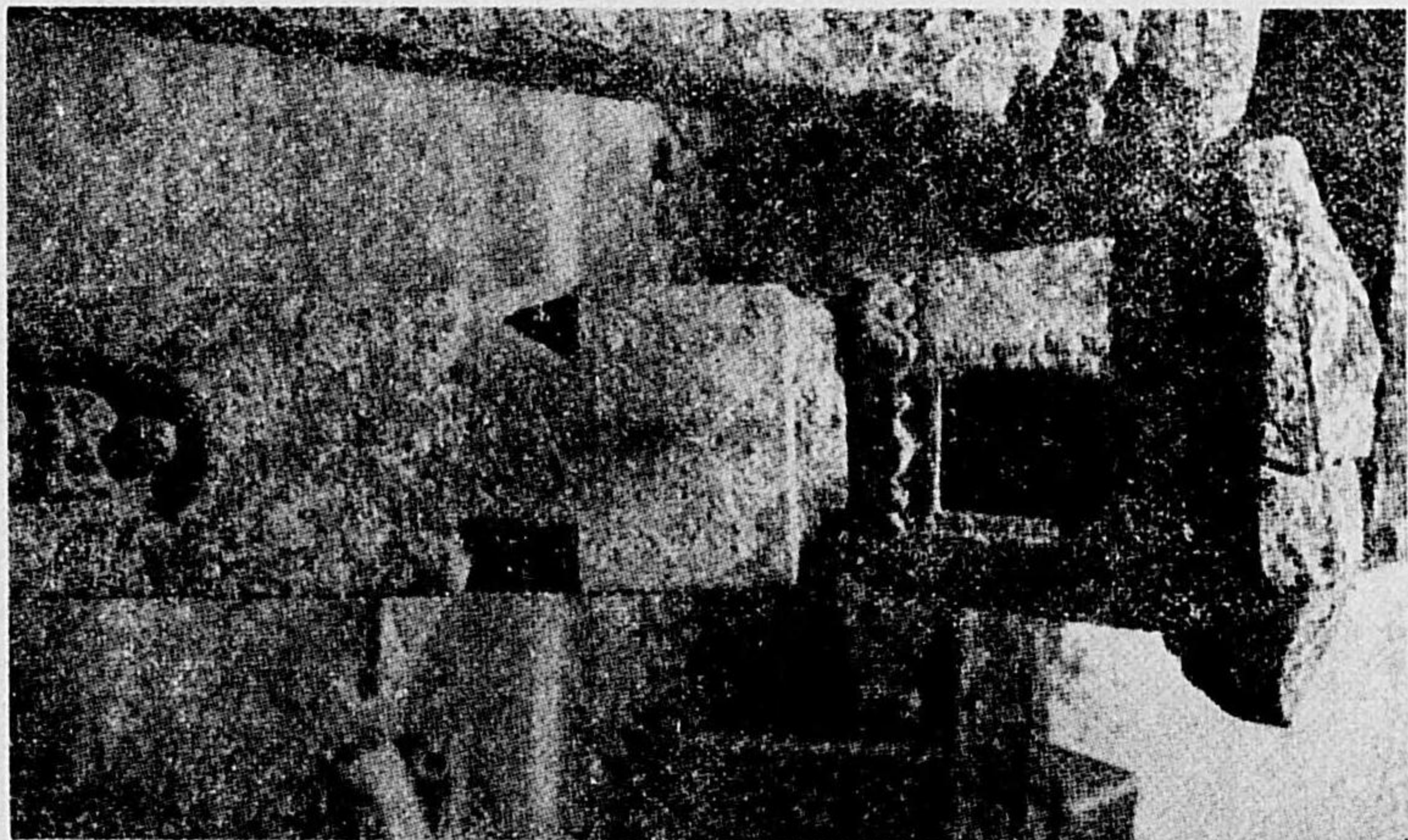


(前頁より) は都合がよくいくまいから、少し火袋との接続はよくないが、ことによつたら當初からかういふ工合であつたかも知れない。火袋は下部に蓮花を刻みだし、八角形で下部つほみ上部開き、窓なく火口は正面にのみあり、内は火皿をおく様に中央を少し高くし、内を凹めてある。笠は八角八注、寶珠は笠と一石から刻みだしてある。時代は未詳だが可なり古さうである。



前前頁向つて左方の石燈を子供が立つてゐる方向から見たところ。背景は佛籠の一

右、ナバル佛塔奉獻石燈 其一 正面 (昭和十一年三月十八日)  
 左、同 其二 正面 (昭和十一年三月十八日)  
 第119頁の圖で明らかであるが、火袋から上部の詳細を見せるため、特に大きくして掲げたのである。中臺は消滅して了つたが、火袋上部は遺構として残つたと考へられる。左方の分は上部破壊したのは遺憾であるけれども、幸に右方ので大體の見當がつく、我國に於ける明治時代の街燈の如くで頗る興味がある。卒との關係は尙ほ研究を要する



圓く側面に十二支を陽刻し、上に反花と蓮座とがあり、金銅の五鈎杵は其上にのせてある。大きさは測つてはみなかったが、長約6尺、爪の膨み約2尺、恐らく世界第一の大きさであらう。其兩側に正面を向いて獅子が座つてゐる。獅子は臺座共高約5尺(一六九・一七七)

臺座は先づ圓壙型で、其側面を十二等分し、十二支を入れてあるが、子が東から初まつてゐるのは、見馴れないせいか少しばかり氣にならなくもない。一六八のは右から左へ「亥・子・丑・寅」、一七〇のは「酉・戌・亥・子」であるがそのうち面白いのを「七一——一七六にだしておいた。此等のうち最初の「子」を中心にして右は「亥」左は「丑」次は「丑」・「寅」、次は「丑」・「寅」と「卯」が尾の方だけ。次は「寅」・「卯」と「辰」が半分、次は「申」が半分と「酉」・「戌」、さうして最後のは「戌」と「亥」とである。ところが此等のうちで特に興味のあるのは「子」・「丑」・「卯」・「酉」・「戌」である。

鼠や兎の様な、後肢に比して前肢の非常に短かくなるべき、食蟲目や喫齒目の獸類が、殆んど後肢と同じ位に發達した前肢をもつてゐることや、長かるべき鼠の尾が短かく、反對に兎の夫れが長くて狐の尾の如くで直立し、鳥の羽の様に其毛が整理されてゐる。形からみれば鼠と猪と同じ様で、兎と虎とよく似てゐる。牛は印度牛と同じく首のところに瘤があるから面白い、さすがに我國の様な普通の牛はかいてない。酉は大概雄鶏がかいてあり、とさか等があつて頗る景氣がいいが、これはどうも雌らしい、さうでなくば鳩か何か、あんな種類の鳥がつけてある様に思はれる。犬は日本犬の様に尾の先が上の方に巻き上つてゐるが、これは或は西藏や此國の犬は、皆尾を卷いた種類なのかも知れない。併しそんな事

はきかたで気がつかなかった。元來犬といふ奴は餘りすぎな方ではないから、ゐると成るべく横を向いて  
でさるだけ遠方を通る事にきめてゐるので、知らないのである。

此寺及び十二支に關しては

To the east, overlooking the plain, are the staircase and the golden Vajra on its circular stand or "dhatu-mandal" of greater age than itself, round the drum of which are cut in strong relief the symbols of the year-circle in the Tibetan calendar. They encircle the stand in the following order, beginning with the panel to the left of the central or eastern panel facing the steps: Rat, Bull, Tiger, Hare or Jackal, Dragon, Serpent, Horse, Sheep, Monkey, Goose, Pig. The last is carved upon the central panel facing the steps. Pratapa Malla covered the stand with an intricately engraved sheet of gilt copper, dispersed with representations of divinities and sacred emblems and utensils. The Vajra itself and two guardian lions were added by the same benefactor about 1645. ("NEPAL" Vol. I, p. 200)

とあるが、右文中十二支を「子」から始めて順序にかきあげてゐるが、「卯」の Hare はうさぎ、Jackal はどういふのか。ジャッカルは豺(ヤマイヌ)である。さう言はれてみると體格も虎や犬と同じようだし、尾も長いし顔もまあ犬らしくもあるが、耳が中途半端で、犬には長過るし兎には短かすぎるし、どうもどうもちつかずの變挺なもの。併しこれを豺とするのはどうもきいた事がないからどううかと思ふ。

これは十二支の研究家なる友人 N さんに依頼して調べて頂かないと、私には始末がつかない。それから「酉」を Goose としてあるが、グースは普通鷺鳥と譯するで、それでいいようである。ところがあの形をみると鷺鳥とは到底無理である、同時にやはりロックとは到底いへない、せいせいへんといふところであらうか、まあピジョンなら最も隱當であらう。「戌」がないのは、ついおとしたのであらう。最後に Pig は少し可愛想である。何せビッグといへば豚である。豚は昔野猪から家畜化させたものだから、同じものだといへぬ事はあるまいが、印度の野猪から亞細亞豚を造り、其亞細亞豚から支那豚ができ、又歐洲野猪から歐洲豚ができたといふことだが、とにかくここに現はれてゐるのは印度野猪とみるべく、瘠ても枯ても「亥」即ち「猪」であらねばならぬ。牙のある豚なんか、恐らく西洋にだって居りはしまい。牙のあるのを豚とみたのは認識不足である。而も榮養可良であるの通り肥満してゐるのだから、正に立派な Boar である。マゼン (L. A. Waddell) の "LAMAISM" に於て Twelve cyclic animals として

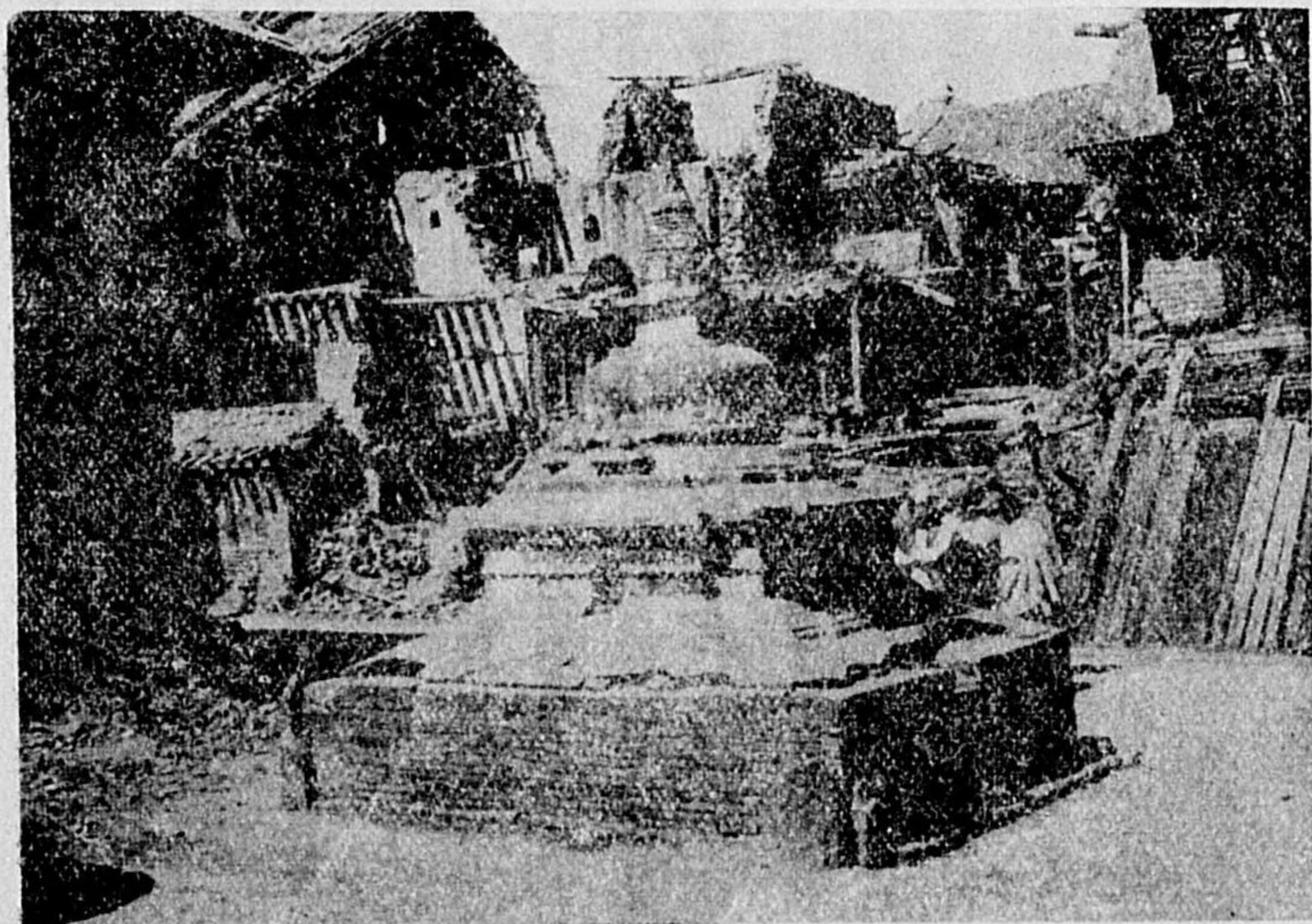
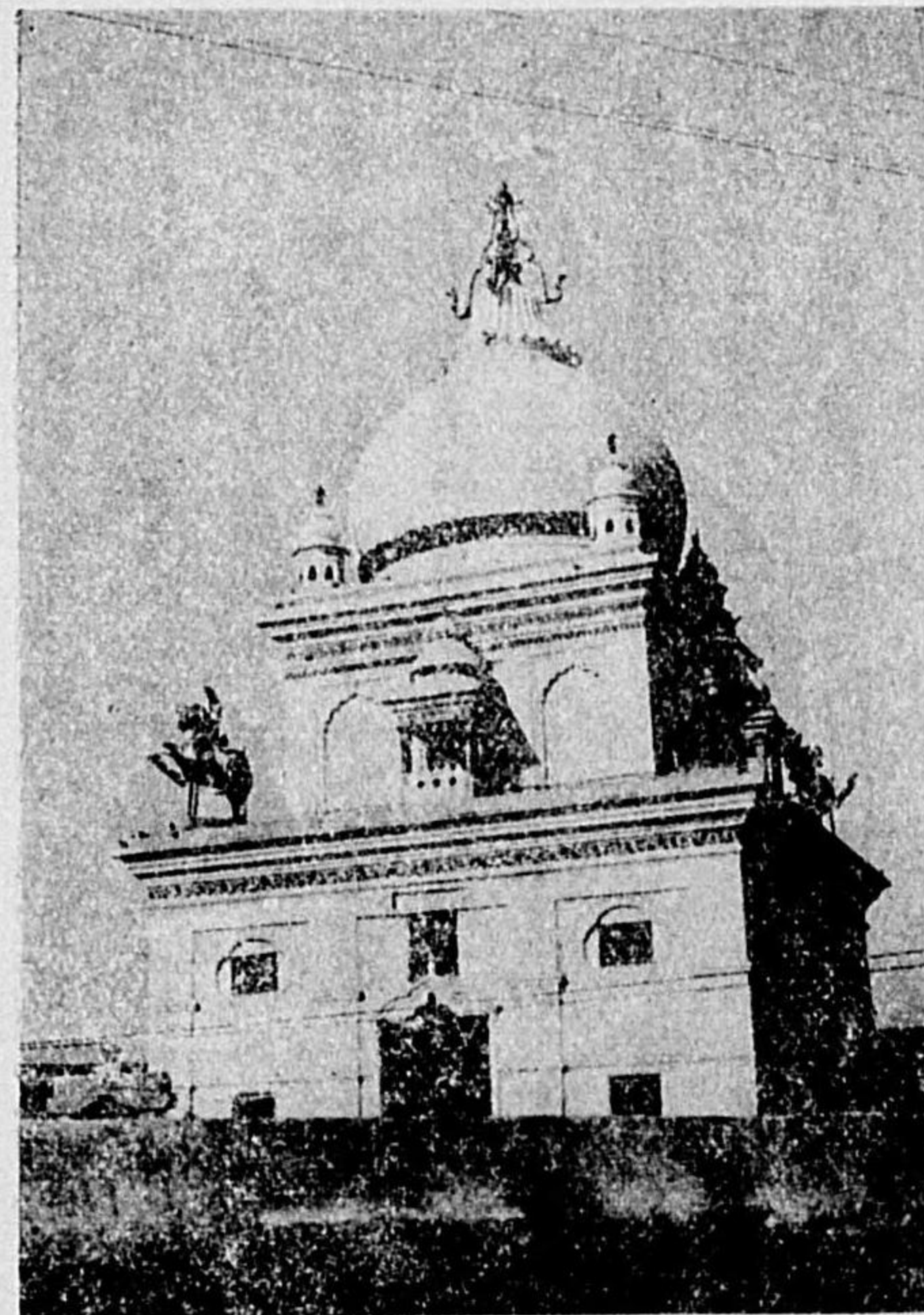
- |          |          |           |          |           |            |
|----------|----------|-----------|----------|-----------|------------|
| 1) Mouse | 2) Ox    | 3) Tiger  | 4) Hare  | 5) Dragon | 6) Serpent |
| 7) Horse | 8) Sheep | 9) Monkey | 10) Bird | 11) Dog   | 12) Hog    |

と擧げてゐる (p. 451)。ホッグは一般的には豚だから、ビッグと似たもので、それなら工合が悪い。但しホッグでも野猪の意味に用ひるから、若しそれとすればいいが、これはボアとした方が間違がなくてよからう。尙ほ同書に掲げたる占星畫像に「酉」はやはり鳩の様なものが描いてある (p. 453)

上。カラモチアン・テムブル  
下。カトマンヅ市中所在の小塔 其五  
(昭和十一年三月十七日)

上圖はカラモチアン・テムブル。R・Hの極近くを流れてゐるツクチャ川に架した橋上より見たもの。餘りにも印度サラセン式が入り込んでゐるので、どうもつまらない。併しネバル・サラセン式とする程の事もあるまい。この様な殿堂らしいものを、私は市内に於いても一棟みた。

下圖の小塔婆は、塔婆よりは背景を見せるのが目的。地震でやられた家屋が、二年たつても未だ其ままで、何といつてもきどくな有様と言はねばならぬ。

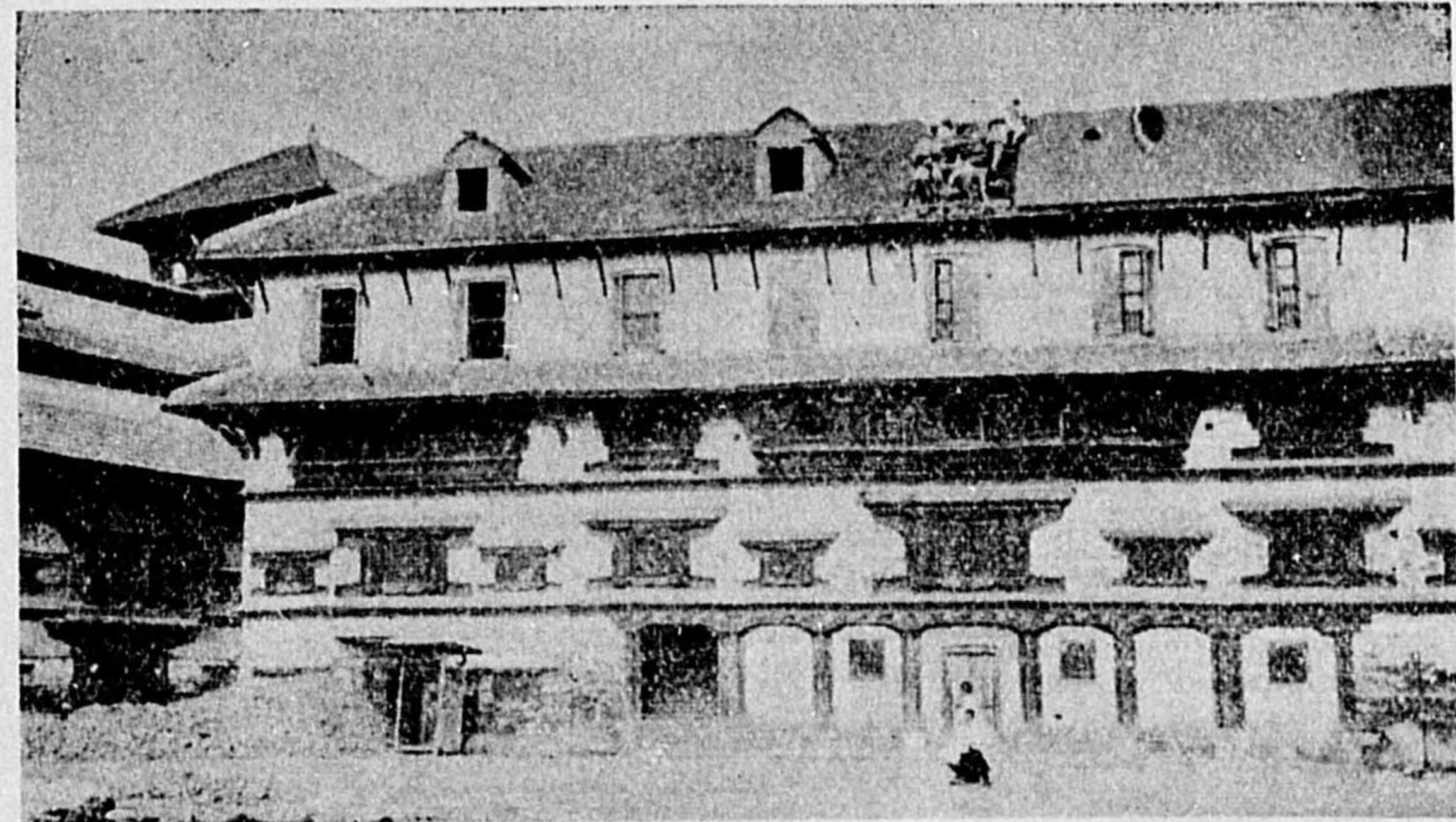


圖に全くでてゐないのは「巳」・「午」・「未」で、「辰」は尾の半分、「申」は前半身が寫つてゐる。全くでてゐないのは障物があったり、光線の都合が悪かったり、さう大して面白くなかつたりしたのでやめたのであるが、各動物は添えてある物差(六吋即ち約五寸)で判る通り、何れも高さも長さも約一尺二寸、年代は誰もはっきりせぬと見えて、どの書物をもてかいてないか又はほかしてある。これは最も賢明な方法で、古往今來その道の大家小家の常用手段である。大家さへ暈すのだから、我我のがピンボケでも文句はあるまい。

我國ではいつ頃から十二支が彫刻等にでてくるかといふと、私は研究してゐないからよく知らない。但し鎌倉時代の十二神將の頭髪の中から、子より亥迄が顔をだしてゐるの等は古いところであらう。ものの臺等にはつてある例は知らぬが、桃山以降は墓股の脚内彫刻に賞用された様で、四五の例を擧ぐれば、近いところから書くと勝鬘院多寶塔(大坂市夕陽丘) 本門寺五重塔(東京池上) 寛永寺五重塔(東京上野・元) 浅草寺五重塔(東京浅草) 天王寺五重塔(東京谷中) 日光東照宮五重塔(栃木縣日光町) 二荒山本殿(官幣中社日) 最勝院五重塔(青森縣弘前市) ——今この位しか記憶がない——等で、我國の塔婆は方三間が普通だから、柱間は12あるので初重だけは眼に近いし、十二支が用ひられる様になつてからは、丁度いい當嵌どころであつたらう。それが塔に多く用ひられた原因であらうと思はれる。何れにしても新しいものである。

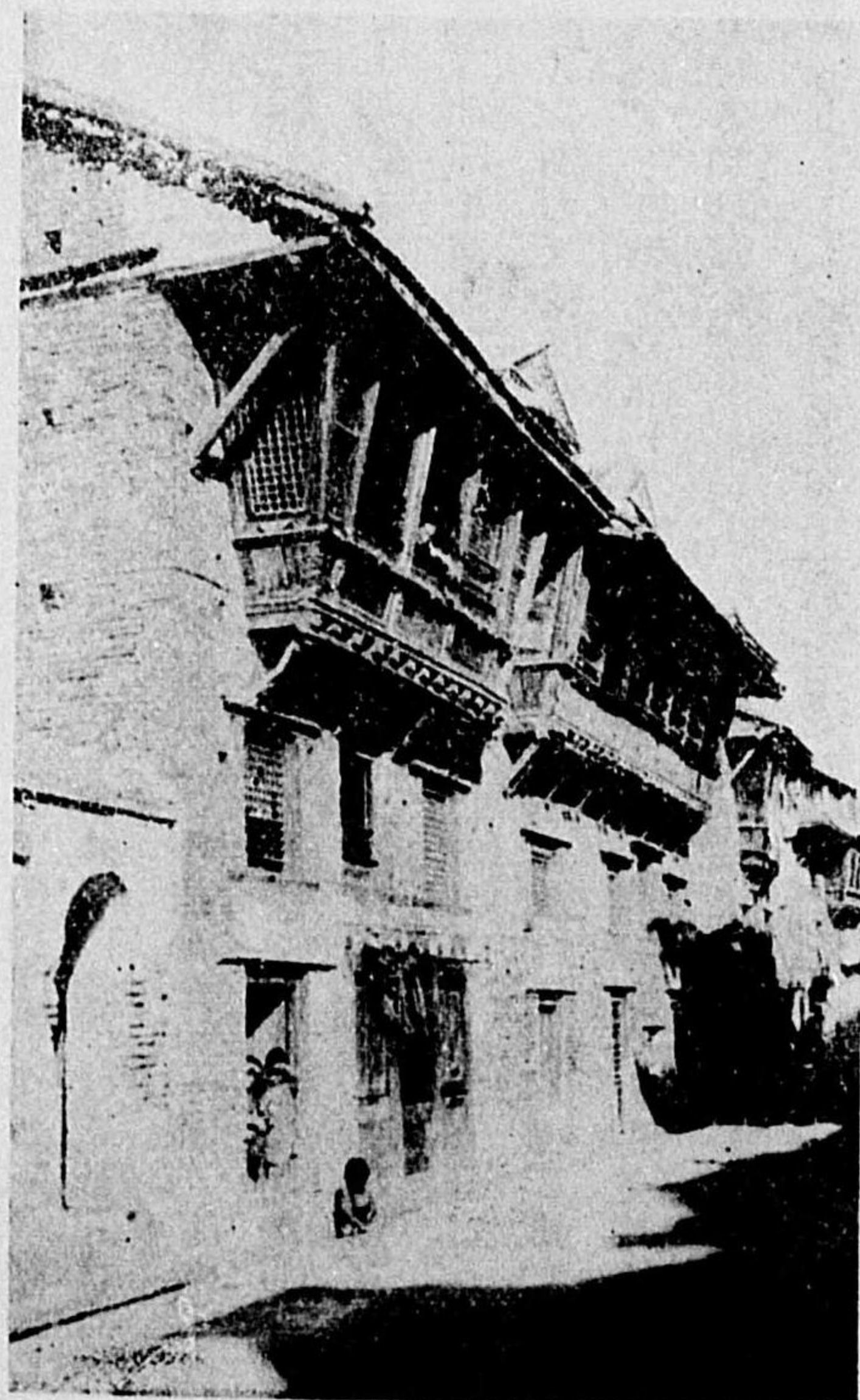
然るに朝鮮では新羅時代の王陵の周圍に護石として立つてゐたり、石塔基壇の裝飾に現はれたり、随分古い時代から用ひられ、今日に及んでゐる、支那のは知らないから何もかけぬが、西藏にもいふ迄も





此頁下。カトマンヅ市の邸宅 其一  
 此頁上。同 其二  
 次頁下。同 其家 其一  
 次頁上。同 其二  
 (昭和十一年三月十五日)  
 (昭和十一年三月十五日)  
 (昭和十一年三月十七日)  
 (昭和十一年三月十七日)

此頁下圖を正面から見たのが上圖。此前のところは今大廣場になつてゐるが、ここには恐らく多くの殿堂等が並び建つてゐたのであらう。夫等が例の震災で全部なくなつたと思はれる。此大邸宅も被害が相當にあつたらしく、先年はまだ壊れた煉瓦が一隅に積んであつた。上圖の左角に積んであるのが夫れである。屋根も修理中で大勢の(次頁へ)



(前頁より) 人夫が上つて働いてゐるのが見える。第97頁に掲げた孔雀の狭間飾の回窓は即此建物の、二階右から二つ目の。此は四階建て、屋上を入れれば五階の堂堂たる建築。

市内民家の一例をここにだしておいたが、この方は屋窓を入れて四階。三階目の格子窓は、代表的木造格子窓の一例で、下小さく上大きく、格子は小さいから内からだけ外が見えるが、外からみられる心配はない。恰も暴夜・埃及建築に於けるマシュレビエー (Mushreb-yeah, Mushreb-yeh) と同一要領で大變に面白い。其格子意匠をに凝すことも亦同様であるから、一層興味があるのである。

なくあるのだから、この様な十二支神發生並びに渡來の系統を調べてみると、随分面白いことと思はれる。これに就いてはNさんがとうの昔に着手された様だが、其後どうなつたか結果が判らない。切に奮勵努力好結果の發表を待つてゐる。

大塔は其後方にある。大きな伏鉢型で白色、金碧粲爛たる平頭及び相輪を頂き、一點の曇りなき碧空に泰然としてたち、雙眼を以て四方を睥睨せるところ、如何なる悪魔外道と雖も近づき難いのは勿論、例ひ魔軍が魔雲に乗つて大舉來攻しても忽ち消散するであらうと思はれて、非常に尊い感に打たれるのである(一八七〇)。其四方即ち東西南北及び東のに並んで一つ、合せて五つの小龕があり、龕前には美しき金屬製の幕を下げてあるが(一七六七・一七七八)、例の如く近づくことができず、従つて此幕の間から内部を拜する事もできず、佛像がまつてあることは書物にかいてあるので——書いてなくとも想像も類推もできるが——承知してゐるだけの事。此等小龕の間には一七九に見る如く、小さい屋根の下に、金屬製圓壘形のもが中心軸で回轉する如く取付けてある。その面に鑄出してある文字を、眼鏡で覗いてみたら、例の極り文句なる「オム・マニ・バ・ドメ・フム」らしかったが、あの字は遠齊九郎先生の領分で元來苦手のだから、間違つてゐるかも知れない。

大正九年(一九二〇年)十月發行の“The National Geographic Magazine,” Vol. XXXVIII, No. 4にJohn

Claude White といふ人が“Nepal: A Little Known Kingdom.”といふ題で、多くの圖を入れていろいろ書いてゐるが、其うちの挿繪によると、此大塔は伏鉢の部分が随分慘憺たる有様であるから、とても今日みる様な圓滿な状態ではない。といつてライト博士の書物にでてゐる(一六四に複製した)ものは、大塔は完全らしく見えるが、小塔の相輪が曲つてゐたり、傍の背の高い白い建物の上の方に草が生へてゐたり、手入が行届いてゐない様である。一六二のは古いだけに、奉獻小塔の數等非常に少ない。これはネバルに駐在官として此市に居住したホジソン(Brian Houghton Hodgson)の蒐集圖の一ださうだ、これはどこ迄正確な圖か知らぬが、伏鉢の形も少し異なるし、そこに石段もついてゐないし、平頭の顔面に疑問符の様な鼻もかいてないから、恐らく圖としては餘程古い方であらう。此伏鉢は煉瓦を以て積んであるさうで、直徑約60呎高約30呎あるといふ。

平頭は多くの書物にはトールン(Toran)とかいてあるが、いつかもかいた様に、後世日本の塔婆に於ける請花に當るところである。此平頭は金銅を以て覆はれ、四面に眉と目と鼻とを黒・白・紅・青等を以て描いてある。此顔は其上部四方に五角形の楯型をした寶冠を頂いてゐるが、此には五佛を恰も佛像光背の化佛の如くに取つけてある(一七七一・一七八〇)。此四方の顔といふよりは寧ろ目は、全知を象徴してゐるのださうであるが、それは事實かも知れぬ。とにかく謂はゆる八方睨で、どこから仰ぎみても、上

\* .....Brian Hodgson.....as British Resident in Nepal—a position to which he was appointed in 1833—is to the effect that Bhim Sen's power had undergone a serious check. (“NEPAL” Vol. I, p. 85)

から恐ろしい眼で睨みつけられてゐる様である。だから少しでも後暗い人は、よきことに拜む事はできない。だから餘程の悪人でない限り、此寺でもボドナート寺でも、其何れかへ參詣するならば、曲つた歪んだ心は忽ち元通り正直な水平な位置に戻るであらう。平頭の上には十三の相輪をあげ、最上部に天蓋を頂く、其上には佛塔から變化したと考へられる鐸の様なものもあげてある。

フマーガッソンの【印度及東洋建築史】第一卷第279頁に

“According to Brian H. Hodgson, there are several low, flat, tumuli like chaityas, with very moderate chattravālis or finials, which are older, and may be of any age; but, as will be seen from the previous woodcut (一六二を指す) that at Swayambhunāth is of an irregular clumsy form, and chiefly remarkable for the exaggerated form of its tee or finial. This is in fact, the most marked characteristic of the modern Tibetan chaitya, which in China is carried frequently to such an extent that the stupa becomes evanescent, and the *chattravali* or spire changes into a nine or thirteen storeyed tower. This chaitya stand on a narrow plinth projecting about 2 ft. from the face of the dome; and the five shrines of the Dyanī Buddhas, built partly into this plinth, were constructed by Rāja Pratāpa Malla in the 17th century.

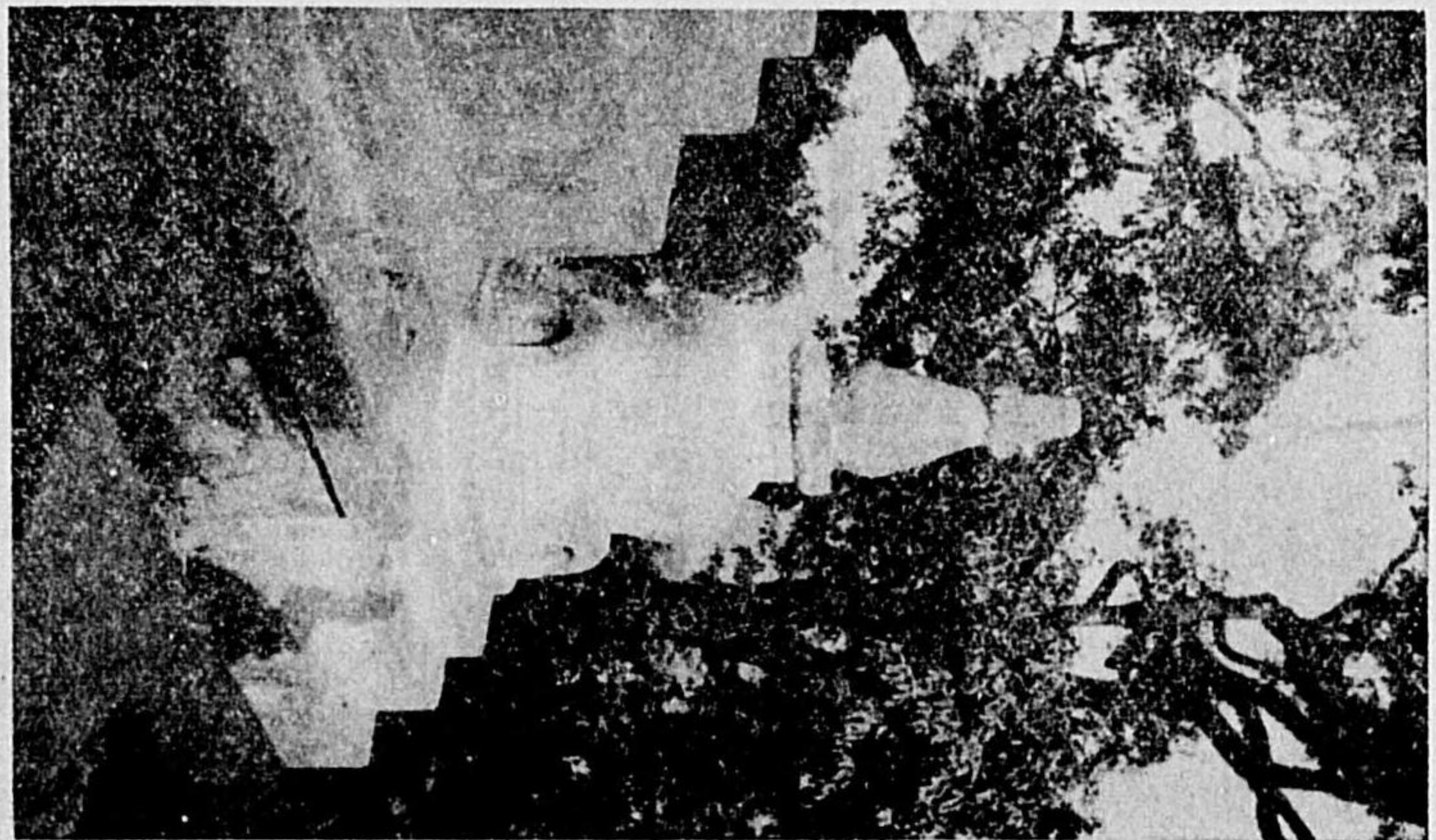
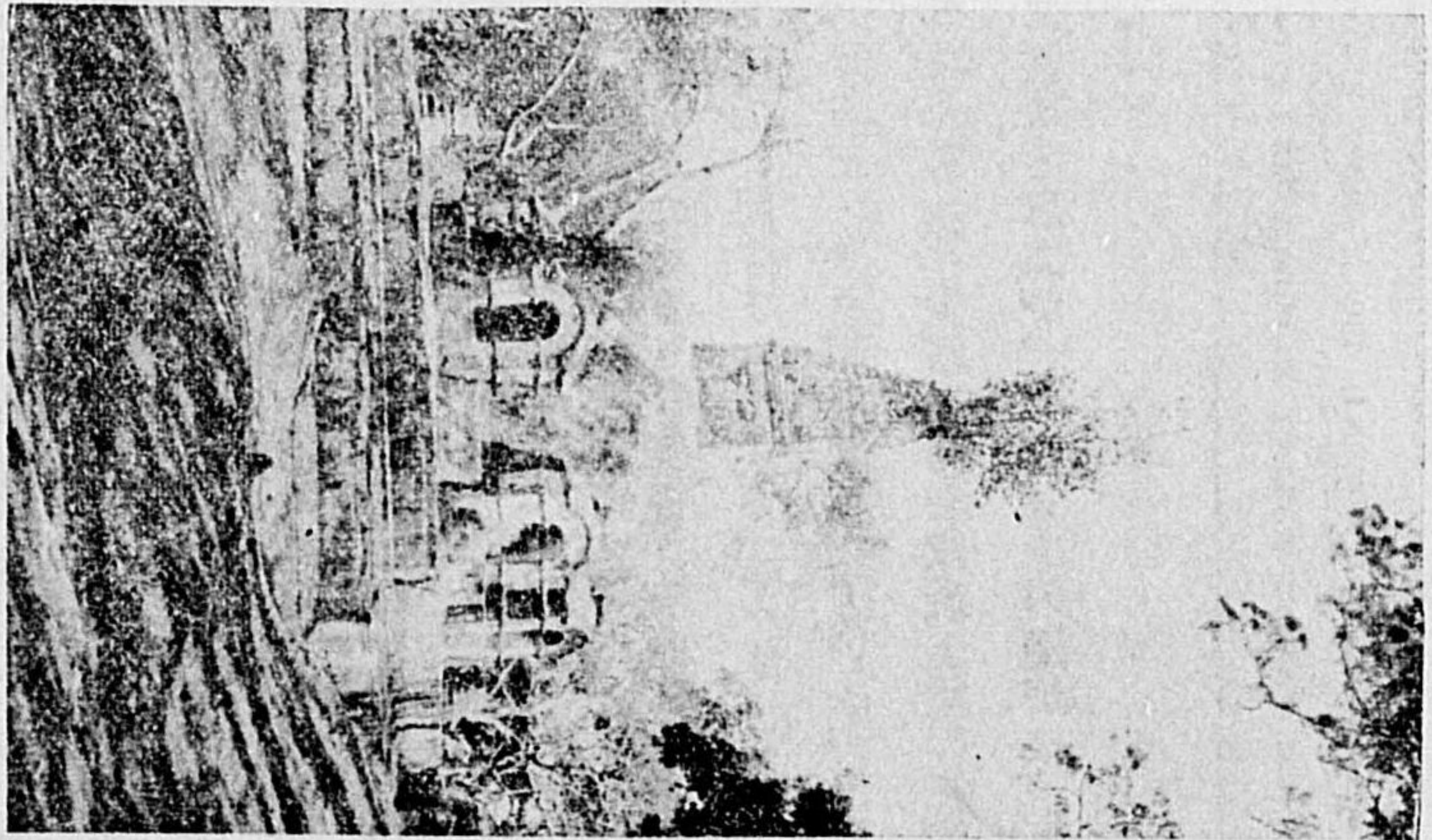
とあるが、この相輪は私に言はせれば、決してイルレギーラー・クラムシー・フォームではなく、頗る堂堂として形もよろしい。この様な大相輪が西藏に於ける塔婆の著しい特徴だといふのに異存はな

い。西藏のチョルテンは、塔身が數重の基壇の上のつてゐるが、肩幅廣く下小さく、即ち喇嘛塔の型式で、發達せる十一の相輪を頂げるものを、代表型式と見て差支ないのである。

併しながらそれから先の文句には少しばかり異議がある。即ち「支那では塔婆其物が殆んど消失してしひ、相輪が九重又は十三重の塔になつた」といふのであるが、これは、さういふ場合もある様に見えるのは、伏鉢も相輪も全部消失したので、決して相輪が層塔に變つたのではない。又普通は伏鉢及び相輪が何重かの構架の上にあげられたので、此場合もフマーガッソンのいふ様ではないのである。日本の層塔に於いては殊に然り。即ち基礎は露盤、塔身は覆鉢、平頭は請花、相輪は多くの場合九個で九輪となり、其上に水煙・龍車・寶珠等がついて、三重・五重・七重等の構架の頂上に置かれる様になつたのである。尙ほ此事に就いては後に記すことにする。

此大塔は第十七世紀にプラタパ・マラが建立したといふが、此王は一六四六(正保三年)に即位してゐるから、いづれそれから後の事であらう。大塔正面右段最上段の五鉢杵臺の前にSkt.の數字で1568とほりつけてある(一七)、これはA.D. 1646に當ると思ふが、どうもその邊がはつきりしない。更に他日調査してみるつもりである。

\* Of the age and history of this great building there is nothing really authentic, except records of restorations commencing from the sixteenth century, but tradition relates that the first Chaitya was built by Gorales, a raja of Nepal between two and three thousand years ago. (“PICTURESQUE NEPAL” p. 145).



右。スワヤンプナート寺正面登口小塔  
（昭和十一年三月十六日）  
左。同 背面登口廢塔  
（昭和十一年三月二十日）  
右圖は塔身の上の方が下よりも膨れて了つたので、これでは印度式とはいへない謂はゆる喇嘛塔の形で、即ち西藏式塔（Tibetan Stupa）の普通形である。探すたらばこの種のもっと大きいのが見出せるかも知れないが、今私が圖示し得るのは他にもあるがやめておく。此種の小塔は諸君にはつまらないかも知れないけれども、さういふわけでこれは興味があるのである。四佛の龕は大分下つてしまつてゐる。  
左圖は大きくもあるし、五佛をまつる龕のあること丘上の大塔の如く、塔身も佉鉢型で大分立派である。上の方に大きな樹が生えてゐて、廢塔の氣分がよく出てゐる。



上。スワヤンプ丘麓の村落  
（昭和十一年三月二十日）  
下。ポドナート村の農家  
（昭和十一年三月十八日）  
上圖中央の農家と下圖階下は、半分から下が例の代赭色に塗つてあり、他の部分は白色。下圖の農家はまことに粗末であるが、階下正面には濡椽があり、柱を建て扉がでてゐる。柱もいい加減な自然木だし、すべて上塗がなくて泥のままだから、大して美しくもないし非衛生的であるが、町の家がすべてこの式で並んでゐるのを、私は南印コンジーベラム市の郊外でみたことがある。夫れに比べれば随分ひどいが、割合に面白い造り方である。

In 1640 the authority of Lhasa seems to have been recognized in the matter of Swayambh-nath. The enormous central timber which rise from the interior of the stupa and supports the upper structure of gilt copper, was renewed by the Tibetans.”

とあるのでみると、心柱があつた様である。ここに「アッバ・ストラクチュアス」といふのは、多分相輪から上をいってゐるのであらう。さうすると其檼の下端は、少なくとも平頭の下端よりもう少し下方迄下つてゐたことと思はれる。恐らく今でもさうであらう。果してさうなら随分面白い事になるのである。此大塔の周囲には三階建位の家があるので、其家の最上階、できたら屋上へあげて貰つて、さういふものの有無も見たかつたし、寫眞もとりたかつたので、一所について來たR・H・の番人頭へ、バズールをして言はしめたところ、二言三言互に何か話した後、とても駄目だといって拒絶どころが峻拒され、取つく鳥がなくなり止むを得ず思ひ切つたが、どうもいくら軽くとも、ただでこんな相輪を支へてゐられるものではないと思つてゐたのが、漸くこの一句で判つた様な氣がした。

困つたのは正面の石に彫りつけてある<sup>1568</sup>で、これがたしかにA.D.1646だとすると、西藏人が檼を1640に取替へ、それから各所いろいろ大修理をして、全部終了した年ともみることができると。

大塔の西北方には、印度教殿堂式二重塔や石柱や奉獻小塔婆が所狭き迄に建並んでゐるが、ここも亦例により一步も近づけないため、遠方から指を銜へてみてゐるだけのことで、先づ此丘上に登ることを許可されたのを感謝すべきである。近づいて一つ一つそばでみる事ができたら、さぞ面白いだらうと思はれるが、さうはいかないから一八〇・一八一に其有様を示しておいた。

大塔の周囲に多くの家がある事は曩に述べたが、一八一左方に二階建が見えてゐる。これは何に用ひてゐるか判明しなかつたので、甚だ物足りない。正面の石階を登つたところの左手の家も同様だが、此家は殊に窓其他の彫刻が美事で、其窓の寫眞をとるため二度目の時は朝出かけたが、大體北に向いてゐるので既に日蔭になつてゐて、素人の手におへなかつたので遺憾ながら圖示ができぬから、其代りには少し物足りないが、西側階下ロジヤの一部を掲げておく(二八二)。此は全部木造で、其型式は古代埃及建築等によく見られる原始的石造擬拱の如く、彫刻をした平たい板を水平に並べた様なもので、其中央の楔石に當るところが、上方に茨を作つてゐる。これは花頭窓の一種と見られぬ事はないので、その様な點も面白いし、其左右の三角小間には、水草に龍か何か四足の動物が彫刻してゐるのも、注意をしておく必要がある。

八六、ポドナート寺大塔 (一六〇)  
カ1

スワヤムブナート寺の東方約三哩、カトマンヅ市を距る略同じ位にもう一つ大きな寺がある。ハシム  
ハチ堂(後出)後方の丘上より望むときは、際立つてはつきりと見える。ポドナート寺と呼ぶ(一六〇)。此

\* .....the latter at Pothnath.....; it is greatly revered by the Tibetans under the name of the Ma-gu-ta cho-  
ren (H. of I. & E. A, Vol. I, p. 278).

It is said Tibet possesses several large stupas as large as the Maguta stupa of Nepal. This latter is one of the celebrated places of Lamaist pilgrimage outside Tibet. It is called the *Ja-run Kasor ch'i-rtan*, and lies about two miles to the north-east of Khamandu, (略圖は一六一にあり)。Immense numbers of Tibetans, both Lamas and lay, visit the place every winter, and encamp in the surrounding field for making their worship and offerings and circumambulating the sacred spot. It is the chief place of Lamaist pilgrimage in Nepal, attracting far more votaries than the Svayambhinath stupa.....Its special virtue is reputed to be its power of granting all prayers for worldly wealth, children, and everything else asked for.

"This stupa enshrines the spirit of the Buddhas of the ten directions, and of the Buddhas of the three times (i.e., the present, past and future), and of all the Bothisats, and it holds the Dharmakaya.

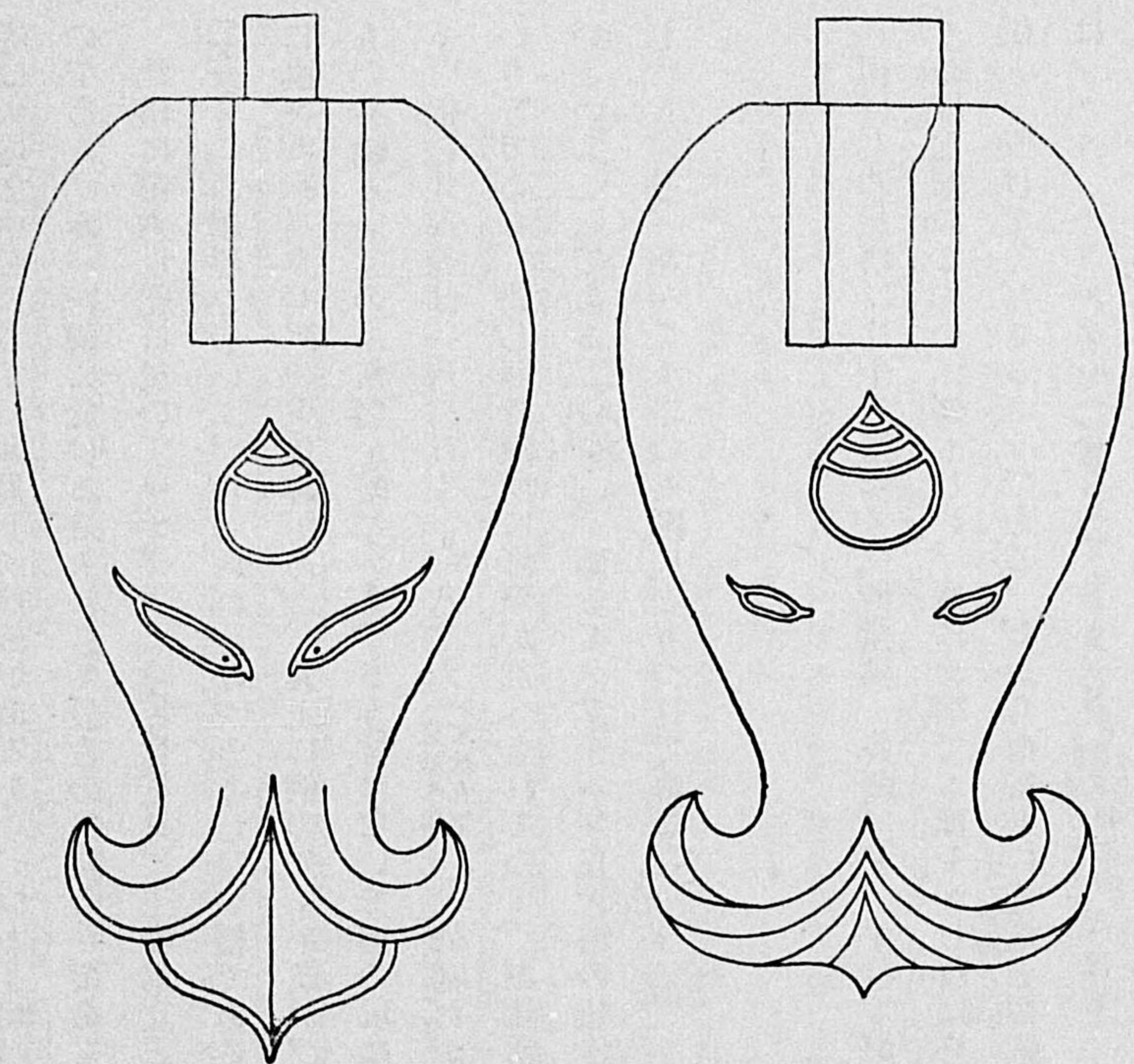
"This stupa is also worshipped by the Nepalese Buddhists, viz., the Newars—the semi-aborigines of the Nepal valley, and the Murmi, a cis-Himalayan branch of Tibetan stock. The name 'Maguta'—pronounced 'Makuta'—is doubtless a contraction for *Makuta bandhana*, the pre-Buddhist 'created chaitya', such as existed at Buddha's death at Kusinagar, in the country of the Mallas" ("LAMAISM" pp. 315, 317)

寺は大塔を中心にして、其周りに村落があるから、つまり圓形の村といふわけで、そこが大分に面白いのである。ネパル國に於ける最大にして最古の寺院の一である。

此塔は第六世紀に於いてマナデバ (Manadeva) 王の創立とも言ひ、又後世西藏のラマ僧なるカサ (Khasa) の創建ともいふ。併し何れかはっきりしない様である。三重で高さ約45呎の壇上にたち、其上に直徑90呎高さ45呎の大伏鉢があり、其上に例の如く平頭及び方錐體——相輪に當るものだが、四角なものもを輪といふのは何だか變だから、さう言はないで形の現はしてゐる通り方錐體としておく——がある。但し此部分は一八二五——一八二六(文政八年—文政九年)の修補だが、従前通りにしたので少しも變へてはないさうである。併し随時隨所に修理が加へられてゐて。創建當初の部分がどの位残つてゐるか判然しないといふことである(一八九六)。而してスワヤムブ丘大塔の様に、梵字を鑄出した圓壙形の回轉する様にしたものを、並べて大塔の外圍にとりつけてある(一九〇)。

\* \* \* \* \*

何にしる此塔には十方諸佛・三世諸佛・菩薩など、すべてがおまつりしてあるのださうだから、參詣せねばならぬこといふ迄もない。殊に何事でも願をかければ必ず御利益があるさうで、其内でも富と子供とを授けてくださるさうである。だから僧俗共に遙遙と西藏あたりから參詣するさうである。西藏人はマクタ・チョルテン (Maguta ch'orten マクタをマクと發音する) 又はビャルン・カソール・チョルテン (Jarun K'a



護國院樓門上層妻大瓶束二種 (明治四十三年七月三十日)

此時分に護國院即ち紀三井寺樓門は丁度修理のため解体中で、すべての彫刻物はおろしてあったので、大瓶束等も手にとってみる事ができた。其結締の上のところに眼が刻みつけてあったのを面白く思ったので、大體の寸法をとって寫生をしておいたのをだしてみたところが、縮尺も入れてないし、断面もかいてないので、左の方は結締のところ、大凡判るが右の方は今となっては忘れてゐるから判然しない。且つ左方の區別も記してないので、甚だ以て杜撰なものだが、我國にもこの様なものがあるといふ證據に略圖を掲げておくのである。

sor chorten (ソルチョテン)  
 ヤ (pya) 讀せ) と  
 きうである) とい  
 ふ (ポドナー)。  
 (の註参照)

\* \*  
 スワヤムブナー  
 ト大塔は、既に記  
 した通り平頭の四  
 方に眼があつて睨  
 みつけてゐるが、  
 これは別に本文を  
 讀まないでも、圖  
 版をみれば誰にで  
 も判る。ポドナー  
 トの方は書かなか  
 ったけれども、や

はり圖版に多くでてゐるから、どの様な眼だかこれも直に知れる筈である。以上二塔は代表的のものが、この様なのは印度にもないようだし、其他どこにあるかないか私には判らない。英國との戦争で失つたクマオン・ガルワル・シッキム等にもあるのかも知れぬ。西藏には此種のチョルテンがあるさうだから、或はやはり眼がついてゐるかも知れない。だからまた近所にはあるとしても、さう遠方にあるとは思はれないが、規模も用ひ場所も材料も時代も皆異なるけれども、此様なのが日本にもあるのだから、少しばかり面白いのである。

夫は和歌浦にある有名な紀三井寺の樓門に用ひてゐるのである。「紀三井寺」といふのは普通名稱で、本名は「護國院」だが、其樓門の兩妻に用ひてゐる大瓶束の胴體に、やはり眼があつて睨んでゐる。然るにものが小さいのと、破風の内側の薄暗いところであるのとから、下からは殆んど見えない。だからまあ眼があつてもなくても大した影響はないし、其立派さに於いても効果に於いても、此等の大塔の夫れに比ぶべくもないが、自分の國にもやはり高いところに睨んでゐる眼があることを知らないで、何人も人の國のものばかり珍らしがるには當らぬ證とするために、此機會に圖示したのである。但しほんの略圖なので眼の形等は墨を入れるとき、少しばかり手帳の寫生と異つて了つた事を諒とせられ度い。いづれ他日どこかにもっと丁寧な圖を掲げる折もあらう。

\* \* \* \* \*

ポドナート寺の大塔に就いては、【西藏旅行記】上巻第三九・四〇頁に

(カタマンド)の大塔村は所謂ボーダと云ふ名で迦葉佛陀の大塔の周圍を廻て居るのであります、……此ボーダの大塔を西藏語にヤンブー、チョエテン、チエンボと云ふ、ヤンブーはカタマンドウの總稱でチョエテン、チエンボと云ふのは大塔と云ふ西藏語であります、西藏では大なる塔のある處は直に(チョエテン、チエンボ)と云ふて居りますが此塔の本當の名は(チャールン、カーシヨル、チョエテン、チエンボ)と云ひますので是れを譯すると(成すことを許すと命じ了はれり)と云ふ意味で此様な名の起つたのは因縁のあることで此大塔の緣起に依りますと釋迦牟尼佛の前の佛で迦葉波佛がなくなつてから後に(チャチーマ)と云ふ老婆が四人の子と共に迦葉波佛の遺骨を納めたとありますが其大なる塔を建てる前に其時代の王に其老婆が大塔を建てることを願ひ出で其許可を受けました然るに其老婆と子供とが非常に盡力して大塔の臺を築いた時分に其時の大臣長者の人々は皆驚きまして云ひますには彼貧困の一小老婆が是なる大塔を建てることと我等は大山の如き者を築かねば釣合の取れぬことだから是れは是非とも中止すが好かるふと相談一決して王に願ふて其次第を述べますと王は答へて既に我は彼老婆に(成すことを許すと命じ了はれり)王者に二言なし云何ともすること能はずと是れに依つて(許成命了之大塔)といふ名になつたのであります……

とある。又“NEPAL” vol. I. p. 204 に立塔の傳説として、

A little girl named Kang-ma, of supernatural birth, having stolen a few flowers in Indra's heaven, was rather rigorously punished by being reborn on earth as the daughter of a swineherd in the Valley. She married, and being left a widow with four children, she maintained herself and them as a gose-girl. Having accumulated much wealth in this unlikely way, she was seized with the desire to build a noble temple in honour of the Buddha Amitabha. So she went to the king and asked him for as much ground as a hide could cover. The king replied "Ja-rung," which is equivalent to "Can do." So, using the conventional trick, she cut the hide into thin strips and of them made a leathern corl. Stretching this out in the form of a square, she claimed and, in spite of a local jealousy, was allowed, the land, whereon she began to build Bodd-

nath. It has several names. That which contains the germ of this story is "Ja-rung k'a-sor" the actual words of the king to her opponents, "I have said that she may." Her sons completed the stupa after her death and, rivalling the famous Sh-way Dagon in Rangoon, laid in the central chamber some relics of Kasyapa Buddha.

とある。この二つを比べてみると大體に同じである。西藏語を羅馬綴にしてあつても、其發音がよく判らないから、どうも素人には策の施しようがないが、Kang-ma をカンマとよむとすれば、チャチーマとは大分差があるけれども、これは多分同一人であらうし、Jarung kasor をチャー・ルン・カーシヨルとよむならば、Ja を dya と發音するのはどうかと思はれるが、態態斷つてあるところをみると、やはりビヤルンが正しからうと考へられる。もう一つは辭書の發音によると「チヨルテン」だが、阿口師は「チョエテン」として居られるので見ると、Chorten はチヨルテンでござんが、mChod-ten とかくと、他の例の如くチョエテンとなるのか、どうも其邊は語學の智識が皆無で判然しない。尙ほ又一方にはチャチーマが四人の子供と共に塔中に迦葉佛の遺骨を納めたとあるのに、他方には老婆の死後四子が大塔を完成し、迦葉の遺骨を奉安したとある。ただ一方の「許成命了」と、他方の "I have said that she may" だけはたしかに一致してゐる。大塔建立の由緒仍如件。

### 八七、チャバイルの佛塔

首都からポドナートへ行く途中にチャバイル (Chabahil) といふ村があり、人家も相當に密集してゐる



るが(一六〇)、そこに數基の塔婆がある。其一は大きく完全であり、他は大分壊れてはゐるが、もう少し古さうに見えるものである。一九一に示したのは後者の方で、相輪を全部缺いてゐるが、それが方形であつたことは容易に想像ができる。四方の龕内に四佛を存してゐるが、外側の飾漆喰は皆とれて了ひ、中みがすっかり露出してゐる。其代りに構造がよく判る。殊に會ま圖に現はれた龕は、上部が眞正の拱になつてゐるが、それが壊れたために積み直したのか、或は初めからさうであつたのか、兩方から水平に少しづつ餘計に石を積みだしてきて、遂に中央に於いて合し、三角形の龕を形成せしめてゐるものもある。廢塔でもこの様なのは大に風致を増してゐる。

一九二・一九三は遙に完全なもので、ポドナートより大分形は小さいが、形式は殆んど同じで、周圍に巡廻禮拜の道があり、一重の圓形壇上に建ち、相輪亦方錐形で十三重、四方に四佛を安置すべき小龕を設くる事、例により例の如し。その壇上塔身の基部に沿ひ、種種の形及び意匠の小碑石を並べてゐるのは、何のためにいつこへ並べたものか。時には面に多くの文字を刻したのもあるが、例によりその文字が一つも判らないので、見當のつけ様がない。

珍らしい事に此塔西方の龕前に二基の石燈がある。其型式は日本のに比べてみると、中臺がないだけで基礎から寶珠迄を備へてゐる。一九四・一九五でその配置及び塔婆との關係は判るであらうが、石燈

\* Chubahil は「チャバイル」とよむか、「チャバヒル」とよむか、又は他に何とか訓み方があるか、その邊相不變判然しない。假りに勝手にチャバイルとしておいたので、誤つてゐるかも知れない。

其物の型式は本文中の挿圖に大きくだしておいたから、夫れによつて詳細が見られよう。ただ少しく疑問なのは竿で、一方のは坐像一、他方のは坐像三を刻してあり、其形式も少し異なつてゐるので、當初からさうであつたか、或は竿だけ破損でもしたため、他より適當のものを持ち來つて應用したか、はつきりしない。此竿には何か文字を刻してあるが、それが何だか判らないため、どうも解決に大影響を來してゐるのである。火袋下部には蓮瓣があり、八角形で下狭く上廣く、我國の明治時代に於ける街燈の火屋の様で窓はなく笠も寶珠も總て一石から刻みだしてある。

\* \* \*  
一九六は附屬小塔婆の一部である。此等の小塔婆の相輪は何れも圓く、途中に少し膨みがあり、大してよろしい形ではないようである。

(昭和十二年九月二十二日稿了・同十七年二月二十二日増補)

# 印度佛塔巡禮記

(第十四回)



パシユバチの「リング」と「ヨーニ」

(昭和十一年三月十六日)

## 八八、印度教祠

ネパール國に於ける印度教の祠堂は非常に多く、家の數より祠の方が多いと言はれる位であるが、夫を大別すると三種になる。其一は尖塔即ちビマナ(上巻第3頁20頁)を有するもので、印度平野の建築、中印度からベンゴール州へかけての祠堂類似の様式を有するもの(後出)。其二は著しい特徴をもつ所の二重・三重・五重塔である。尤も此等の塔型建築は、屋根にも軒先にも反りなく、隅だけが急激に反轉して居り、最上重の露盤の上には相輪の代りに、多くは西洋のベル型の金鈴の様なものがおいてある。だから外形は格段な形をなしてゐる。

以上二種以外に、或は小祠等に多少型式を異にしたのがあるかも知れぬが、あつたところで大したことはあるまいと思ふ。尙ほさきに圖を掲げたカラモチャン堂の如き(第126頁上圖)、葱花屋根や多葉拱を有する印度サラセン式の直寫に、少しばかり此國で考案したと思はれる細部が入つたのがある。さういふのを其三としておいたので、實は此をぬかして二種としておいても差支はないが、暫くさうしておくのである。第112頁に宗教建築を三種としたのは、ビマナ附のを一種おとしたからである。

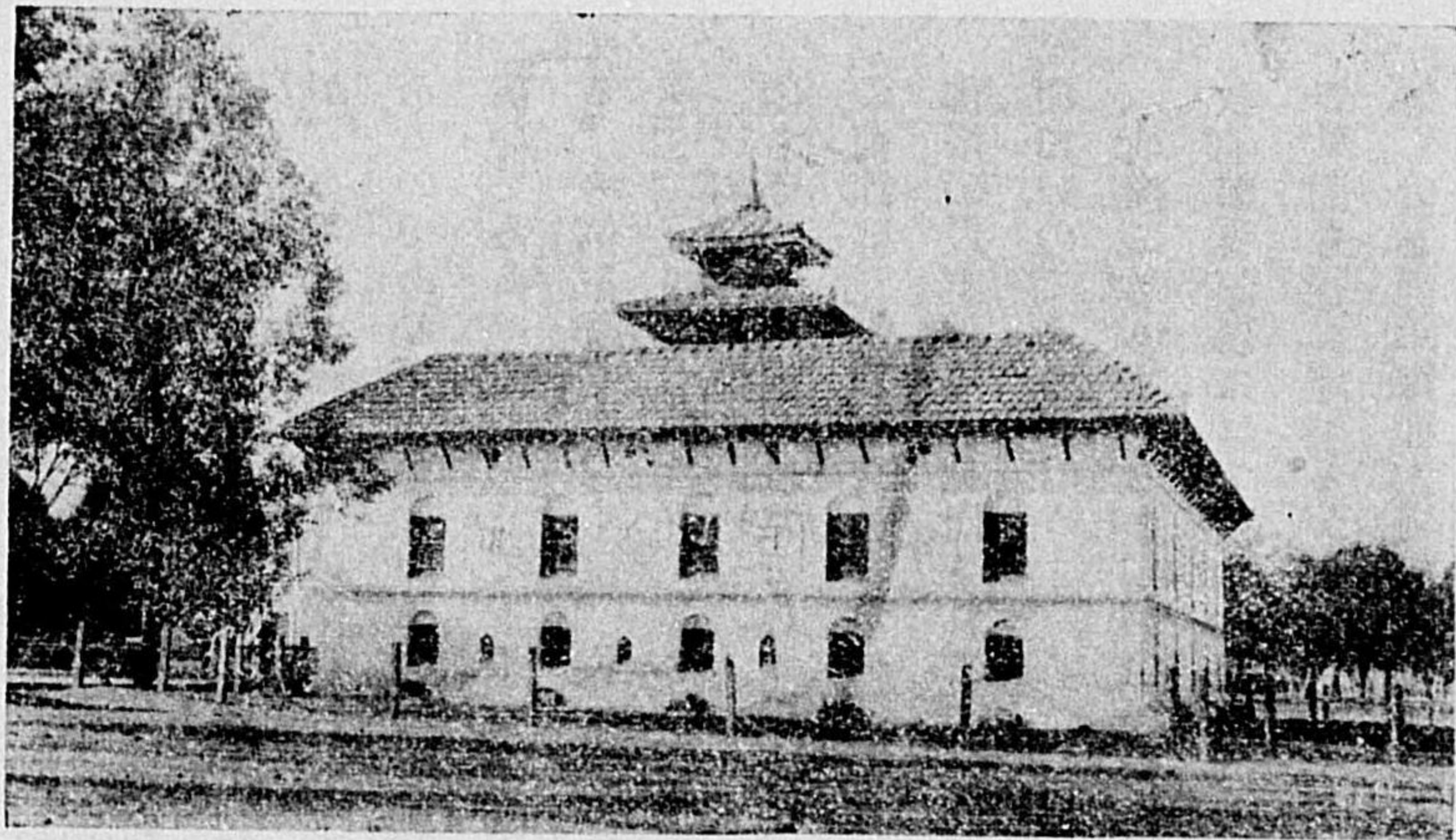
\* ..... and though it is an exaggeration, it is a characteristic one, when it is said that in Nepal there are more temples than houses, and more idols than men..... (H. of I. & E. A. Vol. I. p. 274).

爰には層塔式祠堂のみを取扱ふことにする。此等各重の塔は、出の多い軒先を支へるため、極鼻に近く極下に軒桁をおき、それを方杖で下から斜に突張つてゐる。方杖は最も簡單なのは四角な棒だが、唐草等を彫刻したのが稍や叮嚀な分で、込み入つたのになると佛像の様なものをはりつけてある。佛塔でないから佛像ではなくて、濕婆か何かかも知れぬが、いやに手が多くて千手觀音のできそくなりやうな風に見える。とにかく方杖を用ひて軒の垂下を防ぐのは洵にうまい方法で、屋根は大概瓦葺だが、我國近世の堂塔に於ける様な軒先の不體裁は見出せない。それはいいが時によるとこの方杖等へ、ヤブ・ユム式彫刻をしたりするので、見馴れないせいかどうも目障りになつていけない。

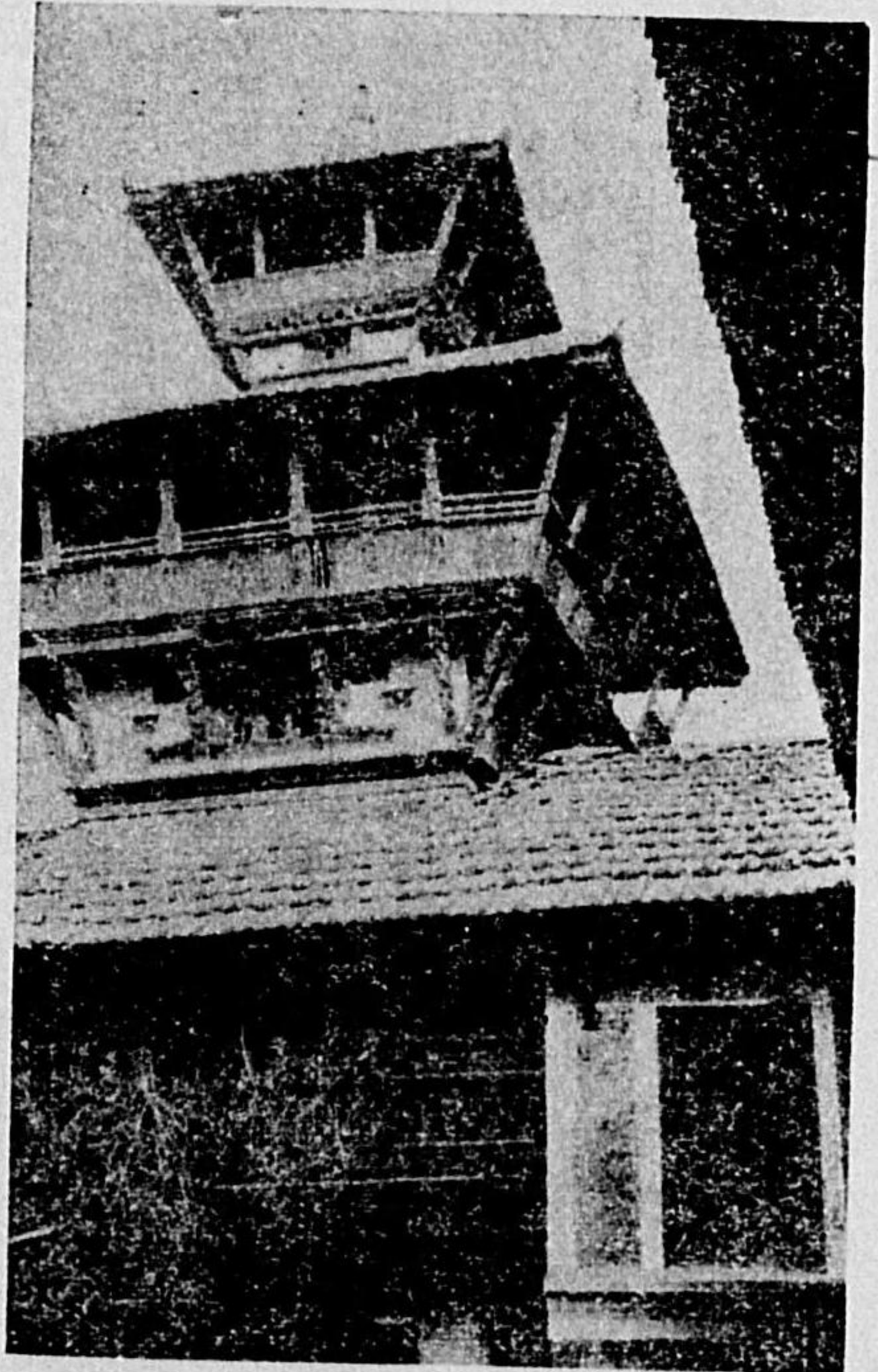
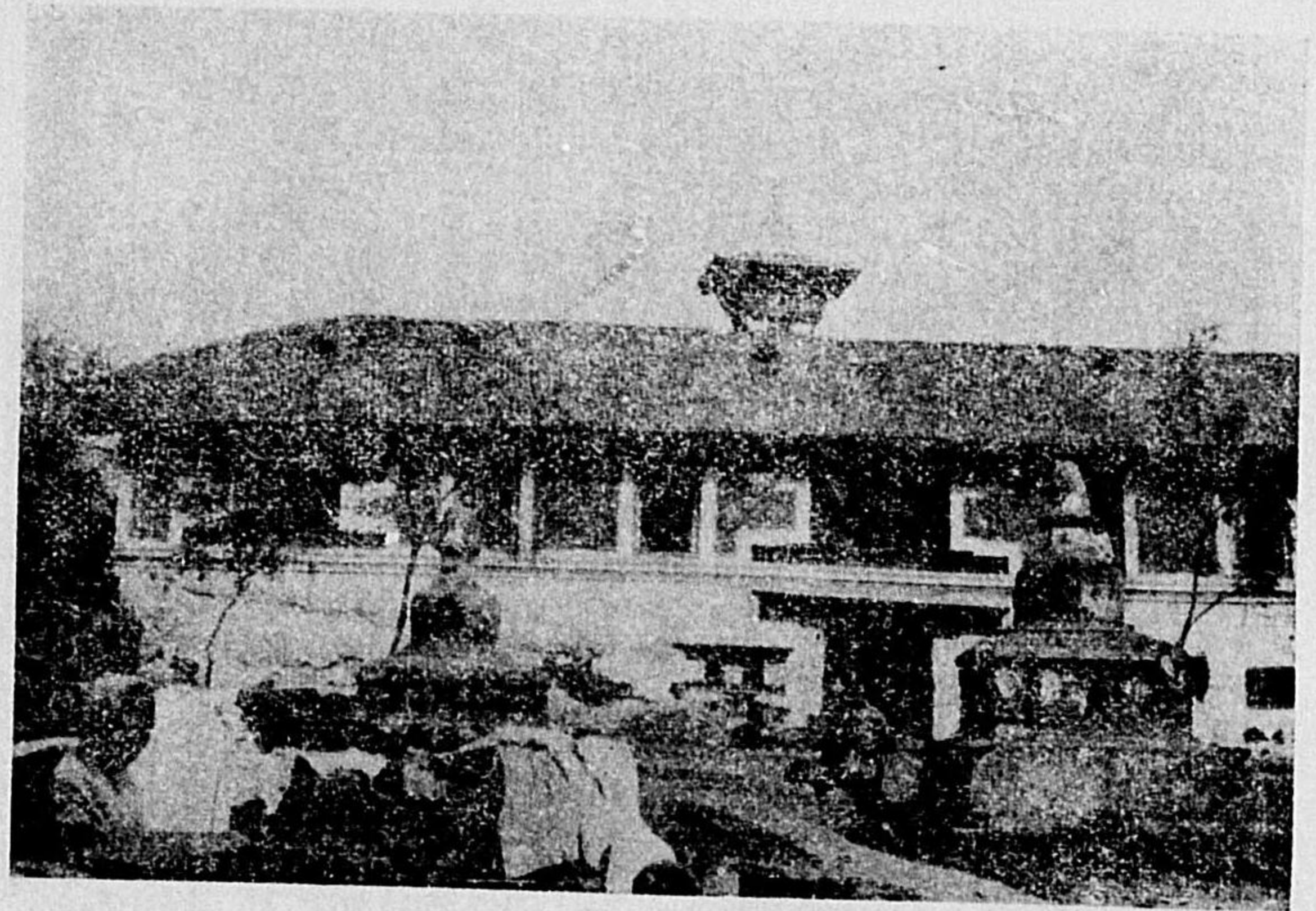
小塔は全部煉瓦からできてゐるが、大きいになると軸部は煉瓦で、其周圍に吹放に四本なり六本なりの木柱を建ててゐるから、初重だけみると方三間又は方五間の單列周柱堂である。さうして其五重位のものになつてくると、各重の落が大分大きいから、第一重は相當の大きさを持つてゐても、最上重は非常に小さくなつて了つてゐる。だから五重は勿論三重の塔にしても我國の層塔とは外見が大に異なつてゐる。支那にもあんな形はないようだし、先づ類例を求むれば、朝鮮の忠北報恩郡俗離面の法任寺捌

\* Yab-yum. It is a Tibetan word consisting of two particles, yab and yum. The word 'yab' in Tibetan means the honorable father and 'yum' means the honorable mother. The combined word therefore means the father in company of the mother, or in her embrace..... ("The Indian Buddhist Iconography," p. 199)

\*\* Peripteral Temple.



上。佛印兩教堂「マハンカル」側面  
 下。同 正面一部  
 (昭和十一年三月十七日)  
 (昭和十一年三月十七日)  
 佛印兩教堂の遺場ださうで、新しいからさう大したものではない。四角形の建物で、其中央に三重塔が建っている。上圖は右(北)側面からみたところで、塔が中央後方に建っている様に見えるが、さうではない事下圖の様である。... the temple of Mahankal..... is a shrine of no great architectural pretensions, lying on the western side of the 'Tundi Khel, immediately opposite the new hospital built by the present Maharaja' (NEPAL, p. 128) とある。シンヂ・ケルといふのは練兵場。青山練兵場のナンシヤモンシヤの様に一本の樹が生へてゐる。



上。カトマンヅ市街の一印度教祠 全景  
 下。同 一部  
 (昭和十一年三月十五日)  
 (昭和十一年三月十五日)  
 次頁にだしたマハンカルも其一だが、市内には此様な型式の建築が多い。前の廣場には小塔婆が數基建っているが、やはりこれ等は佛印兩教共通のものと思つた方がよいようである。祠堂は内部に大中庭があり、其後方の一部に三重塔(屋上からは二重)がたつてゐるが、型式稍や普通の場合と異り、二重及三重日は夫れ夫れ方五間及び方三間の單列周柱堂になつてゐる。ここも神様不在と見え中庭迄入つても誰も居ず、叱られもしなかつたので下圖の様な寫眞がとれた。

相殿(第235頁)によく似てゐる。何れにしても印度のとは全然異なつた様式のものである。

斯の如く外見は我國の塔婆とは異なるが、同じ様なもので上に行く程小さくなつてゐるところの、つまり相似形の家を積み重ねたところは、意味に於いては同じである。さうして最上部に相輪こそないが、多くは金鈴型のものがある。即ちスワヤムブナート寺・ボドナート寺大塔相輪の様に、鍍金がしてあるのであるが、かういふ所へ金屬製のを置き、それに鍍金をするのは、我國でも金銅露盤寶珠に於いてみるべく、どこでもやる事と考へられるが、この場合の金鈴の原型は、佛塔と見てよさうである。一例を擧ぐるならば、古倫母博物館出陳の小塔の如き、どうみても鈴としか見えないものである(本文第162頁及其解説)。西藏やネバルにもあるが、支那から我國に傳來した五鈴鈴とか九鈴鈴とかいふ種類のものも亦、夫れ等が佛器である以上は、其形もやはり其原型を佛塔と考へるのは至當であらう。而も此種の金鈴は、當初からあつたかどうか知らぬが、現在はスワヤムブナート・ボドナート及びチャバイルの佛塔の最上部にも見出されてゐるのである(一七九・一八〇・一八六・一八八)。そんな事が私にとっては大變に面白いのである。

斯様に考へてくると、例ひかかる種類の建築は印度教の夫れであるにせよ、最上部のフニアルに佛教の影響が現はれてゐると考へても、少しも不都合がないのみではなく、さう考へる方がいゝようである。而も後に述べるが、バシユバチナート堂の屋上の金鈴は、中央に大鈴を、その四隅に小鈴をおいた事、恰も佛陀伽耶大塔が四隅に附屬小塔を有するのと同じであるの等は、洵に興味の津津たるものがある。

此種の建築は印度に於いては、ベナレス市恒河河畔に於ける二重塔があるだけと思はれるから(印度記第2、33頁)、此國に旅行せぬ以上、一つしか見られぬ理屈である。故に私は此種の建築の多くの例を掲げ、一通りの解説を加へておこうと考へてゐる。尙ほカトマンヅ市のみに限らず、パターン及びバートガオンの兩市に於ける實例も圖示するであらう。

\*

\*

\*

\*

\*

曩にも記したが、私は僅に一週間だけ首都にゐただから、述べる迄もなく見聞は極めて狭い。其範圍で——だから知れたものだが——此種の建築の分類を試みれば

一、平面より

(イ) 正方形

(ロ) 長方形

(ハ) 不規則形

(ニ) 八角形

(ホ) 圓形

二、屋根の形より

此は平面の形に相當する五つの形の他に

(へ) 方形面取 切面 面 大面取故八角形となる。  
几帳面 隅が几帳面類似となる。

後ののはバータンのマルチョク (Mutchok) の例だが、震災に顛倒したと見えて、今亡い様である。こ  
こには四角・八角・圓の屋根を順序に持った三重塔があったのに、惜しい事をしてしまった。

三、立面より

(イ) 單層

(ロ) 二重

(ハ) 三重……

(ニ) 五重

震災前バータンの市のターバー・スクエアに、丁度二七の大鐘の向ひ側あたりに、「四重」類似の塔があつたので、書物の挿繪にでてゐる。これは「四重」とみえるが、或は初重屋根の下に恰も裳層の塔が、次に「五重」を置き「四重」を省いた。

となる。次に一般の性質としては

一、數重の基壇の上に建つ。

二、軸部煉瓦積

(イ)

初重軸部の四方に柱を立て、單列周柱堂の如くしたもの。

(ロ)

初重軸部の正面にのみ柱を立て、其部分を吹放にしたもの。

(ハ)

周圍に一本の柱もないもの(極小塔の場合は常にさうであるが、時に「バシユバチナート堂の様な大建築もある」)

(ニ)

二重以上軸部の周圍に勾欄を設けたもの。

三、軒一重疎樅。角樅にて反りも増もない様だが、鼻には繪様を彫刻してある。

四、隅のみ扇樅。

五、鼻隠板あり。

六、軒先の垂下防止が主なる目的で、裝飾を兼ねて、樅先端に近く下端に桁を置き、軸部から斜に出した方杖で此桁を支へてゐる。此方杖は精巧なる彫像等を以て覆ふ事がある。尙ほこの方杖の間に細かい格子を嵌めた場合もある。

七、塔が正方形・八角形・圓形の時——不規則形でもそれは大概初層だけだから、上の方は正方形か長方形である——は最上層の屋根中央に露盤を上げ、上に多くは一個又は賽の目の五のやう中央に大一個四隅に小一個づつの空塔婆型・鈴型・瓢箪型等の金銅裝飾を置く。長方形の時には、屋根は四注となるから、鈴又は其他の飾は數個(多くは奇數)になる。

八、屋根は瓦又は金銅板を以て葺く。金銅の時はある間隔に細い瓦棒をおく事、我國江戸時代銅板葺の屋根の様である。

九、屋根にも軒にも反りなし、但し四隅は急劇に著しく上方に反轉してゐる。

十、最上部露盤から幅狭き金銅の裝飾平紐を一條又は數條下げる時がある。

といふ工合である。其配置は

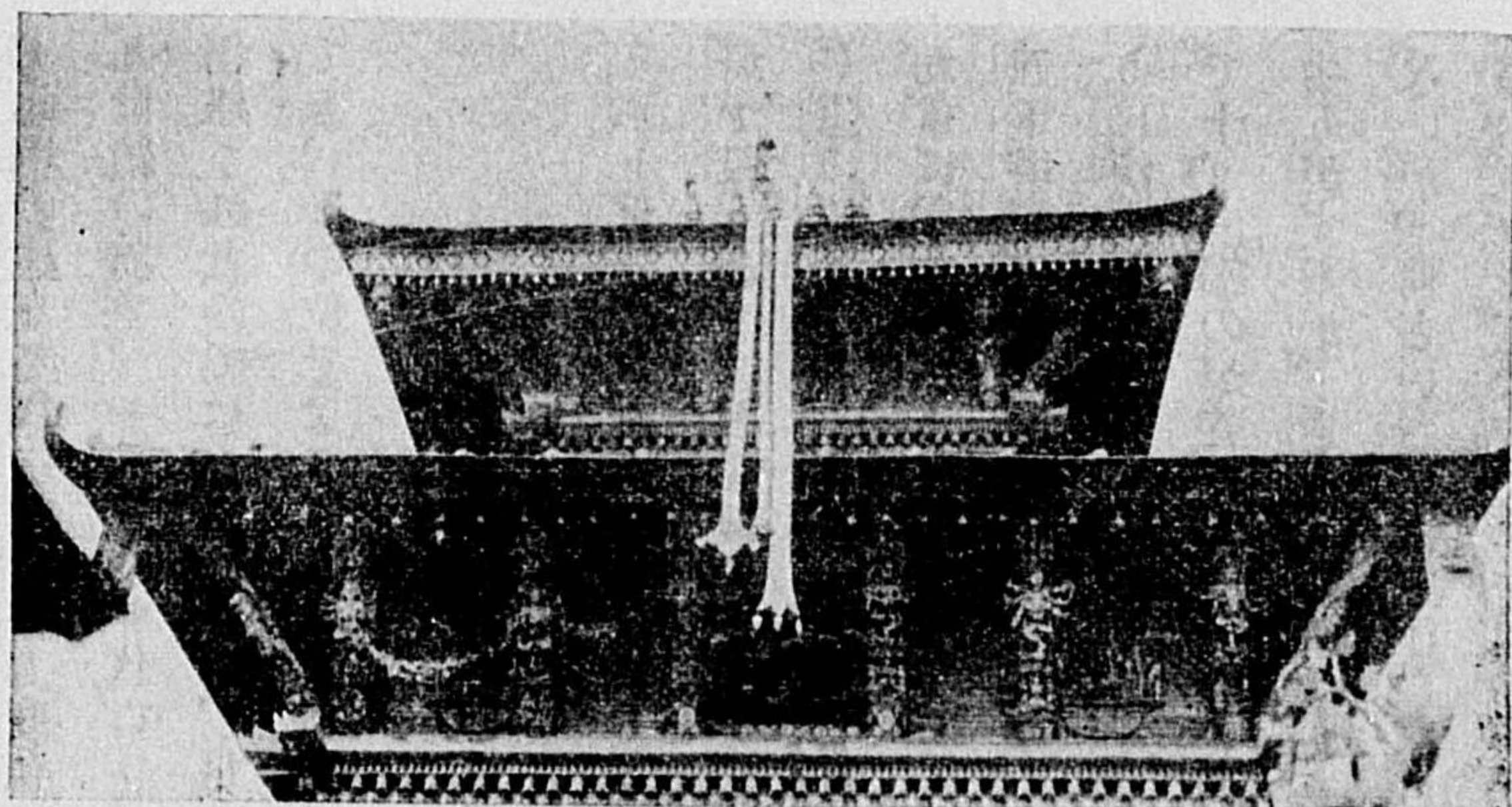
(イ) 單獨——唯一基の場合をいふ。

(ハ)(ロ) 「賽の目の五」式——中央に親、四隅に子のある場合をいふ。  
 他の建物の一部分にあるもの。即ち例へば本文第150・151頁等の圖に現はれてゐる様なものを指す。

### 八九、ヒムセンタン (Bhimsenthan)

カトマンヅ市にある。此建物に就いては何等の記事なく、記載の材料もない。其名もヒムシントンで綴りはエス・アイ・エヌと確かに書いたが、書物にはエス・イー・エヌとなつてゐた。これでもシント訓めるから、これでもどちらでもいいのであらう。それで誤りかも知れぬが、ここでは字の通りセンとしておいた。一九七でみる如く長方形の平面を有する「ゴヒラ」塔で、従つて最上重は四注となり、大棟が割合に長いためか、上に金鈴五個を並べてのせてある。軒先から美しい切れ或は小鈴を下げ、二重目の隅木から小旗、三重目の夫れからは寶瓶、露盤から正面の方に三條の金銅平紐を、何れも裝飾の爲に下げた。

第二重方杖の正面に彫刻してあるのは六臂の神である。ネバル國の切手についてゐるバシニバチ即シバの像は四臂だから、此方が臂が二本多いので、多分何か他の神であらうが、どうも其方は——「極めて淺學で」といふのは、相當に知ってはゐるが謙讓の美德を發揮した如く見せかける普通の手段である。私のはそこへ行くとはつきりしたもので——全く知らないのだから、つまり何さまだか判らない。



上。ヒムセンタン 第二・三重の正面 (昭和十一年三月二十日)  
 下。同 初重 (昭和十一年三月二十日)

クマリー・デパールの前を西に行くと、首都の名のもとになったと傳ふる三階建の古い建築、即第61頁に圖示したあの大きな、豊後の藪の大堂(富貴寺)の様に、一本の大木で建築したといふ傳説のある、あの前に突き當る。そこを左へ行くと、暫くで三重ゴヒラのヒムセンタンの前にでる。と記憶してゐるが或は間違つてゐるかも知れない。道幅が狭いので、正面からだと餘程上を向かないと全景が見えない。初重軒先の裝飾に下げたきれの東南隅が、とれて垂んでゐて少しばかり體裁はよくないが、大きな割合に行届いた大建築である。第二重の隅から幡、第三重からは寶瓶の様なもの下がつてゐるが、これは此建物に限らずよくある。どういふわけかよく判らない。

此塔の建立年代に就いても亦私は記すことができないが、ビム・セン(Bhim Sen)といふ人は、第九世紀の前半、一八三〇年代にホッジソンと共に活躍したことは確かだから、これも大凡そんな時分に創建されたのではあるまいか、果して然らばまあできてからざっと百年といふところ。形式手法からみても、その位でよささうに考へられるが、間違つてゐるかも知れない。

#### 九〇、マハツ・デバル (Mahadu Deval)

カトマンヅ市に多数現存する三重塔のなかで、私はこれが最もよろしいと思つてゐる。なせなら基壇が十段もあり、群を抜いて高いので立派だからである。第63頁に其一部が見えてゐて、第62頁の塔の直ぐ隣に位置してゐる。一九八は即ち夫れで、最下に大きな壇があり、夫れから上は割合に同じ差の壇が九重に、全體が方錐體をなす如く構築され、實に堂堂たるもので、全く羨しい建築物である。法隆寺の五重塔が二重の壇上に建つてゐるのを、大分嬉しく思つて、今度四天王寺のも二重の壇上に建てるつもりに決定したが、ここへ来てみたら三重塔が三つ南北に並んでゐて、基壇の一番少ないので三、多いので十、南端のが五で其中間といふ様な次第で、どうも二重なんかこんなのに比べると、何といつても見劣りがするが、どうもこればかりは勝手に増す事もできず、基壇のみが主眼ではないから、眞似はできないが、何といつても立派な事は争へない。これで法住寺捌相殿の相輪の様な、例へビッグ・テイルと悪口される様な短いのもいいからついでにしてくれたら、滞在中毎日見に行つたらうし、其後も毎夜夢に

みたかも知れない。相輪は駄目としても、現在金鈴又其類似品はなく、特殊の裝飾が其位置にある。それは伏鉢型のもので、謂はゆるスツバ又はチャイチヤ、此國でいふチョルテンがあると見られるので、退去迄に四度程行つてみた位である。視力が極めて弱く、而も亂視ときてゐるので、何を見誤つたか知れぬが、どうも愉快でたまらなかつた。

東側に石段があつて、そこから樂に登れる。神様は不在なのか、ここは登つても叱られなかつたが、扉のすき間から内部を覗いても、何があるのかよく判らずに了つた。これで白い印度式建物や電柱がなかつたら、どの位いいか判らない。

此塔の名をマハツ・デバルといふのは、例により現場できいてかきつけておいたのあるが、これも亦例により誤りかも知れない。私のもつてゐるだけの書物をもても、寫眞がでてゐないので、名は判らない。創建も同様にいつか知らないが、第十七世紀以降位のところかも知れない。

#### 九一、シバルー・デバル (Sivalay Deval)

此の廣場に建てる三基の三重塔のうち、先づこれがいれば平凡である、といふのは基壇が低いからである。一九九に於いてみる様に、初重は方三間で、あとは普通の型式だし、さうして恰好も中中いいから、若し此塔が唯一基あつたら、基壇が低いから平凡だ等といふ言葉は、勿體なくて出ない筈である。餘り他の二基と似てゐる様に見受られたので、多分やはり略ぼ同じ頃の建立と推定をした。尙名稱は、

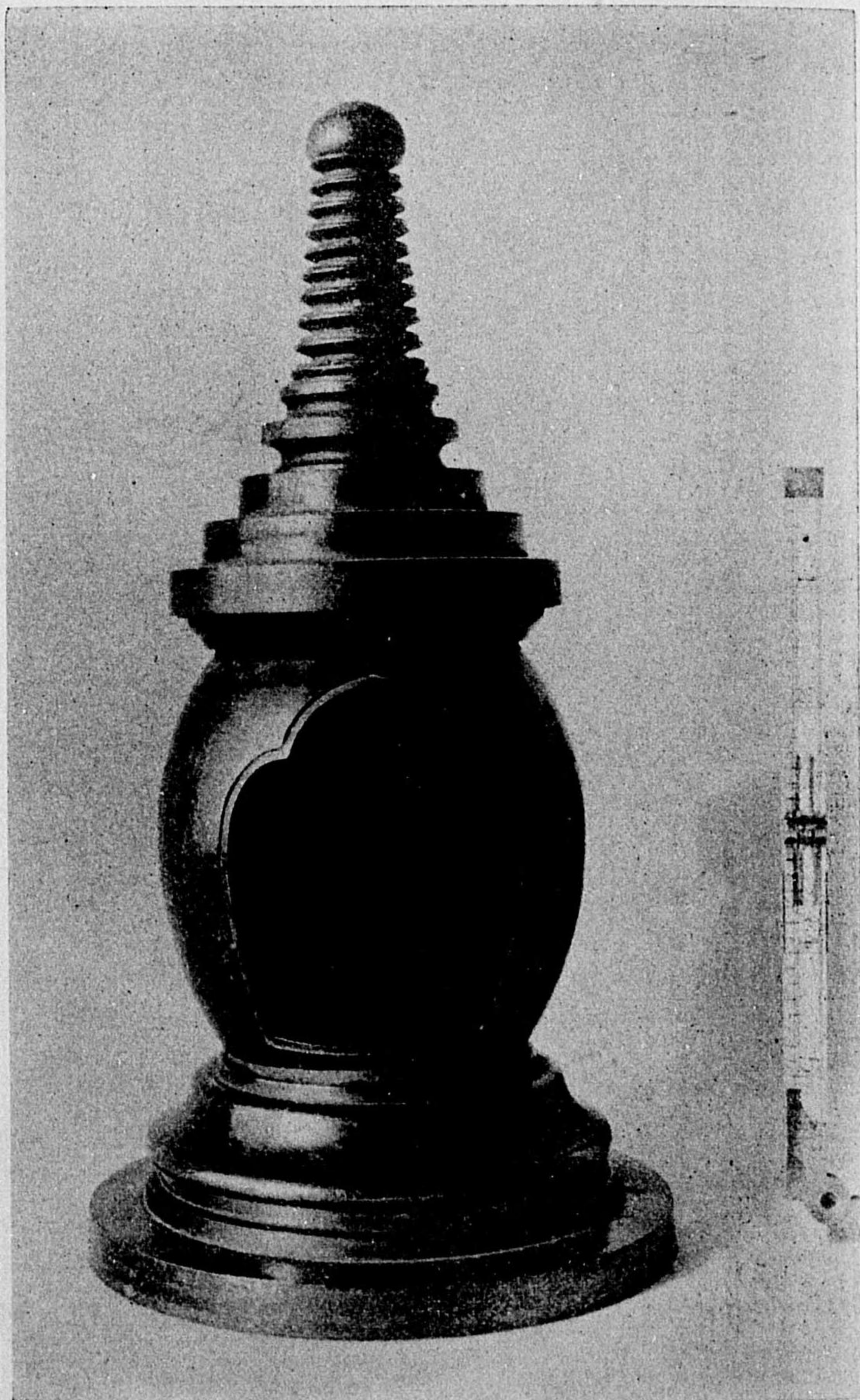


例により遺憾ながら確實性に乏しいが、他の例から推すと違ってもさう大した事はない様である。

### 九二、八角三重塔

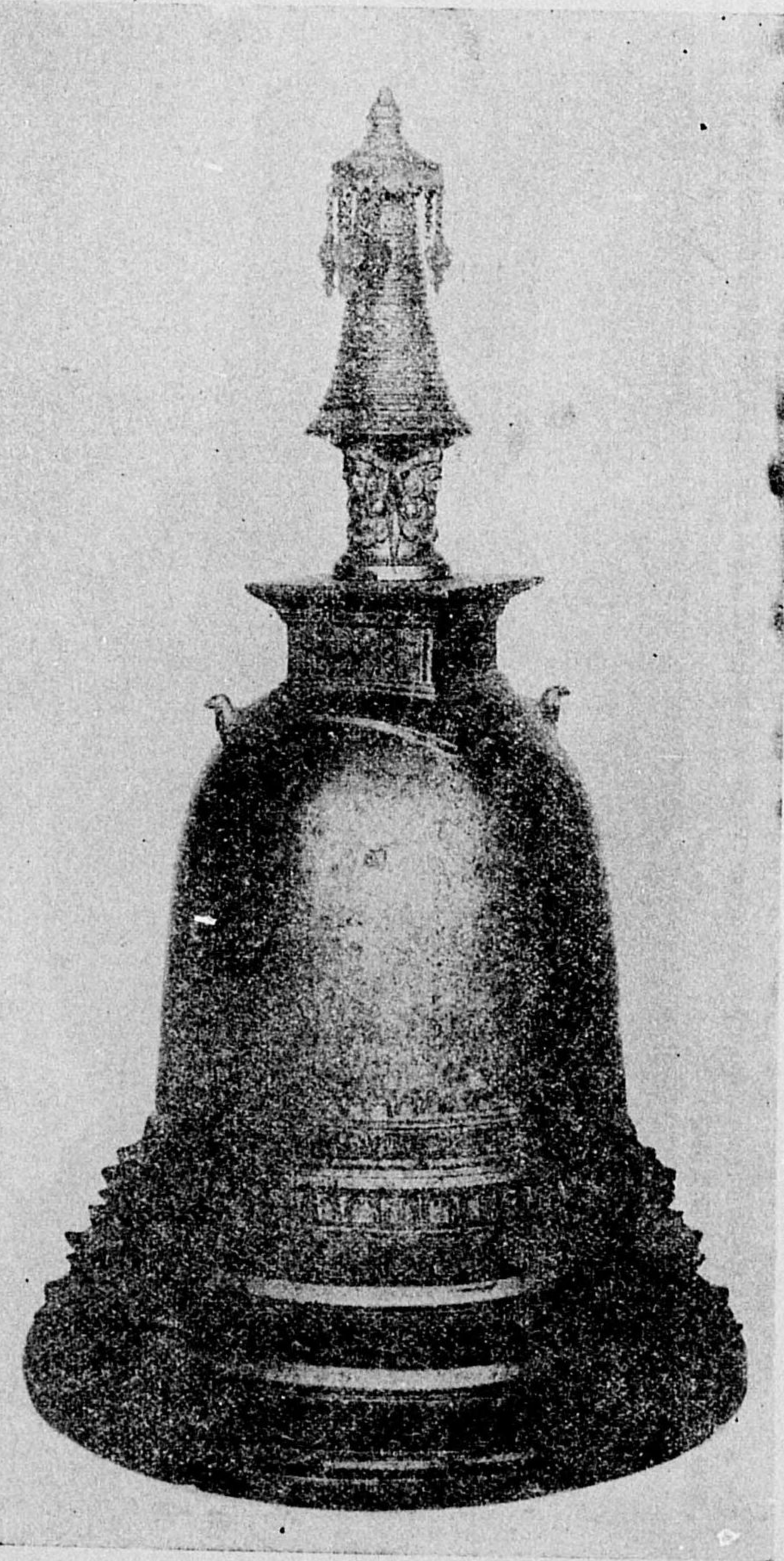
四重八角の基壇上に建つ八角三重塔で、珍しい方だらうと思ふ。幸に震災に倒潰もせず建つてゐたから、二〇〇・二〇一に其姿を示すことができたのである。これは第166頁の挿圖の左端に見えてゐるもので、元來あの廣場にはあの圖にみる如く多くの塔がたち、殊に圖の中央にある二重塔は、更に四隅に小二重塔を有する所の子持塔で、全體としてみるときは、いつもかく「賽の目の五」式、「佛陀伽耶大塔」式、「五智如來」式、「中心柱と四天柱」式で、子塔は小さいからいふ迄もないが、親塔は相當の大きさであり、初重の四方に列柱なく、珍らしく單列周柱堂になつてゐないのに、其後方の三重塔——其もう一つ後ろのは餘り少ししか寫つてゐないので明かでない——と、この八角三重塔とは周柱式だから面白い。

いくら書物を多く買ひ込んで、ただ積んでおくばかりでも、さすがに買った日には一通り繪だけはみる。殊に随分前から大分氣になつてゐたので、この圖だけは直に氣がつき、この親子塔と八角塔とは決して忘れてゐなかつたのみならず、こんなのは一例で、まだ他にもっと珍しいのがいくらもあるらう、といふ風に大に期待してゐたのに、例の大震災で皆顛倒して了つたと見え、所狭き迄に塔が建つてゐた



西藏製金銅塔型小厨子  
各共部其平面が全部圓形の金銅塔型の小厨子だが、謂はゆるチホルテン (Chorten (mChod-rten)) と云ふべく、一六一左下の小圖によく似てゐる。但しこれは元は小さい佛像か何かを入れた厨子とみるべきであらう。底面に錫磨杵の線刻がある。  
(物指は曲尺の約五寸(六吋)・家藏)

古倫母博物館出陳金銅小塔婆



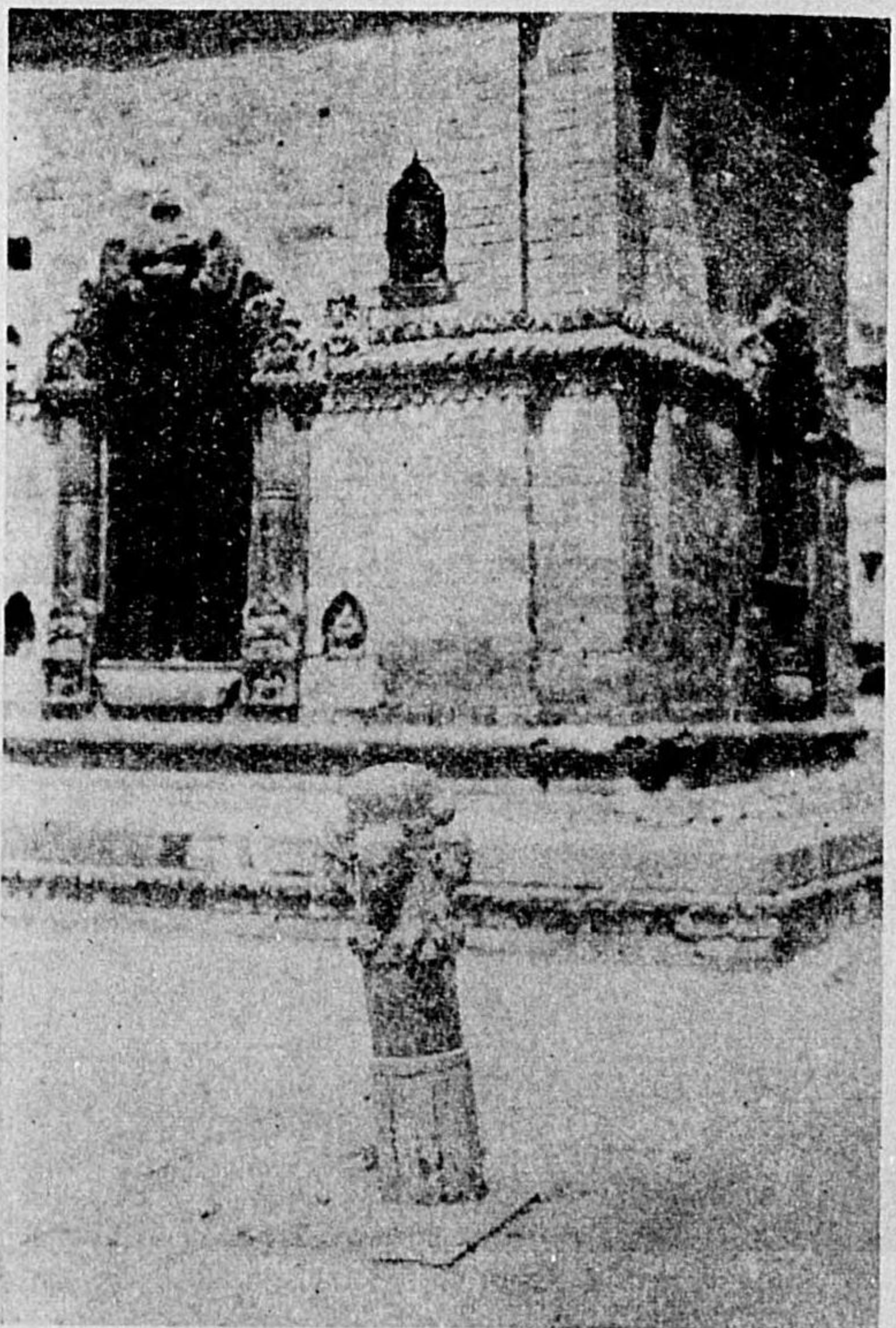
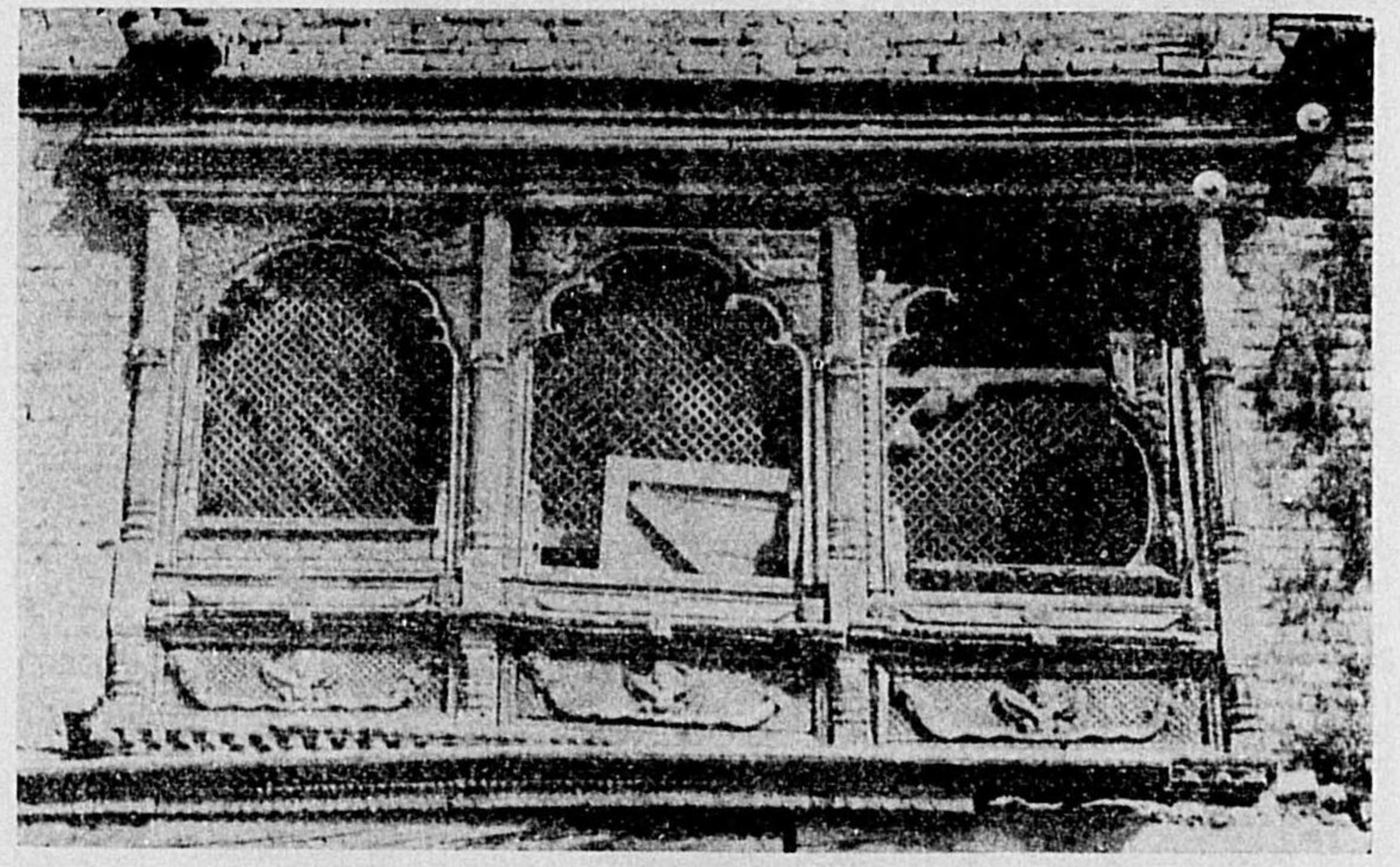
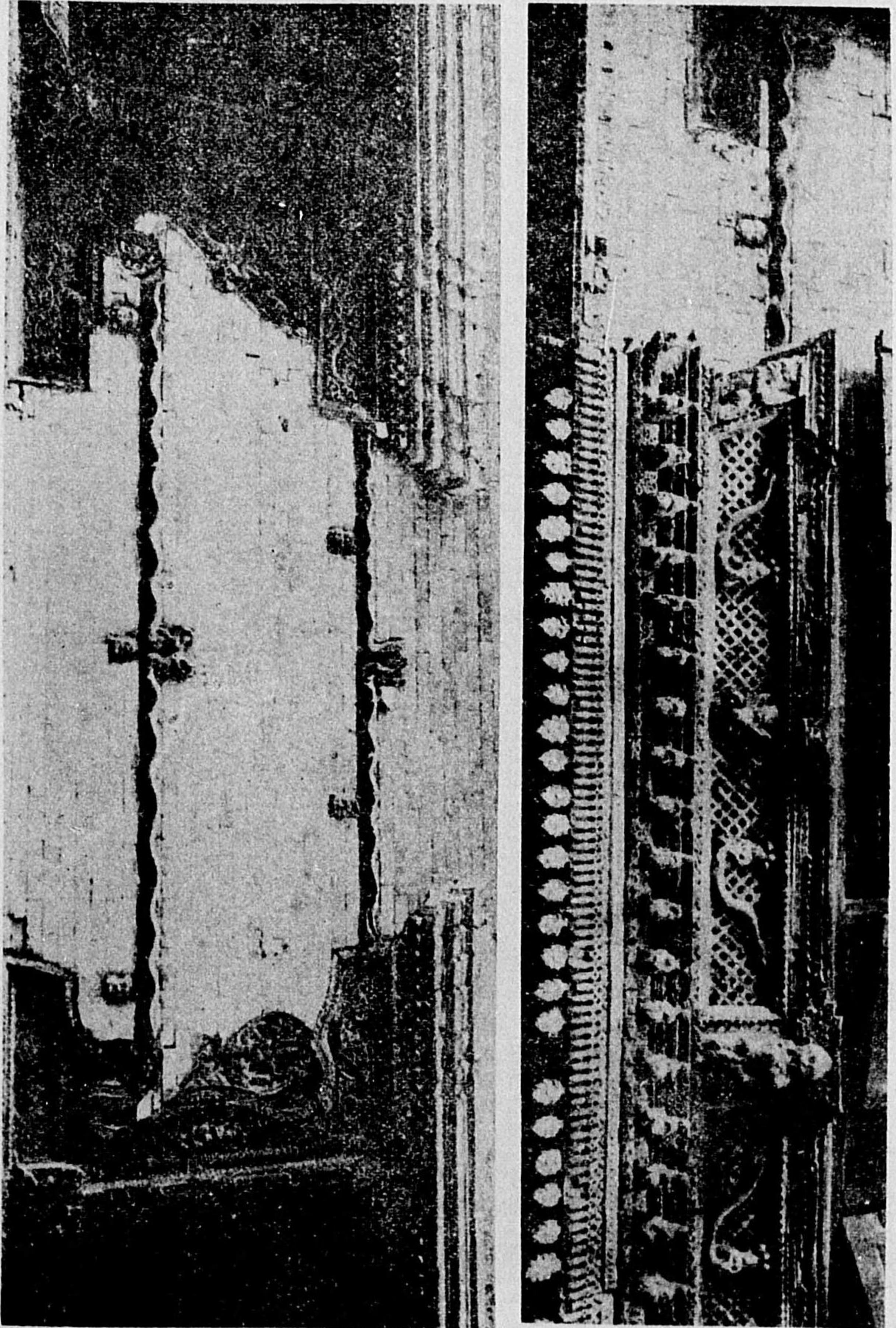
(家藏寫真複寫)

塔には三重の反花の臺座があるが、最上のは蓮座があるから、日本の密教で用ふる大壇側面の裝飾と同じである。塔身基部には唐草があり、其上に亦單瓣の蓮座がある。塔婆の基部を反花で飾ったのは、既にアナラジャプラのジェタワナラマ（實はアバヤギリヤ無畏山塔）でみた所である（上卷八・九及第22頁參照）我國では瓊祇塔及び石造寶塔・寶篋印塔等に於いて見る所である。平頭は方形だが、塔身の上部の四隅を鳥首を以て飾った意味は未考。相輪の上部を（瓊瑤を下けた）天蓋で飾ったのは、スワヤムブナート大塔及びボドナート大塔を初め、ネバル國の塔婆に於いて常に見ると、我國にも室生寺五重塔にあることは有名過ぎる位有名である。此塔婆は全體として鈴と同形であるのからみると、鈴は塔婆に象つたものといへよう。これで相輪が金剛杵に發達すれば夫れでいいのである。そこでネバルの印度教祠なる二・三・五重塔婆型の最上重上の裝飾たる金鈴は、佛塔の變形であると考えられることができるであらう。其塔身が縮少して（即ち原に歸り）半球形になり、相輪が大いに發達すると、我國層塔の最上部になるのである。少くともあとからさう考へる可能性はある。

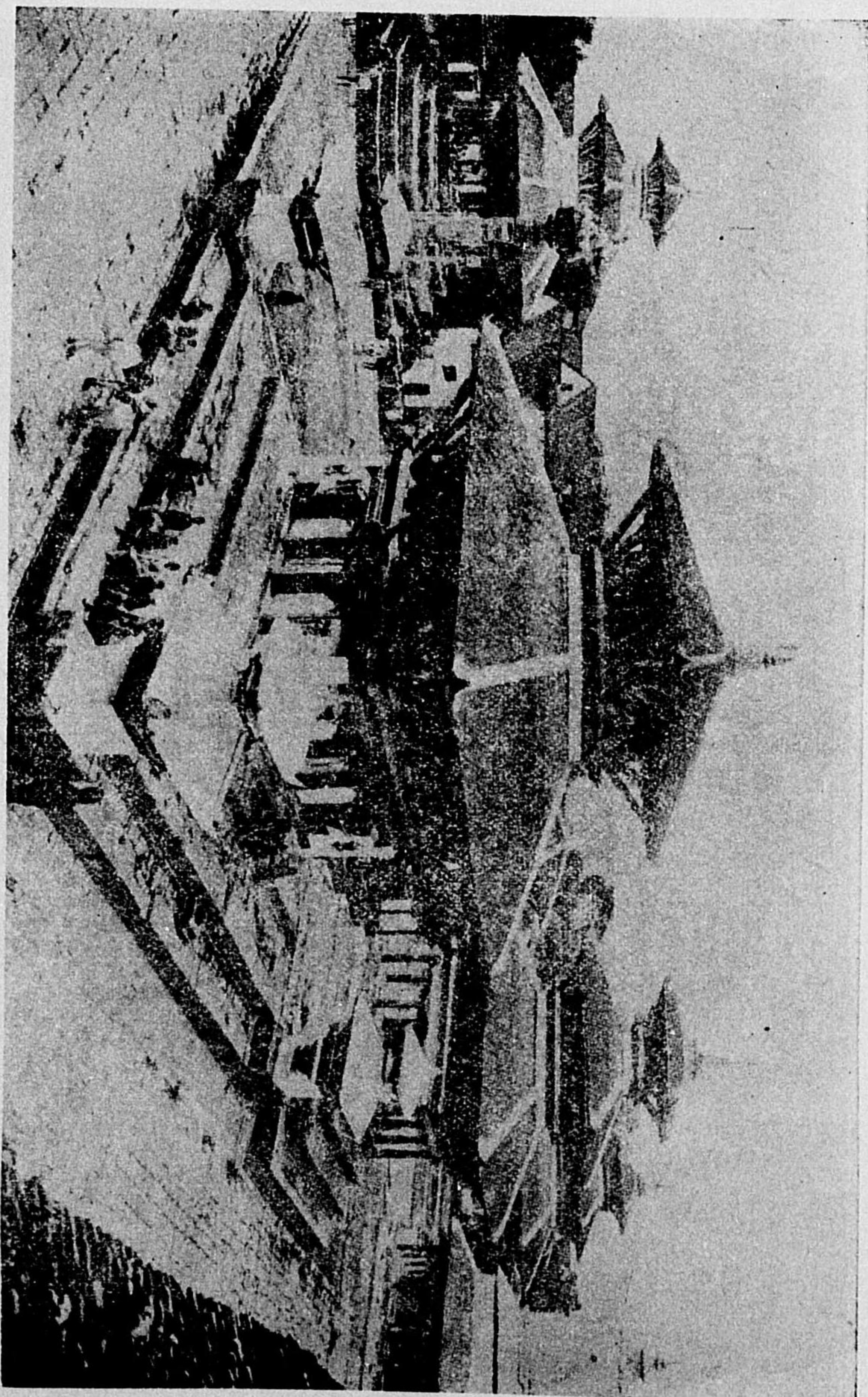


西藏鑄造の五鈴鈴  
昭和十一年三月十七日、初めてボドナート寺の大塔へ參詣したとき見つけたもの。此形をみると、如何にしても其原型は佛塔にかたどつたと考へられるものである。果して事實なら大分興味のあるものといへるだらう。  
(物指は曲尺の約五寸(六吋)、家藏)

上。カトマンズ市窓臺下裝飾のナガ(中央の廻棧羅に注意せよ)(昭和十一年三月十五日)  
 下。同窓同壁面裝飾のナガ(昭和十一年三月十五日)



上。カトマンズ市花頭窓臺裝飾のナガ  
 下。バシユバチ村小禮拜堂壁面裝飾のナガ  
 (昭和十一年三月二十日)  
 (昭和十一年三月十六日)  
 窓とか壁面とかには、殆んどきままつてナガがついてゐる。胴體の短かいのもあるし長いのもあるし、又向ひ合つてゐるのや、反對の方に向いたのもある。胴體が浪の様なもの、繩のように捻れて繞れてゐるものもある。つまり隨所にあるのが愉快なのである。窓に花頭型のあるのも面白いもの一つ。上圖窓臺下兩ナガ中央の廻棧羅に注意せよ。下圖往來のまん中に隣伽があるのも亦印度教の本場らしくてあたりとよく調和してゐる。



カトマンズのダーバー・スクエア ("NEPAL" 挿圖複製)  
 高いところからとった寫眞で、近く子持二重塔があるが、總塔が中央に、子塔が四隅に一基ずつ、佛陀伽耶の大塔と同じ配置にあるのが面白い。パークマンのチャーサーン・バーマンククの傍にある制多亦然り。此圖左端の八角三重塔は、二〇〇・二〇一に掲げたもので、震災前の此廣場の状況がよく列る。

このダーバー・スクエアは、洵にほんとうの廣場になつて、建物なんか無いといつてもいい位。時たま上の干切れて亡くなつた塔の初重らしいものが残つてゐる位で、大に寫眞をとつて持歸り、吹飛ばさうとした計畫が畫餅に歸したのは終生の恨事であるが、幸に八角塔が無事であつたのは有難い事で、萬一これがやられたとしたら、今回は遂に他に類品を見出すことができなかったのである。

何れ立派な名があるのだらう。この様な祠堂に祀られるのは第三第四流の小神ではなくて、恐らく第一流の神だらうが、扱てそこの人にきいてみて貰つても、どうもはつきりしなかつた。併し例ひ逸名塔にせよ、ペリプテラル・テムブルとして方杖を多く用ひたところは、何といつても形がいい。よく恰好がとれてゐる。これで初重の周圍に柱がなかつたら、甚だ物淋しくてこれより大分見劣りがするであらう。

他の塔でも——民家でも邸宅でも、何でもネバル建築ならば——本體が煉瓦である以上、大きな出の多い屋根をかけるためには、樺も餘計出さねばならない。而も塔の様な何重かに上へ積む性質の建物に於いては、方杖を用ひなくては軒先の垂下を防ぐ事は當然困難である。であるから方杖を用ふるのは當然である。さうすれば自然方杖が發達——唐草や神像や其他のものを彫刻したり——するのは、いふ迄もなく自然の成行である。

今は殆んど全部修理をしてつたから、當分の間再び見られず、誰もそんな事を考へる人もないし、氣もつかない様だが、法隆寺五重塔は別として、其他の大和に存在した古塔は、古くなって腐朽してき

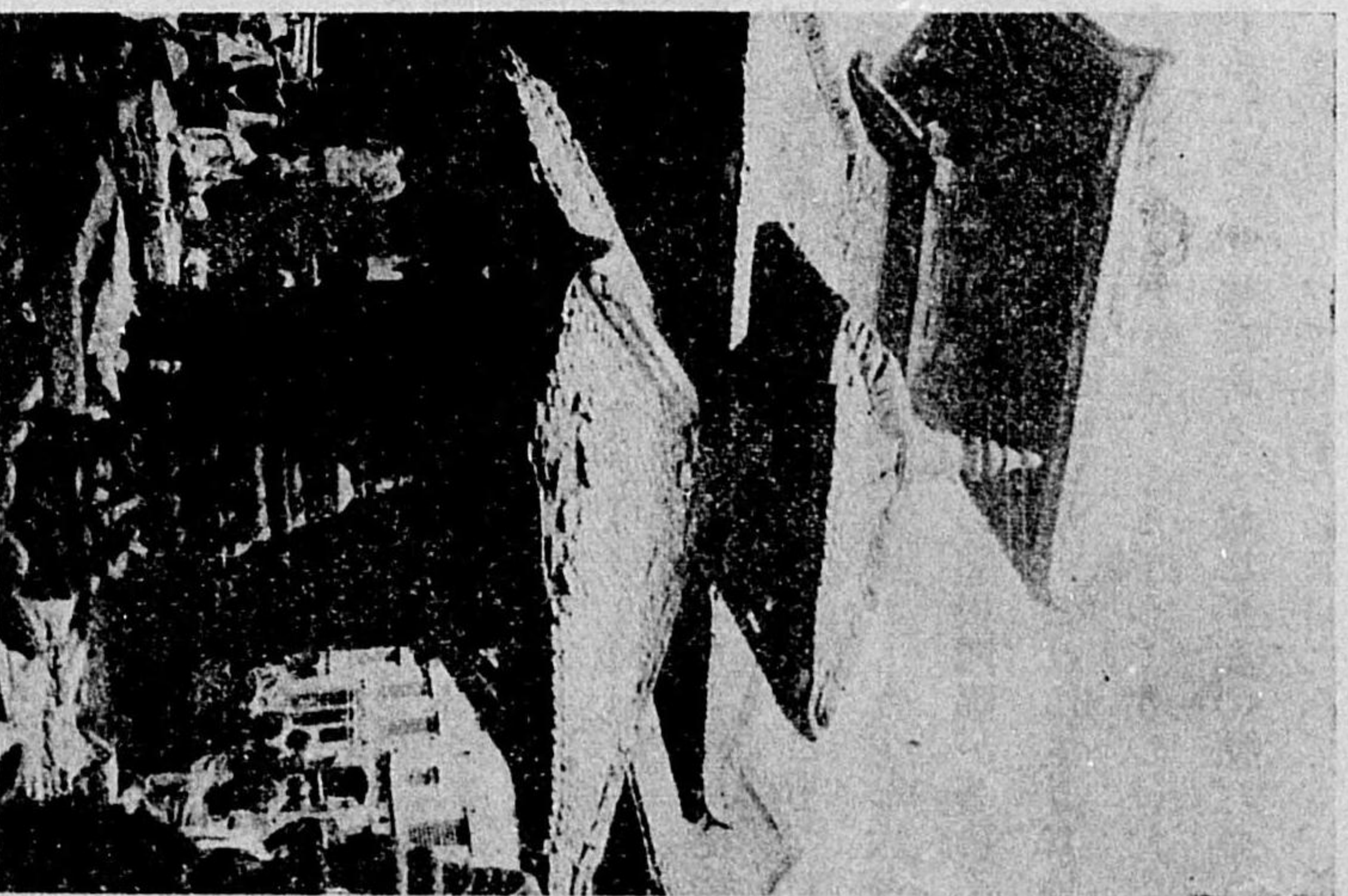
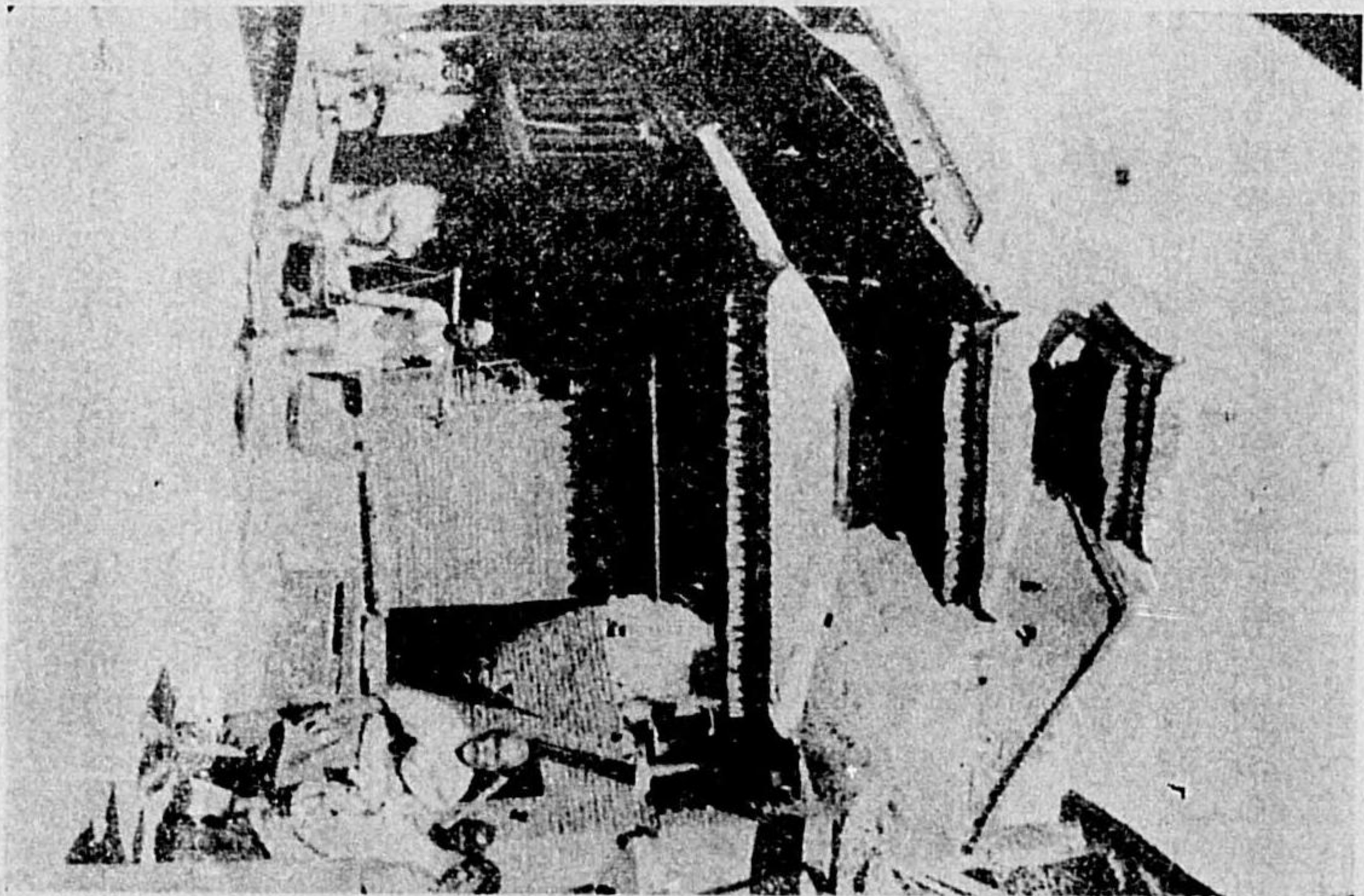
て、捨てておいては軒先がもたないので、飛簷極の先端に近く臨時に丸太を下からあてがひ、臺輪の上あたりから同じく丸太を短く切つて方杖にして、斜に突張らしてあつたから、遠方からみると、ネバル塔と同じ様な外觀を呈してゐたのであつた。そばへよつてはいけなないが、遠方からだとも相當に見られた。だから若しあの時代にネバルを旅行した西洋人が大和邊を旅行したか、或は其反對に行つたならば、相互の建築がよく似てゐる位のことを言つたかも知れない。だから煉瓦の上に木の長い極の元の方だけのせた此國の建築には、方杖が目立つてゐるのがあたりまで、夫れが此場合一層効果的であるのである。

慾を言へばこれも相輪がほしい。さうしてもう一重あつたら随分面白いのだが、少し慾張りすぎる様であるから、この慾望は放棄し、この建築の計畫者に對し、敬意を表しておく。

### 九三、小三重塔

三月十七日午後、クマリーリ・デバルから八角塔の方に出で、それから市内を少し馬車で乗りまはした所、不圖ある小さい廣場にでたら、其東端に西向きに小三重塔が建つてゐた。小さい建物に大きな屋根、金色燦爛として、美しいとも何とも形容の辭がなかつた。二〇二に於いて此をみるに、各重軒先に金銅の瓔珞を下げてゐるが、三重其意匠を異にしてゐる。露盤より正面へ下げた金銅の平紐は特に長く初重の軒先に達し、殊に最上層の裝飾は、餘り複雑ではつきり判らないが、いつもの様に金鈴ではな

右 市内二重小塔  
左 市内三重小塔  
三・五・九重の基壇上に建てる三重塔が南北に並んでゐる廣場の北の方に、この大小二重塔がある。其前景の小佛塔は洵に面白い型式のもの。これを大きく寫してくればよかつた。今更残念に思つてゐる。此は右。左は市中にある小三重塔。小さいのは何れもこの様に周柱室になつてゐない。



く、もつと遙に込み入つたもので、上の方には獅子か神像か、何かさういった様なものが、少なくとも左右と前と三方にでてる様で、其上には三重の天蓋がある。

斯の如く三重の屋根も、瓔珞も露盤も、總てが金色である上に、初重の前にある山形の裝飾、一對の旗、此等何れも金銅だから、一層美しいところへ、正面に西日を一ぱいに受けてゐるのだから、其光り耀いてゐる所は想像に難くないであらう。

もう一つ面白いことは、各重隅降り棟及び瓦棒の末端の裝飾として人面といふか人頭といふか、とにかく顔がつけてある。小さいし、寫眞版が聊か不明瞭なので殆んど目立たないが、初重右端のが、先づさう言はれるとさうかと頷かれる程度に寫つてゐる。これは恰も我國の鬼瓦の様で可なり面白い。西洋にだつて昔のエトルリヤ地方にあつた建築、即ちエトルリヤ建築 (Etruscan A.) として知られた建物の瓦端飾に、奈良時代の鬼瓦によく似てゐて、女の顔がついたのがあつたりする所から、何かこぢつけられない事もないようにも考へられるが、やめておく。この場合この三重塔の隅降り棟がもう少し大きく、従つて此人面も大きいと一層面白いが、さううまうまは行つてゐない。尙ほ各重の屋根四隅が著しく反轉してゐるが、鷄尾の尖端の如くはね上つたかどに一羽づつ鳥がとまつてゐるのは、これは生きた鳥で銅製ではない。どうも申合せたやうに三重共うまうま止まつてゐるものだから、まるでつくりつけたやうだが、初重の降り棟や屋根の上に、他に五六羽ゐるから判るだらう。鳩である。鳩は平和の使ださうだし、傳書鳩の如き益鳥もあるから、一概には言へないが、建築物にとってはどう最負目にみても、義

理にも益鳥とはいへない。

塔其物は小型だし、屋上にも金鈴はないし、では外觀上どこに佛教の影響らしいものが現はれてゐるかといへば、さあといつて口籠つて了ふが、三重塔式の美しき建築として掲げたのである。新しいものらしい。或は創立は古いかも知れぬが、修理後新色をつけ鍍金も新らしくつけたらしく、一層新らしく見られる。

尙ほ塔の左右に板碑型の碑が見えてゐる。上の方に中央に彫像を、左右に日月を陽刻し、下に銘文があるから、それがよめたら又何か判つてくるかも知れない。

\*

\*

\*


\*

\*

人がゐないと、もつと初重正面のところがよく寫つたらうが、何分土地が土地なので、誰も居なくするのには、官憲の力を借りるか何かしない限り、到底望めないことであるから、この邊のところであきらめた。正面中央には【和漢三才圖會】所載川太郎そっくりの姿勢で歩いてゐる男がゐたり、其右には舉踵半屈膝の徒手體操を始めかけようとしてゐるのが、ネバル人獨特の服裝をして跳足で立つてゐたり、私の三十六年間一日の如き、依然として少しも進歩しない固定寫眞に一段の光彩を添えてゐる。

#### 九四、テオ・パータンの三重塔

首都の東北隅といつてもいい位のところ、バシニバチの西北で、チャパイルの斜左下、一六〇オ2にあたるあたりにデオ・パタン (Deo Patan) といふ村がある。その村の中の辻のところになんか異型の三重塔がある。二〇三は即その寫眞であるが、地震のため倒れさうになったので、往來の方から突支ひ棒をやつたため、體裁は甚だよくなつた。裏の方からみると、このような邪魔物はかくれるからいいが、其代り初重の軸部は煉瓦ばかりで殺風景だから、やはり正面の寫眞にしておいた。

異型といふのは初重の平面が普通のものより少しく異つてゐるので、夫れが自然立面に影響し、圖の如くなつたのである。即ち方形の平面を持った初重の兩側に、夫れより少し小さい出張りがついたので、つまり縦の棒の太く短い十字形  をなしたが、これに普通の屋根をかけたので、圖の様な形になつたのである。ところが二重以上はこの様な出た部分がないから、普通の塔に見る如き形であるのである。第三重露盤上には金鈴をおいてある。

然るにここに注意すべき事は、初重の兩側から出してある方形の部分の屋根の棟端飾である。此部分は寄せ棟になつてゐるから、大棟が一つと降り棟が二つと一點に於いて會してゐるので、そこには何か飾りが入用になつてくる。その飾りが、見る人によりて異議があるかも知れぬが佛塔の形をしてゐるのである。兩方がが原版には明らかにでてゐるが、寫眞版にしたら遺憾ながら消えて了つて見えない。其塔身に當るところは一面に反花が刻してあり、其上に金鈴型のものがのせてあるから、その反花のほつてある部分を臺座とも見られる。異議があるかも知れないと思つたのは、さう考へた場合のことである。

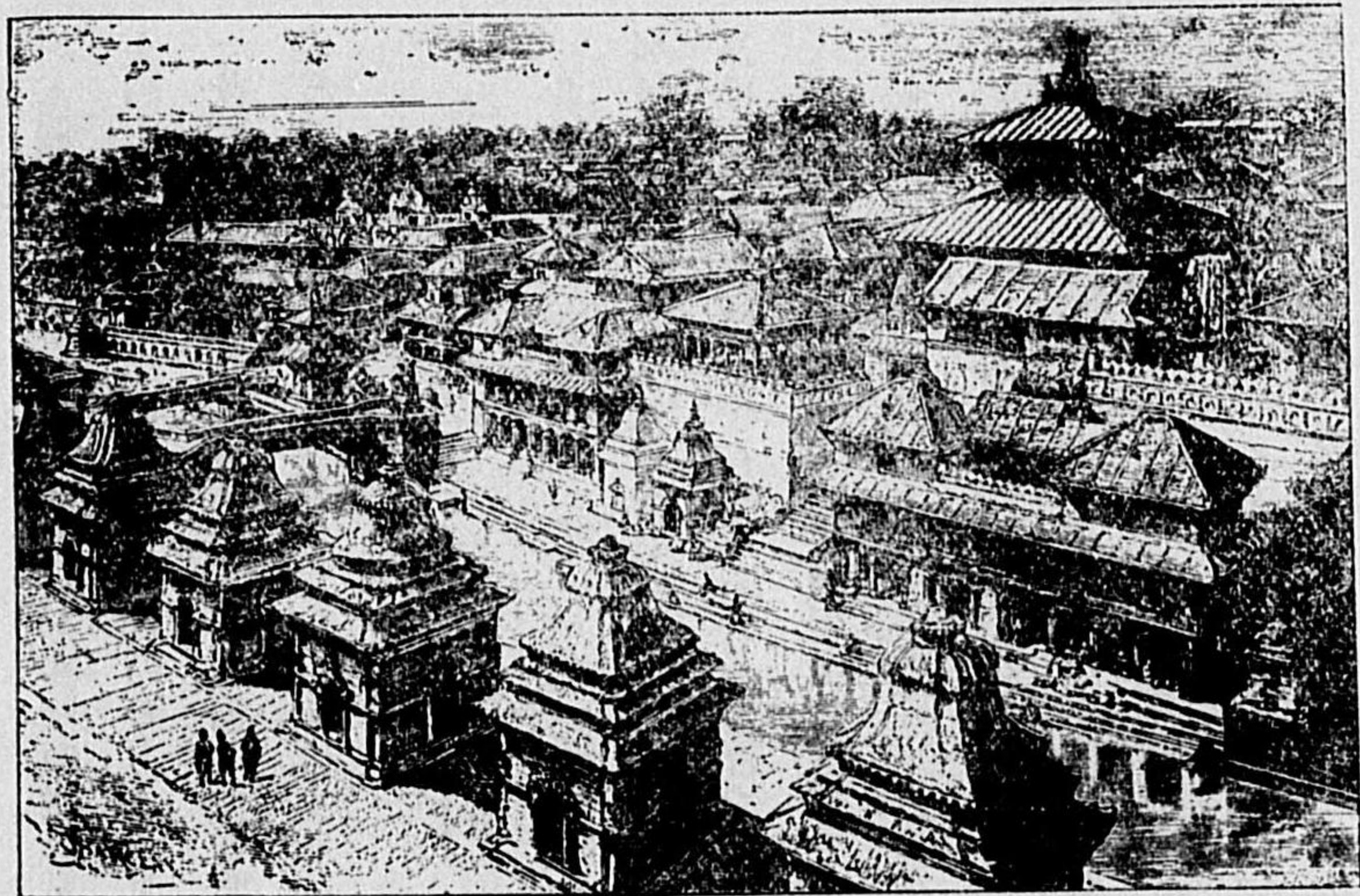
が、例ひさうしても其上の鈴を佛塔の變形と見ればよろしい。若しそれ下の方を塔身とみるならば、上の方はすべて相輪とみられるのである。どちらにしても大丈夫と思ふ。

此點に於いて此三重塔を、私は相當に重要なものと考へてゐるのである。此塔名をジェイバゲインソリ (Jaybagaysori) といふさうだが、例によりはつきり判らない。

### 九五、バシニバチナート・テムブル (一六〇オ2)

カトマンヅ市より約三哩、バグマチ川の右岸にバシニバチ村がある。ここは印度教徒にとりて最も神聖なるバシニバチ即シバを祀つた大堂がある。大堂といつたところで、二重塔に過ぎないが、其境内は實に廣く、全村殆んど祠堂ばかりと言つていい位である。

二〇四—二一一にその境内の全景をだして置いたが、最初のもものは北方の高地から、残りの七圖は東方の高地から俯瞰したものである。東方の高地からは殆んど障碍物がないので、洵によく見えるが、肝心のリングを本尊とせる二重塔の直背のところは、どうも思ふ様に見られない。實はこの東方の高地も、初めは容易に近づく事を承諾しなかつたが、まあ漸く來てもいいといふ事になつたのである。土人は跣足で往來を歩くので、牛馬雞犬の糞尿を踏付けた足で平氣で入つて行く癖に、私共が大奮發大邁歩で靴も靴下もぬいで入らうとしてもいけないといつて入れぬ。どうも境内の神聖や清潔は、彼等によつてこそ大に汚される様に思ふが、こればかりは理屈ではいかないので、如何ともできなかった。どうも



パシュパチナート堂及び火葬場の全景  
(Hist. Ind. & East. Arch. 挿圖複寫)

鼻薬もここではきかないらしい。

昔は境内の建物は總て純ネバル式の興味あるものばかりであつた事は、殆んど同じところから寫した寫真から刻した木版繪が、ファーガッソンの書物にのつてゐるのでよく判る。ここに掲げたのは同書第一卷第284頁の挿繪を縮寫したものだ、右下の三階建の川畔の家屋、其後方(大堂)の入母屋造、其右方(大堂)の四注造は、二〇五と比べてみるとよく判るが、皆現代式のものに代へられてゐる。昔の形を残してゐるのは大堂右方の四注造だが、これとても僅に四注といふ所だけが保存されたので、方杖で支へた軒を持った屋根等は、立派に淘汰されて了つてゐる、其上に左下の寶形造のマンダバムの様なものも、屋根の形はこれより仕方がないから、依然として寶形であるが、材料は生子板に代つて

了つたのは是非もない次第である。

此は何も今更新しく始まつたのでもなければ、敢てここだけでもないのだから、さう一つ一つ文句をつけて攻撃するには當らないかも知れぬが、日本でも社寺の境内に近く鐵とセメントの家ができたり、優秀なる建築と並べて俗悪極る堂宮を建てたり、洵に早や苦しい實例をば、絶えず見せつけられてゐるので、人事と思はれないから、序に一言をかきつけたのである。此次修理の時は、パシュパチの境内等は、せめて屋根だけでも其國特有の「隅扇鼻隠板」式のに復原される事を望むものである。

\*

\*

\*

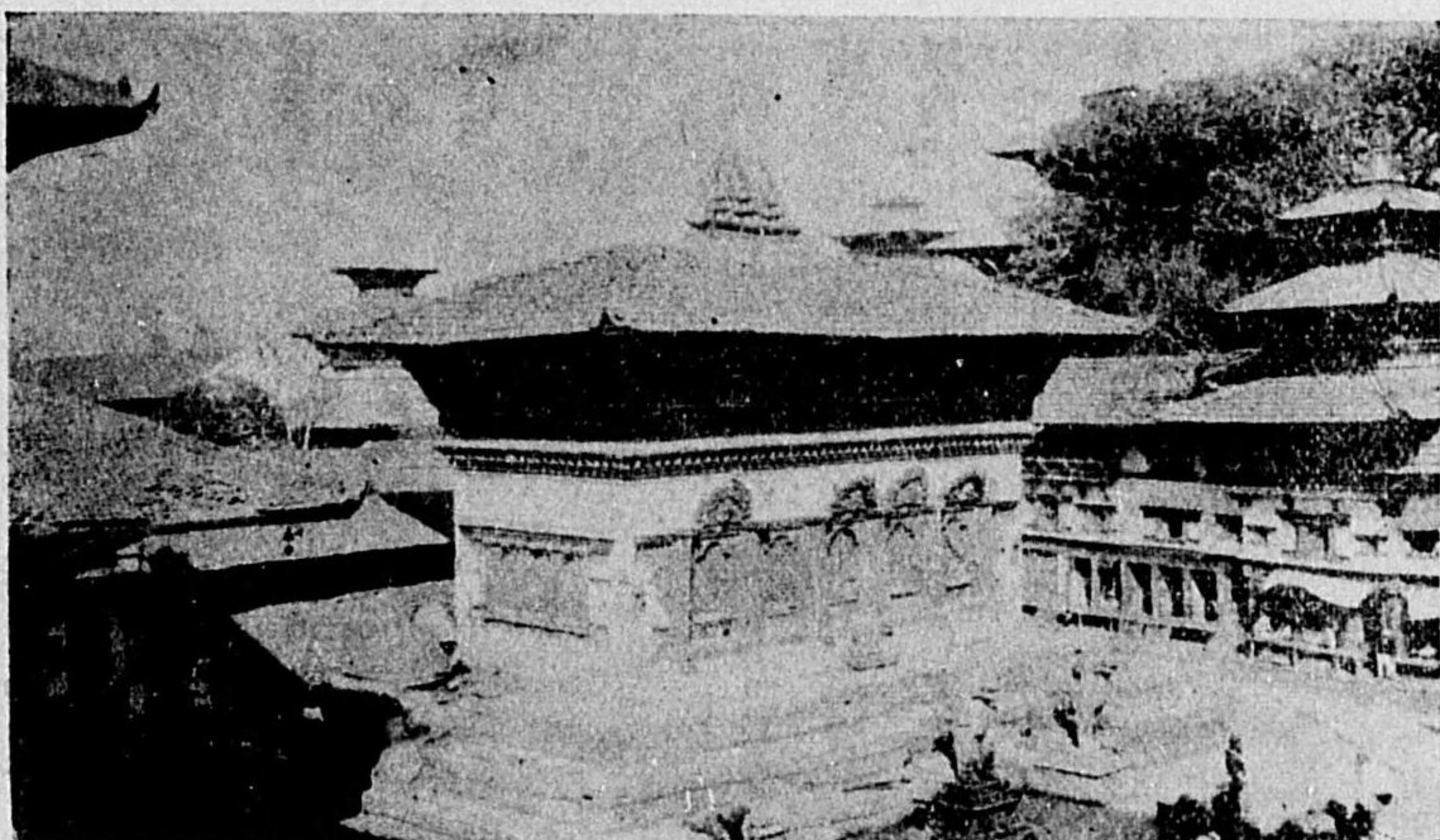
\*

\*

話が少し脇道へ逸れたから元に戻す。此寶形造はここに挿入したカトマンズ市所在の三重の基壇上に建てる四注造の建物と共に、單層堂といふ點が珍らしい。尤も單層の建物なら、バグマチ川岸に沿ひて境内に幾棟も並び建ち、更に其東方に隣れる堂内及び其道にもあるが、これ等は特殊の屋根を有するもので、且つ個人有力者の小禮拜堂ださうである(二二二)。だからそれ等を別にすると、珍らしい事になる。但しこの今取り上げてゐる寶形造も、繪でみると四方吹き放しにしてあるし、實物を東方高地から望遠鏡でみたところでは、何か中央にある様で、周囲はあいてゐた様に見えるから、或は一種のマンダバムかも知れない。

二〇五から二一〇迄は、右から左即ち北から南へ、パシュパチナートの神聖な區域の大全景の寫真で



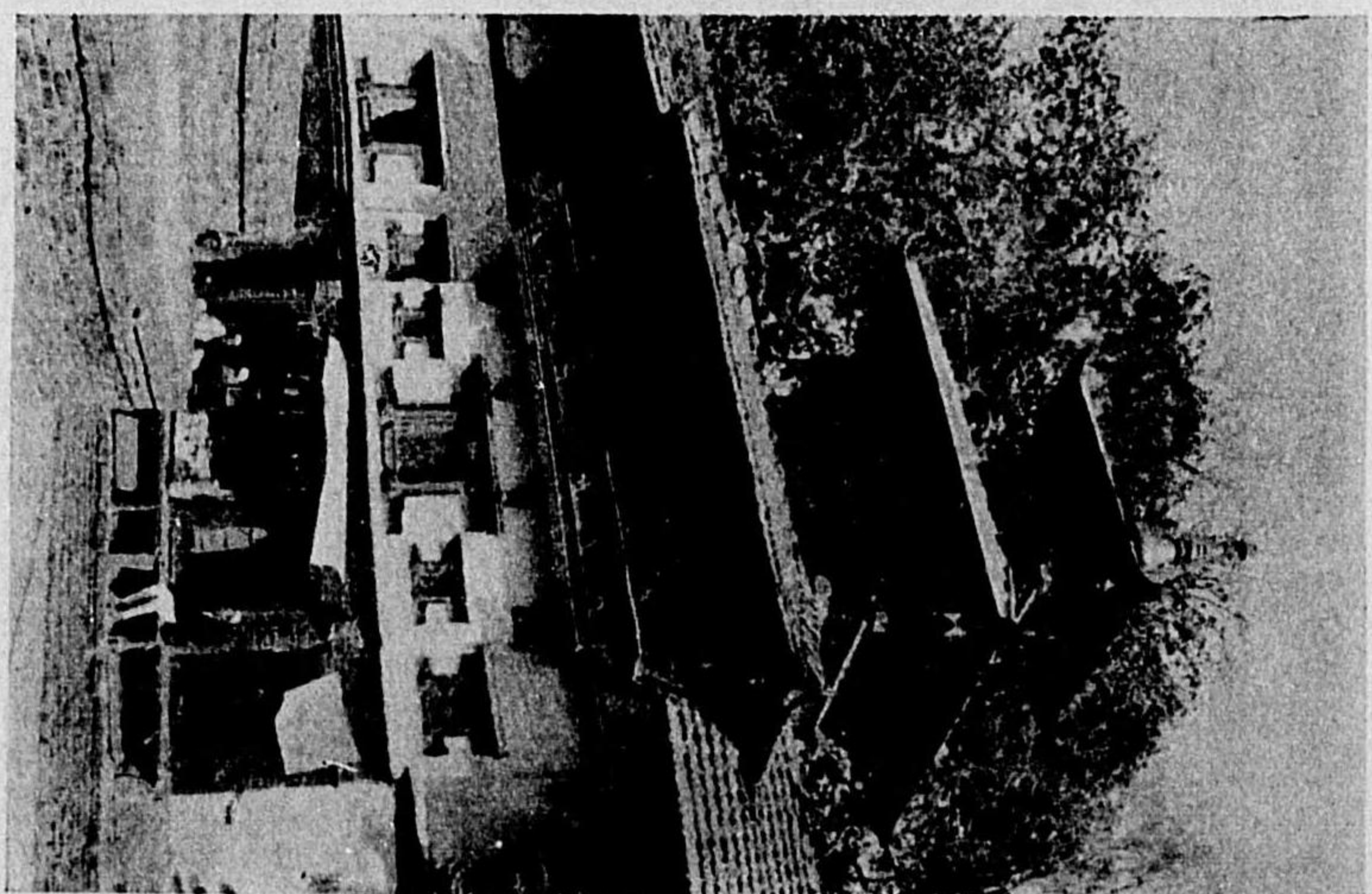
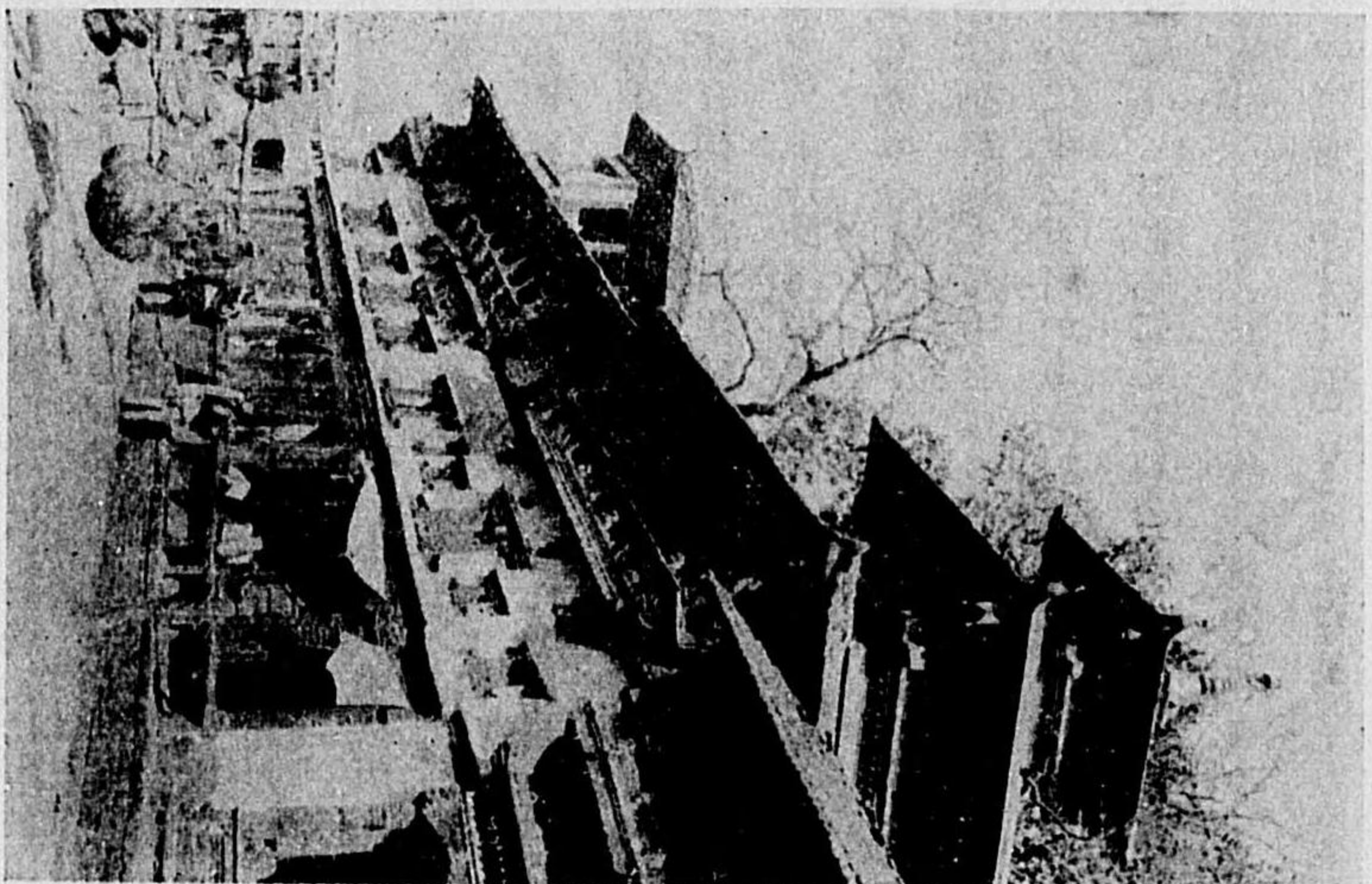


上。市内單層四注の祠堂 其一（昭和十一年三月十五日）

下。同 其二（昭和十一年三月十七日）

三重の基壇上に建つ單層四注の祠堂で、長方形の平面を有す。大棟の裝飾は金色の飄箆の様な飾りがのつてゐる。寫眞は小さいから、正面のところに拱が四つと楣が一つある様だが、其楣の様に見えてゐるところは、他の四つと同じ様に例の此國特有な飾りが元はついてゐたのだが、いつの間にかとれて了ひ、遂に現在の様な形になつたのである。古い寫眞でみると、確がに五つ並んでついてゐるところが寫つてゐる（“NEPAL” p. 195）。其背景に、幸に震災を免れた唯一の八角三重塔が建つてゐる。

左。市内民家屋上の三重塔 其一  
 右。同 其二  
 （昭和十一年三月十七日）  
 前頁下圖右方に見えてゐる三重塔がこれで、恰も二階家の屋根から三重塔が出てゐる形である。だから皆で五階だが、下は商店で其上は住宅らしい。だからつまり二階家が此商店で、それから上が祠堂と思はれる。カトマंडウでは此様なのは餘り見受けなかつた。



ある。この初めの圖の今記した寶形造は、次圖では中央にきてゐるが、其左に最上層の屋根が凹字形の寄棟になつてゐるところの、京都市東山の清水寺本堂の子分の様な建物がある。これは其次の圖だと右下に見え、三階建であることがよく判る。此等二〇六・二〇七及び二〇九に於いて面白いのは、圓形の平面を持った三重塔が寫つてゐることである。此圓形三重塔の前景に、私にとってはどうでもよいよりは、寧ろない方が遙に都合がいい建物があり、夫れが邪魔をしてはつきりしなかつたが、いろいろ工風をして其初重も亦圓形である事を確めたつもりである。此三圖のうち前の二圖には、辛ふじて初重屋根の放射形の瓦棒が寫つてゐるから、それでも判るであらう。

首都滞在中は毎日出歩いたが、かかる圓形三重塔は此限り見なかつた、だから珍らしいのだらう。大中小の雨傘を廣げて積み重ねた様で、大分變つてゐて面白い。色瓦を用ひて屋根を蛇の目型か何かに葺いたらば、愈以て天下一品塔ができるだらう。日本の寺の坊さん達は、いくら面白い新意匠だといつても、建てる勇氣はあるまいから、寺に建つ望は未來永劫ないとする、差向き低級の娯樂場か博覽會等には向かないか。何れにしてもそばへよつてよく見たかつたが、如何とも致し難かつた。

二〇七の左下方に小二重塔があるが、夫れが二〇八では遙かに右方に見え、バグマチ川岸の火葬場迄が遠景にでゐるし、屋根もここには各種のが現はれてゐる。橋も二つ見えてゐるが、このうち右下隅

\* ファーガッソンの圖(第174頁)にも辛ふじて見えてゐるから、昨今の建築でない事だけは確かであらう。

の方は近づく事を許されない。遠い方を渡る事が、異教徒たる外國人に許された唯一のものだといふ事で、私も此橋を渡つて漸く東方の高地に出で、全景を俯瞰し得たのであつた。莫大の献金をするか何かでない、番人への鼻樂位では到底効果はない、左もなくば官憲の壓迫か、とにかく普通では絶對絶望で、外から見える所だけ見ておくよりしかたがない。

二〇九は下流の方の橋を渡つて左岸に出で、西方をみた景色で、ガートの一が見えてゐる(女が一人洗る)。二一〇は前記清水寺本堂子分式の三階建がいやに近く見えてゐるが、これは川の左岸からとつたもので、渡る事を禁じられてゐる橋が近く寫つてゐる。例の單層寶形造が右に、大堂の上重屋根と金鈴とが遠景に寫つてゐる。とにかく「リンガ」を本尊としてゐる大堂が、群を抜いてゐるから、それを中心しにて考へると、寫眞の見當はつくであらう。

此大堂はバーシバル・ランドンの大著【ネバル】の第一卷第22頁に、西側の高い所、多分建物の三階位からと思ふが、さういふ所からとつたらしい寫眞がでゐる。どうして西側からとつた事が寫眞の上から判るかといふと、背景に森が見えてゐるのと、本堂の右下に生子板で葺き代へて殺風景にして丁つたといつて文句をつけた、例の單層單列周柱堂の様な寶形造が建つてゐるからである。負おしみの様だ

\* Linga, Lingam. n. [Sans.] The phallus: the symbol under which Siva is worshipped in India. (Funk and Wagnalls English Dictionary)

が、寫眞でみるとさう大したものではない。背中に瘤のある大牛の座像は、西側正面中央に鎮座してゐるのだから、後ろからは到底見えない筈である。此寫眞の説明に“*A unique photograph of the main temple, taken for the first time by special permission*”としてあるが、それは如何にもさうに違ひない。だからこれ等は官憲の壓迫で、建物の三階位へ昇り、そこから寫眞をとるだけの許可を得たのであらう。官憲といつても、ネバル國の官憲が英國の官憲に壓迫されたので、其壓迫に耐えかねてバシニ・バチナートの住職を壓迫し、された方ではいくら宗教の神聖を標榜してゐても、何とも仕方がなかつたので、賢明なる住職は無駄な抵抗をしないで、御無理御尤で引込んだ結果であらう。

\* \* \* \* \*

本堂は周柱堂でないから、初重の周圍が壁であり、柱の建つてゐる程の雅趣はないが、變つた意匠がしてあるので、異なつた感じがよくでてゐる。軒先の方杖の間には全部格子をはつてあるので、どうも何だか箱を二つ積重ねた様である。其上に最も大事な基壇もさう高くないといふよりは、極めて低いので、どうも言ひにくいが建築物としては、恰好も割合にとれず、少しばかり見劣りがする。同書第一巻第222頁には、凸版に縮少複製して掲げたフアーガッソンの挿圖と、殆んど同じ所からとつたのではないかと思はれる寫眞をだしてあるが、それには本堂の屋根に一ばい足場がかかつてゐて、肝心の屋上金鈴のところがよく見えてゐないが、一昨年はそんな事がなくてよかつた。實はこの金鈴のところが必要な

のである。

\* \* \* \* \*

まともに見た寫眞は、版にしたら少し朦朧として了つて、充分に判然せぬのは遺憾であるが、少し斜にとる事ができたら、その方のみておく事にする。所が其漸く斜にとつた二一〇のはひどく暈けて了つたので、何とも仕方がなくなつたが、金鈴が子持である事が私にとつては甚だ面白いのである。四角な露盤の上に圓い平面のものを載せれば四隅があくのは當然であるから、其空き間へ子鈴をのせるのも亦自然で、こんな事は誰でも考へつくが、私はこれを見て、直に佛陀伽耶の大塔を想起したのであつた。

例の地震で壊れて了つたかも知れぬが、パターンには大佛寺 (Mahabuddha Temple) があつた。佛陀伽耶大塔と同じ意匠で、ただ形が少し悪いし、物もあれより遙に小さいようである。私は書物の挿繪でみたので實物は知らぬが、どうもあたりの家屋と比べてさう思ふのである。それから同市のチャーヤ・バー・タンクの邊にも立派な子持塔がある(二二六)。故にといふ次第では決してないが、親の四隅に子がゐて、さうして其親は佛塔から變化したと考へるならば、親子諸共さういふ事になり、さうして夫れがリングガ堂の屋根に乗つたとしても、夫れは決して不自然でも不都合でもない筈である。而も其

\* Perceval Landon: "NEPAL", Vol. I, p. 41.

金鈴の直ぐ右には小型の、大塔の右方には大型の三叉戟が(後者は地上からたつてゐるので、上の方だけが)、シバを祀つてゐる證據にたててあるのだから、佛教と印度教とが竝んでゐる様で、どうも頗る愉快である。

\* \* \* \* \*

本堂の前の牛像の傍に、寡婦の殉死場があるさうであるが、昔は夫が死せば婦は生きながら焚死せねばならなかつたので、シバの大堂の傍で夫が行はれたものと見える。夫に殉死した貞淑な妻の像を、夫の像と竝べて記念のために刻した板碑型の石の數個を、私はカマラプール(カマラプラム)に近きハンビの遺跡で、また石柱に刻したのなら、サンチのダク・バンガローの近くでもみたが(上巻第1頁、36頁)、此村ではついても見受なかつた。ところがこの様な習慣は幣風だからとて、禁止されてゐる筈なのに、昭和十二年三月二日の【讀賣新聞】は、印度ラクノー (Lucknow) 地方に密集する婆羅門教徒の間には、この殉死の風が時折行はれてゐて、「一月中にもこの誤られた犠牲者が四指を屈してゐると」報じた位で、現今さへこれだから、昔は寧ろ喜んで笑つて焚死したであらう。と思はれるかも知れぬが、實は止むを得ずの場合が多かつたと見られる。

\* “Close by it is the place where widows are burnt as Satis along with the bodies of their dead husbands; and the little chapels along the side of the river are commemorative of the temples here are of any antiquity, most of them — if not all — dating since the beginning of the 17th century.” (H. of I. & E. A., Vol. I. p. 283)

“It will not be a matter of surprise that in Nepal, which represents better than any other existing district the law and custom of mediæval India, great difficulty was found in an attempt to obliterate this ancient and evil custom. Before Jang Jhadur’s day the burning alive of a widow upon her husband’s funeral pile was commonly practiced in Nepal. It had been abolished in India by Lord William Bentinck in Council on the 4th December 1829, but naturally it was long before the practice itself was entirely stamped out, so deeply had it been identified with religious duty or, in some cases, family jealousy, in minds of the people. Jang Jhadur thought it must stop, and he issued instructions that in no case in which the widow was performing or was likely to perform valuable service to her children, her husband’s family, or the State, was she to be allowed to commit this honourable form of suicide. Ehir Sham Sher carried the movement a step farther. He insisted that the consent of the Prime Minister himself or, in his absence, of the highest legal authority, should be obtained any widow was permitted to immolate herself. This did not, however, have the effect that was intended. The whole weight of public opinion was so often brought to bear upon the woman that, in many cases she was driven to make the great sacrifice before the cumbersome machinery of the law could be set in motion to protect her. Not the least of the claims to the respect of the world that Chandra Sham Sher possesses is that on the 28th June 1920 he absolutely and completely abolished the whole practice of sati from one end of Nepal to the other.” (“NEPAL”, Vol. 2, p. 172)

\* Kamalapur, Kamalapuram. M. & S. M. R. のホスピタル (Hospital) 驛を距る一哩に在る。ここに D. B. あり。ホスピタル驛よりトンガの便あり。D. B. 満員の時は、村の家の部屋だけなら借りられる。私の行ったのは昭和十年十二月十八日で、其夜だけ村の建物の部屋だけ借りて一泊、翌日バンガローに移った。さうしたら今度は反對に相客なく、二夜獨りで占領することができた。

\*\*\* Hampi. マイラメ州とハイデラバード州との境を流れるツングアバードラ (Tungabhadra) 川畔にあり、古へのビジャヤナガー (Vijayanagar) 王の首府。此王國は一三三六年(建元元年)から一五六五年(永祿八年)迄南印に於いて隆盛であったが、此時勢衰へ、其後約五年にして滅亡したのであるが、立派な遺跡が約9哩平方の地に散在してゐる。